

上田市文化財調査報告書第33集

琵琶塚Ⅱ

小泉地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

1989年3月

上田市教育委員会
上小地方事務所

『琵琶塚Ⅱ』正誤表

上田市教育委員会

本文

頁	行	誤	正
例言	5	小泉地区県ほ	小泉地区県管ほ
〃	6	国庫圃場事業	国庫補助事業
挿図目次 第101図		・同址カマド実測… 124	・同址カマド実測図… 124
付表目次 第22表		出土土器一覧表 …… 114	出土土器一覧表 …… 119
8	32	副葬品は勾玉・	副葬品は勾玉・
20	7	規模は南西北	規模は南北
36	14	グリット	グリッド
39	1	小形の半月形	小形の半球形
39	10	グリット	グリッド
65	14	明茶褐色土	暗茶褐色土
67	4	明褐色土	暗褐色土
67	5	暗黄褐色土	明黄褐色土
79	11	ピットが	ピットが
80	24	内外面へら磨き	外面はへら磨き
86	7	暗褐色土で	暗茶褐色土で
86	15	ピットは	ピットは
100	18	北東辺長約2.2m	北東辺長約4.0m
100	18	約54~74m	約54~74cm
100	25	鉄斧・胴剣の	鉄斧・銅劍の
100	28	鉄斧・胴剣・	鉄斧・銅劍・
105	9	行わている。	行われている。
105	27	13は群馬県	12は群馬県

頁	行	誤	正
107	1	1行目全文削除	
107	28	6は口縁部径	36は口縁部径
109	2	(38~53)	(38~52)
109	31	1に近似する値	68に近似する値
113	3	鉄斧(1)と、	鉄斧(74)と、
113	11	細型管玉(77)	細形管玉(77)
113	15	細型管玉は	細形管玉は
124	16	隅丸長方形と	隅丸方形と
124	16	規模は南北3.5m	規模は東西3.5m
134	29	SK01は主柱穴	P ₁ は主柱穴
134	31	規模はSK01が	規模はP ₁ が
134	32	P ₁ が径35cm、	P ₂ が径35cm、
134	33	P ₂ が径40cm、	P ₃ が径40cm、
136	5	示すう残存する	示す。残存する
147	14	7はい所謂	7は所謂
155	5	3の口縁部は	4の口縁部は
163	1	披熱して燃土化	披熱して焼土化
166	3	(29~36)	(29~37)
166	3	(37~38)	(38)
166	6	37・38は赤色	38は赤色
185	10	調査の概略に	第1章で
196	30	『那可君体遺跡』	『那可君体遺跡』
奥付		発掘調査報告	発掘調査報告書

挿図

頁	挿図 番号	訂 正 箇 所
17	6	図中「SB-84」→「SB-85」
21	9	図中「鉄鏟」→「鉄鏝」
21	10	題名中「・」削除
39	23	図中「P1」→「P2」
42	25	断面図A-A' 左右逆
51	32	図中「坏(35-8)」→「壺(35-8)」
51	32	図中「坏(35-9)」→「壺(35-9)」
66	48	断面図A-A' 水系レベル +80cm
82	63	図中「<」削除
87	68	平面図「_B'」→「B-B'」
121	99	図中「SK-21E」→「SK-21」

頁	挿図 番号	訂 正 箇 所
137	121	題名「第121図 第82号住居址…」
144	129	題名中「出」削除
144	129	平面図「P6」記入漏れ
146	132	平面図「D-_'」→「D-D'」
150	136	断面図土層「1」「2」記入漏れ
157	145	平面図「SB-117」→「SB-116」
159	149	遺物番号「1」→「2」
162	151	第33号土壇 第4・5層位置不適切
172	158	題名中「ピット列」→「ピット群」
173	161	断面図「_F'」→「F-F'」
193	付2	No.3地点「タケ亜科」スリット欠落

写真図版

図版頁	誤	正
21	15-36	15-29
21	15-38	15-36
22	16-47	16-44
27	34-8	35-8
28	36-13~36-19	35-13~35-19
33	61-7	61-6

図版頁	誤	正
33	61-8	61-7
37	第62号住居址	第61号住居址
48	126-1~3	126-1.2
52	水田跡土層	水田跡道跡土層
53	水田跡土層写真	水田跡道跡土層 写真(2)

付表

付表番号	挿図番号	誤	正
全表	—	頸部	頸部
2	14-28	縦・ヘラ削り	縦・楯ヘラ削り
	15-32	□縁部 1/6~胴部上位	□縁部~胴部上位 1/6
	15-33	外内明橙褐色、	外明橙褐色、
	16-46	□縁部 1/3~底部	□縁部~底部 1/3
5	24-4	肩部で僅かに張る器を呈する	肩部で僅かに張る器形を呈する
	6	27-1	く、上方に反り返る。
6	27-3	糸切り後	糸切り痕
	27-4	糸切り後	糸切り痕
	27-5	糸切り後	糸切り痕
	27-11	底部~高台	底部~高台部
	28-22	坏部1/6	坏部1/4
	28-47	腰部は利、	腰部張り、
7	31-8	内面楯ヘラ磨き	内面楯ヘラ磨き
8	35-20	35-20	36-20
	35-26	35-26	36-26
9	39-6	半部屈曲して	坏部屈曲して
13	55-6	備考欄	「*外・頸内赤彩。」を追加
	55-7	*外頸内赤彩、	削除
	55-10	調整・施文様別記のものに訂正	
	55-29		
	55-17	「く」の字状に外反した後、	「く」の字状に外反した後、
	56-32	□唇部僅かに肥適庄。	□唇部僅かに肥庄。
	57-36	金黒母を少量	金雲母を少量
58-55	器受部 1/6径	器受部 1/6	
14	61-3	外内橙褐色、	外橙褐色、
	61-4	外裏部や上げ	外裏部やや上げ
	61-5	器高(11.2)	楯径(11.2)

付表番号	挿図番号	誤	正
14	61-6	器高(11.0)	楯径(11.0)
17	69-1	斜めフエラ削り。	斜めヘラ削り。
	69-2	「く」の字状に	「く」の字状に
	70-7	ヘラ磨き楯ナデ	ヘラ磨き土ナデ
	70-17	色調：外内暗茶褐色	削除
19	78-3	「く」の字状にする。	「く」の字状に外反する。
	78-11	底径 12.2	楯径 12.2
20	81-9	突帯を伏す。	突帯を付す。
	81-10	突帯を伏す。	突帯を付す。
21	85-13	85-13	85-14
	88-48	体部下位~1/3	体部下位 1/3
	88-49	体部下位~1/4	体部下位 1/4
	88-50	体部下位~1/3	体部下位 1/3
	89-68	89-68	90-68
24	89-73	89-73	90-73
	100-3	「く」の指示状に外反し、	「く」の字状に外反し、
27	100-5	細砂粒片を少し	細砂粒を少し
	100-9	□縁部横ナデ	□縁部横ナデ
	108-2	外面□縁部横ナデ。	外面横ナデ。
30	119-1	胴部は放談形を	胴部は理形を
31	121-9	胴部下位~脚部合部上位	胴部下位~脚部合部上位完存
	121-18	器受部~底部ほぼ完存	器受部ほぼ完存
32	124-2	接合部~脚柱	接合部~脚柱部
42	152-13	底径 5.66	底径 5.6
	153-28	内面横刷毛調整	内面横刷毛調整
	154-34	接合部~裾部	接合部~脚部
	154-35	接合部~裾部	接合部~脚部

調整・施文
□縁部横ナデ。外内面横ヘラ磨き。□唇部に凹線を有する。
□縁部横ナデ。
外内面横ナデ。
外内面横ナデ。
外内面横ナデ。
□縁部横ナデ。頸部外面縦刷毛調整。
□縁部横ナデ。外面一部刷毛調整。
□縁部横ナデ。内面横ヘラ磨き。
外内面横ナデ。
外内面横ナデ。
外内面横ナデ。
外内面横ナデ。
□縁部横ナデ。外面ヘラ磨き？。
□縁部横ナデ。外面ヘラ削り？。内面ヘラ削りナデ。
□縁部横ナデ。胴部外内面ナデ？。□縁部外面に凹線文を有する。
□縁部横ナデ。外面横刷毛調整。
□縁部横ナデ。胴部刷毛調整？。
外内面横ナデ。
□縁部横ナデ。外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整・ナデ。

調整・施文
□縁部横ナデ。内面横刷毛調整・ヘラ削り。

第44表

番号	項目	誤	正
33	長軸	3.3	3.7
38	壁高	10~21	23~25
42	所産期	不明	弥生時代後期？
62	壁高		54~74
	主軸	N-__-E	N-27'-E
67	形態	隅丸長方形	隅丸方形
	カマド	東壁やや南寄り	東壁中央部
76	壁高	14~24	11~24
	主軸	N-72'-E	N-73'-E

番号	項目	誤	正
77	主軸	N-23'-W	N-64'-E
78	壁高	9~28	9~29
	主軸	N-15'-E	N-17'-W
85	主軸	N-80'-E	N-85'-E
113	長軸	4.7	4.4
	壁高	3~8	4~8
	主軸	N-6'-E	N-84'-W
118	長軸	3.3	3.4

上田市文化財調査報告書第33集

琵琶塚 II

小泉地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

1989年3月

上田市教育委員会
上小地方事務所

序

上田市を流れる千曲川の川西に位置する小泉地区は、東西に流れる浦野川を中心に、古くから私たちの祖先が暮らしていた地域です。一帯には縄文時代からの集落遺跡や古墳が数多く存在し、往時を今に偲ばせています。

昭和62年度、この小泉地区の県営ほ場整備事業に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地である琵琶塚遺跡と小泉条里水田跡の発掘調査を昭和61年度に引続き実施しました。昭和61年度の調査により出土した琵琶塚遺跡の土器群は当地方でも随一の質と目され、続く今回の調査は関係者の注目を集める中で実施しました。

調査を開始して間もなく、遺跡の範囲が予想以上の密度をもって広がり、土器群も前年以上のバラエティに富んだものが出土し、教育委員会とは場整備事業関係機関の間で再三にわたって保護協議を実施し、最終的には当初の二倍余りの予算を投じての調査となりました。その結果、弥生時代から平安時代にかけての竪穴式住居址やその他の遺構が数多く検出され、これらに伴い出土した遺物は、当地区でも特筆されるべき質・量を誇り、今後の研究に大きな指標をあたえるものとなりました。

こうした事情を踏まえ、当初は昭和62年度中に報告書を刊行する予定でしたが、整理・報告書刊行を昭和63年度事業とし、ここに御報告する次第です。

調査は上田女子短期大学の塩入秀敏助教授に調査団長をお願いし、都合2ケ年にわたって担当していただきました。特に、62年度の現場調査では厳しい暑さとスケジュールに加え、度重なる調査面積の増加にも顧問の先生方や調査員の方々と共に御尽力いただきました。また、ほ場整備実行委員会の大沢委員長、小泉自治会の増田自治会長を初めとする地元の皆さんにも現場作業への参加や整理作業室の確保、地権者の同意等に便宜を図っていただきました。さらに、長野県教育委員会、上小地方事務所の関係者の方々にも調査に対して全面的に御理解・御協力を賜りました。ここに記して衷心より御礼申し上げます。

平成元年3月25日

上田市教育委員会

教育長 赤羽 奈

例 言

- 1 本書は長野県上田市大字小泉^{こいずみ}字琵琶塚^{びわづか}と字町裏^{まちうら}にまたがって所在する琵琶塚遺跡の第2次調査と、上田市大字小泉^{こいずみ}字桜町^{さくらまち}、字藤ノ木^{ふじのき}、字舞台^{ぶたい}、字地ノ眼^{じのめ}、字清水田^{しみずだ}、字池下等^{いけした}にまたがって所在する小泉条里水田跡遺跡の調査報告書である。
- 2 両遺跡の調査は小泉地区県ほ場整備事業の着工に先立ち、上小地方事務所の依頼を受け、上田市教育委員会が主体となり^市国庫圃場事業^{神田}として行なった。現場調査は、琵琶塚遺跡ほか発掘調査団に事業委託して実施された。現場における調査は琵琶塚遺跡が昭和62年7月10日～11月8日、小泉条里水田跡遺跡が昭和62年7月6日～7月30日、昭和63年9月1日～9月2日にかけて実施された。
- 3 琵琶塚遺跡の発掘調査では、遺跡のごく限られた範囲の調査にもかかわらず、検出された遺構、出土遺物は極めて膨大な量であった。本書では検出された遺構と、それに伴う遺物の紹介を中心に記述は最小限に留めた。
- 4 遺構実測図の作成は、塩入秀敏、倉沢正幸、中沢徳士、塩崎幸夫、末永成清、稲垣美麻が行なった。
- 5 遺物実測図の作成は執筆者が主として行い、一部を中沢、末永、稲垣、尾見智志氏が行なった。
- 6 拓本は、上野良幸、中山文子が行ない、トレースは宮下信子、米窪千鶴が行なった。
- 7 遺構写真は塩崎、中沢が、遺物写真は塩崎が撮影したものを使用した。
- 8 石器類の石材は赤塩一己氏に鑑定していただいた。
- 9 小泉条里水田跡のプラント・オパール分析調査は、(有)古環境研究所に依頼して実施した。
- 10 本書の執筆は第1章を事務局が、第2・第3章第3節1. (34)・2. (5)・同第4節・第4章を塩入が、他を塩崎が執筆した。
- 11 本書の編集は塩崎が行ない、上田市教育委員会がこれを校閲した。
- 12 本調査にかかわる資料は、すべて上田市教育委員会の責任下に保管されている。
- 13 本書が上梓されるまでには、非常に多くの方々や諸機関よりご指導、ご協力を賜った。

以下、ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。(敬称略 五十音順)

青木一男、赤塚次郎、尾見智志、加納俊介、児玉卓文、小林真寿、小林秀夫、小山岳夫、坂井美嗣、笹沢浩、竹原学、坂野和信、樋口昇一、福島邦男、堀田雄二、前島卓、宮原洋子、森嶋稔、森山公一、山下誠一

上小地方事務所、地元圃場整備委員、小泉区民の皆様、上田市農村整備課、小泉圃場整備事務所、上田市立信濃国分寺資料館

凡 例

- 1 各遺構の略号は、次のとおりである。

住居址（掘立柱建物址、竪穴状遺構を含む）－S B 土壙－S K 溝状遺構－S D
柱穴－P

- 2 遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。

住居址・溝状遺構・土壙－1/60（ただし第21号土壙は1/30） カマド1/30

- 3 遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

土器－1/3 鉄製品・石器・石製品・玉類・土製品－1/2（一部1/3）

- 4 遺構平面図における点のスクリーントーンは、焼土・炉址・カマドを表す。

- 5 土器実測図における点のスクリーントーンは、赤色塗彩、土師器黒色処理、灰釉を表す。

- 6 遺構断面中の水系レベルは、ベンチマークとの標高差を示す。ベンチマークは第1次調査と同一で標高は443.901mである。また、方位は磁北を示す。

- 7 琵琶塚遺跡における調査地区及び各遺構の番号は、混乱を避けるため第1次調査時の番号に継続して付した。なお、調査及び整理作業の進展にともない遺構番号にいくつか欠番が生じている箇所があることを了解されたい。

- 8 出土土器一覧表、遺構一覧表の法量、規模欄の()は推定値を示す。

- 9 図版中の遺物番号は簡略化した（例、第56図1→56-1）。なお、縮尺は統一してない。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
付表目次	
図版目次	
第 1 章 調査の経過	
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査の経過	1
第 3 節 調査の体制	2
第 4 節 調査日誌	4
第 2 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 自然的環境	5
第 2 節 歴史的環境	5
第 3 章 琵琶塚遺跡の調査	
第 1 節 調査の概要	11
第 2 節 基本層序	19
第 3 節 遺構と遺物	20
1. 住居址	20
2. 土壌	160
3. 溝状遺構	171
4. ピット	172
第 4 節 調査のまとめ	181
第 4 章 小泉条里水田跡遺跡の調査	
第 1 節 調査の概要	185
付 編 プラント・オパール分析調査報告	189
図 版	
あとがき	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図…………… 7	第31図 第26号住居址出土遺物実測図…………… 49
第2図 琵琶塚遺跡試掘トレンチ・ 発掘調査区域設定図…………… 13	第32図 第27号住居址実測図…………… 51
第3図 琵琶塚遺跡グリッド配置図…………… 14	第33図 第27号住居址カマド実測図…………… 53
第4図 琵琶塚遺跡C区遺構全体図…………… 15	第34図 第27号住居址出土遺物実測図(1)… 54
第5図 琵琶塚遺跡D区遺構全体図…………… 16	第35図 第27号住居址出土遺物実測図(2)… 55
第6図 琵琶塚遺跡E区遺構全体図…………… 17	第36図 第27号住居址出土遺物実測図(3)… 56
第7図 琵琶塚遺跡F区遺構全体図…………… 18	第37図 第27号住居址出土遺物実測図(4)… 57
第8図 琵琶塚遺跡基本層序模式図…………… 19	第38図 第28号住居址実測図…………… 59
第9図 第21号住居址実測図…………… 21	第39図 第28号住居址出土遺物実測図…………… 60
第10図 第21号住居址カマド実測図…………… 21	第40図 第30号住居址実測図…………… 61
第11図 第21号住居址出土遺物実測図(1)… 22	第41図 第31号住居址実測図…………… 62
第12図 第21号住居址出土遺物実測図(2)… 23	第42図 第32号住居址実測図…………… 63
第13図 第21号住居址出土遺物実測図(3)… 24	第43図 第32号住居址出土遺物実測図…………… 63
第14図 第21号住居址出土遺物実測図(4)… 25	第44図 第33号住居址実測図…………… 64
第15図 第21号住居址出土遺物実測図(5)… 26	第45図 第33号住居址出土遺物実測図…………… 64
第16図 第21号住居址出土遺物実測図(6)… 27	第46図 第34号住居址実測図…………… 65
第17図 第22号住居址実測図…………… 31	第47図 第35号住居址実測図…………… 65
第18図 第22号住居址出土遺物実測図(1)… 32	第48図 第36号住居址実測図…………… 66
第19図 第22号住居址出土遺物実測図(2)… 33	第49図 第37号住居址実測図…………… 67
第20図 第22号住居址出土遺物実測図(3)… 34	第50図 第38号住居址実測図…………… 67
第21図 第23号住居址実測図…………… 36	第51図 第39号住居址実測図…………… 68
第22図 第23号住居址出土遺物実測図…………… 37	第52図 第40号住居址実測図…………… 69
第23図 第24号住居址実測図…………… 39	第53図 第40号住居址出土遺物実測図…………… 69
第24図 第24号住居址出土遺物実測図…………… 40	第54図 第41号住居址実測図…………… 71
第25図 第25号住居址実測図…………… 42	第55図 第41号住居址出土遺物実測図(1)… 72
第26図 第25号住居址カマド実測図…………… 43	第56図 第41号住居址出土遺物実測図(2)… 73
第27図 第25号住居址出土遺物実測図(1)… 44	第57図 第41号住居址出土遺物実測図(3)… 74
第28図 第25号住居址出土遺物実測図(2)… 45	第58図 第41号住居址出土遺物実測図(4)… 75
第29図 第25号住居址出土遺物実測図(3)… 46	第59図 第42号住居址実測図…………… 79
第30図 第26号住居址実測図…………… 49	第60図 第43号住居址実測図…………… 80
	第61図 第43号住居址出土遺物実測図…………… 81

第62図	第45号住居址実測図	82	第96図	第65号住居址実測図	120
第63図	第45号住居址出土遺物実測図	82	第97図	第65号住居址出土遺物実測図	121
第64図	第46号住居址実測図	83	第98図	第66号住居址実測図	121
第65図	第46号住居址出土遺物実測図	84	第99図	第66号住居址カマド実測図	121
第66図	第47号住居址実測図	85	第100図	第66号住居址出土遺物実測図	122
第67図	第48号住居址実測図	86	第101図	第67号住居址・同址カマド実測図	124
第68図	第48号住居址カマド実測図	87	第102図	第67号住居址出土遺物実測図	125
第69図	第48号住居址出土遺物実測図(1)	88	第103図	第68号住居址実測図	126
第70図	第48号住居址出土遺物実測図(2)	89	第104図	第68号住居址出土遺物実測図	126
第71図	第49号住居址実測図	91	第105図	第69号住居址実測図	127
第72図	第50号住居址実測図	91	第106図	第70号住居址実測図	128
第73図	第50号住居址カマド実測図	91	第107図	第71号住居址実測図	128
第74図	第51号住居址実測図	92	第108図	第71号住居址出土遺物実測図	128
第75図	第52号住居址実測図	93	第109図	第72号住居址実測図	129
第76図	第52号住居址出土遺物実測図	93	第110図	第74号住居址実測図	130
第77図	第53号住居址実測図	94	第111図	第75号住居址実測図	130
第78図	第53号住居址出土遺物実測図	95	第112図	第75号住居址出土遺物実測図	131
第79図	第54号住居址実測図	97	第113図	第76号住居址実測図	131
第80図	第61号住居址実測図	97	第114図	第77号住居址実測図	132
第81図	第61号住居址出土遺物実測図	98	第115図	第77号住居址出土遺物実測図	132
第82図	第62号住居址実測図	101	第116図	第78号住居址実測図	133
第83図	第62号住居址出土遺物実測図(1)	102	第117図	第79号住居址実測図	134
第84図	第62号住居址出土遺物実測図(2)	104	第118図	第80号住居址実測図	134
第85図	第62号住居址出土遺物実測図(3)	106	第119図	第80号住居址出土遺物実測図	135
第86図	第62号住居址出土遺物実測図(4)	108	第120図	第82号住居址実測図	136
第87図	第62号住居址出土遺物実測図(5)	110	第121図	第82号住居址出土遺物実測図	137
第88図	第62号住居址出土遺物実測図(6)	111	第122図	第83号住居址実測図	139
第89図	第62号住居址出土遺物実測図(7)	112	第123図	第83号住居址カマド実測図	139
第90図	第62号住居址出土遺物実測図(8)	113	第124図	第83号住居址出土遺物実測図	140
第91図	第62号住居址出土遺物実測図(9)	118	第125図	第84号住居址実測図	141
第92図	第62号住居址出土遺物実測図(10)	118	第126図	第84号住居址出土遺物実測図	141
第93図	第63号住居址実測図	119	第127図	第85号住居址実測図	142
第94図	第63号住居址出土遺物実測図	119	第128図	第85号住居址出土遺物実測図	143
第95図	第64号住居址実測図	120	第129図	第101号住居址実測図	144

第130図 第 101号住居址出土遺物 実測図…………… 144	第149図 第 119号住居址出土 遺物実測図…………… 159
第131図 第 104号住居址出土遺物 実測図…………… 145	第150図 土壙実測図(1)…………… 161
第132図 第 104号住居址・ 同址カマド実測図…………… 146	第151図 土壙実測図(2)…………… 162
第133図 第 106号住居址実測図…………… 148	第152図 第33号土壙出土遺物実測図(1)…………… 165
第134図 第 107号住居址実測図…………… 149	第153図 第33号土壙出土遺物実測図(2)…………… 166
第135図 第 108号住居址実測図…………… 149	第154図 第33号土壙出土遺物実測図(3)…………… 167
第136図 第 110号住居址実測図…………… 150	第155図 第 4号溝状遺構実測図…………… 171
第137図 第 110号住居址出土遺物 実測図…………… 150	第156図 第 5号溝状遺構実測図…………… 171
第138図 第 111号住居址実測図…………… 151	第157図 第 6号溝状遺構実測図…………… 172
第139図 第 112号住居址実測図…………… 152	第158図 D区ピット群実測図…………… 172
第140図 第 113号住居址実測図…………… 153	第159図 C区ピット列実測図…………… 172
第141図 第 114号住居址出土遺物 実測図…………… 153	第160図 D区ピット列実測図…………… 172
第142図 第 114号住居址実測図…………… 154	第161図 C区ピット群実測図…………… 173
第143図 第 115号住居址実測図…………… 155	第162図 ピット実測図…………… 176
第144図 第 116号住居址実測図…………… 156	第163図 小泉条里水田跡遺跡 トレンチ設定図…………… 186
第145図 第 117号住居址実測図…………… 157	第164図 小泉条里水田跡遺跡 土層模式図(1)…………… 187
第146図 第 118号住居址実測図…………… 158	第165図 小泉条里水田跡遺跡 土層模式図(2)…………… 188
第147図 第 118号住居址出土遺物 実測図…………… 158	付 編
第148図 第 119号住居址実測図…………… 159	第 1 図 イネのプラント・オパール 密度と変遷…………… 191
	第 2 図 おもな植物の推定生産量と変遷… 192

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表…………… 6	第27表 第71号住居址出土土器一覧表…… 129
第2表 第21号住居址出土土器一覧表…… 28	第28表 第75号住居址出土土器一覧表…… 131
第3表 第22号住居址出土土器一覧表…… 34	第29表 第77号住居址出土土器一覧表…… 133
第4表 第23号住居址出土土器一覧表…… 38	第30表 第80号住居址出土土器一覧表…… 135
第5表 第24号住居址出土土器一覧表…… 41	第31表 第82号住居址出土土器一覧表…… 138
第6表 第25号住居址出土土器一覧表…… 46	第32表 第83号住居址出土土器一覧表…… 140
第7表 第26号住居址出土土器一覧表…… 50	第33表 第84号住居址出土土器一覧表…… 142
第8表 第27号住居址出土土器一覧表…… 57	第34表 第85号住居址出土土器一覧表…… 143
第9表 第28号住居址出土土器一覧表…… 61	第35表 第101号住居址出土土器一覧表… 145
第10表 第32号住居址出土土器一覧表…… 63	第36表 第104号住居址出土土器一覧表… 147
第11表 第33号住居址出土土器一覧表…… 63	第37表 第110号住居址出土土器一覧表… 150
第12表 第40号住居址出土土器一覧表…… 70	第38表 第114号住居址出土土器一覧表… 155
第13表 第41号住居址出土土器一覧表…… 76	第39表 第118号住居址出土土器一覧表… 159
第14表 第43号住居址出土土器一覧表…… 81	第40表 第119号住居址出土土器一覧表… 160
第15表 第45号住居址出土土器一覧表…… 83	第41表 土壌一覧表…………… 163
第16表 第46号住居址出土土器一覧表…… 85	第42表 第33号土壌出土土器一覧表…… 168
第17表 第48号住居址出土土器一覧表…… 90	第43表 ピット一覧表…………… 174
第18表 第52号住居址出土土器一覧表…… 94	第44表 琵琶塚遺跡住居址一覧表…… 178
第19表 第53号住居址出土土器一覧表…… 96	第45表 検出された住居址…………… 181
第20表 第61号住居址出土土器一覧表…… 99	
第21表 第62号住居址出土土器一覧表…… 114	付 編
第22表 第63号住居址出土土器一覧表…… 114 ⁹	第1表 各植物の換算係数…………… 189
第23表 第65号住居址出土土器一覧表…… 121	第2表 試料1ccあたりの プラント・オパール個数…… 190
第24表 第66号住居址出土土器一覧表…… 123	第3表 イネの推定生産量…………… 194
第25表 第67号住居址出土土器一覧表…… 125	第4表 稲粃の生産総量の推定…………… 196
第26表 第68号住居址出土土器一覧表…… 127	

図版目次

- 図版1 1・2.琵琶塚遺跡遠景 3.琵琶塚遺跡
全景
- 図版2 1.第21号住居址 2.同址礫検出状況
3・4.同址カマド
- 図版3 1.第21号住居址遺物出土状況
2.第22号住居址 3.第24号住居址
- 図版4 1.第25号住居址 2・3.同址カマド
4.同址遺物出土状況
- 図版5 1.第27号住居址 2.同址遺物出土状況
3.同址カマド 4.第30・31号住居址、
第16号土壙
- 図版6 1.第32号住居址 2.第33号住居址
3.第41号住居址
- 図版7 1.第48号住居址 2・3.同址カマド
4.第50号住居址
- 図版8 1.第50号住居址カマド 2.第51号住居
址 3.第52号住居址
- 図版9 1.第61号住居址 2・3.第62号住居址
- 図版10 1.第62号住居址鉄斧出土状況
2.同址銅釧出土状況 3.同址遺物出土
状況 4.第63号住居址
- 図版11 1.第66号住居址 2.第67号住居址
3.第66号住居址カマド 4.第67号住居
址カマド
- 図版12 1.第69・71・72号住居址 2.第76~78
号住居址 3.第79号住居址
- 図版13 1.第82号住居址 2.同址礫検出状況
3.第83号住居址
- 図版14 1.第84号住居址 2.第85号住居址
3.第101号住居址
- 図版15 1.第104号住居址 2.第108号住居址、
第32号土壙 3.第110号住居址
- 図版16 1.第111号住居址 2.第114号住居址
3.第115号住居址
- 図版17 1.第118号住居址 2.第119号住居址
3.第15号土壙
- 図版18 1.第18号土壙 2・3.第21号土壙
4.第24号土壙 5.第31号土壙
- 図版19 1.第32号土壙 2.第33号土壙
3.第6号溝状遺構 4.D区ピット列
- 図版20 第21号住居址出土遺物(1)
- 図版21 第21号住居址出土遺物(2)
- 図版22 第21号住居址出土遺物(3)
- 図版23 第22号住居址出土遺物
- 図版24 第23・24号住居址出土遺物
- 図版25 第25号住居址出土遺物(1)
- 図版26 第25号住居址出土遺物(2) 第26号住居
址出土遺物
- 図版27 第27号住居址出土遺物(1)
- 図版28 第27号住居址出土遺物(2)
- 図版29 第27号住居址出土遺物(3) 第28・32号
住居址出土遺物
- 図版30 第33・40号住居址出土遺物
- 図版31 第41号住居址出土遺物(1)
- 図版32 第41号住居址出土遺物(2)
- 図版33 第43・45・46号住居址出土遺物
- 図版34 第48号住居址出土遺物(1)
- 図版35 第48号住居址出土遺物(2) 第52号住居
址出土遺物 第53号住居址出土遺物(1)

- 図版36 第53号住居址出土遺物(2) 琵琶塚遺跡
現地説明会
- 図版37 第61号住居址出土遺物
- 図版38 第62号住居址出土遺物(1)
- 図版39 第62号住居址出土遺物(2)
- 図版40 第62号住居址出土遺物(3)
- 図版41 第62号住居址出土遺物(4)
- 図版42 第62号住居址出土遺物(5)
- 図版43 第62号住居址出土遺物(6) 第63・65号
住居址出土遺物
- 図版44 第66号住居址出土遺物
- 図版45 第67・68・71・75号住居址出土遺物
- 図版46 第77・80号住居址出土遺物
- 図版47 第82号住居址出土遺物
- 図版48 第83号住居址出土遺物 第84号住居址
出土遺物(1)
- 図版49 第84号住居址出土遺物(2) 第85・101
・104号住居址出土遺物
- 図版50 第110・114・118号住居址出土遺物
- 図版51 1.小泉条里水田跡遺跡遠景 2.小泉条
里水田跡遺跡航空写真
- 図版52 小泉条里水田跡遺跡土層写真(1)
- 図版53 小泉条里水田跡遺跡土層写真(2)
- 図版54 1.小泉条里水田跡遺跡プラント・オパ
ール標本採取 2・3.整理作業 4.琵琶
塚遺跡ほか発掘調査団

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和61年度から着手された県営ほ場整備事業小泉地区の事業地区内には周知の埋蔵文化財包蔵地である琵琶塚遺跡が存在していた。このため、事業主体者である上小地方事務所と長野県教育委員会、上田市教育委員会の関係者で保護協議を行い、施工前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。（昭和61年度上田市教育委員会発行『琵琶塚』参照）

昭和62年度、引続き実施されたほ場整備事業地区内にも同遺跡及び小泉条里水田跡遺跡が広がっており、昭和61年10月3日関係者を集めて保護協議を実施し、その結果、調査面積 900㎡以上を総事業費 6,000千円（農政部局側負担 4,350千円、文化財保護部局側負担 1,650千円）を以って発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

上田市教育委員会では昭和62年6月2日付け上教社発第 108-1,2号で文化庁長官宛て埋蔵文化財発掘調査の通知を提出、昭和62年6月16日、地元小泉公民館で小泉地区ほ場整備実行委員会、上小地方事務所、上田市農村整備課、上田市教育委員会及び塩入秀敏調査団長を交えて最終的な調整会議を開催し、調査を麦の取入れの終わる7月6日から開始することで合意に達した。この後昭和62年6月29日付けで調査団長以下調査員6名の委嘱を行い、「琵琶塚遺跡ほか発掘調査団」を編成し、同日調査団会議を開催、調査の実施について打ちあわせを行った。この中で、小泉条里水田跡についてはトレンチ調査を主体にプラント・オパール分析を行い、条里の畔畔の検出と水田面の確認に努めること、琵琶塚遺跡についてはグリッドによる平面調査を主体に行うこととなった。昭和62年7月1日、上小地方事務所長と上田市長の間で調査の委託契約が成立し、これをうけて市教委では同日、文化財保護部局負担分と合わせて調査団に事業委託した。

7月6日、発掘機材の搬入、テントの設営を行い、翌7日歛入式を挙行し、本格的に調査に着手した。

第2節 調査の経過

調査団はまず、小泉条里水田跡遺跡の調査に着手した。ここでは調査の方針に基づいて重機によるトレンチを掘った後、人手で壁面を精査し、条里の畦畔の検出に努めるとともに、埼玉県の有限会社古環境研究所にプラント・オパール分析を委託、水田面の確認を意図した。この結果については第4章で述べるとおりである。

その後、調査地を暫時琵琶塚遺跡に移し、同遺跡の範囲と土層を確認するため重機により試掘トレンチを掘ったところ、遺跡は地表面からごく浅いレベルで予想以上に広がっていることが判明し、当初予算では対応が困難な状況となった。このため、市教委、調査団では再度遺跡の保護協議を文化課指導主事、上小地方事務所及び地元関係者を集めて7月20日急遽実施した。協議ではほ場整備の設計変更まで含めて検討したが、水路の関係で不可能となり、結局5,000千円の調査費の増額と、整理・報告書作成のほとんどを次年度送りとし、2,000㎡以上を調査することで結論を見た。これにしたがい、先に上小地方事務所と上田市長間で締結した調査の委託契約の変更契約を8月18日付けで締結し、上田市では8月21日付けで調査団との間の変更委託契約を締結した。

ところがこの直後地方事務所から、従前の設計では遺物包含層まで土を動かさず、現状保存が可能となっていた遺跡範囲のうち、4,000㎡に及ぶ面積の土を大規模に移動する設計が呈示された。市教委、調査団ではこの対応は不可能であるので、再考を依頼したが折合わず、8月26日再々協議を実施した。この結果、調査費をさらに2,000千円増額し、対応することとなった。上田市では再度前述の手順にしたがい、地方事務所と調査団とにそれぞれ10月15日付けで、委託契約を締結する一方、国庫補助の変更申請を昭和62年9月29日付け上教社発第158号で、県費補助を12月21日付け上教社発第158-2号で文化庁長官と長野県教育委員会教育長宛てそれぞれ申請した。

調査はこうしたあいつぐ計画変更と膨大な出土遺物・遺構によりその進捗は必ずしも順調とは言えず、困難な状況の中で進められ、11月8日、現場調査を終了した。

この後、上田市立信濃国分寺資料館で遺物の洗浄作業を昭和62年度末まで行い、昭和63年度、遺物整理・報告書刊行に関する事業委託契約を市教委と調査団の間に締結し、1年間かけて事業を実施、平成元年3月25日調査報告書を刊行して調査はすべて終了した。

第3節 調査の体制

上田市教育委員会では新たに琵琶塚遺跡ほか発掘調査団を編成し、調査を同調査団長の塩入秀敏氏に委託して実施した。調査団の構成及び作業員は下記のとおりである。

琵琶塚遺跡ほか発掘調査団

顧問 五十嵐 幹 雄（日本考古学協会員、上田市文化財保護審議会委員）
" 岩 佐 今 朝 人（日本考古学協会員、前別所小学校教頭）
団 長 塩 入 秀 敏（日本考古学協会員、上田女子短期大学助教授）
調 査 員 児 玉 卓 文（日本考古学協会員）昭和63年3月31日退任
" 猪 熊 啓 司（上小考古学研究会員、長野県立長野高等学校教諭）

// 川上元（日本考古学協会、上田市立博物館庶務学芸係長）
 // 倉沢正幸（長野県考古学会、上田市立信濃国分寺資料館学芸員）
 // 中沢徳士（長野県考古学会、上田市教育委員会社会教育課学芸員）
 // 塩崎幸夫（長野県考古学会、同社会教育課嘱託）
 事務局長 清水万伴（上田市教育委員会社会教育課長）
 事務局次長 内藤良典（同社会教育課文化係長）昭和63年3月31日退任
 // 富田篤（同社会教育課文化係長）昭和63年4月1日着任
 事務局員 中沢徳士（同上田市教育委員会社会教育課学芸員）

発掘・整理作業参加者

（調査補助員）保坂富男（長野県考古学会員）末永成清（長野大学研究生）稲垣美麻（奈良大学生）

（発掘作業）宮崎のふい、増田ふき子、戸島津多江、村瀬よみ子、唐沢藤幸、小山康直、宮崎まつ子、田中森雄、赤羽幸雄、宮崎さゆり、堀内今朝次、長浜清吉、荒井美恵子、渡辺玉緒、近藤広世、金沢優美、田中いずみ、小林美貴子、成沢伯、大滝論、倉田篤、高橋智仁、山岸史和、関とみ江、下平正義、長浜峰吉、宮原順子、高野聖子、尾見英雄、依田久美子、田中美穂、池田次郎、遠藤元子、舟坂育子、清水春雄、青木均、関茂樹、遠藤理恵、田中淳、加藤直記、三富一弘、中山新吾、竹花忠雄、中本賢一、土屋雄彦、湯本みつる、宮島洋子、柳沢啓治、田中利明、舟坂政男、高橋仁美、蒲生まり子、手塚繁、原博和、西沢孝弘、丸山隆、高塩利勝、藤沢俊二、沼田亀治、竹村アキ、小山修一、小山倍子、井出淳子、久松定明、小林稔、北沢由美子、小田智美、北原里美、岡崎陽子、岡崎千春、箱山征、平林秀一、滝沢良平、中沢謙光、中沢茂代、西沢仁、真島亥三郎、山極袈裟万、松本幸江、石坂代美、居鶴藤吾、宮崎民雄、宮崎みち子、舟坂京子、小山濃、小泉寛見、宮崎はつを、清水一雄、清水利治、清水美枝子、宮崎輝美、宮崎百合子、清水忍、宮崎真平、清水悦男、坂口勉、宮崎四郎、小山美年、関広治、関房子、室賀久弥、室賀しやう、宮崎とり、宮崎俊明、宮崎幸信、清水幸二郎、堀内鉄也、田中当成、神田みちえ、赤羽三千男、川又英史、清水信幸、井形健司、倉沢克彦

（整理作業）坂巻ケン子、堀内節子、上野良幸、神林比砂子、中山文子、河上純一、米窪千鶴、竹内美恵子、宮下信子、大原広枝（順不同 敬称略）

第4節 調査日誌（抜粋）

昭和62年

- 7月6日（月） 条里水田跡へ発掘器材搬入、テント設営。重機でトレンチを掘削、畦畔を検出するために土層の調査を行なう。
- 7月7日（火） 鋤入式
- 7月8日（水） ㈲古環境研究所によるプラント・オパール標本採取
- 7月9日（木） 条里水田跡をトレンチにより調査
- 7月10日（金） テントを琵琶塚遺跡に移動。重機によりテスト・トレンチで遺跡の状態を調査
- ～7月12日（日） 査したのち、表土剥ぎ、グリッド設定、遺構検出作業にかかる。
- 7月16日（木） C区の表土剥ぎ終了
- 7月20日（月） 関係者による保護協議。2,000㎡の追加調査となる。
- 7月23日（木） D区表土剥ぎ、ローリング・タワー設置
- 7月24日（金） D、E区表土剥ぎ終了。C区遺構掘り下げに着手
- 8月7日（金） C区遺構掘り下げ、D・E区遺構検出作業
- 8月8日（土） D区掘り下げに着手
- 8月13日（木） お盆休暇
- ～8月16日（日）
- 8月17日（月） E区遺構掘り下げに着手、D・E区グリッド杭打ち
- 8月22日（土） ほ場整備実行委員会事務所へ遺物を搬入、暫時遺物整理に着手する。
- 8月26日（水） ほ場整備設計変更に伴う保護協議。約4,000㎡の調査対象区追加
- 8月30日（日） 現地説明会実施。約100名が来訪
- 9月3日（木） E区掘り下げ終了。全体測量にかかる。
- 9月5日（土） 追加調査区（F区）の表土剥ぎに着手
- 9月16日（水） F区遺構検出作業に着手
- 9月24日（木） F区遺構清掃
- 10月8日（金） F区遺構掘り下げに着手
- 10月29日（木） C区実測終了
- 11月3日（火） D区調査終了。発掘器材の撤収を開始する。
- 11月8日（木） 発掘器材をすべて撤収。調査を終了する。

これ以降、上田市立信濃国分寺資料館において遺物の洗浄を約半年かけて行ない、昭和63年度、遺物整理・報告書作製事業を行ない、平成元年3月25日調査報告書を刊行して調査はすべて終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 自然的環境

長野県東部に位置する上田盆地の南西部は、塩田と川西の二地区に二分される。塩田地区は小盆地で塩田平と呼ばれているのに対し、川西地区は、浦野川が形成した谷平野を中心に室賀谷を加えた一帯である。浦野川は上田小県地域では依田川・神川に次ぐ大河川で、小県郡青木村の大明神岳（1232m）、二ツ石岳（1563m）、御鷹山（1623m）、大沢山（1440m）、子檀嶺岳（1223m）などを源とする相染川、宮淵川、滝川、田沢川、阿鳥川などを集め東北流し、下流域に至って更に室賀川、塩田平の全流れを集めた産川を合流して上田市下之条で千曲川に注ぐ。上流域の青木村杵掛あたりですでに谷平野を形成し始め、流下するにしたがいその活動は活発で、その幅は青木小学校辺で約400m、上田市浦野で約900m、同吉田で約1000mをはかる。また、河岸段丘もよく発達し、中下流域では第1段丘（比高差約3m）、第2段丘（比高差約5m）の2段を認めることができる。

今回、圃場整備事業に先立って2次にわたり発掘調査された琵琶塚遺跡は、浦野川が形成した谷平野の最も幅の広い地帯である上田市小泉の字琵琶塚と字町裏にわたって所在し、浦野川右岸第2段丘の段丘崖に沿って、浦野川の流れに望む地点に立地する。一帯は谷平野とは言っても東から西へ、また南から北へゆるやかな傾斜をなし、遺跡付近では川は北側の城山（993m）の山裾に寄って流下しているので、遺跡は谷平野の北端に位置することになる。浦野川を挟んで北には名勝岩鼻から三ツ頭山（920m）につらなる城山の山塊がそびえ立って北風をさえぎり、また南には塩田平と画する丘陵状の小尾根が存在するのみで、「日向小泉」の名の示す通り日照まことに良く温暖で、その上、年間降雨量が1000mmにも満たない全国でも有数の寡雨地帯であり、浦野川以外に洪水を惹起する危険性のある河川もなく、さしたる自然災害は考えられにくい絶好の生活環境であると言える。

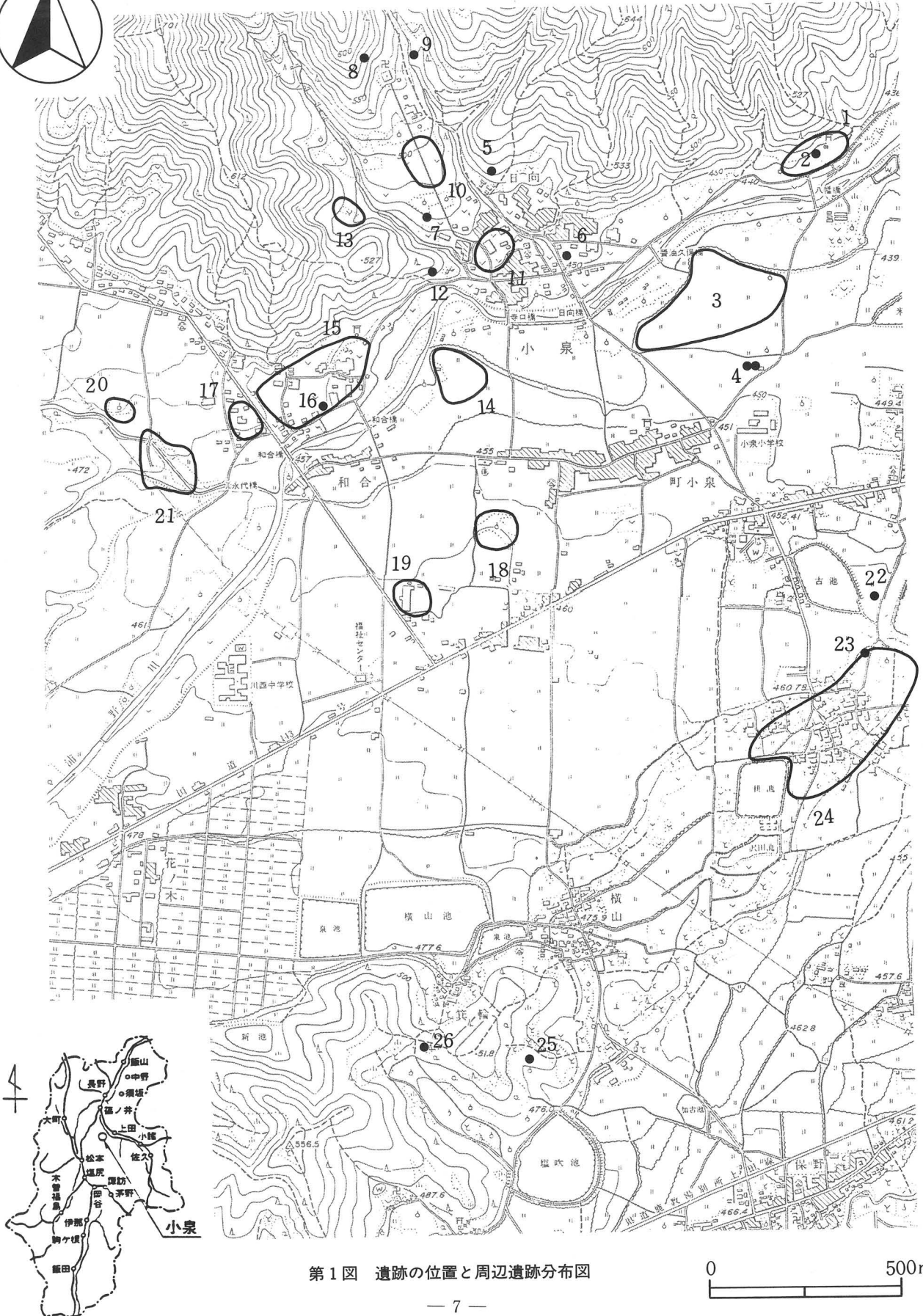
琵琶塚遺跡は、海拔445～448mをはかり、浦野川の現河床とは4～5mの比高差をはかるこの緩い傾斜面に約40000㎡にわたって広がっている。

第2節 歴史的環境

浦野河流域において認められる最も古い人類の足跡は、約7000年前の縄文時代早期後葉茅山式期の土器を出土した室賀谷の奥の谷鬼（やぎ）遺跡にしるされた。地形などからより古い時期の遺跡が発見される可能性をもつ地点はあるが、現在の時点ではこれをさかのぼる時期の遺跡は確認されていない。縄文時代はその後の全ての時期を通じて遺跡が存在するが、中期後半の加曾利

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	時代							備考		
					縄	弥	古	奈	平	中	近			
1	325	八幡山遺跡	小泉字八幡山	山麓		○	○	○	○					
2	324	八幡山古墳	小泉字八幡山	〃			○							
3	326	琵琶塚遺跡	小泉字琵琶塚・町裏	段丘		○	○	○	○					
4	327	琵琶塚古墳	小泉字琵琶塚	平地			○							全壊
5	328	日向小泉1号古墳	小泉字宮ノ入	山麓			○							全壊
6	329	日向小泉2号古墳	小泉字東村	〃			○							僅かに残る
7	330	日向小泉3号古墳	小泉字西村	山腹			○							僅かに残る
8	331	日向小泉4号古墳	小泉字寺住平	〃			○							半壊
9	332	日向小泉5号古墳	小泉字蛇川原入	〃			○							全壊
10	333	西寺畑遺跡	小泉字西寺畑	山麓		○	○							
11	334	旗鉾遺跡	小泉字旗鉾	台地	○	○	○	○	○					
12	335	鍛冶山古墳	小泉字鍛冶山	山麓			○							
13	336	鍛冶山遺跡	小泉字鍛冶山	〃	○		○	○						
14	337	大道下遺跡	小泉字大道下	段丘	○	○	○	○	○					
15	338	和合遺跡	小泉字和合	〃	○	○	○	○	○					
16	339	将軍塚古墳	小泉字和合	山麓			○							
17	340	岳之里遺跡	下室賀字岳の里	〃			○							
18	383	高田遺跡	小泉字高田	段丘	○	○	○	○	○					
19	384	長谷田遺跡	小泉字長谷田	平地		○								
20	341	岳ノ鼻遺跡	下室賀字岳ノ鼻	段丘	○		○							
21	413	山崎城跡	岡字山崎	台地			○		○	○				昭和54年発掘調査
22	385	扇田古墳	吉田字扇田	平地			○							
23	386	東村墳墓群	吉田字東村	〃						○	○			
24	387	原田遺跡	吉田字原田	〃		○	○	○	○					
25	388	口明塚古墳	保野字口明塚	山腹			○							
26	389	富士塚古墳	保字富士塚	山頂			○							



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

0 500m

E式期に遺跡数が最も増加する傾向が見られ、琵琶塚遺跡付近では大道下遺跡をあげることができる。後晩期は数的に激減するものの、琵琶塚遺跡の西南西3kmの大字浦野に下前沖遺跡が出現し、昭和55年に行われた発掘調査の結果、後期後葉加曾利B式期～晩期中葉大洞C₂式期の遺物が出土したが、浦野川流域のみならず上田小県地域においても数少ない該期遺跡の内でも、土器・石器のほか装身具・呪的遺物など最も内容豊かな遺物を出土した遺跡の一つとしてよく知られている。前述の大道下遺跡からもこの時期の遺物が表採されている。近く発掘調査が計画されているので、その結果が期待される。

上田小県地域における弥生時代遺跡のはじめは上田市八幡裏遺跡で、中期後葉に位置づけられそうな壺形土器を出土しているが、それ以外には今のところ遺跡は認められていない。遺跡数が爆発的に増えるのは後期後葉の箱清水式期に至ってからである。当地域も千曲川流域と松本平までを包含する櫛描文と赤色塗彩で代表される箱清水式文化圏に属し、多くの遺跡の存在が確認されている。琵琶塚遺跡の周辺では、南方の塩田平に天神山田屋敷・西光坊・和手遺跡などの比較的大規模な遺跡があり、また東方の上田原遺跡群なども規模の大きい遺跡であるのに対して、青木村をも含め10余りが知られているこの地区の弥生時代遺跡にはあまり大きな遺跡は存在せず、わずかに琵琶塚遺跡が塩田平や上田原の遺跡に匹敵する規模と内容をもっている。琵琶塚遺跡からは昭和61・62年度の発掘調査により合計23軒の箱清水式期の住居址が検出されているが、調査区域外で表面採集される遺物から遺跡全体では50軒を上回るものと思われ、当地域では該期の最大規模の集落遺跡である。至近距離ではないが、上田市上平遺跡はこの時期の防御機能をもつ高地性集落であると言われ、「クニ」の誕生をめぐって繰り返される権力集団の統廃合の過程に生まれたものである。琵琶塚遺跡もこの不安定な政治的状況の中に置かれており、集落存立のために紆余曲折をたどったであろうことも十分想像できる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭期にかけての遺跡としては、当琵琶塚遺跡と青木村の岡石遺跡B地点が上げられる。両遺跡とも東海地方西部に分布の中心をもつS字口縁台付甕形土器を出土しており、琵琶塚遺跡はその外に近畿地方や北陸地方の影響を受けた土器を持つ。特に、古墳時代最初頭の布留I式の精製浅鉢の出土量は東日本では5指の内に数えられるものである。これらのことは、単なる文化の伝播の結果と言うより政治的な波の波及とも考えられている。岡石遺跡は遺跡の全容は知られていないが、琵琶塚遺跡に比べかなり小規模と思われるものの、その存在は重要である。

古墳時代の遺跡は古墳の数に比して少数である。湮滅したものも含め19基を数える古墳の内、室賀の神宮寺古墳、青木村の塚穴古墳が調査された。共に直径20mに及ばない円墳だが、内部主体に両袖式の横穴式石室で、前者は直線的な羽子板型石室を、後者は胴張りの石室を有する。特に後者の副葬品は勾玉・切子玉・ガラス小玉・耳環などの装身具が見事である。また、西方1kmの和合將軍塚古墳は礫塚をもつ縦穴式石室墳ではないかと考えており、かつて鉄剣2口が出土したと伝える。西北500mの日向小泉には日向小泉1～5号墳と鍛冶山古墳の6基の円墳が存在し

ており、当地域唯一の古墳群として注目される。更に、すでに畑地化して湮滅してはいたが、最近リング園の排水路工事に際して人物埴輪・円筒埴輪を出土した八幡山古墳は、琵琶塚遺跡とは浦野川を挟んで東北方 300mの近距離にある。これらの古墳は、やや古いと考えられる和合將軍塚古墳は例外として、その他のほとんどは後期後半に比定され、7世紀代に築造されたものである。和合將軍塚古墳が竪穴式石室墳としてそのまま認められるならば、6世紀前葉以前にはすでにかかなりの権力の集中があったことになり、その後は少々分散するものの継続して権力の存在をみることができると考えられる。集落遺跡としては、現時点で古墳時代遺跡として確認されているのは琵琶塚遺跡と青木村岡石遺跡のみであるが、特に琵琶塚古墳の2次にわたる発掘調査では、古墳時代全期にわたる45軒の住居址が検出されており、遺跡全域が調査されたならば恐らくこの2倍に及ぶものと考えられ、南に隣接する2基の琵琶塚古墳（湮滅）を始め周辺古墳の存立に深くかかわってきたものと思われる。また、琵琶塚遺跡の存在する上田市大字小泉に東接する地籍は大字吉田であるが、この吉田の地名は古代の吉田連（むらじ）氏にかかるもので、吉田連氏を中心とした一帯の開発を想定する考察もなされている。このように、少数ながらも古墳の存在は当時の開発が相当進んでいたことを物語っており、今後この時期の遺跡が更に増加することを示唆していると言えよう。

奈良・平安時代に至ると、集落数が急増する。農工具製作や土木工事にかかる技術の進歩により、灌漑用水路の開鑿や水田の開発が急激に進んだ結果であり、水田化可能な谷平野は言うまでもなく戦後初めて開拓の手が入ったと考えられていた室賀谷の奥の谷鬼の地にも1000年前にすでに開拓者が入り込んでいた。645年の大化改新により正式に科野（信濃）国が成立し、国府は上田盆地に置かれ、8世紀の初頭には令制の東山道が松本から保福寺峠を越えて浦野川沿いに通るようになった。青木村の岡石遺跡は「東山道浦野駅跡推定地」として発掘調査された遺跡である。東山道は当地区内では浦野川左岸の山裾を通っていたと考えられていたが、最近では、谷平野の真ん中を一直線に通っていたとも言われている。いずれにしても東北方の古舟橋付近で千曲川を渡って東に向かったと想定されている。8世紀中頃には上田に信濃国分寺が創建され、当地域に東山道を通り入り込んでくる文物はさらに増加したものと思われる。『万葉集』に詠まれた「浦野の山」もこのあたりの山とされる。古代信濃国にあった16の官牧の内の一つ塩原牧は浦野川上流域にあったと考えられており、今にのこる「牧寄・馬背」などの牧に関する数多くの地名等はその事実を如実に物語っている。また、『日本霊異記』に登場する「小県郡跡目郷」の「他田舎人蝦夷（おさだのとねりえみし）」は信濃国造氏につながるものと考えられるが、8世紀中頃の人物であり、銭や稲を高利で貸していた財産家で、言わば豪族であった。塚穴古墳や塩原牧とも何らかの関係があったと考えることもできよう。

この地区には小泉条里水田跡が残されている。一町ごとに地割りされた条里水田の跡は、現在もその痕跡を農道や水路・畦畔に明瞭にみられるが、この大土木工事は松本平の調査によって明らかになったように、平安時代後期あるいは終末期以後に行われたものと考えられる。琵琶塚遺

跡はこの条里水田跡の最北方に当たり、このあたりでは地割りが不明瞭になっている。琵琶塚遺跡の平安時代に属する住居址が古墳時代に比し著しく少ないのは、水田化可能地は水田にし住居を別の地に移した結果と思われるが、この傾向は奈良時代から見られ、この地区の一等水田地帯内には大規模な奈良・平安時代の集落遺跡は存在しないのである。

ともかく、当地域は『倭名類聚抄』の小県八郷の内の「福田郷」であり、一部分「跡部郷」にも含まれると思われるが、今ならば超一級国道とでも言うべき東山道沿いの地区であり、中央の文物も入りやすく、当時としては開けた土地であったと考えられる。

第3章 琵琶塚遺跡の調査

第1節 調査の概要

琵琶塚遺跡は浦野川右岸の河岸段丘上に約40,000㎡の範囲にわたって所在しており、弥生時代後期から平安時代後期にわたる川西地区最大規模の複合集落遺跡である。本遺跡は昭和61年度より実施される県営圃場整備事業に伴ない、その大部分が破壊されることとなり、2年度にわたる発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。

昭和61年度に実施された第1次発掘調査では約500㎡の極めて小規模な発掘調査であったにもかかわらず、竪穴式住居址19軒、土壇14基、溝状遺構3基、ピット21基が検出され、多量の遺物が出土した。特に古墳時代後期と平安時代後期の一括資料は質、量とも豊富で、当地域の該期における標識となり得る良好な資料であった。また、弥生時代終末期から古墳時代初頭における東海、北陸、畿内等の影響を強く受けた外来系土器が多量に出土し、県内外より多大な関心が寄せられた。しかしながら、調査終了後に圃場整備事業が開始されると非常に広範囲にわたって遺構が展開していることが確認され、遺跡面積のかなりの範囲におよぶ遺構、遺物が重機により破壊されてしまう結果となった。

昭和62年度の第2次発掘調査では、第1次調査の反省に基づき、より広範囲な発掘調査が実施されることとなった。調査に先立ち重機によるトレンチ調査を行なった結果、川岸段丘崖に沿って広範に遺構、遺物が分布していることが確認され、工事によって削平される地点を重点的に選定して発掘調査を実施することになった。このため、調査地点は数カ所に分割され、昭和61年度に調査されたA・B区に継続して便宜的に東よりC～E区と呼称することとした。調査面積はC区が約1,200㎡、D区が約500㎡、E区が約400㎡の範囲を設定した。調査は3m×3mのグリッド方式による平面発掘とし、重機による水田表土剥ぎの後、グリッドを設定した。グリッドは東から西へA・B・C…Z・2A・2B……、北から南へ1・2・3……と設定した。

調査はC区より順次着手されたが、川西地域特有の固く締まった強粘質土壌と、予想以上の遺構の重複により、遺構確認、遺構掘りなどの作業は困難を極めた。特に黒褐色の遺物包含層中に遺構が構築されていたC区中央部付近は遺構の重複が複雑で、遺物もかなり攪拌されており十分に把握できなかった。

調査は8月下旬になって4,000㎡に及ぶ面積が新たに破壊されることになり、調査を実施することとなった(第1章第2節参照)。しかし、限られた調査期間と予算内で対応するのは自ら限界があり、E区周辺の約400㎡とF区として設定した約1,550㎡の範囲を辛うじて調査したに過ぎない。

約4ヵ月に及ぶ調査の結果、検出された遺構は竪穴式住居址68軒、掘建柱建物址2軒、土壇19

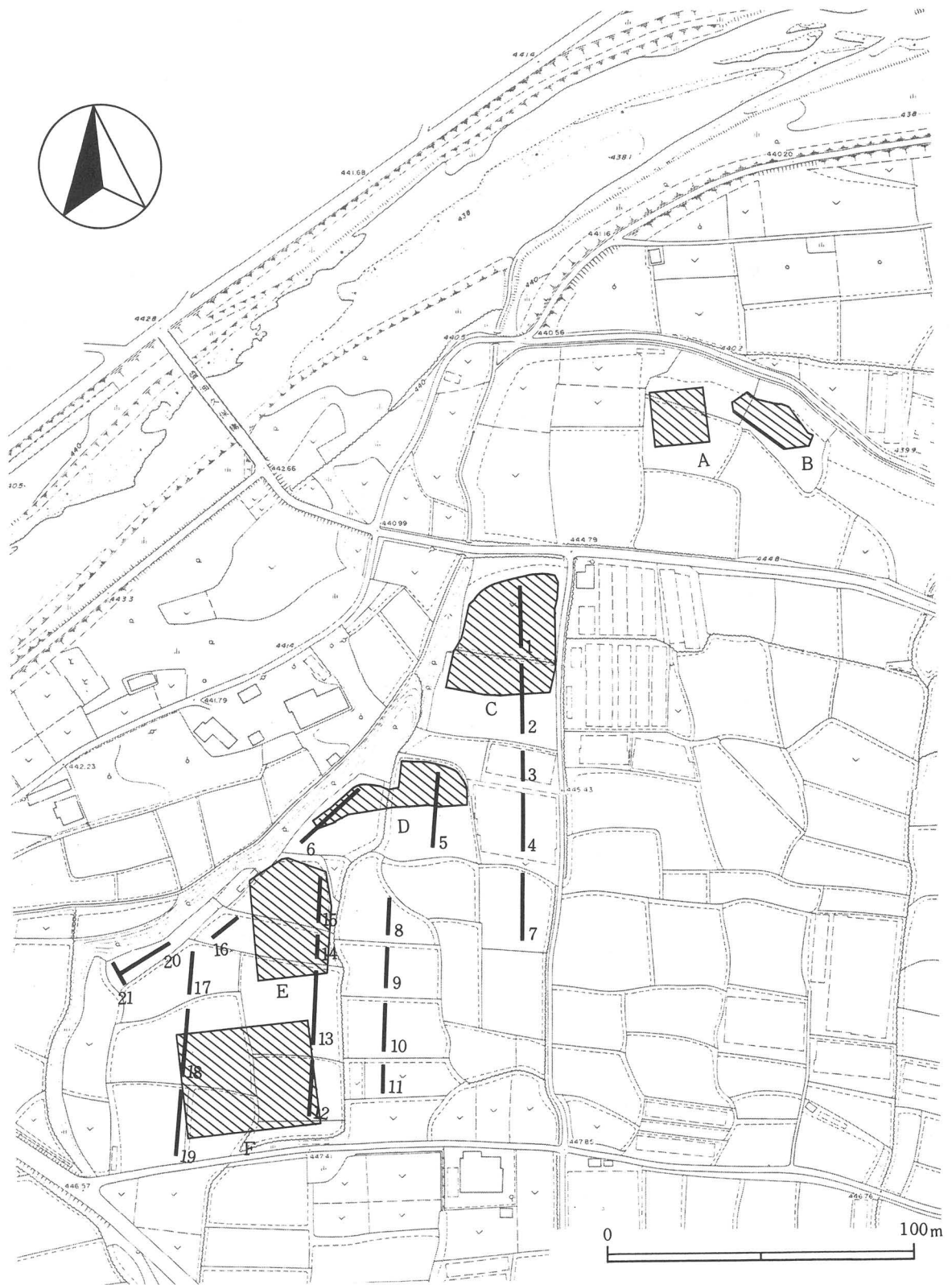
基、溝状遺構3基、ピット51基にのぼり、コンテナ約120箱に及ぶ遺物が出土した。検出された遺構の所産期は、一時断絶があるものの弥生時代後期から平安時代後期の約800年間にわたり、特に弥生時代後期から古墳時代後期にかけての時期に盛んに人々が生活を営んでいたことが確認された。

弥生時代の遺構は、後世の遺構によって破壊されている例が多いが、第62号住居址、第33号土壙等から多量の一括資料が出土し、特に第62号住居址からはコンテナ10箱以上にのぼる弥生土器と鉄斧、銅釧、石包丁、細形管玉、ガラス小玉等の祭祀的な色彩の強い遺物が出土した。本址で出土した鉄斧は県内では最も古い時期の資料と推測される。また、鉄石英製の細形管玉は第1次調査の際にも第15号住居址から出土しており、該期に北陸地方と何らかの関係があったことが窺われる。

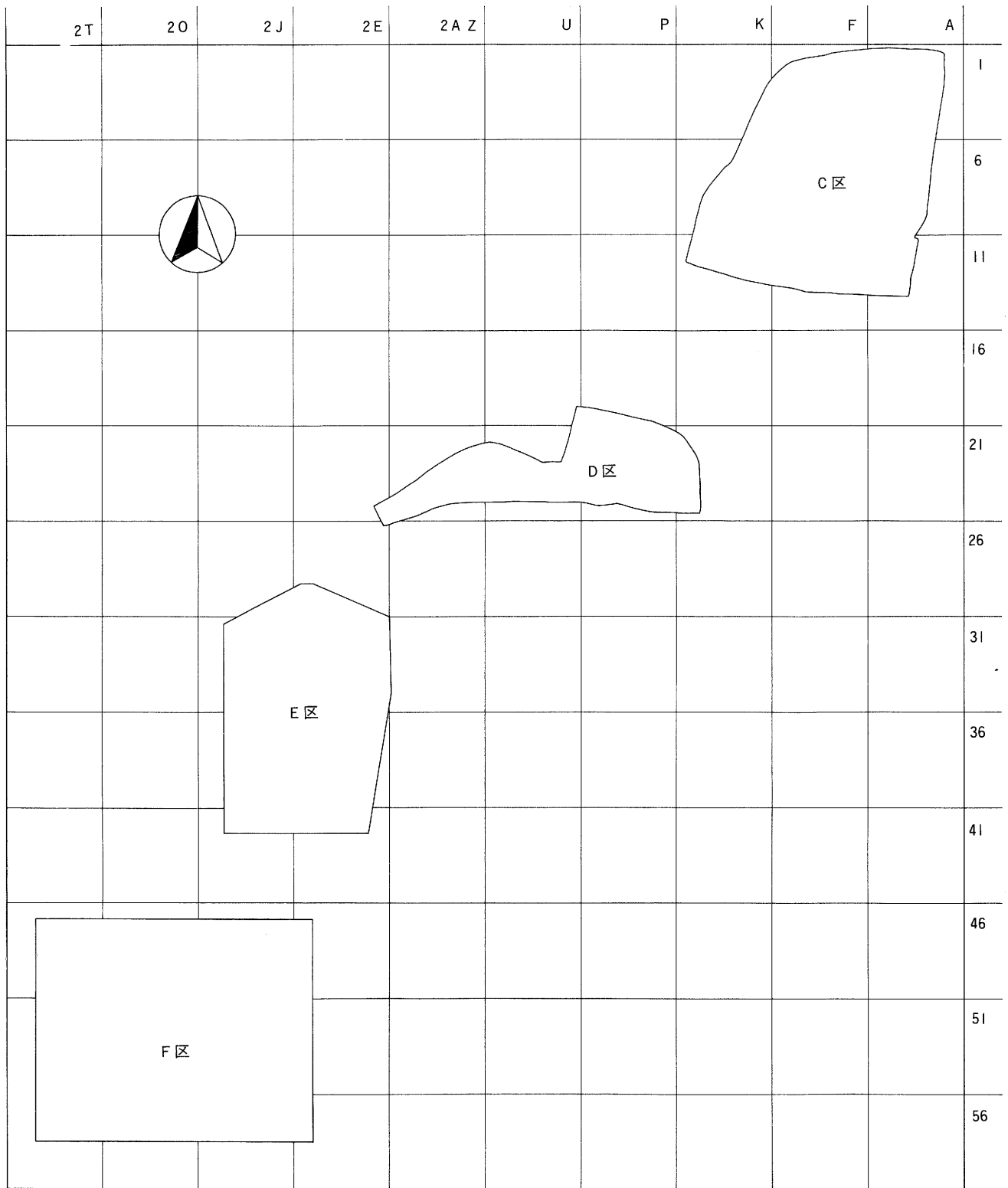
古墳時代の遺構は、弥生時代後期に続く前期と後期にピークがあり、前期では前回調査に引き続き極めて多種多量の外来系土器が出土している。特に第41号住居址からは小細片ながら非常に多彩な外来系土器が出土した。本址の資料は在地系の土器をほとんど含まず、畿内の布留式や東海・北陸地方等の土器の影響を強く受けた土器が相伴しており、当地域における外来系土器の出現のあり方に多くの示唆を与えるものとなる。また、古墳時代中期の遺構では、第22・53・82号住居址等がまとまった資料を出土しており、従来あまりはっきりしなかった当地域の該期研究に貴重な資料を提供することとなった。古墳時代後期は、今回の調査で最もまとまった資料が出土しており、特にC区の第21・27・48号住居址からは原位置を留めた多量の遺物が出土した。これら3軒の住居址と前回調査された第4号住居址は住居址プラン、カマド位置、構築方法、燃焼部内からの獣骨片出土、天井石の検出状況、遺物の出土状況等いくつかの共通する要素があり、ほぼ同時期に存在していたものと推測される。また、カマド天井石の検出状況と遺物の遺存状況から推して生活用具すべてを故意に残したままカマド焚口を天井石で塞ぎ、住居を廃棄したものと推測され、豊富な一括資料とともに住居廃絶の様相を知ることのできる稀有な例となった。

奈良時代以降は住居址数が激減し、奈良時代3軒、平安時代2軒の住居址が検出されたに過ぎない。奈良時代の3軒は出土遺物が乏しいものの、平安時代後期の第25・66号住居址は良好な一括資料を出土しており、特に第25号住居址からは50点近い羽釜、坏類、灰釉陶器が図示できた。

2年度にわたる琵琶塚遺跡の発掘調査の結果、調査面積、検出された遺構、遺物等は従来の発掘調査とは比較にならないほど大規模なものとなり、多くの問題点を残しながらも多大な成果をあげることができた。

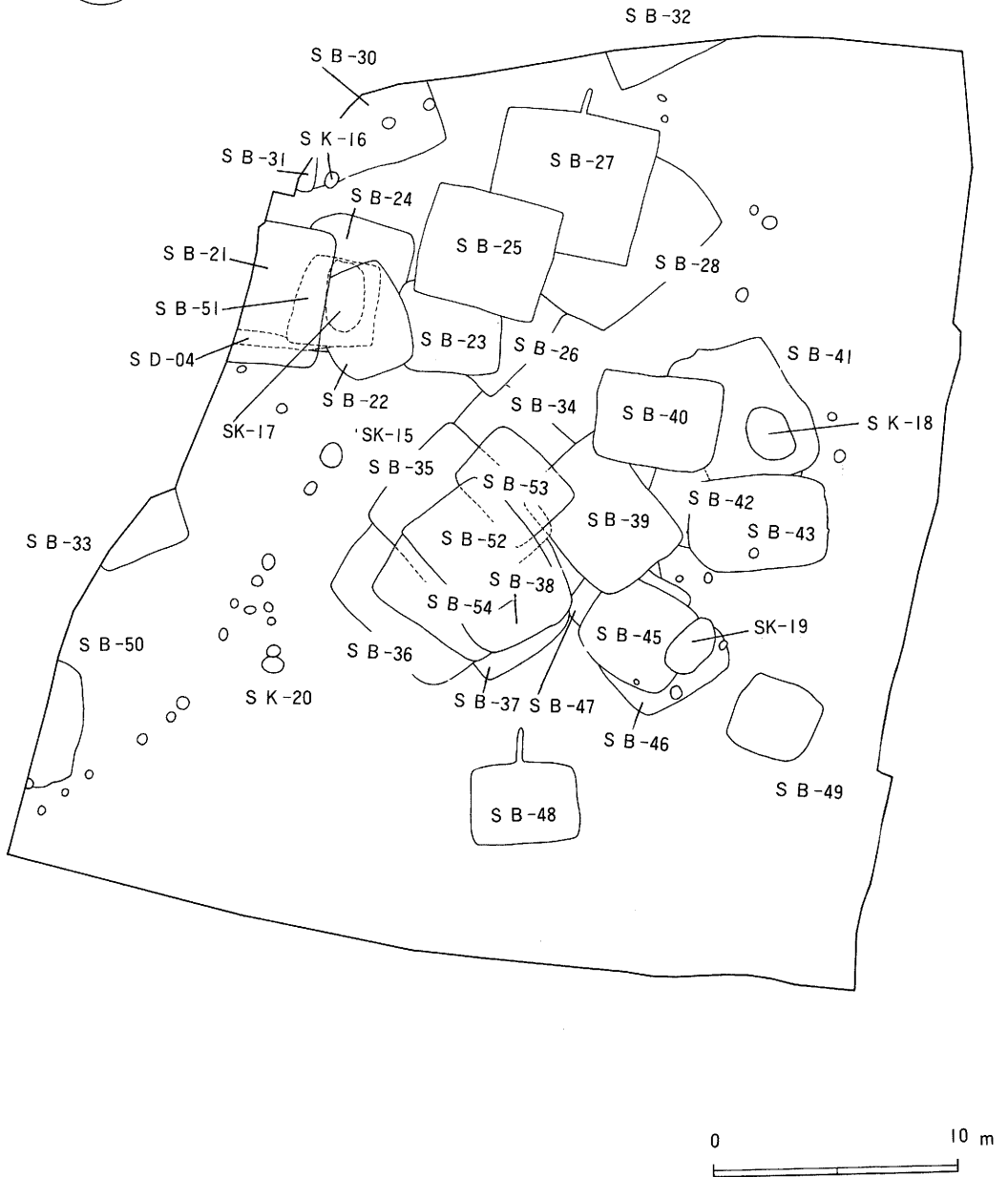
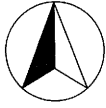


第2図 琵琶塚遺跡試掘トレンチ・発掘調査区域設定図

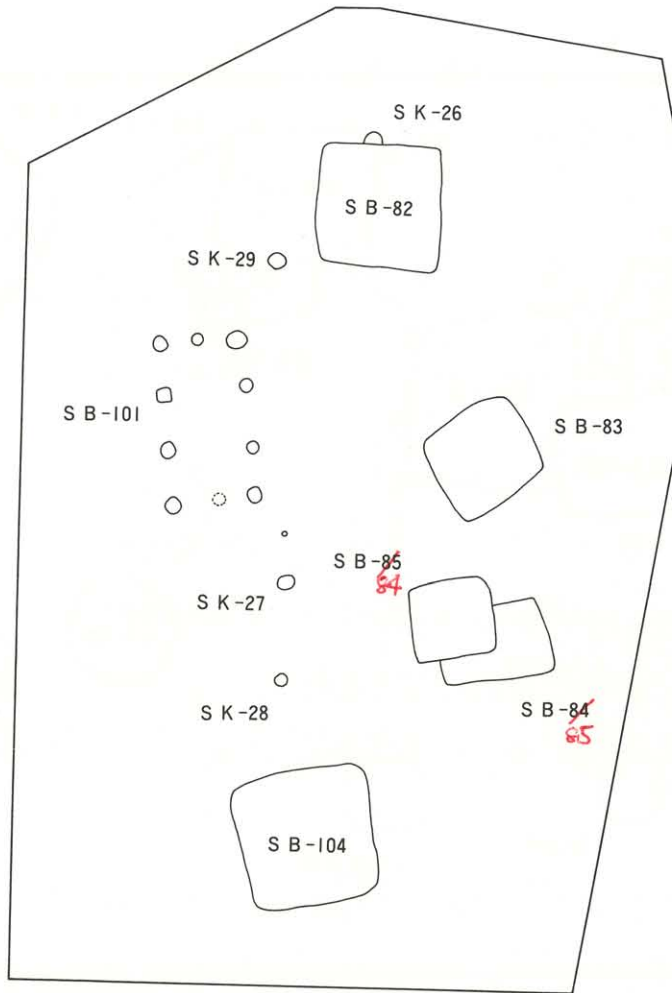


第3図 琵琶塚遺跡グリッド配置図

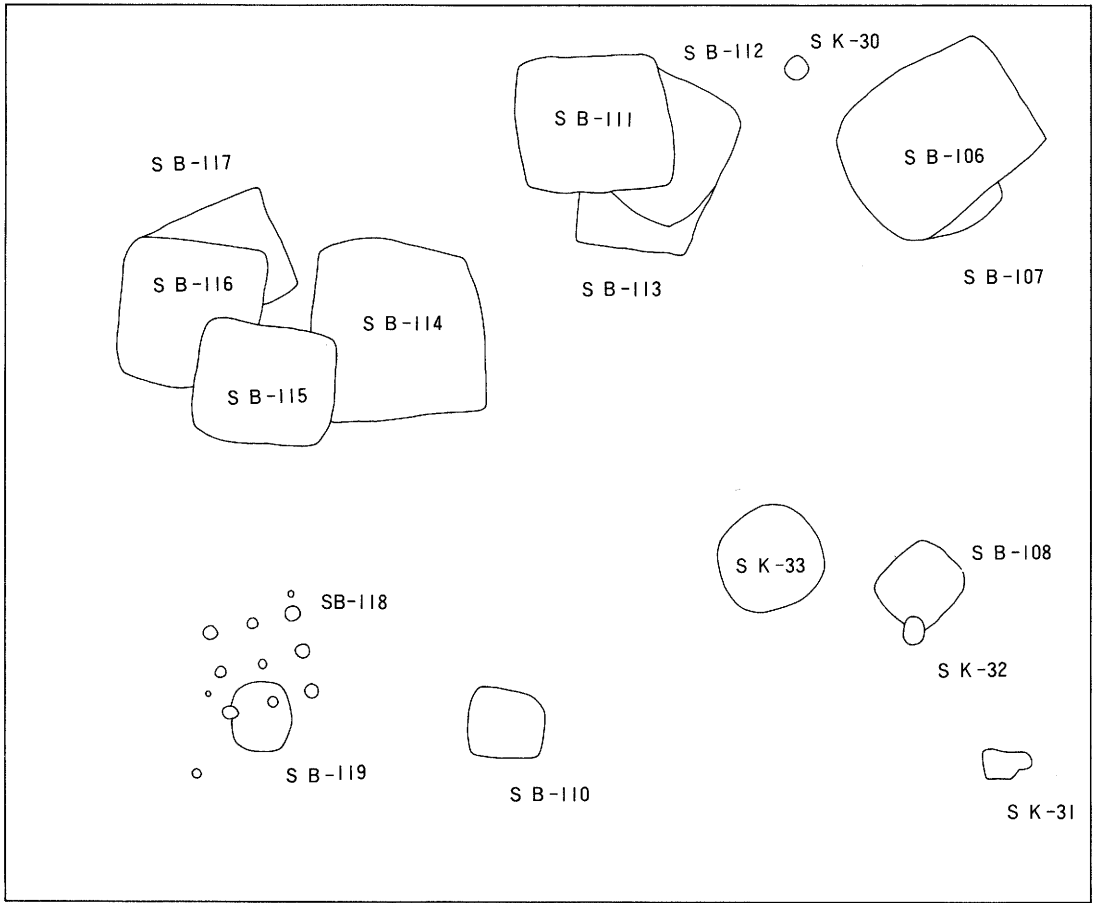
0 30 m



第4図 琵琶塚遺跡C区遺構全体図



第6図 琵琶塚遺跡E区遺構全体図



第7图 琵琶塚遗迹F区遗构全体图

第2節 基本層序

琵琶塚遺跡は、上田市大字小泉字琵琶塚と字町裏の両地域に所在し、小県郡青木村に源を持つ浦野川の右岸第2段丘上に立地し、約40,000m²の範囲に展開していると推定されている。

標高は443～450mを測り、西から東に、南から北に向かって緩やかに傾斜している。浦野川河床との比高差は4～5mを測る。

琵琶塚遺跡の層序はC～F区にかけてほとんど大差なく、全体として固く締まる強粘質土層で構成されている。

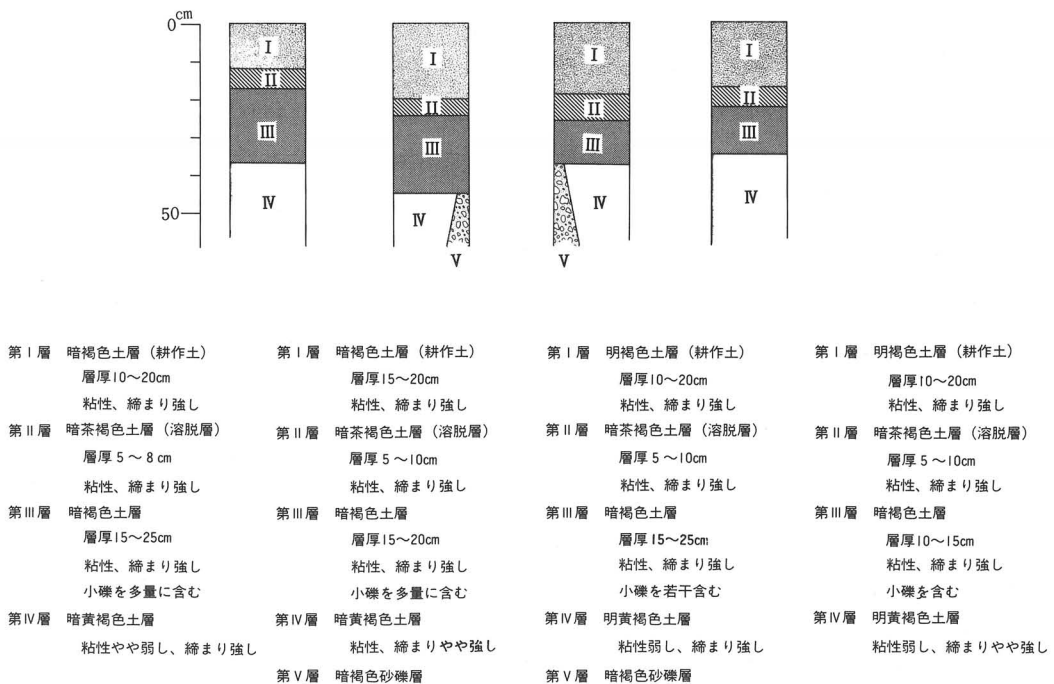
第1層は耕作土層で、層厚は10～20cmを測る。粘性強く、比較的固く締まる。

第2層は水田床土の溶脱層で、層厚は5～10cmを測る。

第3層は小礫を多量に含んだ暗褐色土層で、層厚は10～25cmを測る。粘性、締まり共に強い。

第4層は暗黄褐色土層で、ローム粒子を若干含み細密に締まる。

第5層は河床砂礫層で、D・E区の一部において検出された。



第8図 琵琶塚遺跡基本層序模式図

第3節 遺構と遺物

1. 住居址

(1) 第21号住居址 (SB21)

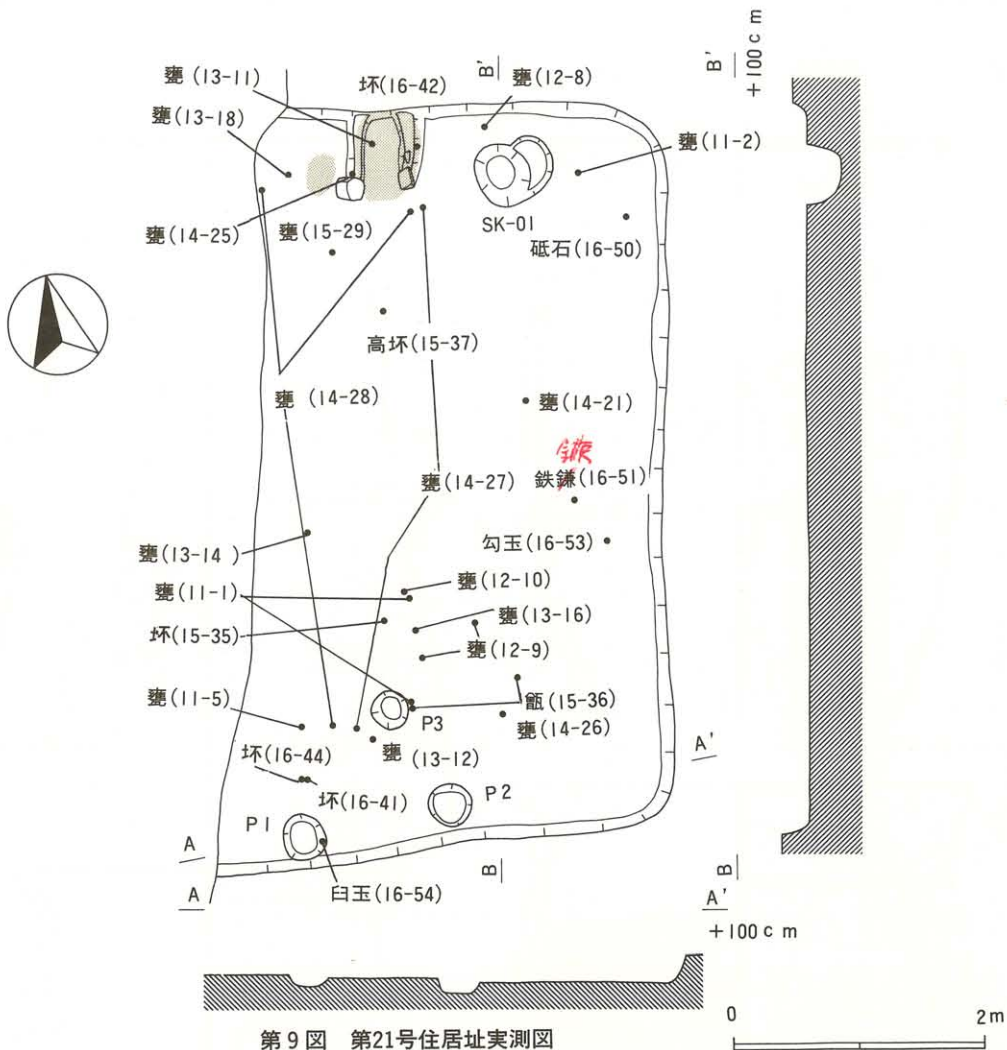
遺構 (第9・10図)

本住居址はC区北西部のグリッドK・L-3～5において、第22・24号住居址等と重複して、住居址東側の約2/3が検出された。平面プランは主軸方向をN-10°-Eに持つ隅丸長方形を呈すると推定され、カマドの設置位置を北壁中央部と推定した場合、規模は南西北6.0m、東西4.6mを測る。残存する壁高は10～22cmを測り、壁は垂直に近く立上がる。床面は住居址北側でややレベルが下がるが全体としてはほぼ平坦で、比較的堅緻であった。覆土は小礫を含んだ暗黒褐色土の単一層であるが、住居址のほぼ全域にわたって10～20cmの河原石が多数混在していた。これらの礫は床面より3～5cmほど浮いた状態で10～20cmほどの厚さを測り、特に住居址南部ではかなりまとまって検出された。

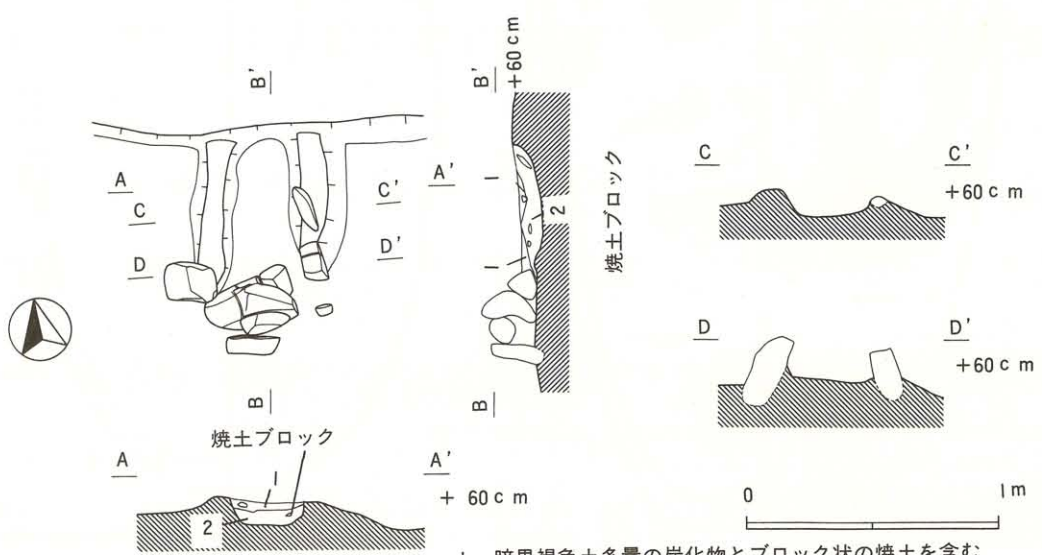
カマドは北壁中央部に設置されたと推定され、遺存状況は良好であった。残存する規模は右袖60cm、左袖65cm、両袖幅63cmを測り、焚口部に一對の河原石を配し、小礫混じりの暗黄褐色粘土で馬蹄形に袖部を構築している。火床部は非常に良く焼けており、焚口部分には天井石と推定される4点の強い火熱を受けた河原石が組み合うようにして直立した状態で検出された。燃烧部内部からは火熱を受けた少量の小骨片が出土したが獣骨片と推定される。また、カマド左側にカマドより掻き出されたものと推定される若干の焼土と灰が検出された。琵琶塚遺跡の古墳時代後期住居址では初年度に調査された第4号住居址と後述する第48号住居址においても、天井石の石材が焚口部を塞ぐようにして遺存している例が確認されており、いずれの住居址も住居機能中の様相を強く残した状態で多数の遺物が出土しているところから、何らかの理由によって住居を生活用具すべてと共に廃棄する事態が発生し、カマドを破壊して天井石で閉塞し、住居を廃棄した可能性が想起される。本址覆土中より多量に検出された礫は本址を廃棄する際に投入されたものとも推測される。なお、後述する第27号住居址も天井石は残されていなかったが、同様に意図的に遺物を残して廃棄された住居址と推定される。

土壙・ピットは計4基検出された。SK01は貯蔵穴と推定され、東側にテラスを有し規模は64×54cm、深さ19cmを測る。P₁・P₂は南壁沿いに並んで位置し、副次的な柱穴と推定される。P₁は径35cm、深さ11cm。P₂は径35cm、深さ8cmを測る。P₃は住居址南側中央部に検出され、径30cm、深さ28cmを測る。

遺物の出土状況は、カマド付近と住居址南側の2ヶ所に集中する傾向が見られ、南側においては前述した覆土中の礫群の下層より床着の状態で出土している。しかし、一個体でまとまって検

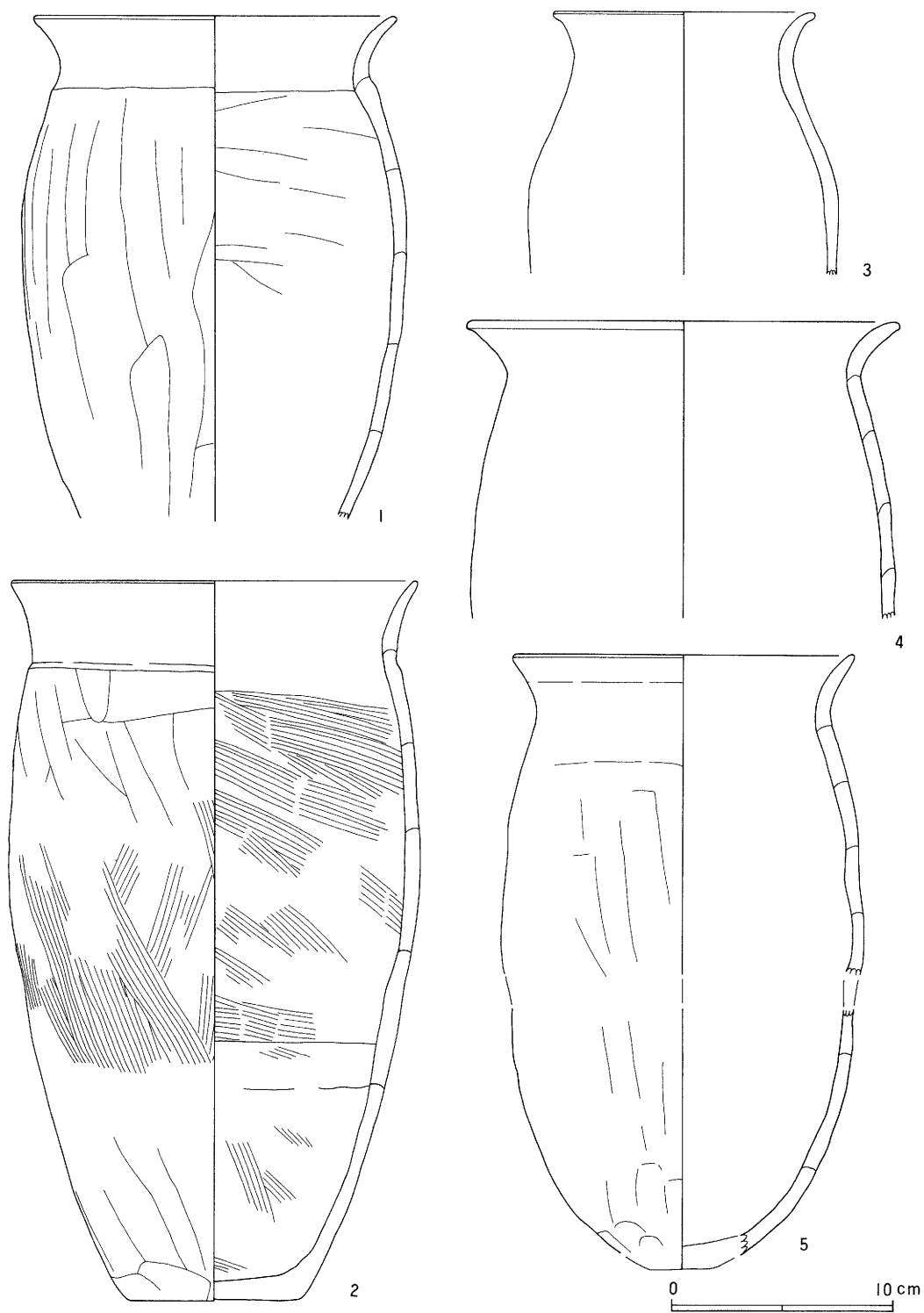


第9図 第21号住居址実測図

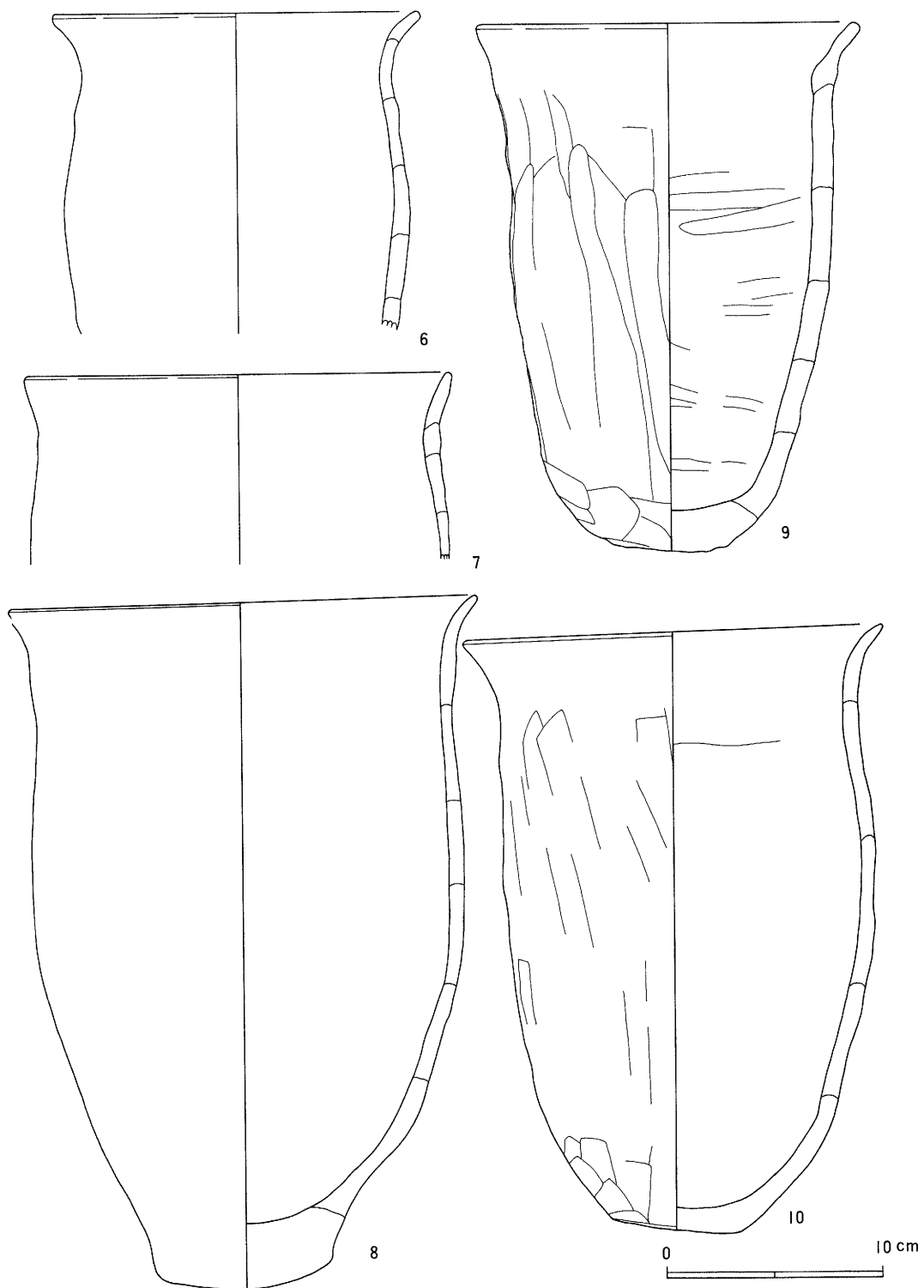


1. 暗黒褐色土多量の炭化物とブロック状の焼土を含む
2. 暗茶褐色土 多量の焼土を含む

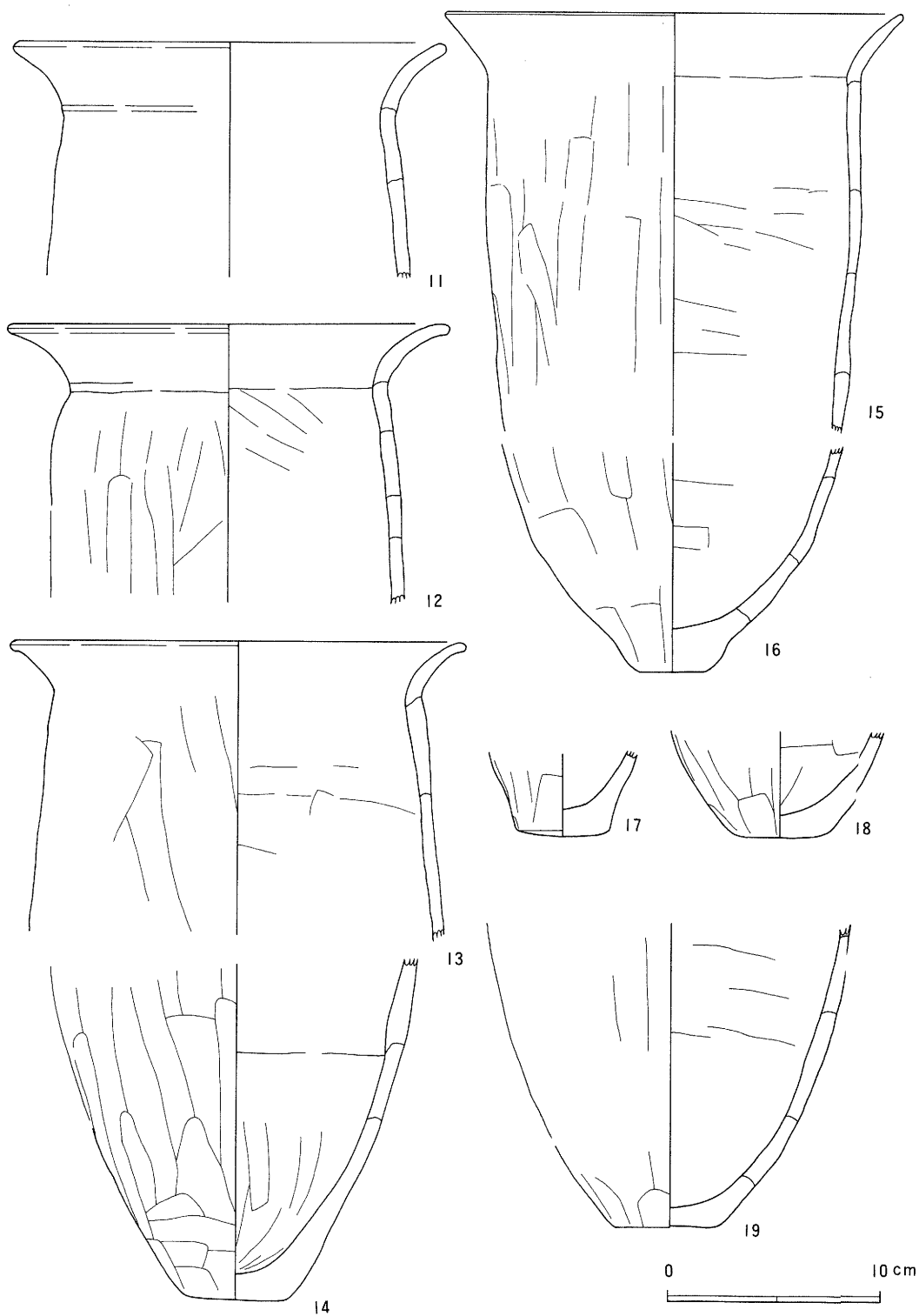
第10図 第21号住居址~~X~~カマド実測図



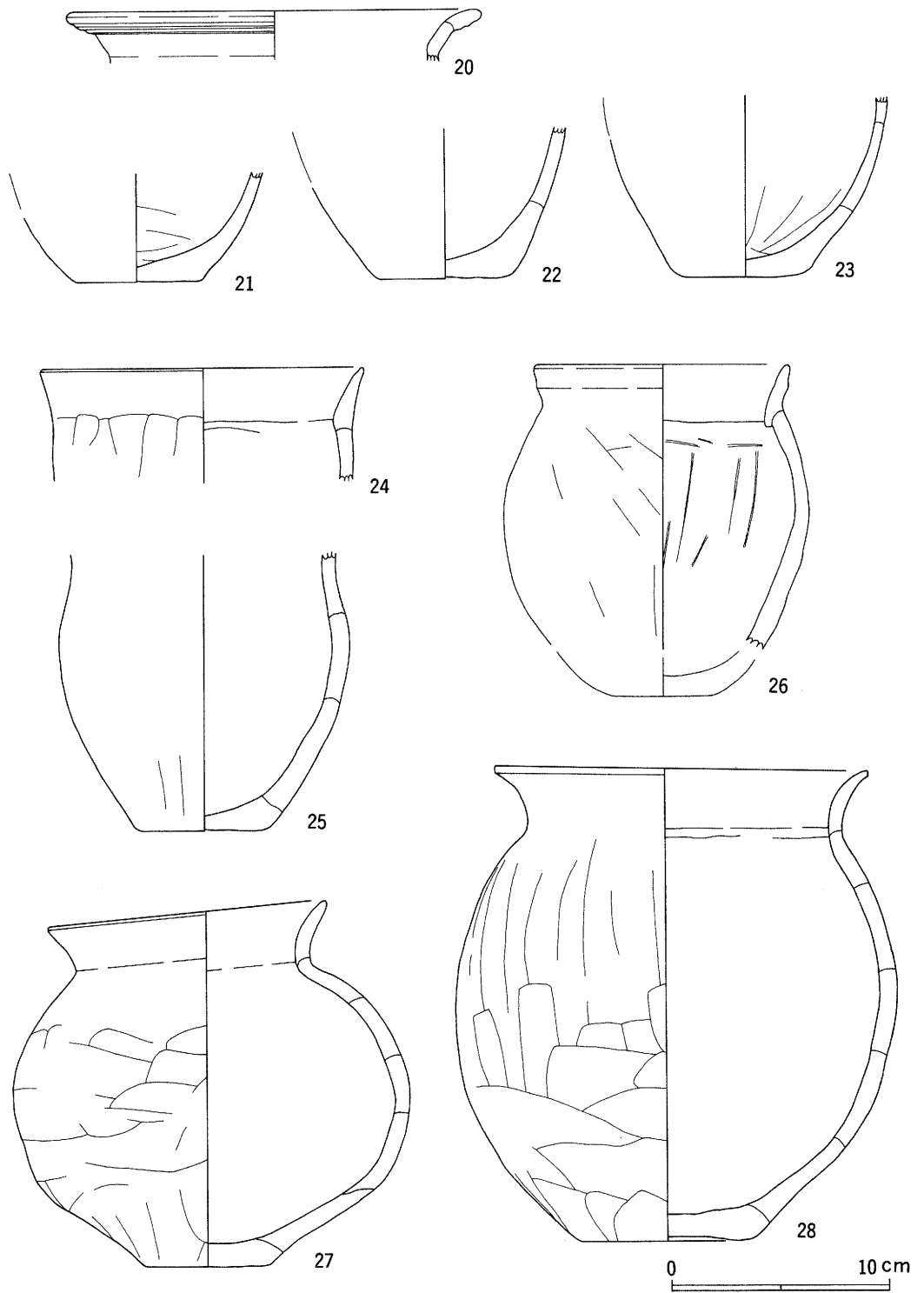
第11图 第21号住居址出土遺物実測図(1)



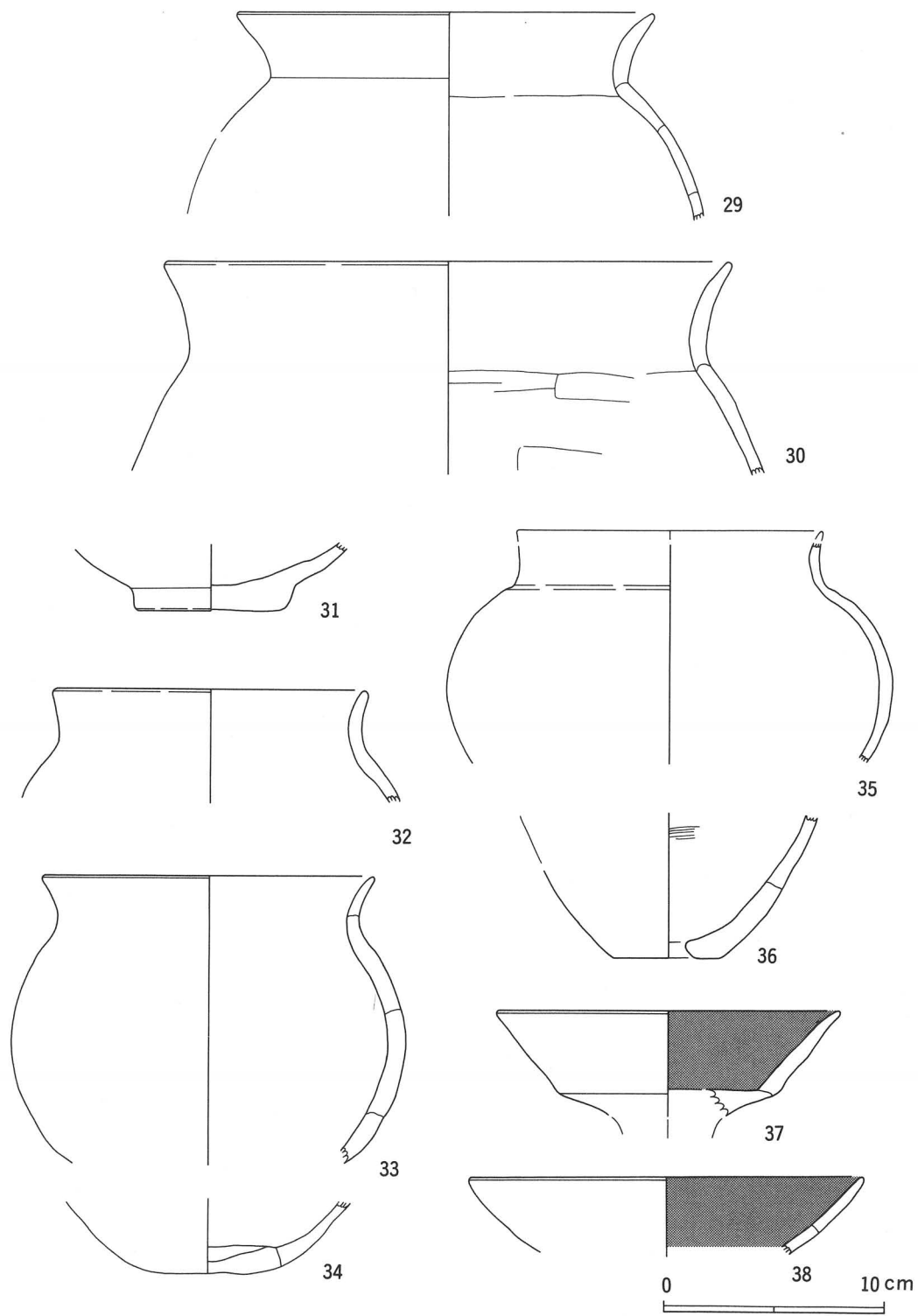
第12図 第21号住居址出土遺物実測図(2)



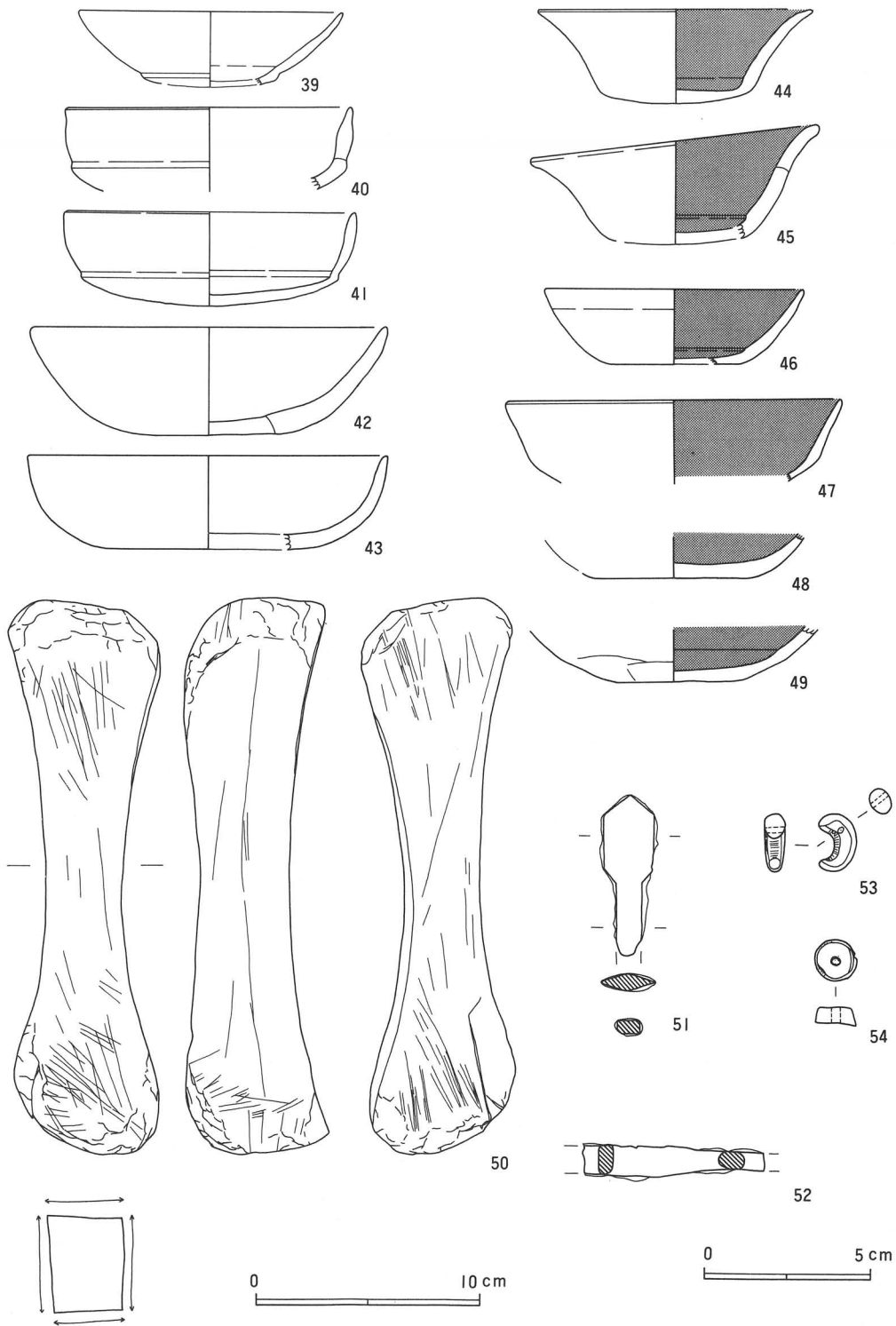
第13图 第21号住居址出土遺物実測図(3)



第14图 第21号住居址出土遗物实测图(4)



第15図 第21号住居址出土遺物実測図(5)



第16图 第21号住居址出土遺物実測図(6)

第2表 第21号住居址出土土器一覧表

挿函番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
11-1	土師・甕	口縁部完存 胴部3/4	口径 16.6	口縁部、下位に段を持って緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗赤褐色、内明茶褐色 *外面黒斑あり。
11-2	土師・甕	口縁部 1/2 胴部1/2 底部完存	口径 18.6 器高(32.8) 底径 8.1	口縁部、下位に段を持って緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外内面斜め刷毛調整。底部外面一部へら削り?。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良色調：外明灰褐色、内明橙褐色 *外面に煤付着。
11-3	土師・甕	口縁部～胴部 中位1/2	口径 12.0	口外部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：長石・白色小砂粒多く含む 焼成：良色調：外暗赤褐色、内極暗赤褐色
11-4	土師・甕	口縁部～胴部 中位 1/3	口径 19.8	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り+ナデ。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明赤褐色 *内面に暗褐色の付着物。
11-5	土師・甕	口縁部～胴部 上位完存 胴部下位3/4	口径 15.6 器高(28.0)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗赤褐色、内明灰褐色 *外面に若干の煤付着。
12-6	土師・甕	口縁部～胴部 中位1/4	口径(17.2)	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：金雲母・小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗赤褐色 胴外面暗褐色に変色。
12-7	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/4	口径(20.0)	口縁部弱く「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗赤褐色、内極暗褐色
12-8	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/3 下位～底部完存	口径 22.2 器高 32.0 底部 8.4	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り。	胎土：白色小砂粒を多く含む 焼成：不良 色調：外内淡橙色 *器面の風化著しい。
12-9	土師・甕	ほぼ完存	口径 19.4 器高 24.7	口縁部短く「く」の字状に外反する。底部は殆ど丸底となる。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。底部外面・内面横へら削り。	胎土：0.2～0.5の礫を多く含む 焼成：良色調：外内明灰褐色
12-10	土師・甕	ほぼ完存	口径 19.7 器高 28.2 底径 6.0	口縁部緩く外反する。底部は僅かな平底を持つ。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面ナデ。	胎土：0.3～0.8の礫を多く含む 焼成：良色調：外内明茶褐色
13-11	土師・甕	口縁部1/4 胴部上位1/3	口径(20.0)	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗赤褐色 *内面極暗褐色の付着物
13-12	土師・甕	口縁部1/3 胴部上位1/4	口径(20.5)	口縁部、下位に段を持って緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面斜めへら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外明赤褐色、内暗茶褐色
13-13	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/5	口径(21.0)	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外明赤褐色、内灰赤褐色
13-14	土師・甕	胴部下位～底部ほぼ完存	底径 4.3		外面へら削り。内面縦へら削り+ナデ。底部外面横へら削り。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良色調：外内暗赤褐色
13-15	土師・甕	口縁部～胴部 上位3/4 胴部 中位1/4	口径 21.0	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗灰褐色、内明灰赤褐色 *16の上部か。
13-16	土師・甕	胴部下位～底部1/2	底径 3.6		外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：雲母片・小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗灰褐色 内淡赤褐色 *15の下部か。
13-17	土師・甕	底部2/3	底径 4.4		外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良色調：外暗灰褐色、内明灰褐色
13-18	土師・甕	底部ほぼ完存	底径 4.2		外面縦へら削り。内面横へら削り。	胎土：黒雲母・小砂粒を含む 焼成：良色調：外灰橙褐色、内明灰褐色
13-19	土師・甕	胴部下位～底部ほぼ完存	底径 5.6		外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多量に含む上 焼成：良色調：外内暗赤褐色
14-20	土師・甕	口縁部1/3	口径(19.1)	口縁部2段に短く外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗褐色
14-21	土師・甕	底部完存	底部 5.7		外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明赤褐色

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
14-22	土師・甕	底部完存	底部 6.3		外面縦へら削り。内面不明。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：不良 色調：外内明黄褐色 *底部外面に木炭痕あり。
14-23	土師・甕	底部完存	底部 5.5		外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
14-24	土師・甕	口縁部1/3	口径(15.0)	口縁部内面に稜を持って僅かに外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内極暗褐色 *外面に若干の煤付着。
14-25	土師・甕	頸部～底部1/2	底径 6.2	口縁部外反し、胴部は僅かに肩が張る。	胴外面縦へら削り+ナデ。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗茶褐色
14-26	土師・甕	口縁部～胴部下位完存	口径 11.5 器高(15.3)	口縁部直立気味に外反し、僅かに有段状となる。	口縁部横ナデ。胴外面斜めへら削り+ナデ。内面縦へら削り+ナデ。	胎土：0.8, 0.3~0.1の礫・小砂粒・黒雲母細片を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内暗茶褐色
14-27	土師・甕	ほぼ完存	口径 12.8 器高 16.8 底径 5.7	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形に張って下半部で僅かにこける。	口縁部横ナデ。胴外面横へら削り。底外面縦へら削り。内面斜め・横へら削り。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗灰褐色
14-28	土師・甕	ほぼ完存	口径 17.2 器高 22.0 底径 8.0	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗灰赤褐色(底部煤付着) *外面煤附着。
15-29	土師・甕	口縁部ほぼ完存 胴部上位1/3	口径 19.2	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明橙褐色
15-30	土師・甕	口縁部～胴部上位1/6	口径(25.9)	口縁部緩く外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴内面横へら削り。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内明黄褐色
15-31	土師・甕	底部 1/2	底径 6.8		外面不明。内面横へら削り。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内暗灰色 *外面煤附着。
15-32	土師・甕	口縁部 1/6～胴部上位	口径(14.3)	口縁部直立気味に僅かに外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面不明。	胎土：小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
15-33	土師・甕	口縁部僅少 胴部1/3	口径(15.2)	口縁部僅かに外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ?	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色、内明灰褐色
15-34	土師・甕	底部 1/2			外面へら削り。内面ナデ。	胎土：小細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色、内淡橙褐色
15-35	土師・壺	口縁部下位～胴部中位1/6	口径(14.0)	口縁部外面に段を持って直立気味に外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外面へら削り。内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明灰褐色
15-36	土師・甌	底部完存	底径 5.0	内湾して立上がる。底部に1孔を有する。	外面縦へら削り。内面横刷毛調整+ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
15-37	土師・高坏	坏部1/2	口径 15.8	坏部屈曲外反し長く伸びる。	外面縦へら磨き?。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色細粒子を少量含む 焼成：良 色調：外淡黄褐色、内黒色
15-38	土師・高坏	坏部1/2	口径(18.2)	坏部内湾して開く。	外面不明。内面へら磨き。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内黒色
16-39	土師・坏	口縁部～底部1/2	口径(12.0) 器高(3.4)	浅い丸底から段を持って立上がり、口縁部は僅かに内湾しながら長く伸びる。	外内面へら磨き?。	胎土：赤褐色細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内淡黄褐色
16-40	土師・坏	体部1/4	口径(13.0)	体部中位に段を持って屈曲し、僅かに外傾する。	口縁部横ナデ。底外面へら削り。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明灰橙褐色
16-41	土師・坏	体部1/2、底部ほぼ完存	口径(13.2) 器高 4.3	浅い丸底から直立気味に立上がり、口縁部は僅かに内湾する。	口縁部横ナデ。底外面へら削り。内面横へら磨き+ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外黒ずん橙色～黄茶褐色、内明茶褐色。

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
16-42	土師・坏	口縁部～底部 1/3	口径(16.2) 器高 4.9	底部から口縁部にかけて半球形に内湾して開く。	口縁部横ナデ。外面へラ削り+ナデ。内面ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明灰褐色
16-43	土師・坏	口縁部～底部 1/4	口径(16.3) 器高 4.3	底部から口縁部にかけて緩く立上がり、口縁部ではほぼ直立する。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面横へラ磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
16-44	土師・坏	ほぼ完存	口径 12.5 器高 4.3	浅い丸底の底部から強く屈曲して立上がり、口縁部は外反して長く伸びる。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
16-45	土師・坏	口縁部～底部 1/2	口径 13.2 器高 5.4	浅い丸底の底部から強く屈曲して立上がり、口縁部は外反して長く伸びる。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面横へラ磨き。	胎土：赤褐色細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明白褐色、内黒色
16-46	土師・坏	口縁部 1/3～ 底部	口径(11.8) 器高 3.4	底部内面に段を持って立上がり、口縁部は僅かに内湾する。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡黄褐色、内黒色
16-47	土師・坏	口縁部1/6	口径(15.3)	体部中位で緩やかに屈曲し、口縁部は内湾する。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面横へラ磨き。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内黒色
16-48	土師・坏	底部1/2	底径 7.0	底部から緩やかに立上がる。	外内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡黄褐色、内黒色
16-49	土師・坏	底部～体部下 位1/4	底径 (5.6)	底部から緩やかに立上がる。	外面へラ削り。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡黄褐色、内黒色

出される例は少なく、多くの固体が数カ所に分散して出土しており、接合関係がかなり広範囲に及ぶ遺物もある。以上の様相から本住居址出土の遺物は住居址廃絶時に一括して廃棄された可能性が高いと推測される。

本址は第22・24・51号住居址、第4号溝状遺構を切って構築されており、所産期は住居址形態出土遺物等から古墳時代後期と推定される。

遺物(第11～16図)

本址からは土師器片、石器、石製品、鉄製品が出土している。土師器の器種には甕、壺、坏、高坏、甗等があり、量的にも豊富であるが、中でも長胴甕の出土量が多く他を凌駕している。

1～23は長胴甕で、小砂粒や金雲母片を多量に含んだ砂質で脆い暗赤褐色を呈する類と、小礫を多く含んだ極めて脆弱な類があるが、前者が主体を占める。器形は胴部のあまり張らない砲弾形を呈し、口縁部で緩く「く」の字状、あるいは「し」の字状に外反するものが多い。調整は胴部内外面はへラ削りされ、口縁部は横ナデにより行われているが、2の胴部内外面は刷毛調整が行われている。24～26は小形甕で、胎土・調整等は長胴甕とほぼ同様である。26は口縁部が僅かに有段状を呈する。27～34は胴張甕で、27はやや偏平な球形胴を持ち、胴下半部は僅かにこける。口縁部は屈曲して滑らかに外反する。28はやや胴長な器形を呈し、口縁部は面取りされている。胴部外面には煤の付着が顕著である。35は短頸壺で、偏平な体部に段を持って短く直立する口縁部を持つ。36は甗で、平底の底部に1孔を有する。37・38は高坏で、ともに坏部内面が黒色研磨され、39～49は坏で、44～49は内面が黒色研磨されている。40・41は所謂模倣坏で浅い丸底の底部を持ち、40は段を持って直線的に外傾し口縁に至る。41は口辺部が緩く内湾する。42・43はや

や厚手の作りで緩く内湾して口縁に至る器形を呈する。44・45は平底に近い底部に大きく長く外反する口辺部を有する。

50は住居址北東部より出土した頁岩製の砥石で、4面が著しく使用されており、重量は1175gを測る。

51・52は鉄製品である。51は鉄鏃で平根式の有茎鏃である。茎部を欠損しているが、残存長は49mm、最大幅は17mm、厚さは6.5mm、重量は6.30gを測る。52は両端を欠損した棒状の鉄製品で、残存長は55mm、幅は9.5mm、厚さは5.3mm、重量は6.14gを測る。

53は濃緑色を呈する蠟石製の勾玉で住居址南壁沿いより出土した。整った「C」字形を呈し、丁寧に研磨されている。全長17.1mm、幅12.2mm、厚さ5.8mm、重量1.31gを測る。穿孔は両面より行われ、孔径は1.8～2.2mmを測る。54は乳黄色～乳黄褐色を呈する白玉で、径12.3mm、厚さ5.2mm、孔径2.8mm、重量は1.28gを測る。

(2) 第22号住居址 (SB22)

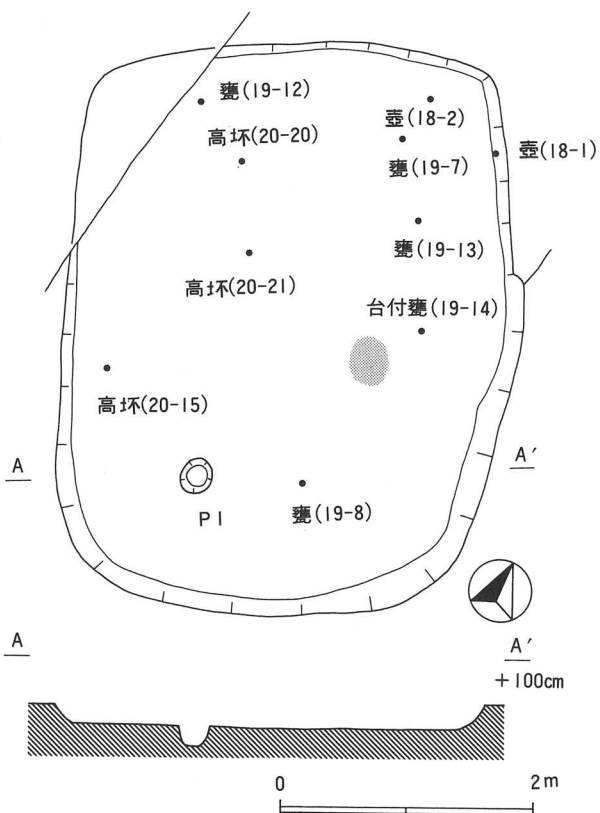
遺構 (第17図)

本住居址はC区北西部、グリッドJ-4・5に位置し、第21・23・24号住居址等と重複して検出された。平面プランは主軸方向をN-25°-Wに持つ4.6×3.6mの隅丸長方形を呈する。残存する壁高は9～21cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は小礫を多く含んだ暗黒褐色土の単一層であった。

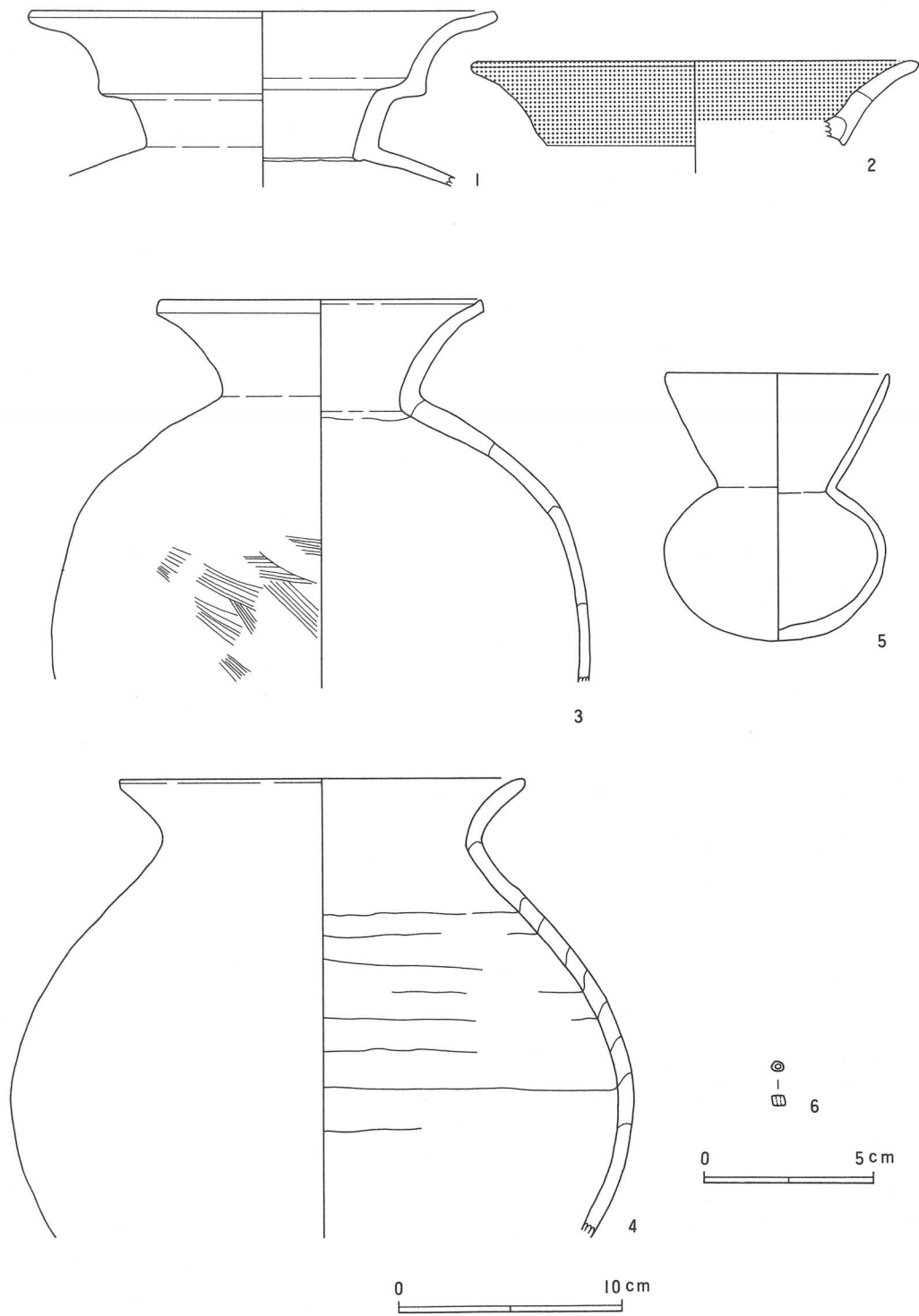
炉址は住居址中央部東寄りの床面上において焼土が認められたことから、この位置に存在したものと推定されるが掘り込みは認められなかった。ピットは住居址南側西寄りに1基検出され、径25cm、深さ17cmを測る。

遺物の出土は、住居址北部に集中する傾向が看取され、個々の土器は土圧により細かく破碎した状態で出土している。

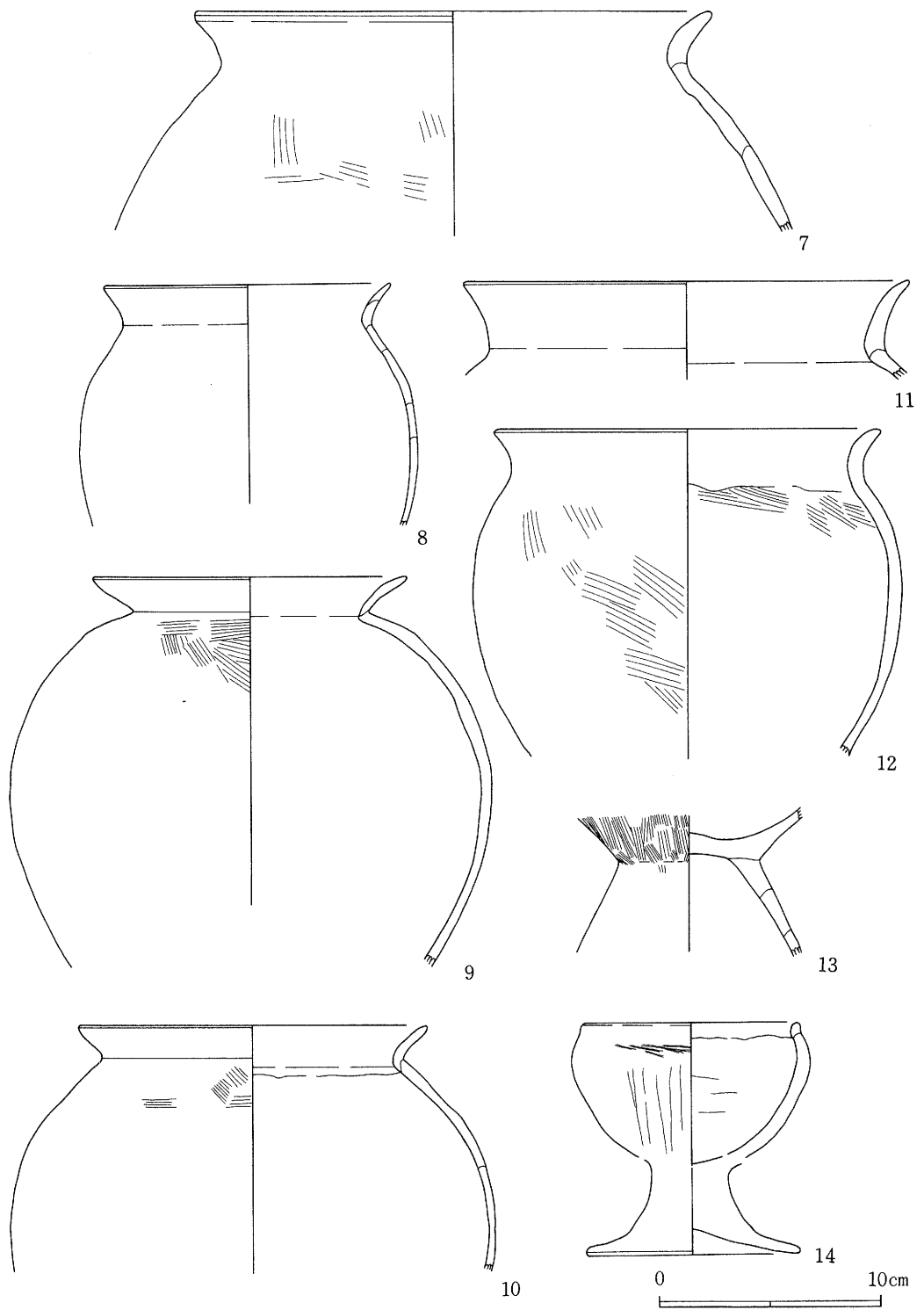
本址は第23・24・51号住居址、第17号土壇、^A第4号溝址を切って構築され、第21号住居址に北西コーナー部を切られている。これらの重複関係と出土遺物から、本址の所産期は古墳時代中期と推定される。



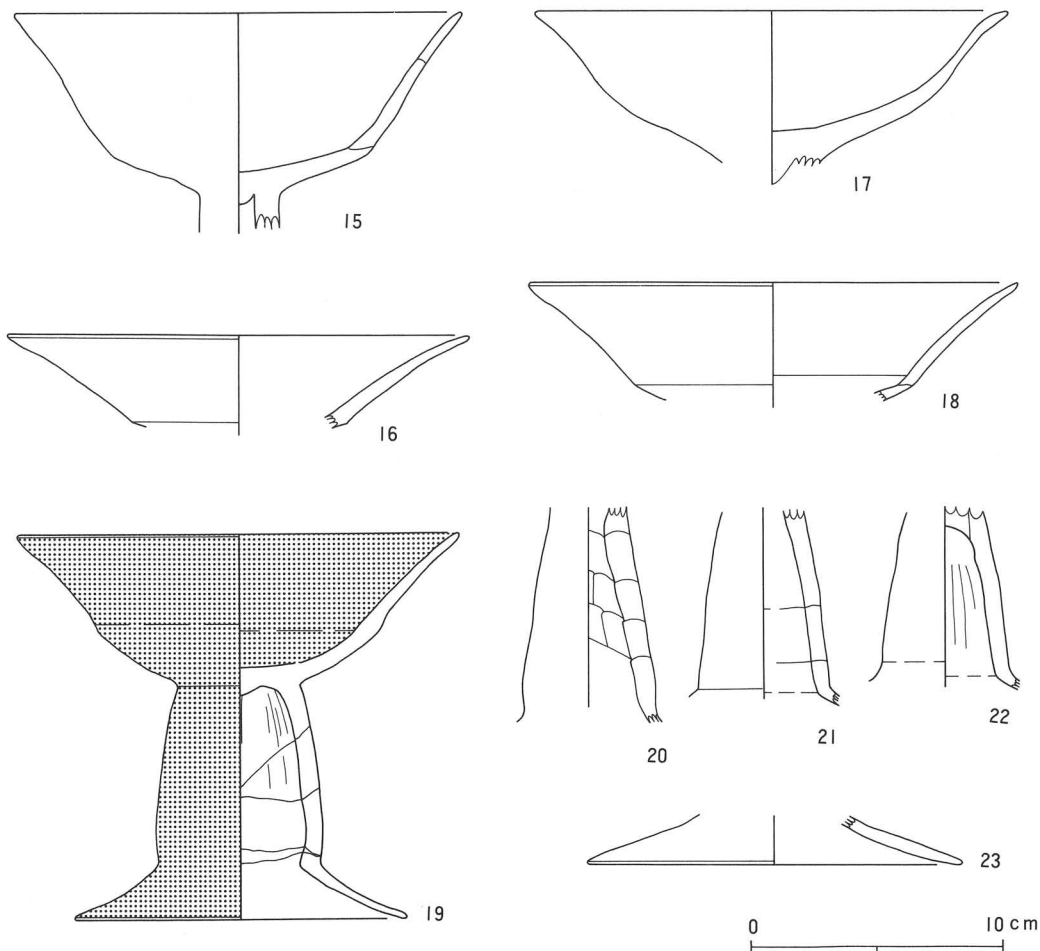
第17図 第22号住居址実測図



第18图 第22号住居址出土遺物実測図(1)



第19图 第22号住居址出土遺物実測図(2)



第20図 第22号住居址出土遺物実測図(3)

第3表 第22号住居址出土土器一覽表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
18-1	土師・壺	口縁部2/3 頸部1/2	口径 21.0	口縁部直立して立上がり、2段に屈曲外反する。体部は球形に張る。	口縁部横ナデ。体外面不明。内面へラ磨き？。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外橙褐色、明赤褐色
18-2	土師・壺	口縁部 1/4	口径(20.0)	口縁部2段に屈曲外反する。	口縁部横ナデ。内面横へラ磨き。	胎土：白色微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色 内明茶褐色 *外内面赤彩。
18-3	土師・壺	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 14.4	口縁部「く」の字状に外反し、端面取りされる。体部は下膨れとなる。	口縁部横ナデ。体外面斜め刷毛調整。内面横刷毛調整+ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外灰黄褐色、内灰黄色
18-4	土師・壺	口縁部～胴部 中位1/3	口径(18.2)	口縁部「く」の字状に外反し、体部は下膨れとなる。	口縁部横ナデ。体外面斜め刷毛調整+ナデ。内面ナデ。	胎土：砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外茶褐色、内黒褐色

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
18-5	土師・埴	口縁部1/6 体部ほぼ完存	口径(10.0) 器高(12.0)	口縁部僅かに内湾して開く。体部はやや扁平な球形を呈する。	外面へラ磨き?。内面ナデ。	胎土：石英・微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明褐色、内暗褐色
19-7	土師・甕	口縁部～胴部 中位 1/8	口径(23.6)	口縁部緩く「く」の字状に外反し、胴部は大きく張る。	口縁部横ナデ。胴外面斜め・横刷毛調整。内面横刷毛調整+ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗茶褐色、内黒褐色
19-8	土師・甕	口縁部～胴部 中位 1/3	口径(13.0)	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外内面刷毛調整?。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内内灰褐色
19-9	土師・甕	口縁部～胴部 下位1/2	口径(14.4)	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形に大きく張る。	口縁部横ナデ。胴外面横・斜め刷毛調整。内面刷毛調整+ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内暗白褐色 *胴部外面に煤付着。
19-10	土師・甕	口縁部一部 胴部2/5	口径(16.0)	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形に大きく張る。	口縁部横ナデ。胴外面横・斜め刷毛調整。内面刷毛調整+ナデ。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色 *胴部外面に煤付着。
19-11	土師・甕	口縁部 1/4	口径(20.2)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面不明。内面へラ削り。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
19-12	土師・甕	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 17.8	口縁部緩く外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴外内面斜め刷毛調整。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色 *外面に煤付着。
19-13	土師・甕	脚台接合部完 存		脚台部大きく「ハ」の字状に開く。	胴外面縦刷毛調整。胴内面・脚外内面ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明茶褐色
19-14	土師・椀	椀部 3/4 高台部完存	口径 10.0 器高(10.2) 底径 9.8	椀部内湾し、口縁部で直立気味に外反する。脚台部は大きく開く。	口縁部・裾部横ナデ。外面・椀内面へラ磨き?。脚内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
20-15	土師・高坏	口縁部1/6 接合部完存	口径(18.0)	坏部屈曲し、僅かに外反しながら長く伸びる。	外内面へラ磨き。	胎土：黒雲母他の微砂粒を含む 焼成：良 色調：外明白褐色、内明茶褐色
20-16	土師・高坏	坏部1/3	口径(18.5)	坏部屈曲外反し、長く伸びる。	外内面へラ磨き。	胎土：粗砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明白褐色
20-17	土師・高坏	坏部3/5	口径(18.8)	坏部内湾して開き、口縁部で緩やかに外反する。	外内面へラ磨き。	胎土：赤褐色細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明白褐色、内明橙褐色
20-18	土師・高坏	口縁部1/4	口径(19.6)	坏部屈曲外反し、長く伸びる。	外内面へラ磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内暗黄褐色 *外面に黒斑あり。
20-19	土師・高坏	坏部1/2 脚部1/4	口径 17.7 器高(15.7) 裾径(13.2)	坏部緩やかに屈曲外反して開く。脚部はやや寸胴の柱状を呈し、裾部で屈曲外反する。	口縁部・裾部横ナデ。外面縦へラ磨き?。脚内面へラ削り。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外内面赤彩される。
20-20	土師・高坏	脚柱部完存		粘度鈕を螺旋状に巻いて成形される。	外面縦へラ磨き。内面ナデ。裾内面横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内内明黄褐色
20-21	土師・高坏	脚柱部完存			外面縦へラ磨き。内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色
20-22	土師・高坏	脚柱部完存			外面不明。内面縦へラ削り。裾内面横ナデ。	胎土：赤褐色・白色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内内明黄褐色
20-23	土師・高坏	裾部1/4	裾径(15.0)	裾部屈曲して大きく外反する。	裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内淡橙色

遺物 (第18～20図)

本址からは土師器片、ガラス小玉と、混入遺物として少量の弥生土器片が出土している。土師器の器種は壺、甕、埴、台付椀、高坏等がある。出土量は比較的多かったが、小細片が多く図示できたのは23点である。

1～4は壺で、1・2は球形胴かやや下膨れの胴部を持つと推定され、頸部で一旦直立した後、口縁部に二段に外反する有段口縁を呈し、2は内外面赤色塗彩される。3は球形胴を呈し、

口縁部が「く」の字状に屈曲外反し、口縁端部は面取りされ、横ナデにより上方に僅かにつまみ上げられている。4はやや下膨れの胴部を呈し、口縁部が丸く短く外反し、胴部内面には輪積み痕が明瞭に残る。5は埴で、やや扁平な体部に僅かに内湾しながら長く伸びた口辺部を持つ。6はガラス小玉で、淡青色を呈し直径3.6mm、厚さ2.9mm、孔径1.4mmを測る。7~14は甕で、いずれも大きく張った球形胴を呈し、口縁部は短く太く外反する。内外面ともに刷毛整形され、口縁部は横ナデにより整形されている。13は比較的大形の台付甕の脚台部で、外面は細かく刷毛整形されている。14は台付椀で、大きく内湾し口縁部で僅かに直立する椀部と、低く高坏状に開く台部を持つ。15~23は高坏で、坏部は僅かに稜を持って大きく開き、脚部は柱状を呈し、裾部で大きく開く器形を持つ。全体として細密な胎土が用いられているが、焼成が甘く依存状況は良くない。脚部の柱状の部分は粘土紐を螺旋状に巻いて成形されている。19は脚部内面を除き赤色塗彩される。

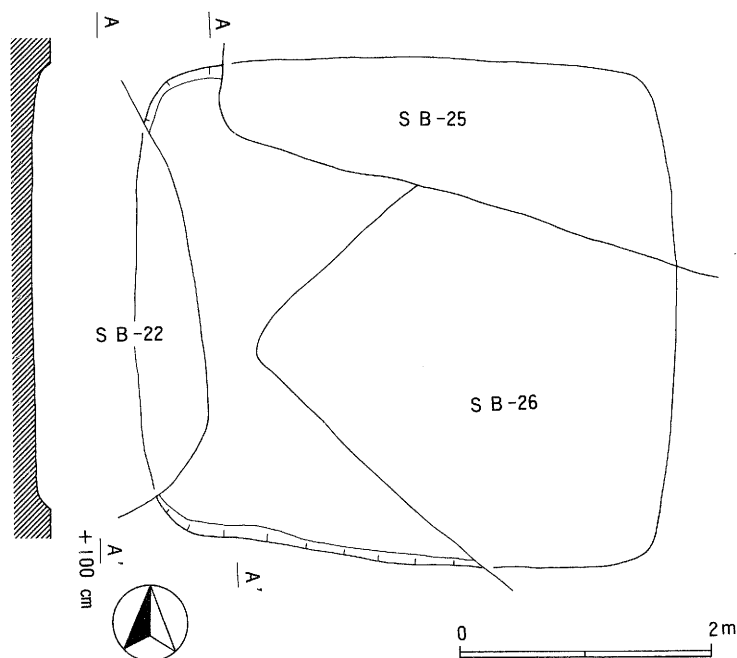
(3) 第23号住居址 (S B 23)

遺構 (第21図)

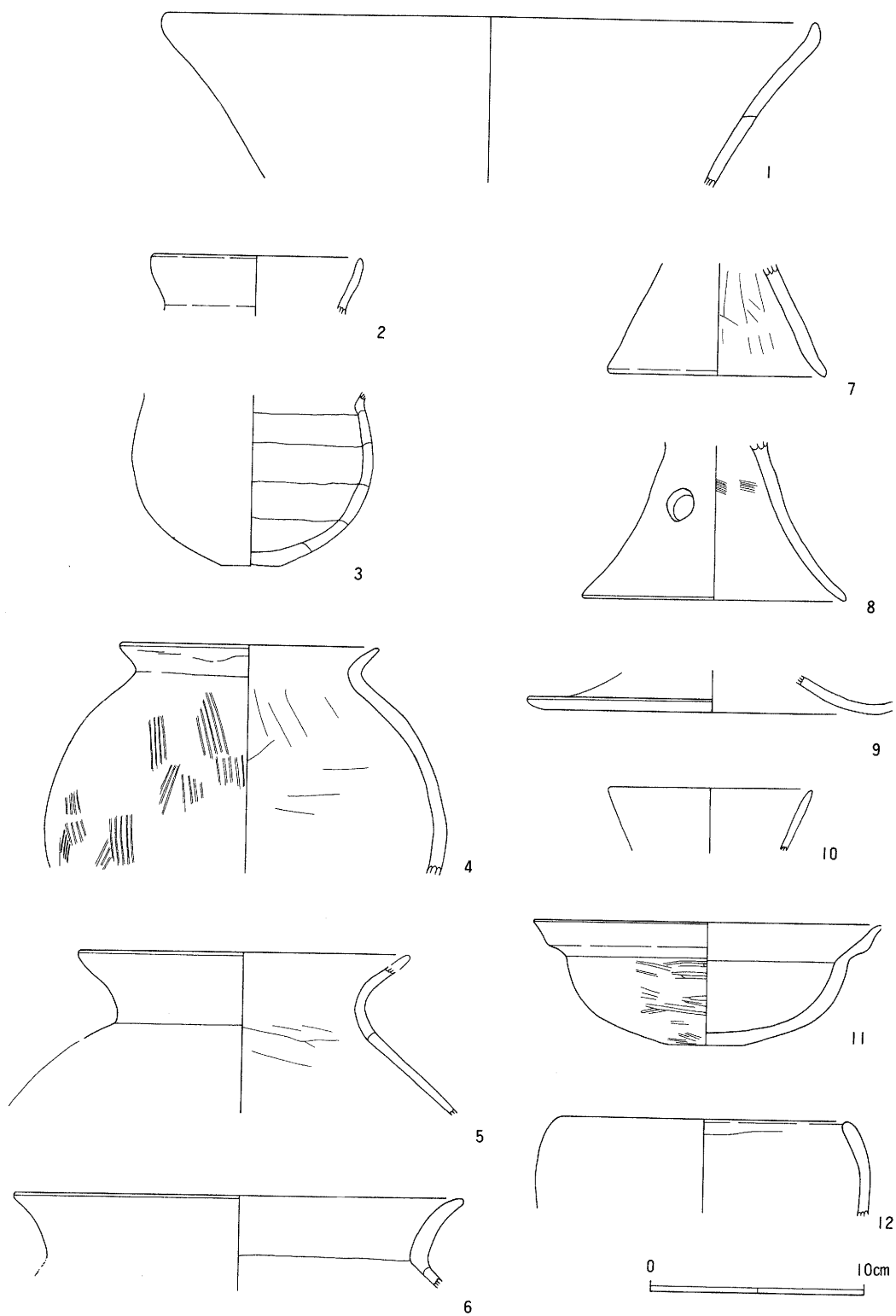
本住居址はC区北側中央部、グリッドH・I-4・5に位置し、第22・24~26号住居址と重複して検出された。平面プランは、北側を第25号住居址によって破壊されており、また、調査の都合上第24・26号住居址の調査を先行したため、北西部と東南部のプランも不明確となってしま

たが、東南方向に僅かに長い4.3(推定)×4.0mの隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向はほぼ東西を示す。残存する壁高は9~12cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面は全体に軟弱で、覆土は5~10cmの礫を多量に含んだ暗褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

本址は第24・26号住居址を切って構築された後に、第22・25号住居によって切られており、重複関係と出土遺物等から古墳時代前期の所産と推定される。



第21図 第23号住居址実測図



第22图 第23号住居址出土遺物実測図

第4表 第23号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
22-1	土師・壺	口縁1/6	口径(30.4)	口縁部長く外反し、端部で僅かに内湾する。	口縁部横ナデ。外内面へラ磨き？。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
22-2	土師・壺	口縁部1/4	口径(9.6)	口縁部緩く内湾する。	口縁部横ナデ。	胎土：小細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内明灰褐色
22-3	土師・壺	頸部～底部1/2	底径 2.8	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈する。	外面へラ磨き。内面ナデ。	胎土：石英・長石等の微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色
22-4	土師・甕	口縁部～胴部中位3/4	口径(12.0)	口縁部「く」の字状に外反する。胴部はやや下膨れとなる。	口縁部横ナデ。外面斜め刷毛調整。内面へラ削り？。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外明乳褐色、内暗黒灰色
22-5	土師・甕	口縁部1/2	口径 15.6	口縁部丸く外反し、僅かに内湾しながら長く伸びる。胴部は球形。	口縁部横ナデ。外面刷毛調整+ナデ？。内面へラ削り？+ナデ？。	胎土：白色・赤褐色小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗灰褐色
22-6	土師・甕	口縁部1/3	口径(21.4)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：白色・赤褐色小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明黄褐色
22-7	土師・高坏	脚部1/4	底径(10.0)	脚部直線的に開き、裾部で僅かに外反する。	外面縦へラ磨き？。内面へラ削り。裾部横ナデ。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内淡橙褐色
22-8	土師・高坏	脚部1/3	裾径(12.4)	脚部緩やかに外反しながら開く。	外面縦へラ磨き。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。透かし孔を有する(3ヶ所)。	胎土：石英他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
22-9	土師・高坏	裾部1/4	裾径(17.4)	脚部大きく開き、裾部で僅かに反り返る。	外面縦へラ磨き。内面・裾横ナデ。	胎土：石英・長石他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
22-10	土師・埴	口縁部1/6	口径(9.6)	口縁部直線的に開く。	不明。	胎土：長石をごく少量含む 焼成：やや不良 色調：外内明橙褐色
22-11	土師・鉢	口縁部1/8 体部ほぼ完存	口径 16.4 器高 5.8 底径 3.6	口縁部2段に屈曲外反する。体部は半球形を呈し、僅かな平底を有する。	口縁部横ナデ。体部外面横へラ磨き。内面へラ磨き？。	胎土：長石・赤褐色の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明灰褐色
22-12	土師・壺	口縁部1/4	口径(13.6)	体部内湾する。	口縁部横ナデ。外面へラ磨き？。内面不明。	胎土：赤褐色他の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色

遺物(第22図)

本址からは土師器片と少量の混入遺物、緑色凝灰岩の小片1点などが出土している。土師器の器種には壺、甕、無頸壺、高坏、埴、鉢等がある。

1～3は壺で、1は大きく広がり端部で内湾する口縁部である。2は球形に近い胴部を持つと推測され、内湾して立上がる口縁部である。3は口縁部を欠損しているが、僅かな平底を持つ球形胴を呈する。比較的精良な胎土を用い、外面は丁寧なへラ磨きが行われている。4～6は甕で、4はやや下膨れの胴部に短く「く」の字状に外反する口縁部を持ち、外面は粗い刷毛整形が行われ、内面はへラ削りされている。5は球形胴を呈すると推定され、頸部で丸く外反し、口縁部はやや内湾しながら長く伸びている。6は「く」の字状に外反する口縁部片である。7～9は高坏の脚部で、7はやや風化が著しいが、直線的に開く器形を呈する。8は長くスカート状に開き、円形の透かし孔が3ヶ所穿孔されている。外面はへラ磨きが施され、内面は刷色整形されている。

9は器台の可能性もあるが、大きく開き裾部で上方に反返る形態を呈する。坏部は小形の半月形を呈すると推定される。10は埴の口縁部で、直線的に開いている。11は口縁部が屈折して開く所謂鉄兜形の鉢で、体部は浅い半円形を呈し、底部は僅かに平底となる。小砂粒を多く含んだやや粗い胎土を用い、器肉も厚く作られている。外面はへら磨きが観察されるが、内面は風化が著しく調整は不明確である。当遺跡では初年度の調査でも同形の鉢が出土しているが、胎土や口縁部の整形などの点で本品は在地で製作された模倣品と推定される。12は無頸壺で、大きく内湾し、口縁部は丸く仕上げられている。

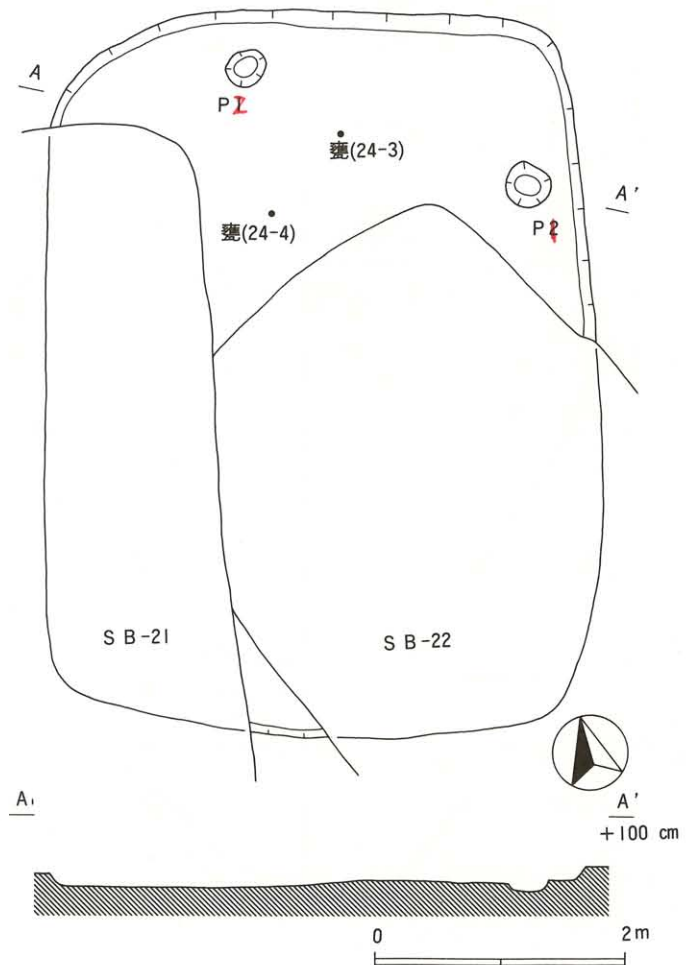
(4) 第24号住居址 (SB24)

遺構(第23図)

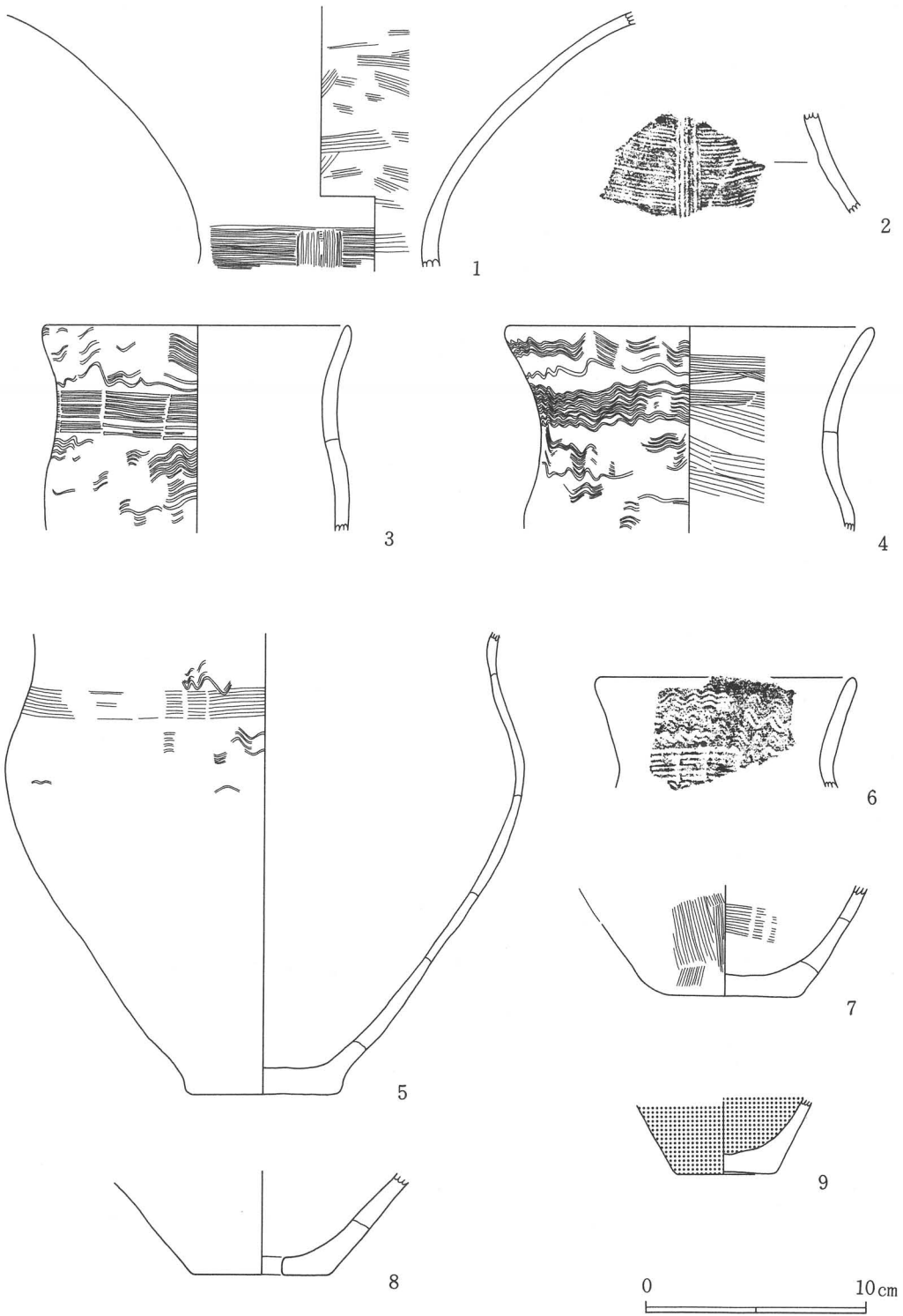
本住居址はC区北側、グリッド⁴I~K-3~5に位置し、第21~23号住居址と重複して検出された。平面プランは南側の大部分は第21~23号住居址によって破壊されており、北側と南壁の一部が検出され、N-15°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。規模は南北5.3m、東西4.4mを測る。残存する壁高は9~18cmを測り壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は小礫を含んだ黒褐色土の単一層であった。

ピットは計2基検出され、P₁は径36cmの不整形円形を呈し深さは8cmを測り、P₂は34×29cmの楕円形で深さは9cmを測る。炉址は検出されなかった。

本址は第51号住居址、第17号土壌、第4号溝状遺構を切って構築され、第21~23号住居址によって切られている。本址の所産期は、重複関係と出土遺物より、弥生時代後期と推定される。



第23図 第24号住居址実測図



第24图 第24号住居址出土遺物実測図

第5表 第24号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
24-1	弥生・壺	口縁部～頸部 1/3		口縁部大きく朝顔状に 外反して開く。	外面縦へら磨き。内面 横刷毛調整+ナデ。頸 部にT字文を有する。	胎土：各種の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰色～明黄 褐色、内明黄褐色*2次焼成を受 ける。
24-2	弥生・壺				外面T字文を有する。 内面剥落。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明乳褐色。
24-3	弥生・甕	口縁部～胴部 中位1/3	口径(14.0)	口縁部緩く外反し、口 唇部は部分的に内湾す る。	口縁部横ナデ。外面簾 状文+波状文。内面横 へら磨き。	胎土：石英他の小砂粒を多量に含 む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗茶褐色。
24-4	弥生・甕	口縁部～胴部 中位1/2	口径 16.8	口縁部緩く外反し、肩 部で僅かに張る器を呈 する。	口縁部横ナデ。外面波 状文。内面横・斜め刷 毛調整。	胎土：小細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内明赤褐色
24-5	弥生・甕	胴部1/2 底部 完存	底径 6.6	肩部で強く張り、底部 に向かって急速に収縮 する。	外面簾状文+波状文。 内面へら磨き？。	胎土：赤褐色他の小細砂粒を多く 含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内明橙褐色 *外面に黒斑あり。
24-6	弥生・甕	口縁部～頸部 1/6	口径(11.6)	口縁部緩く「く」の字 状に外反する。	口縁部横ナデ。外面簾 状文+波状文。内面横 へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗灰褐色
24-7	弥生・甕	底部完存	底径 6.6	僅かに内湾して立上が る。	外面縦刷毛調整。内面 横刷毛調整。	胎土：長石他の微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内明黄褐色
24-8	弥生・甌	底部 1/2	底径 6.2	僅かに外反して立上が る。底部に1孔を有す る。	外面縦へら磨き？。内 面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内明橙褐色
24-9	弥生・鉢	底部完存	底径 4.4	内湾して立上がる。	外面縦へら磨き。内面 へら磨き。	胎土：小細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 *外内赤彩。

遺物(第24図)

本址からは弥生土器片が出土している。出土量は遺構の大半が破壊されているため、僅少であつた。器種は壺、甕、高坏、鉢、甌等があり、図示できたのは9点である。

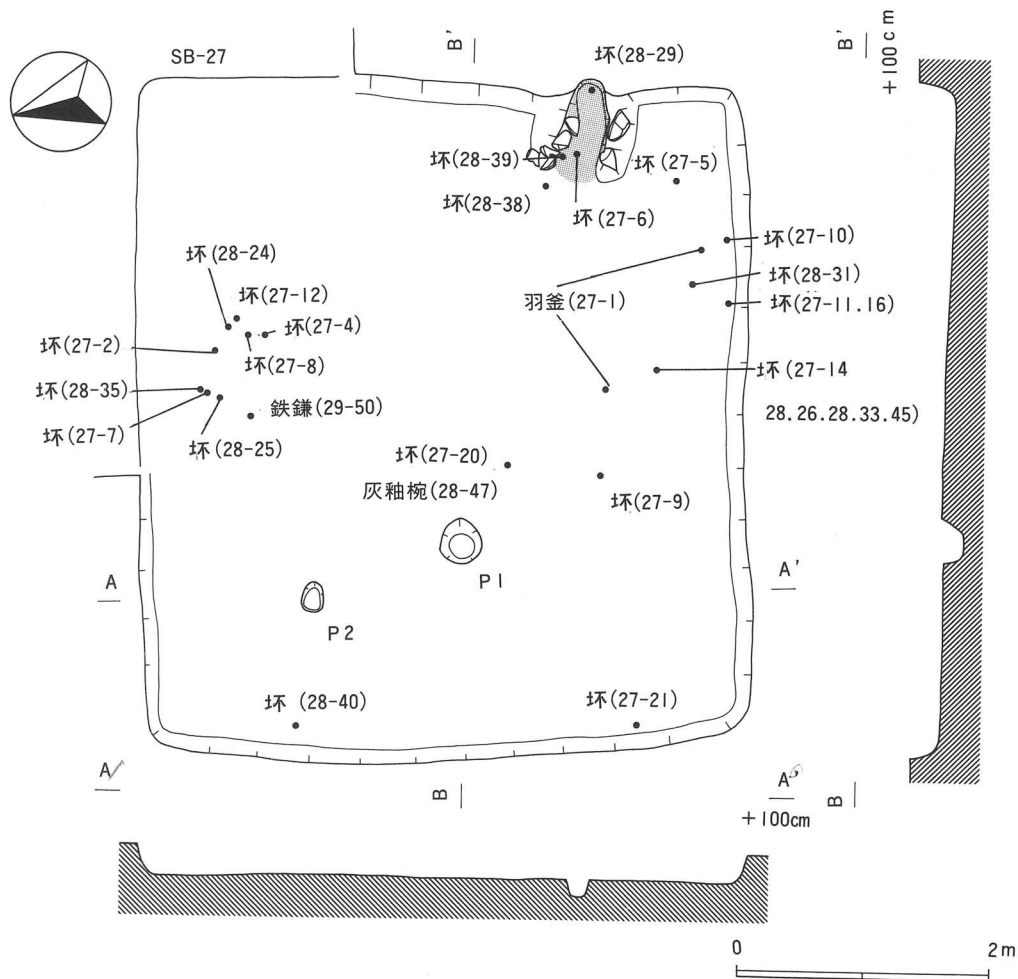
1・2は壺で、頸部にはT字文が施文されているが、両個体とも縦への垂下文は1条である。1は大きく朝顔状に開く口縁部で、頸部T字文の施文工具の単位は11本と推定される。外面はへら磨きが行われており、内面は刷毛整形されている。内外面とも赤色塗彩は施されていない。2は1よりやや小形の壺と推定され、施文工具の単位は6本と推定される。3～7は甕で、3は口径と胴部最大径がほぼ等しく、11本単位の施文工具を用い簾状文を施文した後に波状文を施文している。4は口縁部に最大径を持ち、簾状文は施文されず、9本単位の波状文のみで充填されているが、波状文の施文は頸部より上下方向に向かって1条ずつ行われている。5は肩が張り、底部に向かって急速に収束するやや特異な器形を呈する。器肉は比較的薄く作られ、器面はかなり荒れているものの、簾状文を施文した後に、波状文を上下方向に向けて充填している。6は小形の甕で、口径と胴部最大径はほぼ等しいと推定される。8は甌で、内外面へら磨きされ、底部に1孔を有する。9は内外面赤色塗彩された鉢の底部である。

(5) 第25号住居址 (SB25)

遺構 (第25・26図)

本住居址はC区北側中央部、グリッドG～I-3～5におといて第23・26～28号住居址と重複して検出された。規模は東西長5.5 m、南北長4.9 mを測り、平面プランは東西にやや長い隅丸方形を呈する。カマドを中心とした主軸方向はN-74°-Wを示す。残存する壁高は19～32cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は東側が5～8 cmほど低いがほぼ平坦で、比較的堅緻であった。覆土は小礫を多量に含んだ暗黒褐色土の単一層であった。また、カマド正面の約1.8mの範囲に多数の人頭大の河原石が床面より20cmの厚さで検出され、それらのうちのいくつかは火熱を受けていたことから焼失住居の可能性も考慮されるが、覆土中から木炭片、焼土等は検出されなかった。

カマドは東壁南寄りに設置され、多数の礫を芯材に用い、暗茶褐色粘土を充填して構築されている。遺存状況は比較的良好で、規模は全長90cm、両袖幅88cmを測る。



第25図 第25号住居址実測図

ピットは2基検出され、P₁は住居址西側中央部に位置し、35～33cm、深さ15cmの略円形を呈する。P₂は住居址北西部に位置し、25×19cm、深さ13cmの楕円形を呈する。

遺物はカマド周辺と住居址北東部においてやや集中して出土し、特に北東部では土師器高台付坏6点、土師器小皿2点と、鎌と推定される鉄製品が床着の状態集中して検出された。また、覆土中においても極めて多数の土師器坏、小皿片等が出土している。

本址は第23・24・26～28号住居址を切って構築されており、出土遺物から平安時代後期の所産と推定される。

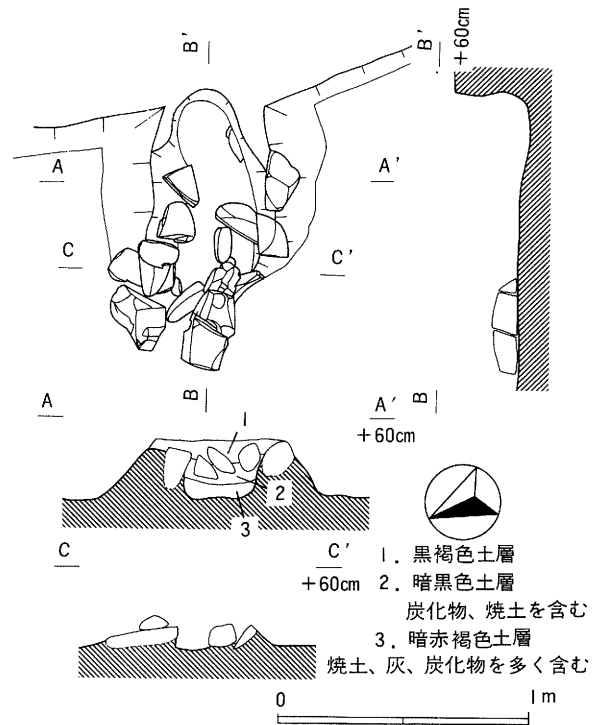
遺物(第27～29図)

本址からは土師器片、灰釉陶器片、鉄製品が出土している。土師器の器種には羽釜、高台付坏、小皿等があり、灰釉陶器には椀が、鉄製品には刀子、鎌がある。

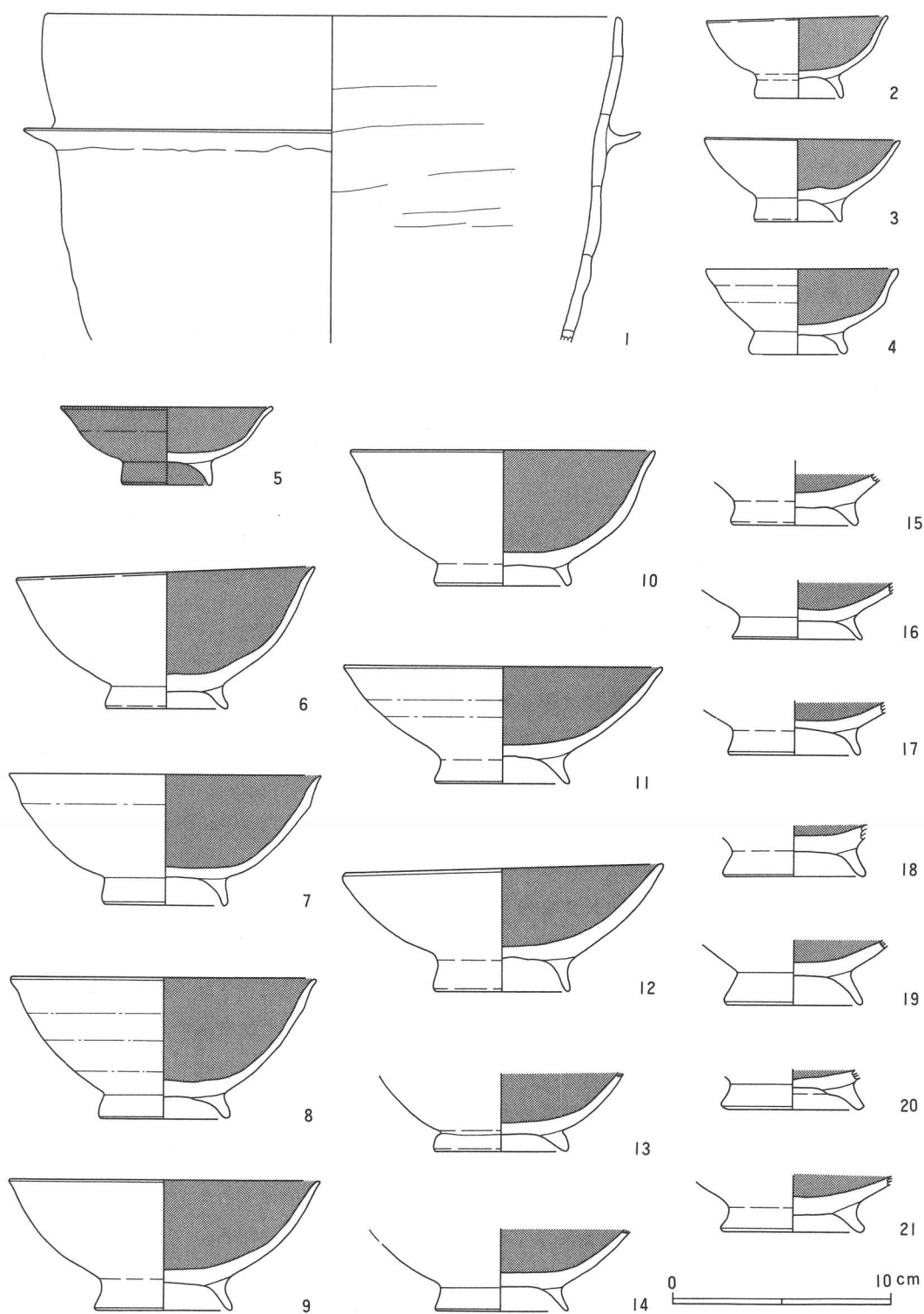
1は羽釜で、カマド正面と右側の数ヵ所に破碎して検出された。細砂粒を多く含んだ砂質の胎土で作られ、口辺部は内湾し、口縁端部は僅かに面取りされている。鋸部は薄く、上方に反り返っている。外面には煤の付着が顕著である。

2～5は小形の高台付坏で、2～4は坏部内面がへら磨きされた後に、黒色処理されている。2は住居址北東部より完形品で出土した。口縁部が僅かに外反し、高台断面は三日月状を呈し内湾する。底部裏面は指頭によりナデ整形される。3は口縁部がやや肥厚し、高台部は内湾する。4は口縁部、高台部とも僅かに外反するが、坏部内面の研磨面は一部を除いて剥落している。5はカマド右側より出土し、2～4より僅かに大きく、内外面黒色処理されている。6～33は高台付坏で、6～21は坏部内面が黒色処理されている。坏部は内湾して口縁部で僅かに外反する。高台部は断面が三日月状を呈し内湾する類、三角形を呈し外反する類、端部で僅かに肥厚し短く外反する類、短く外反して端部が面取りされている類などいくつかの相違が看られる。なお、12はやや厚手の作りで口縁部も外反せず、やや他と異なっている。底面裏面は全面ナデ整形されるか、中央部に僅かに回転糸切り痕が残る。30は底径8.0cmを測る大形品である。31～33は高台部が長く「ハ」の字状に伸びた所謂足高高台である。高台高は15～17mmを測る。

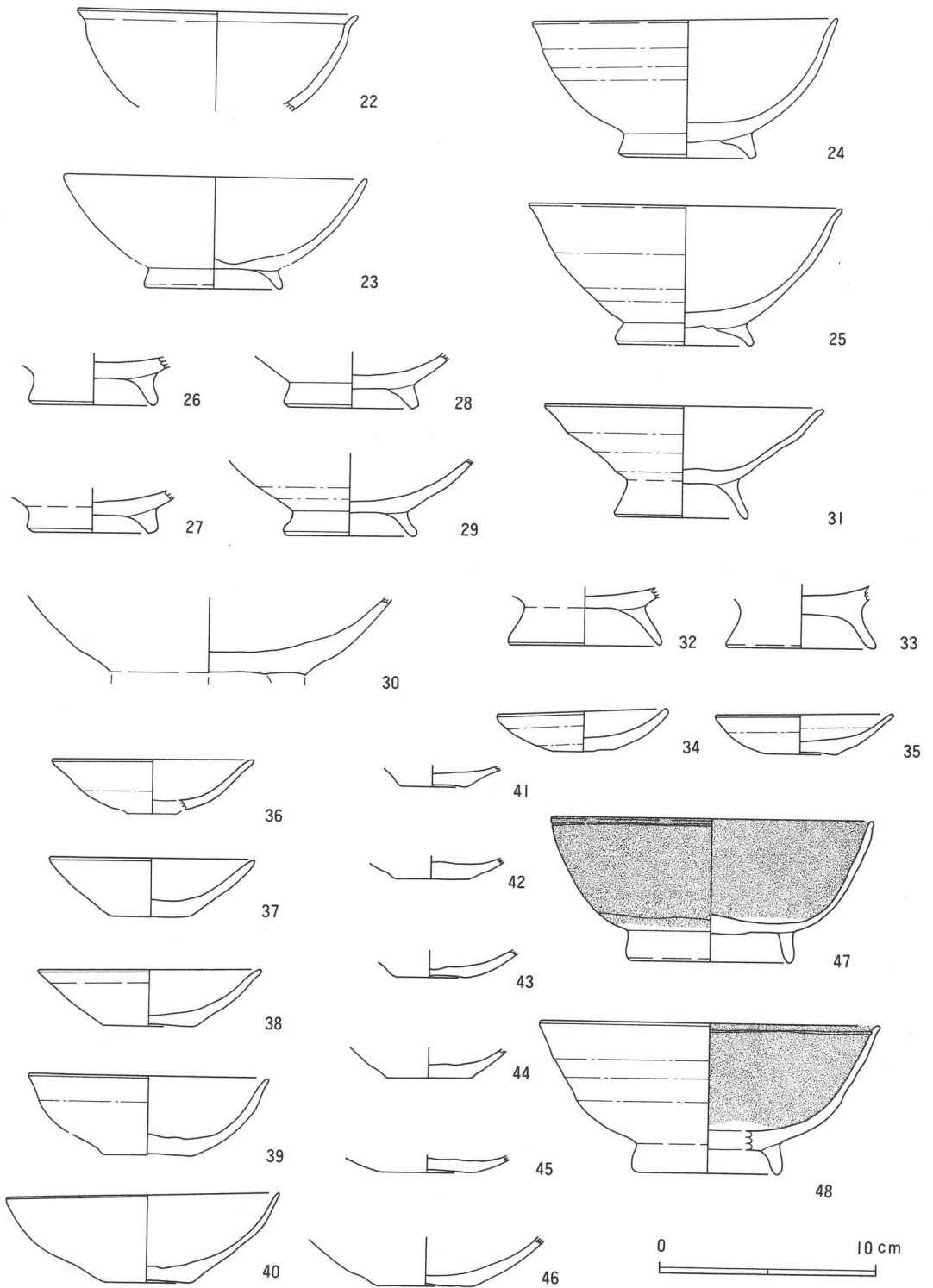
34・35は土師器の小皿で、浅く内湾する器形を呈し、ほぼ等しい法量を示す。底部裏面には僅かに糸切り痕が残る。36～46は土師器の坏で、法量は比較的ばらつきが看られる。器形はいずれ



第26図 第25号住居址カマド実測図



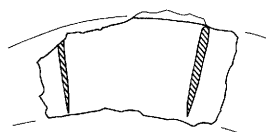
第27图 第25号住居址出土遺物実測図(1)



第28图 第25号住居址出土遺物実測図(2)



49



50



第29図 第25号住居址出土遺物実測図(3)

も内湾しながら立上がり、口縁部で僅かに外反する器形を呈する。底部は右方向の回転糸切りにより切り離されているが風化が著しい。

47・48は灰釉陶器の椀で、47は住居址中央部より出土し、腰の張る器形を呈する。口縁端部は外反せず、外面には不明瞭ながら1条の沈線が刻まれている。高台部は僅かに内湾し、底部裏面は全面指頭によりナデ整形されている。底部中央部は気泡が入り膨らんでいる。施釉は内

外面に行われ、淡い緑灰色を呈する。48はやや厚手の作りで、口縁部で僅かに外反し、高台部は三日月状を呈する。口縁部内面には1条の沈線が刻まれている。施釉は内面のみに行われ、淡緑色を呈する。

49・50は鉄製品で、49は刃部中央部より先端を欠損しているが刀子と推定され、住居址西側中央部より出土した。平棟平造りで、区は棟側のみの片区で丸く作られ、残存長は12.8cm、元幅2.1cm、棟幅0.7cm、茎長8.1cm、重量は19.19gを測る。50は両端を欠損しているが鎌と推定され、残存長は5.4cm、刃幅2.4cm、刃厚2.6mm、重量11.28gを測る。

第6表 第25号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
27-1	土師・羽釜	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 26.4	口辺部内湾し、端面取りされる。鏝部は薄く、上方に反り返る。く、上方に反り返る。	外面ナデ。内面横へら削り+ナデ。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色 内明灰褐色 *外面煤附着。
27-2	土師・坏	完存	口径 8.4 器高 3.7 底径 4.2	付け高台内湾する。口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面ナデ。内面へら磨き。糸切り痕中央部にわずかに残る。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色 内黒色
27-3	土師・坏	坏部1/4 底部～高台部 ほぼ完存	口径 (8.9) 器高 3.9 底径 3.9	付け高台・口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面横ナデ。内面へら磨き。糸切り後ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
27-4	土師・坏	ほぼ完存	口径 8.9 器高 4.0 底径 4.6	付け高台内湾する。口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面横ナデ。内面へら磨き。糸切り後ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内黒色
27-5	土師・坏	ほぼ完存	口径 9.9 器高 3.6 底径 4.3	付け高台僅かに内湾する。口縁部外反する。底部回転糸切り。	外面横ナデ。内面へら磨き。糸切り後ナデ消す。	胎土：白色小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内黒色
27-6	土師・坏	ほぼ完存	口径 13.8 器高 6.3 底径 6.4	付け高台・口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面クロコナデ。内面へら磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内黒色
27-7	土師・坏	ほぼ完存	口径 14.2 器高 6.1 底径 6.0	付け高台僅かに内湾する。口縁部外反する。底部回転糸切り。	外面クロコナデ。内面へら磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明乳褐色、内黒色
27-8	土師・坏	ほぼ完存	口径 14.2 器高 6.5 底径 6.0	付け高台内湾する。口縁部外反する。底部回転糸切り。	外面クロコナデ。内面へら磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：褐色砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外明乳褐色、内黒色
27-9	土師・坏	口縁部1/2 体部～高台部 完存	口径 14.4 器高 6.0 底径 6.4	付け高台・口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面クロコナデ。内面へら磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内黒色

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
27-10	土師・坏	坏部1/4 底部～高台部 完存	口径(14.1) 器高 6.2 底径 6.4	付け高台・口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：金雲母・細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内黒色
27-11	土師・坏	坏部1/3 底部～高台部 完存	口径(14.7) 器高 5.4 底径 6.2	付け高台・口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
27-12	土師・坏	ほぼ完存	口径 14.7 器高 5.8 底径 6.4	付け高台・口縁部かすかに内湾する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕僅かに残る。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
27-13	土師・坏	坏部1/6 底部～高台部 完存	底径 6.4	付け高台内湾する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。接合部横へラ削り。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内黒色
27-14	土師・坏	坏部中位～高台部 ほぼ完存	底径 6.2	付け高台内湾する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕中央部にかすかに残る。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内黒色
27-15	土師・坏	底部～高台部 ほぼ完存	底径 5.6	付け高台僅かに外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内黒色
27-16	土師・坏	底部～高台部 ほぼ完存	底径 5.7	付け高台外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕残る。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
27-17	土師・坏	底部完存 高台部1/2	底径 6.2	付け高台僅かに外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕僅かに残る。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
27-18	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.2	付け高台僅かに外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明橙色、内黒色
27-19	土師・坏	底部完存 高台部1/2	底径 6.4	付け高台僅かに外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
27-20	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.6	付け高台外反し、端面取りされる。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕中央部に残る。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内黒色
27-21	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.7	付け高台外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内黒色
28-22	土師・坏	坏部1/6	口径(13.2)	口縁部内外に稜を持って強く外反する。	外面横ナデ。内面へラ磨き？。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
28-23	土師・坏	坏部2/3 底部～高台部 1/2	口径(19.1) 器高 (5.2) 底径 6.4	付け高台内湾し、口縁部は緩く内湾する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕残る。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
28-24	土師・坏	ほぼ完存	口径 14.2 器高 6.4 底径 6.5	付け高台・口縁部外反する。高台端面取りされる。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：赤褐色小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
28-25	土師・坏	ほぼ完存	口径 14.6 器高 6.5 底径 6.4	付け高台内湾し、端面取りされる。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面へラ磨き。糸切り痕ナデ消す。	胎土：褐色他の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明褐色
28-26	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.0	付け高台僅かに外反する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き？。糸切り痕残る。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
28-27	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.0	付け高台外傾し、端面取りされる。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き？。糸切り痕ナデ消す。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
28-28	土師・坏	底部～高台部 完存	底径 6.2	付け高台外傾し、端面取りされる。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面へラ磨き？。糸切り痕僅かに残る。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
28-29	土師・坏	坏部中位～高台部 1/2	底径 6.3	付け高台強く外反する。底部回転糸切り。	高台部ロクロナデ。内面へラ磨き？。糸切り痕僅かに残る。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙色、内淡橙褐色

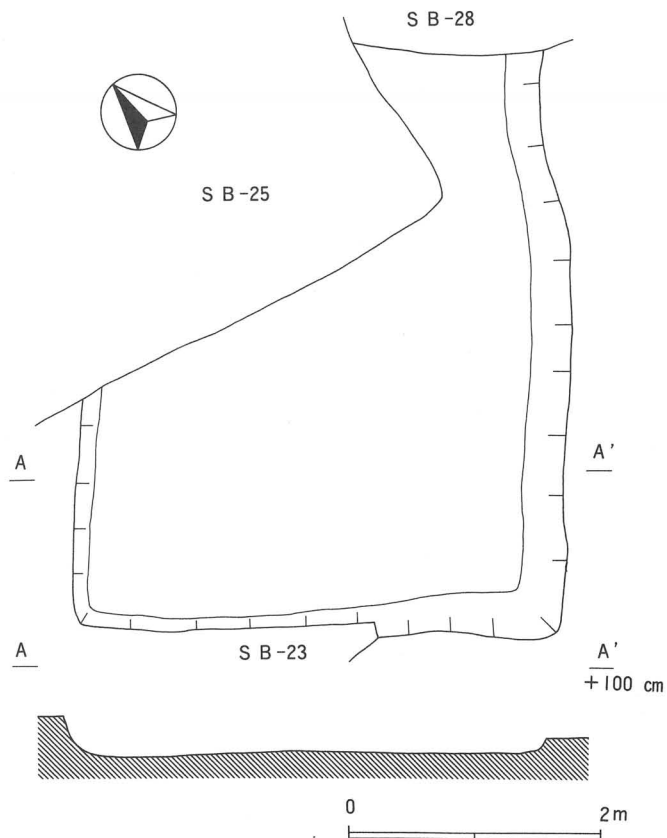
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
28-30	土師・坏	底部1/2 (高台部欠損)		付け高台(欠損)。底部回転糸切り。	外内面ナデ?。糸切り痕残る。	胎土:小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内明橙褐色
28-31	土師・坏	ほぼ完存	口径 13.0 器高 5.2 底径 6.1	付け高台「ハ」の字状に外傾する。口縁部僅かに外反する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面ナデ。糸切り痕ナデ消す。	胎土:小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内明橙褐色
28-32	土師・坏	底部ほぼ完存 高台部 1/2	底径 7.2	付け高台「ハ」の字状に外傾する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面不明。糸切り痕僅かに残る。	胎土:赤褐色小砂粒を多量に含む 焼成:良 色調:外内明橙褐色
28-33	土師・坏	底部ほぼ完存 高台部 3/4	底径 7.0	付け高台「ハ」の字状に外傾する。底部回転糸切り。	高台部横ナデ。内面不明。糸切り痕ナデ消す。	胎土:赤褐色小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内明橙褐色
28-34	土師・坏	ほぼ完存	口径 8.2 器高 1.9 底径 3.4	底部から口縁部にかけて内湾する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面ナデ。糸切り痕ナデ消す。	胎土:赤褐色小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-35	土師・坏	口縁部~底部 3/5	口径 8.5 器高 1.9 底径 3.4	口縁部で僅かに外反する。底部回転糸切り。	外内面ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内明橙色
28-36	土師・坏	体部1/3	口径 (9.4)	口縁部で外反する。底部回転糸切り。	外面ロクロナデ。内面ナデ?。	胎土:小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外明黄褐色、内暗灰褐色
28-37	土師・坏	口縁部1/2 底部完存	口径 (9.6) 器高 2.7 底径 3.8	底部から口縁部にかけて内湾する。底部回転糸切り。	外内面ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-38	土師・坏	ほぼ完存	口径 10.4 器高 2.5 底径 4.4	口縁部で僅かに外反する。底部回転糸切り。	外内面ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-39	土師・坏	口縁部1/3 底部完存	口径 (11.2) 器高 3.7 底径 4.4	底部から口縁部にかけて内湾する。底部回転糸切り。	外内面ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-40	土師・坏	ほぼ完存	口径 12.6 器高 4.1 底径 4.5	内湾して立上がり口縁部で僅かに外反する。底部回転糸切り。	外内面ロクロナデ?。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を多く含む 焼成:良 色調:外明灰褐色、内淡橙褐色
28-41	土師・坏	底部完存	底径 3.4	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外明黄褐色、内明橙褐色
28-42	土師・坏	底部完存	底径 3.7	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内明橙褐色
28-43	土師・坏	底部完存	底径 3.8	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-44	土師・坏	底部2/3	底径 4.1	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-45	土師・坏	底部1/2	底径 4.8	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:細砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外淡茶褐色、内暗灰褐色
28-46	土師・坏	体部下位~底部 2/3	底径 4.6	底部回転糸切り。	ロクロナデ。糸切り痕残る。	胎土:赤褐色小砂粒を若干含む 焼成:良 色調:外内淡橙褐色
28-47	灰釉・椀	口縁部~高台部 1/2	口径(15.0) 器高 6.1 底径 7.8	腰部は利、付け高台外傾する。口縁部は緩やかに内湾する。底部回転糸切り。	体部ロクロナデ(高台部付近横へラ削り)。高台部横ナデ。糸切り痕ナデ消す。口縁外面に沈線を有する。	胎土:精良 焼成:良 色調:外内明灰白色 *外内面に淡緑色の釉がかかる。 底部に気泡が入る。
28-48	灰釉・椀	口縁部1/8 体部~高台部 1/3	口径(15.8) 器高 7.0 底径 7.0	付け高台内湾し、口縁部僅かに外反する。	外面ロクロナデ。内面ナデ。口縁内面に沈線を有する。	胎土:精良 焼成:良 色調:外内明白灰色 *外内面に淡緑色の釉がかかる。

(6) 第26号住居址 (S B26)

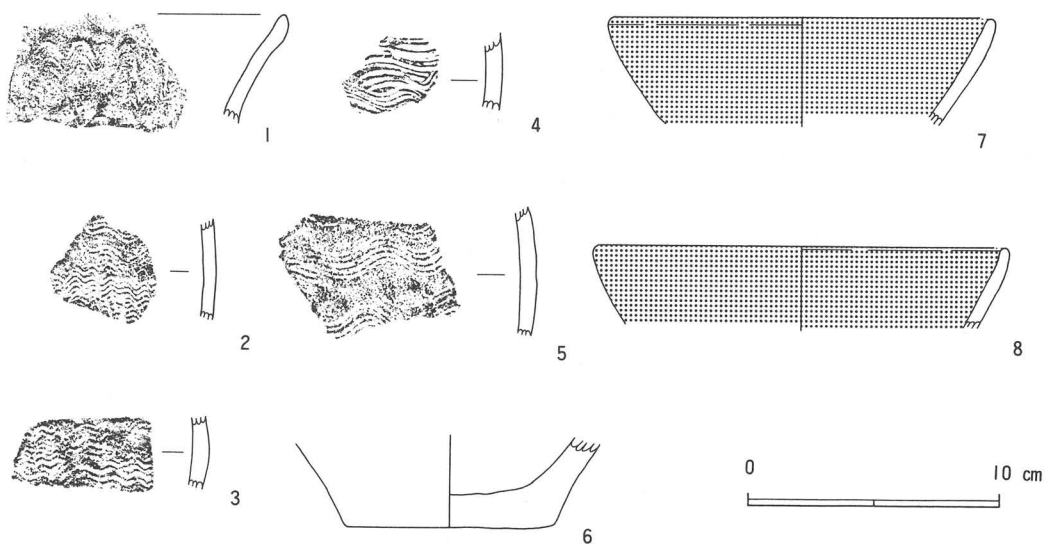
遺構 (第30図)

本住居址はC区北側中央部、グリッドG~I-4~6において第23・25・28号住居址等と重複して検出された。北側を第25・27号住居址によって破壊されており、南北の規模は不明であるが東西長は4.1mを測る。平面プランはN-44°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。残存する壁高は24~34cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面は一部で礫が露出しているものの全体に堅緻で、覆土は5~10cmの礫を多量に含んだ暗褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

本址は第34号住居址を切って構築され、第23・25・28号住居址によって切られており、重複関係、出土遺物等から弥生時代後期の所産と推定される。



第30図 第26号住居址実測図



第31図 第26号住居址出土遺物実測図

遺物 (第31図)

本址からは弥生土器片が出土している。出土量は僅少で細片がほとんどである。器種には壺、甕、高坏、鉢等があるが小細片が多く図示できたのは拓影を含めても8点にすぎない。

1～6は甕で、いずれも比較的整った波状文が施文され、1の口縁端部は内湾して、受け口状を呈する。3・4は同一個体と推定され、頸部簾状文を施文した後に、胴下半部に向けて波状文を施文している。7・8は鉢で、共に内湾して開き、口縁部で更に内湾する器形を持ち、内外面ともへら磨きされた後に赤色塗彩が施される。

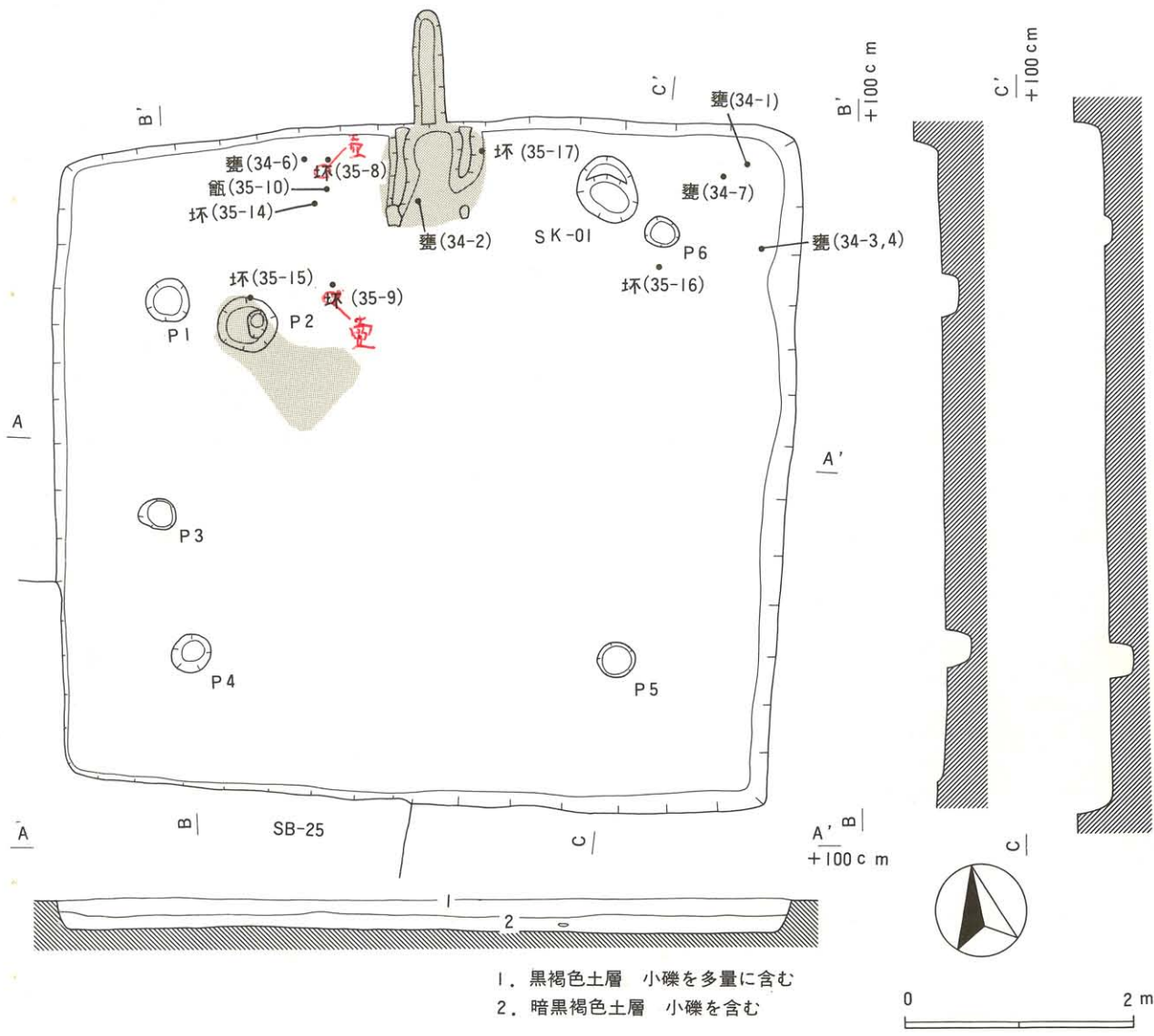
第7表 第26号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
31-1	弥生・甕			口縁部緩く外反し、端部で僅かに内湾する。	口縁部横ナデ。外面波状文。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
31-2	弥生・甕				外面波状文。内面へら磨き。	胎土：石英他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗灰色
31-3	弥生・甕				外面波状文。内面不明。	胎土：微細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
31-4	弥生・甕				外面簾状文+波状文。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色 * 5と同一個体。
31-5	弥生・甕				外面波状文。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色 * 4と同一個体
31-6	弥生・甕	底部完存	底径 8.2	外反して立上がる。	外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明灰褐色 * 底部に靱圧痕
31-7	弥生・鉢	口縁部1/6	口径(15.0)	口縁部緩やかに内湾する。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色 * 外内赤彩。
31-8	弥生・鉢	口縁部1/8	口径(16.4)	口縁部でやや強く内湾する。	外面縦へら磨き。内面縦へら磨き。	胎土：石英・長石の微細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 * 外内赤彩。

(7) 第27号住居址 (S B 27)

遺構 (第32・33図)

本住居址はC区北側中央部のグリッドF～H-1～4において第25・28号住居址等と重複して検出された。平面プランは整った隅丸方形を呈し、規模は東西6.5m、南北6.1mを測り、カマドを中心とした主軸方向はN-12°-Eを示す。残存する壁高は20～31cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はほぼ平坦で北西部では堅緻であったが、南東部ではやや軟弱であった。覆土は2層に分けられ、上層は礫を多量に含んだ黒褐色土、下層は暗黒褐色土であった。カマドの左手前には床面より5cmほど浮いた状態で1.4×1.3mの範囲にわたって礫が集中して検出されたが、性格は明確にできなかった。また、住居址中央西寄りのP₂付近には1.4×0.9mの範囲にわた



第32図 第27号住居址実測図

って焼土の堆積が検出されたが、床面レベルより15cmほど浮いており本址との関連は明確にし難い。

カマドは北壁中央部に設置されており、煙道先端部から袖末端部まで185cm、両袖幅85cmの規模を有する。遺存状況は良好で、構築に際しては床面を浅く掘り窪めた後に暗茶褐色粘土で馬蹄形に袖部を形成し、両袖先端部には補強のために一对の河原石を配している。燃烧部内には支柱に用いられたと推測される河原石が袖にもたれるようにして2点検出された。また、強く披熟した獣骨と推定される骨片が少量出土した。

土壌、ピットは計7基検出された。SK 01はカマド右側に検出され貯蔵穴と推定される。楕円形を呈し、規模は61×50cm、深さ33cmを測り、北側にテラスを有する。ピットはいずれも略円形を呈し、径26～51cm、深さ6～22cmを測る。

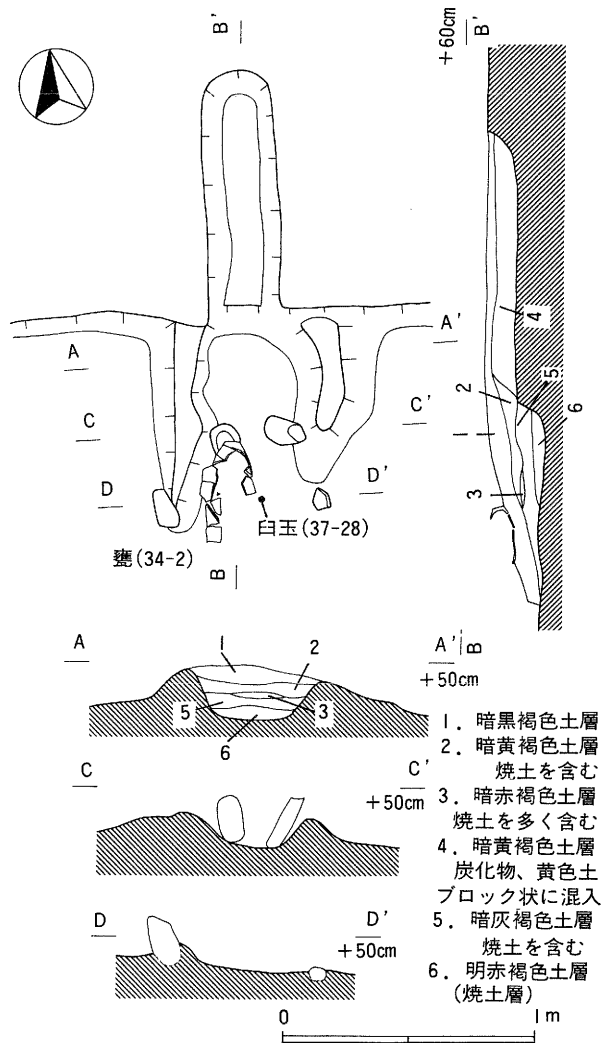
遺物の出土状況はカマド周辺と住居址北東隅に集中する傾向が看取され、その大部分が住居址機能時の位置を留めて復元完形の状態出土している。

本址は第28号住居址を切って構築された後、第25号住居址によって切られており、住居址形態と出土遺物より古墳時代後期の所産と推定される。

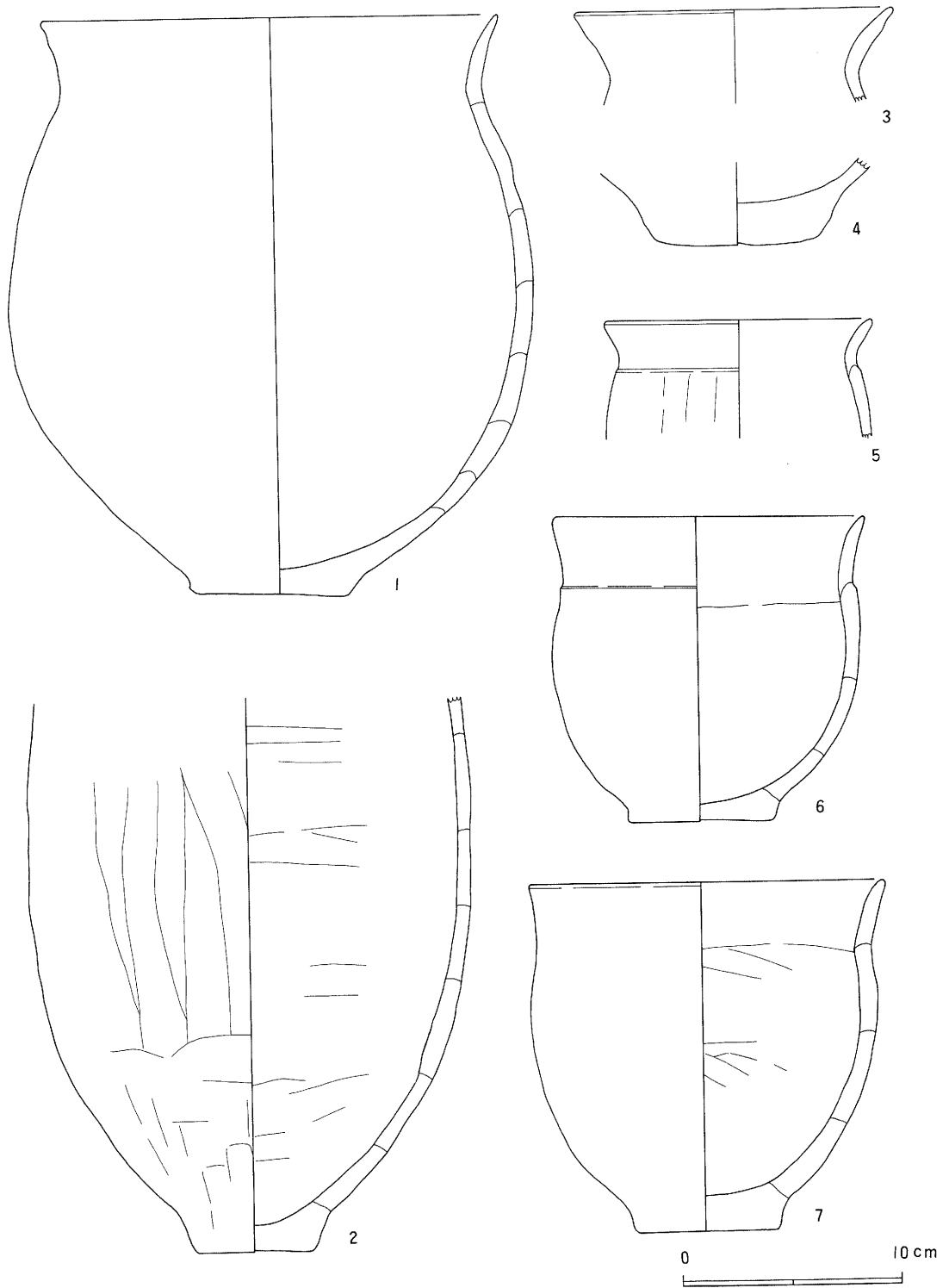
遺物 (第34～37図)

本址からは土師器片、須恵器片、鉄製品、白玉、土製品が出土している。土師器の器種には胴張甕、長胴甕、小形甕、壺、甑、坏等があり、須恵器の器種には蓋、甕がある。

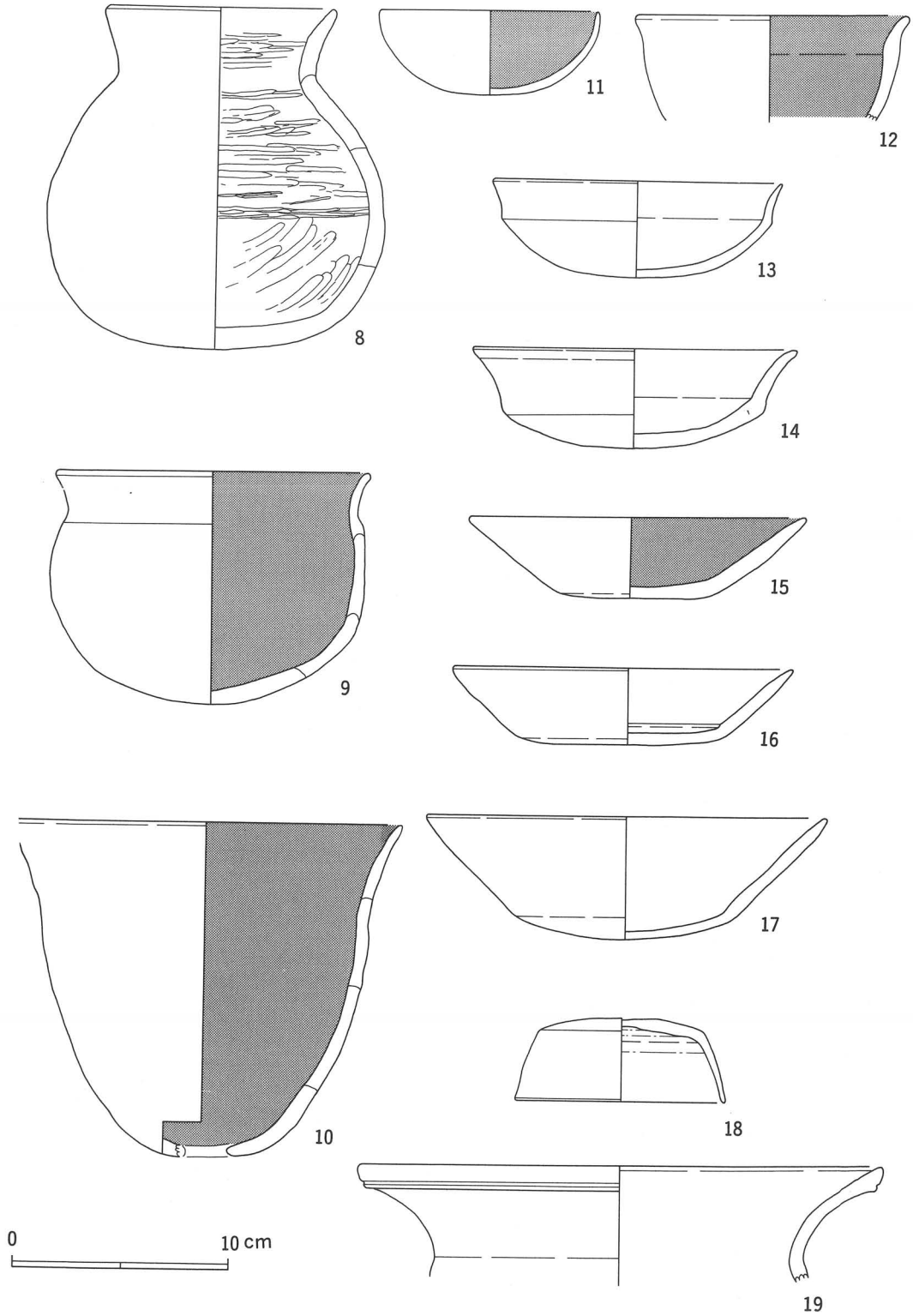
1は住居址北東隅部より復元完形の状態出土した胴張甕で、あまり張らない胴部に緩く外反する口縁部を持ち、底部には不明瞭ながら木葉痕が観察される。2はカマド上部より手前側に倒置した状態で検出された長胴甕で、筒状の胴部が底部付近で急速に収縮する器形を呈し、底部には木葉痕が観察される。3・4は同一個体片と推定される胴張甕片で、胎土に小礫を多量に含み、口縁部は「く」の字状に外反する。5～7は小形の甕で、5は頸部で僅かに段を持ち口縁部は直



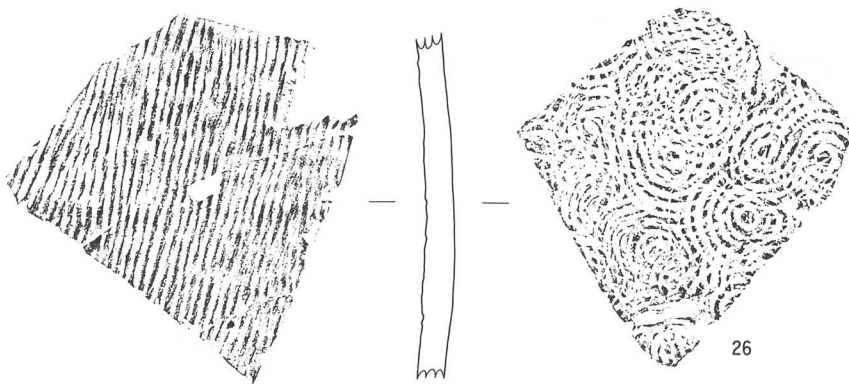
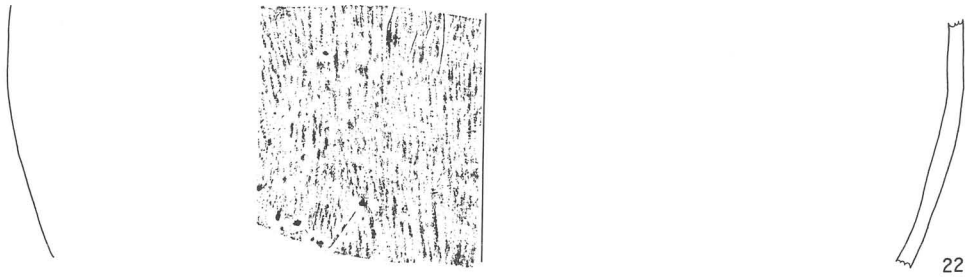
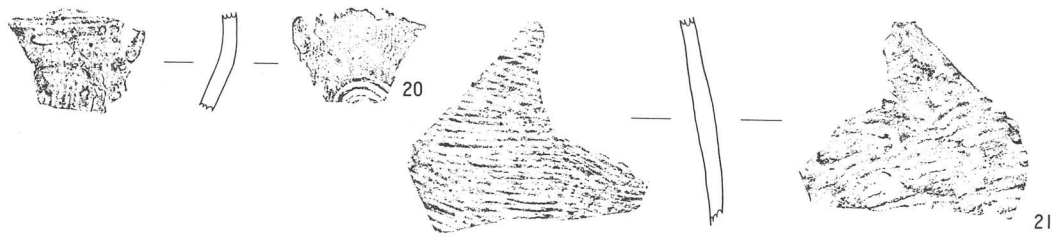
第33図 第27号住居址カマド実測図



第34图 第27号住居址出土遺物実測図(1)

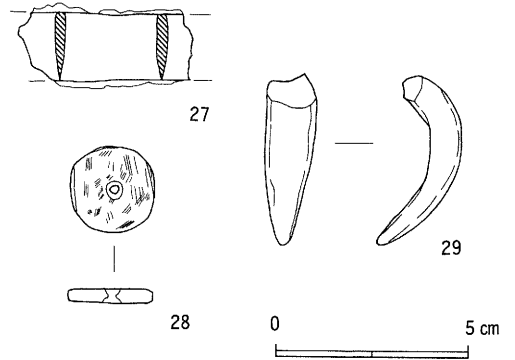


第35图 第27号住居址出土遺物実測図(2)



第36图 第27号住居址出土遗物实测图(3)

立しながら僅かに外反する。6・7は共に小砂粒を多く含んだ暗赤褐色の胎土で作られ、底部には木葉痕が観察される。8・9は壺で、8は下膨れで丸底の体部に、短く直立気味に外反する口縁部を持ち、内外面ともへら磨きが施される。9は半球形の体部に僅かに段を持って直立気味に外反する口縁部を持ち、内面は黒色処理されている。10は甑で砲弾形の器形を呈し、底部に1孔を有する。内面はへら磨きが施された後、黒色処理されている。11~17は坏で、11は丸底の底部より内湾しながら直立して口縁に至る器形を持ち、12は口縁部に僅かに外反する器形を持つ。共に内面は黒色処理されている。13・14は所謂模倣坏で、丸底の底部に屈曲して外反し口縁に至る器形を持つ。15・16は平底の底部から直線的に開く器形を呈し、内面は丁寧なへら磨きが施される。法量もほぼ同一であるが、15は内面が黒色処理されている。17は15・16に近い器形を呈するが、底部はやや丸みを帯び、口径18.6cmの大型品である。18は須恵器の蓋で、扁平な天井部に僅かに内湾する長い口辺部を持ち、外面は丁寧にナデ整形が行われている。19~26は須恵器の甕で、19は長く伸びた甕の口縁部で青黒色の自然釉が看取される。20は小片のため、器形は不明確であるが上部に櫛描波状文が施文され、内面には同心円文が残る。21は外面に平行タタキ目痕が綾杉状に施文され、内面には同心円文が残る。23~26は同一個体片と推定される大甕片で、外面には平行タタキ目痕、内面には同心円文が残る。口辺部外面にはへら描きの斜状文が施文されている。本甕と同一個体と推定される甕の破片はC区北側の各遺構に散在して検出された。27は刀子と推定される鉄製品で、両端部を欠損しており、断面は二等辺三角形を呈する。



第37図 第27号住居址出土遺物実測図(4)

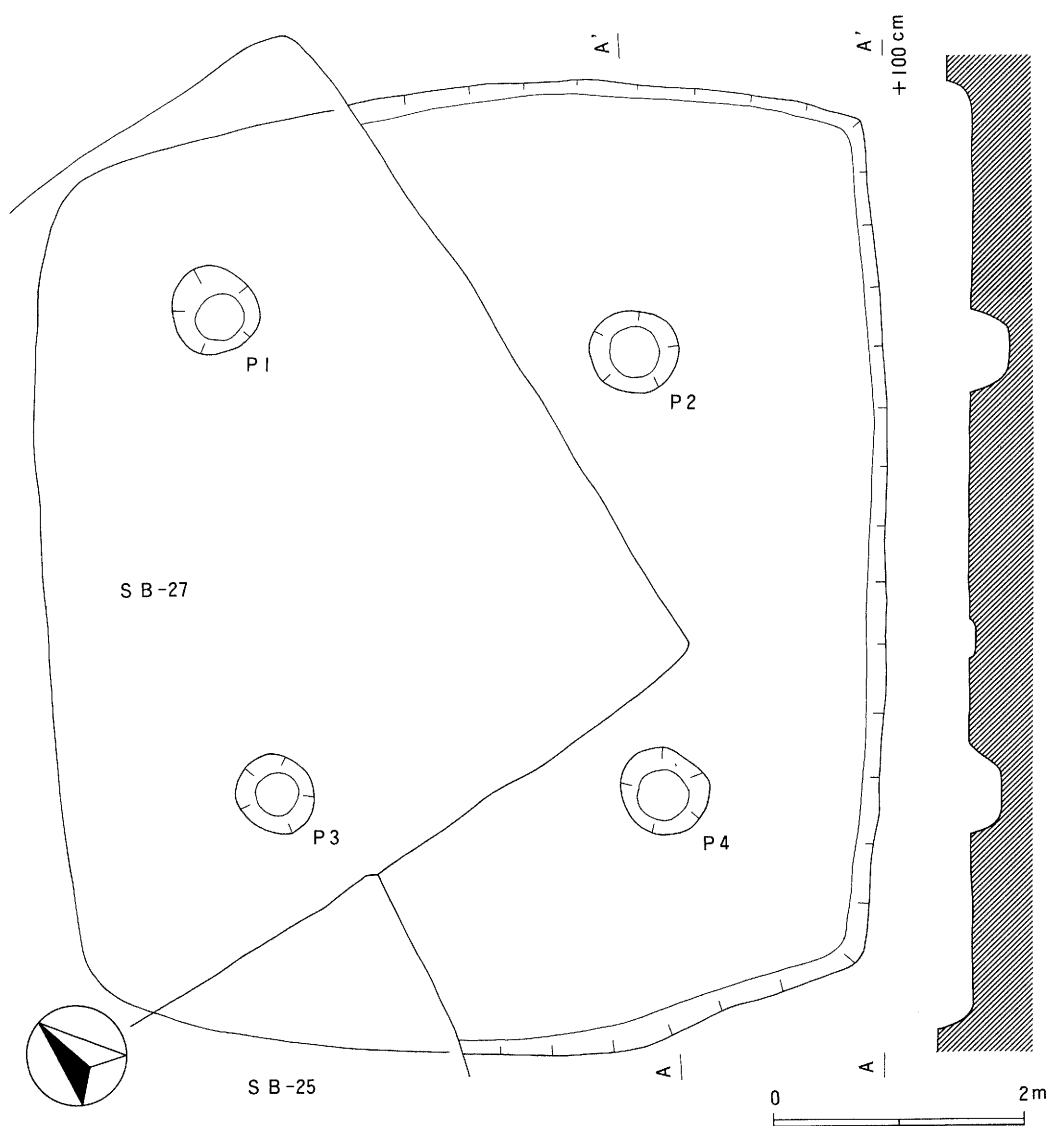
第8表 第27号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
34-1	土師・甕	ほぼ完存	口径 21.2 器高 26.9 底径 6.8	口縁部緩やかに外反する。最大径を胴部中位に有する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面不明。	胎土：石英・長石他の細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外赤褐色、内灰黄色 *底部に木葉痕。胴部煤ける。
34-2	土師・甕	胴部上位~底部ほぼ完存	底径 5.6	胴部筒状を呈し、底部にむけて急速に収縮する。	外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：黒雲母・細砂粒を含む 焼成：良色調：外明赤褐色、内暗灰褐色 *底部に木葉痕。
34-3	土師・甕	口縁部1/4	口径(14.8)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：小礫粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗赤灰褐色 *4と同一個体か。
34-4	土師・甕	底部完存	底径 7.5		外面へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小礫粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗赤灰褐色 *3と同一個体か。
34-5	土師・甕	口縁部1/4	口径(12.4)	口縁部、外面に段を持って「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：微砂粒を若干含む。 焼成：良色調：外明褐色、内明灰褐色
34-6	土師・甕	ほぼ完存	口径 14.4 器高 14.2 底径 6.7	口縁部、外面に段を持って僅かに外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へら削り。内面横へら削り。	胎土：金雲母・小砂粒を多く含む 焼成：良色調：外暗赤褐色、内明赤褐色 *底部に木葉痕。

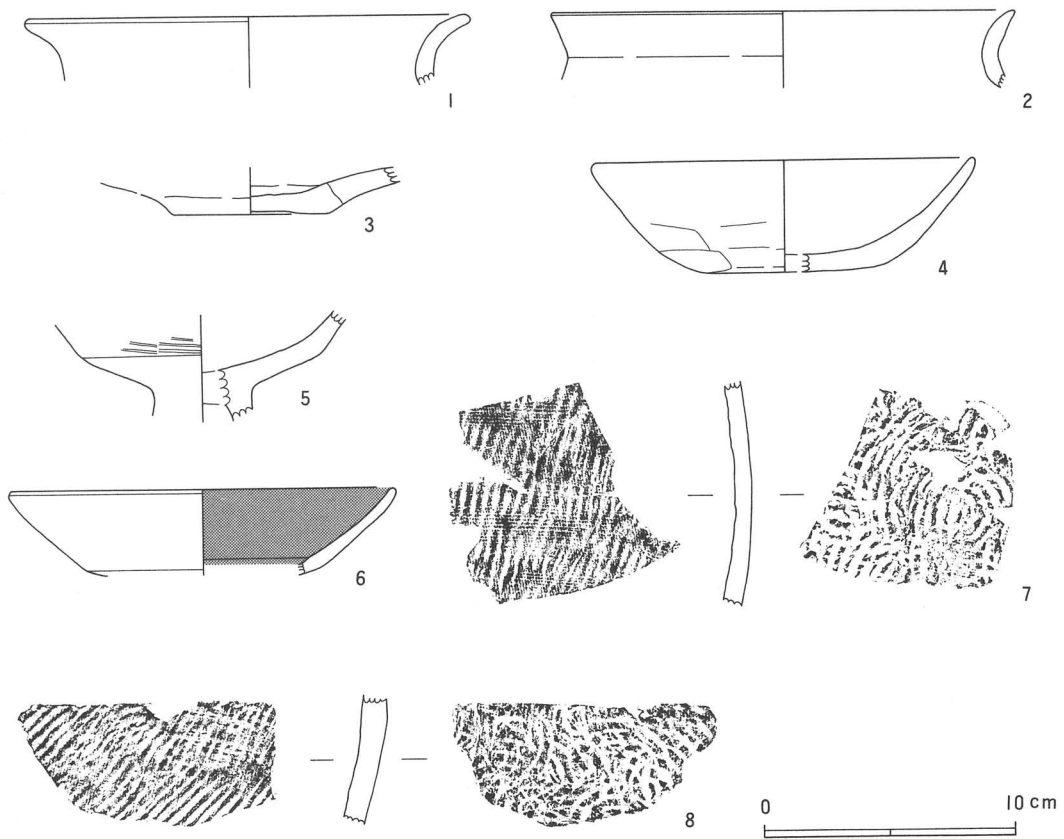
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
34-7	土師・甕	ほぼ完存	口径 16.5 器高 16.3 底径 6.6	口縁部、僅かに外反する。	口縁部横ナデ。胴外面縦へラ削り。内面横へラ削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗黒褐色 *底部に木葉痕。
35-8	土師・壺	ほぼ完存	口径 10.7 器高 16.0	口縁部直立気味に外反する。体部は下膨れで丸底となる。	口縁部横ナデ。体外面不明。内面積・斜めへラ磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外橙灰褐色、内赤灰色 *胴部に黒斑あり。
35-9	土師・壺	ほぼ完存	口径 14.6 器高 10.9	口縁部段を持って直立気味に外反する。体部は半球形の丸底を呈する。	口縁部横ナデ。体外面横へラ磨き?。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒多く含む 焼成：良 色調：外灰赤褐色、内黒色
35-10	土師・甌	ほぼ完存	口径 18.4 器高 15.6	口縁部僅かに外反し、体部は砲弾状を呈する。底部に1孔を有する。	口縁部横ナデ。体外面横へラ削り。内面横へラ磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
35-11	土師・坏	口縁部~底部 1/4	口径(12.2) 器高 4.0	丸底で半球形の体部を有する。	口縁部横ナデ。体外面横へラ削り。内面横へラ磨き。	胎土：小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外明白褐色、内黒色
35-12	土師・坏	口縁部1/5	口径(12.8)	内湾して開き、口縁部で弱く「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。体外面縦へラ削り。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
35-13	土師・坏	口縁部~底部 1/2	口径 13.6 器高 4.5	口縁部、体部中で屈曲外反して開く。底部は丸底。	口縁部横ナデ。体外面へラ削り+ナデ。内面横へラ削り+ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内淡橙褐色
35-14	土師・坏	完存	口径 15.1 器高 4.7	口縁部、屈曲外反して開く。底部は浅い丸底を呈する。	口縁部横ナデ。体外面へラ削り+ナデ。内面横へラ削り+ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外橙褐色、内乳黄褐色
35-15	土師・坏	ほぼ完存(口縁一部欠損)	口径 15.6 器高 3.8 底径 7.0	平底の底部から屈曲して直線的に開く。	口縁部横ナデ。体外面へラ磨き?。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内黒色
35-16	土師・坏	完存	口径 15.4 器高 3.6 底径 9.6	平底の底部から内面に段を持って屈曲し、直線的に開く。	口縁部横ナデ。体外面へラ磨き?。内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
35-17	土師・坏	口縁部~底部 3/4	口径 18.6 器高 5.8	浅い丸底の底部から僅かに段を持って屈曲し、直線的に開く。	口縁部横ナデ。体外面横へラ削り。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
35-18	須恵・蓋	1/2	器高 3.9 裾径 9.8	天井部丸みを帯び、口辺部僅かに内湾しながら長く伸びる。	外内面クロコナデ。	胎土：細砂粒を微量含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内青灰色
35-19	須恵・甕	口縁部1/12	口径(24.4)	口縁部長く外反し、口唇部に僅かな突帯と沈線を有する。	外内面クロコナデ。	胎土：白色細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗青灰色 *外内に青黒色の自然釉かかる。
35-20	須恵・甕				外内面タタキ。外面波状文を有する。	胎土：細砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内暗青灰色
35-21	須恵・甕				外内面タタキ。	胎土：微砂粒をやや多く含む 焼成：良 色調：外極暗青灰色、内暗青灰色
35-22	須恵・甕				外内面タタキ。	胎土：白色細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明緑灰色、内明青灰色 *濃緑色の自然釉かかる。
35-23	須恵・甕			口縁部外反し、口唇部に突帯を有する。	外内面クロコナデ。外面にへラ描き斜状文を有する。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内青灰色 *24~26と同一個体か。
35-24	須恵・甕			口縁部外反し、口唇部に突帯を有する。	外内面クロコナデ。外面にへラ描き斜状文を有する。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内青灰色 *23,25,26と同一個体か。
35-25	須恵・甕			口縁部外反する。	外内面クロコナデ。外面にへラ描き斜状文・横線文を有する。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内青灰色 *23,24,26と同一個体か。
35-26	須恵・甕				外内面タタキ。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内青灰色 *23~25と同一個体か。

残存長は 4.7cm、刃幅は 2.2cm、重量は 11.97g を測る。28は石灰岩製の白玉でカマド前部より出土している。両面、周縁とも丁寧に研磨されており、明白灰色を呈する。やや四角張った円形を呈し、大きさは22.3×22.2mm、厚さ 4.1mm、重量3.28g を測り、穿孔は両面より行われ、孔径は 2.2mm を測る。29はカマド右側より出土した土製勾玉と推定される土製品で頭部を欠損しており、明橙色を呈する。残存長は 4.6cm、最大幅は13.7mm、厚さは 8.5mm、重量は4.89g を測る。

(8) 第28号住居址 (S B28)
遺構 (第38図)



第38図 第28号住居址実測図



第39図 第28号住居址出土遺物実測図

本住居址はC区北側中央部のグリッドE～G-2～5において、第25～27号住居址等と重複して検出された。遺構北西部の大部分を第25・27号住居址によって破壊されており、全体の規模等は不明確であるが、北壁と南壁の僅かに張った隅丸長方形を呈すると推定される。南北長は7.8m、推定される東西長は6.8mを測り、主軸方向はN-46°-Eを示す。残存する壁高は15～30cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層である。

カマドは検出されなかったが、北壁中央部の第27号住居址に切られた部分の壁面に少量の焼土が検出されており、北壁中央部のやや西寄りにカマドが設置されていた可能性が推測される。ピットは計4基検出され、支柱穴と推定される。いずれも略円形を呈し、径58～71cm、深さ25～31cmを測る。

本址は第26号住居址を切って構築された後、第25・27号住居址によって切られており、重複関係、出土遺物等より古墳時代後期の所産と推定される。

遺物 (第39図)

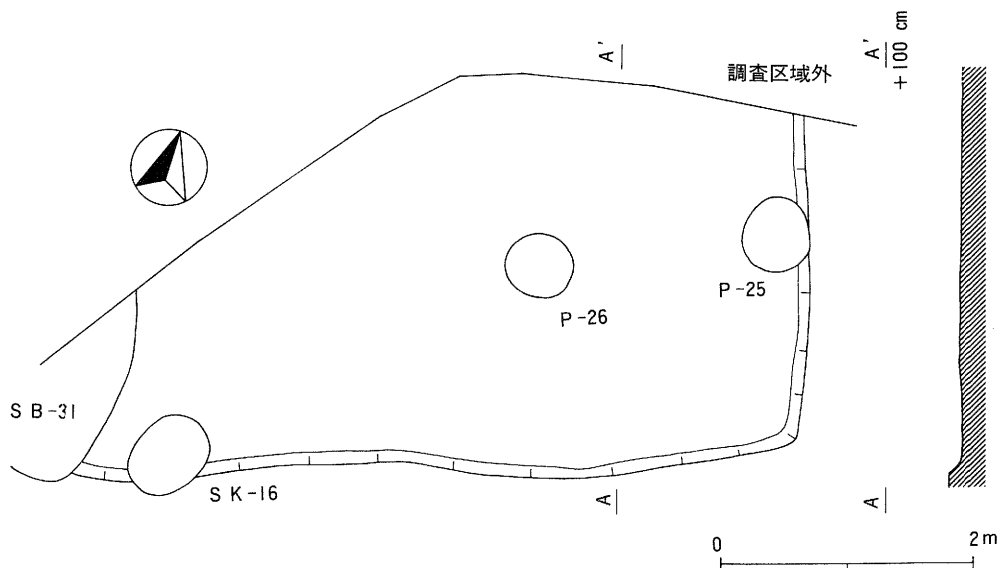
本址からは土師器、須恵器の小片が少量出土している。土師器の器種には甕、坏、高坏があり、

須恵器の器種には甕がある。1～3は甕で口縁部で緩く外反する器形を持つ。4は坏で平底の底部に緩く内湾しながら立上がる器形を呈する。5・6は高坏で6の内面は黒色処理されている。7・8は甕で外面に平行タタキ目痕、内面に同心円文が残る。

第9表 第28号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
39-1	土師・甕	口縁部1/6	口径(17.9)	口縁部外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：赤褐色他の小細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内淡赤褐色
39-2	土師・甕	口縁部1/4	口径(18.6)	口縁部外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：石英他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内明橙灰色
39-3	土師・甕	底部1/2	底径 6.2	底部外反し、大きく開いて立上がる。	外面へラ削り。内面ナデ。	胎土：赤褐色他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内明白灰色
39-4	土師・坏	口縁部～底部1/5	口径(15.1) 器高 4.5 底径 (7.7)	内湾して立上がる。	口縁部横ナデ。外面横へラ削り。内面へラ磨き。	胎土：赤褐色他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
39-5	土師・高坏	接合部1/3		坏部屈曲して開く。	外面横刷毛調整。内面へラ磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：やや不良 色調：外内明橙褐色
39-6	土師・高坏	坏部1/6	口径(15.6)	半部屈曲して緩く内湾する。	口縁部横ナデ。外面縦へラ磨き？。内面へラ磨き。	胎土：赤褐色他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明白褐色、内黒色
39-7	須恵・甕				外内面タタキ。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗青灰色、内明青灰色
39-8	須恵・甕				外内面タタキ。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗灰色、内暗青灰色

(9) 第30号住居址 (S B30 第40図)

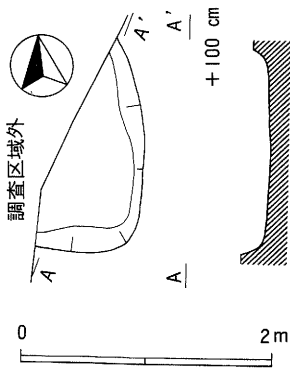


第40図 第30号住居址実測図

本住居址はC区北西部のグリッドI～K-1～3において、第31号住居址、第16号土壙等に切られて検出された。遺構北西部は調査区域外にあり、西側も第31号住居址によって切られているため全体の規模、プラン等は不明確であるが、隅丸（長）方形を呈すると推定され、調査された範囲の南壁は5.7m、東壁は2.7mを測る。東西を基準とした主軸方向はN-73°-Eを示す。残存する壁高は8～13cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は軟弱で、柱穴等は検出されなかった。覆土は暗黒褐色土の単一層である。

本址からは弥生土器の小片が若干出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

(10) 第31号住居址 (S B31 第41図)



本住居址はC区北西部のグリッドK-2・3より第30号住居址と重複して検出された。遺構の大部分は調査区域外にあり、調査されたのは南東部の一部のみであったため全体のプランは把握できない。調査された部分の東壁は1.8m、南壁は0.8mを測り、平面プランは隅丸（長）方形を呈するものと推定される。南北の主軸方向はN-2°-Eを示す。残存する壁高は8～17cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は軟弱で、覆土は暗褐色土の単一層である。

本址は第30号住居址を切って構築されているが、出土遺物は皆無で所産期は不明である。

第41図 第31号住居址実測図

(11) 第32号住居址 (S B32)9

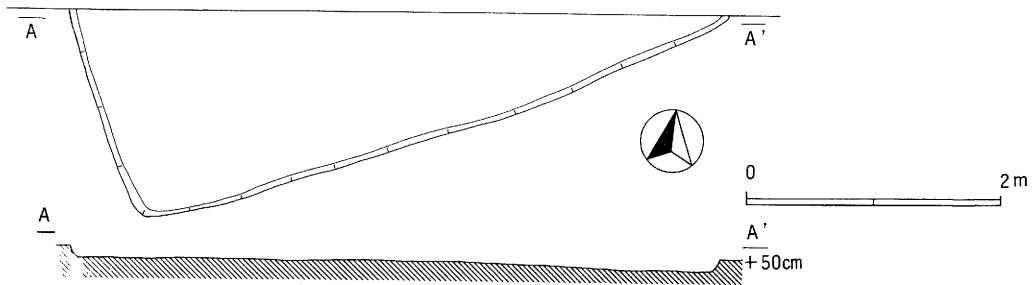
遺構 (第42図)

本住居址はC区北部のグリッドE～G-1より検出された。遺構は南西部の一部が調査されたが、北側の調査区域外は以前の造成により削平されている。調査された部分の南壁は5.0m、西壁は1.8mを測り、平面プランは隅丸（長）方形を呈すると推定される。東西方向の主軸はN-65°-Eを示す。残存する壁高は7～10cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は固く締まった黒褐色土の単一層である。柱穴等は検出されなかった。

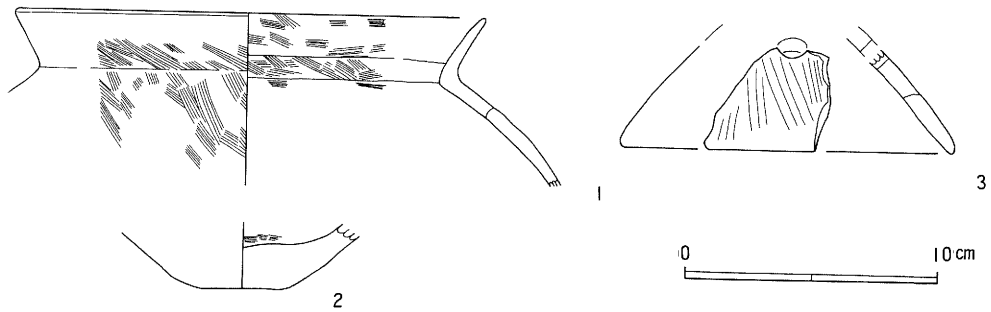
本址の所産期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

遺物 (第43図)

本址からは土師器片と混入遺物の弥生土器片が出土している。出土量は僅かで小片が多く、図示できたのは3点のみである。1・2は甕で共に球形胴を有し、内外面刷毛整形されている。1は口縁部が「く」の字状に外反する。3は高杯の脚部である。内外面粗い刷毛整形され、数は不明だが円形透かし孔が穿孔されている。以上の他に有段口縁を呈する壺の口縁部片等が出土している。



第42図 第32号住居址実測図



第43図 第32号住居址出土遺物実測図

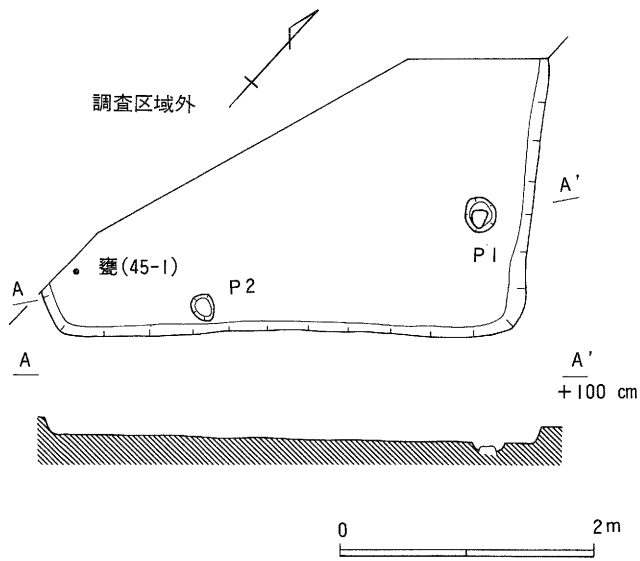
第10表 第32号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
43-1	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/3	口径(18.8)	口縁部「く」の字状に 外反し、胴部張る。	口縁部横ナデ。外面斜 め刷毛調整。内面横刷 毛調整+ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
43-2	土師・甕	底部完存	底径 3.2		外内面刷毛調整。	胎土：小細砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗黒灰色
43-3	土師・高坏	脚部下位1/8	底径(13.0)	内湾して「ハ」の字状 に開く。	外内面刷毛調整。裾部 横ナデ。透かし孔を有 する。	胎土：赤褐色他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色、内 暗灰褐色

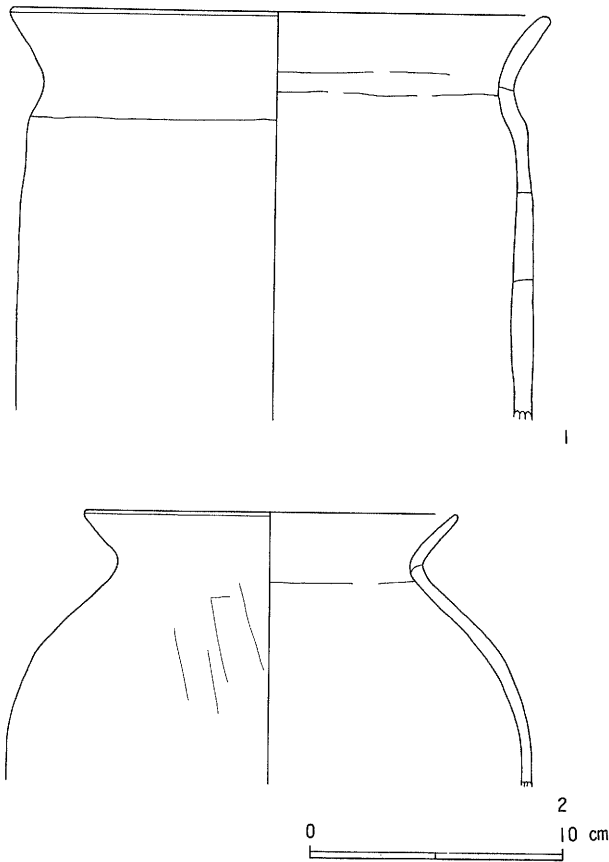
(12) 第33号住居址 (S B33)

第11表 第33号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
45-1	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/3	口径(21.6)	口縁部僅かに外反し、 胴部はほぼ直立する。	口縁部横ナデ。胴部外 内面へら削り+ナデ。	胎土：白色・黒色小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
45-2	土師・甕	口縁部～胴部 中位2/5	口径(15.0)	口縁部「く」の字状に 外反し、胴部大きく張 る。	口縁部横ナデ。外面斜 めへら削り。内面ナ デ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明灰褐色



第44図 第33号住居址実測図



第45図 第33号住居址出土遺物実測図

遺構(第44図)

本住居址はC区西部のグリッドM・N-7・8に位置し、遺構の南側が検出された。調査区域内において他遺構との重複はない。平面プランは北側が不明確ながら、隅丸方形を呈すると推定され、南壁は3.7mを測る。東西の主軸方向はN-69°-Eを示す。残存する壁高は9~13cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は一部に貼り床が確認されたほかは軟弱で、覆土は暗黒褐色土の単一層であった。

ピットは計2基確認され、P₁は径27cm、深さ7cm、P₂は径23cm、深さ9cmを測り、P₁の底には上部が平坦な平石が検出された。また、遺構検出時に南壁中央部においてまとまった焼土が確認されカマドの存在が予想されたが、遺構掘り下げに伴ない消滅し、床面、及び壁面下部には何らの痕跡も確認されなかった。カマドは東壁中央部、もしくは北壁中央部に設置されていたものと推定される。本址は出土遺物より古墳時代後期の所産と推定される。

遺物(第45図)

本址からは土師器片が僅小出土した。1は住居址南西隅部より出土した土師器長胴甕の上半部で直線的な胴部を持ち、内外面ともへら削りの後、非常に丁寧にナデ整形されている。2は土師器胴張甕で、球形胴に「く」の字状に外反する口縁部を持ち、内外面ともへら削りされ、内面はナデ整形されている。

(13) 第34号住居址 (S B 34 第46図)

本住居址はC区中央部のグリッドG～I-5～7において第26・35・39号住居址等と重複して検出された。遺構南東部の大部分は他遺構との重複によって破壊されており、調査し得たのは北壁 4.4m、西壁 2.5mの範囲である。平面プランは隅丸長方形を呈すると推定され、東西の主軸方向はN-45°-Wを示す。残存する壁高は14～17cmを測り、壁は緩やかに立上がる。覆土は小礫を多く含んだ明茶褐色土の単一層である。炉址、柱穴等は検出されなかった。

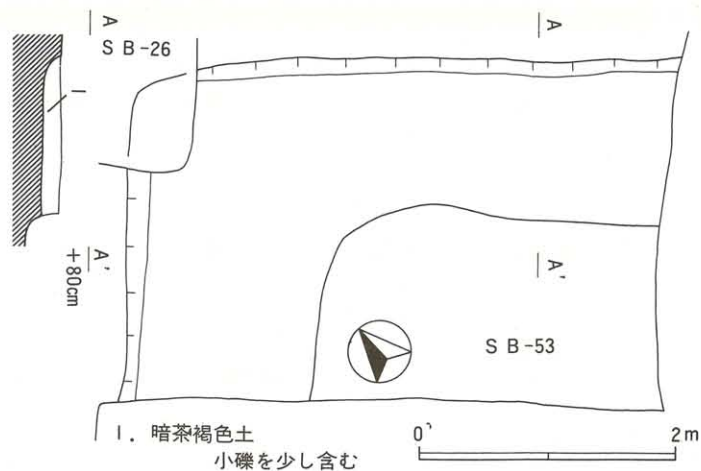
本址からは弥生土器片と土師器片の小片が若干出土している。

本址は第26・35・39・53号住居址等によって切られており、重複関係と出土遺物より弥生時代後期の所産と推定される。

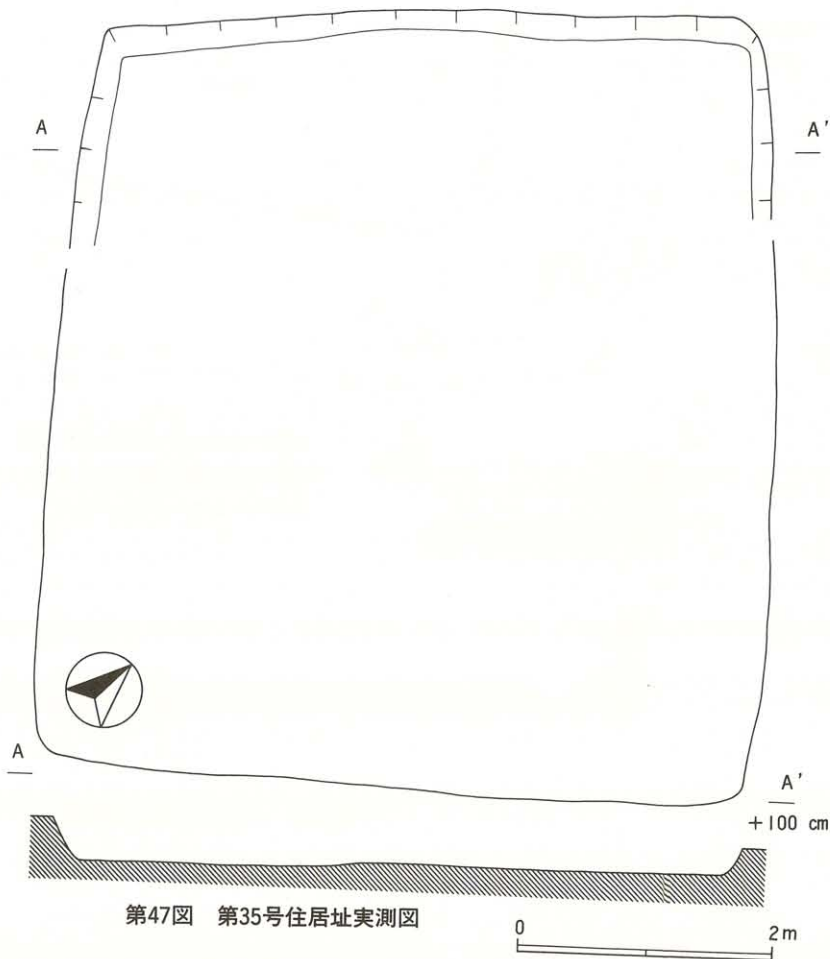
(14) 第35号住居址

(S B 35 第47図)

本住居址はC区中央部のグリッドH～J-6～8において検出された。南東部での他遺構との重複が著しく、



第46図 第34号住居址実測図

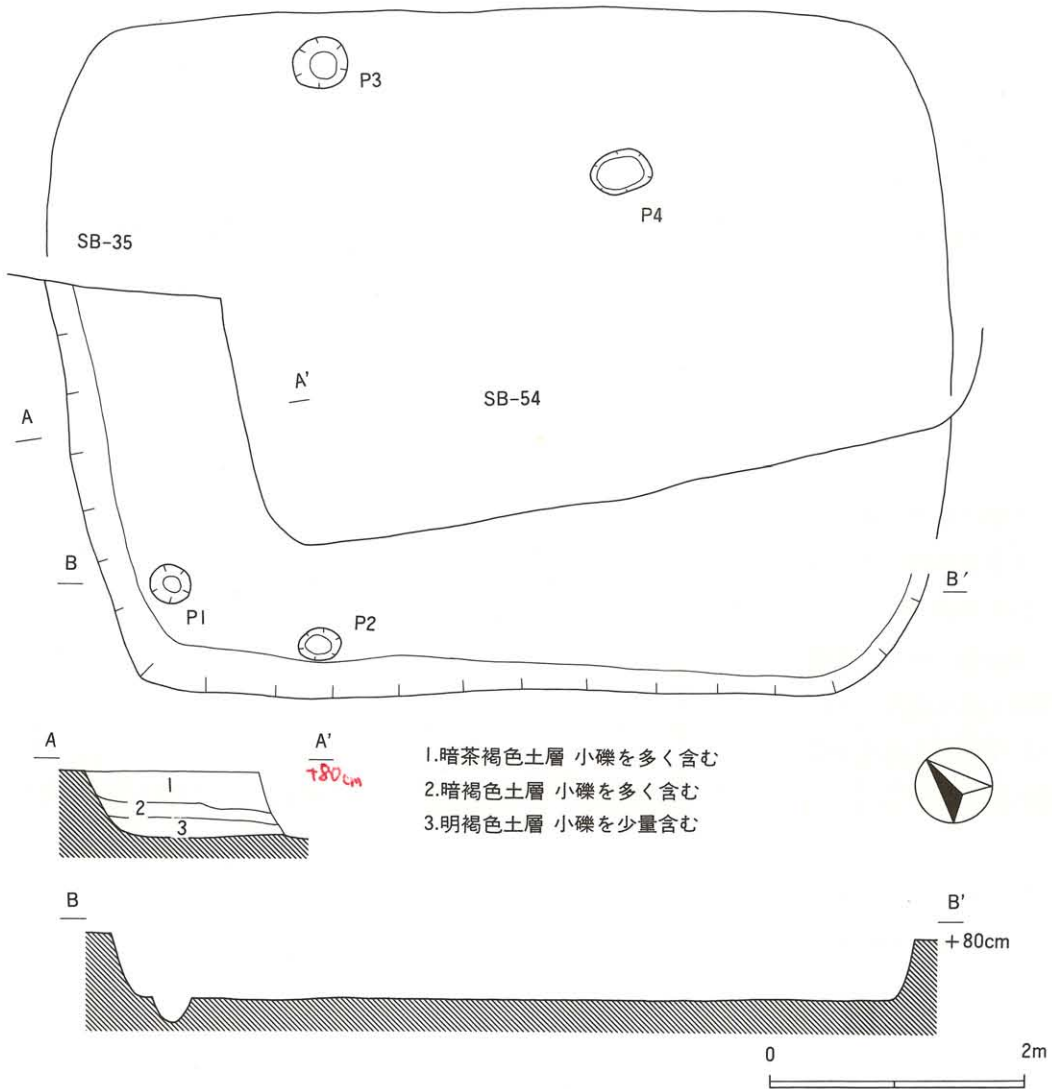


第47図 第35号住居址実測図

第52・53号住居址の調査を優先したため、西壁を除く3辺のプランは土層断面に現れた僅かな立上がりより推定したものである。推定された平面プランは東西6.3m、南北5.7mの隅丸方形を呈し、東西の主軸方向はN-45°-Wを示す。残存する壁高は16~30cmを測り、壁は緩やかに立上がる。覆土は小礫を多く含んだ茶褐色土の単一層であった。本址からは古墳時代後期に比定される土師器片が若干出土しており、該期の所産と推定される。

(15) 第36号住居址 (SB36 第48図)

本住居址はC区中央部のグリッドH~K-7~10において検出された。遺構北東部の大部分は

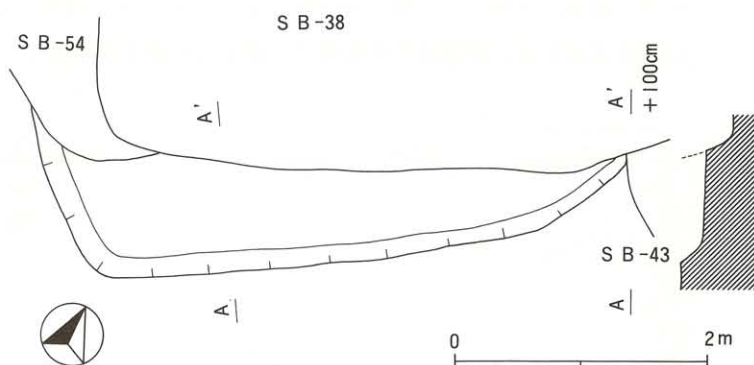


第48図 第36号住居址実測図

他遺構との重複によって破壊されており、北東部のプランはやや不明確であるが、平面プランは主軸方向をN-40°-Wに持つ隅丸長方形を呈すると推定され、規模は東西 6.0m、南北 5.5m（推定）を測る。残存する壁高50~54cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面は軟弱で、覆土は3層に分けられ、第1層は小礫を多く含んだ暗茶褐色土、第2層は小礫を多く含んだ明褐色土、第3層は暗黄褐色土である。ピットは計4基検出され、径34~47cm、深さ14~20cmを測る。本址からは弥生土器の小片が若干出土しており弥生時代後期の所産と推定される。

(16) 第37号住居址 (SB37 第49図)

本住居址はC区中央部のグリッドG~I-9・10において第38・47・54号住居址等と重複して検出された。遺構の大部分を他遺構によって破壊されているため、全体のプラン、規模等は不明である。調査された範囲の東壁は4.3m、南壁は1.5mを測る。東壁を基準とした主軸方向はN-57°-Eを示す。残存する壁高は12~22cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻であるが、ピット等は検出されなかった。本址からは弥生土器の小細片が少量出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

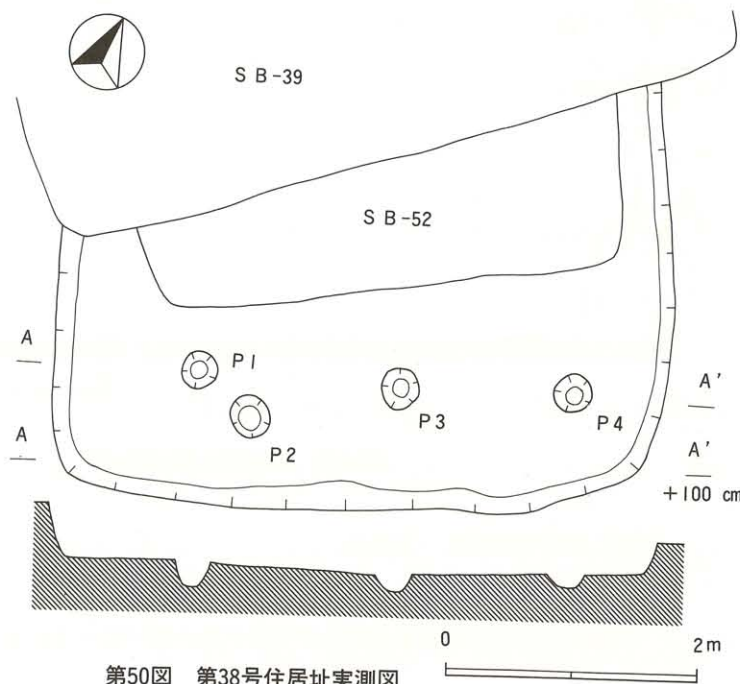


第49図 第37号住居址実測図

(17) 第38号住居址

(SB38 第50図)

本住居址はC区中央部のグリッドG~I-8・9において第35~39・47・52・54号住居址等と重複して検出された。遺構の大部分は他遺構との重複によって破壊されており、全体のプラン、規模等は不明



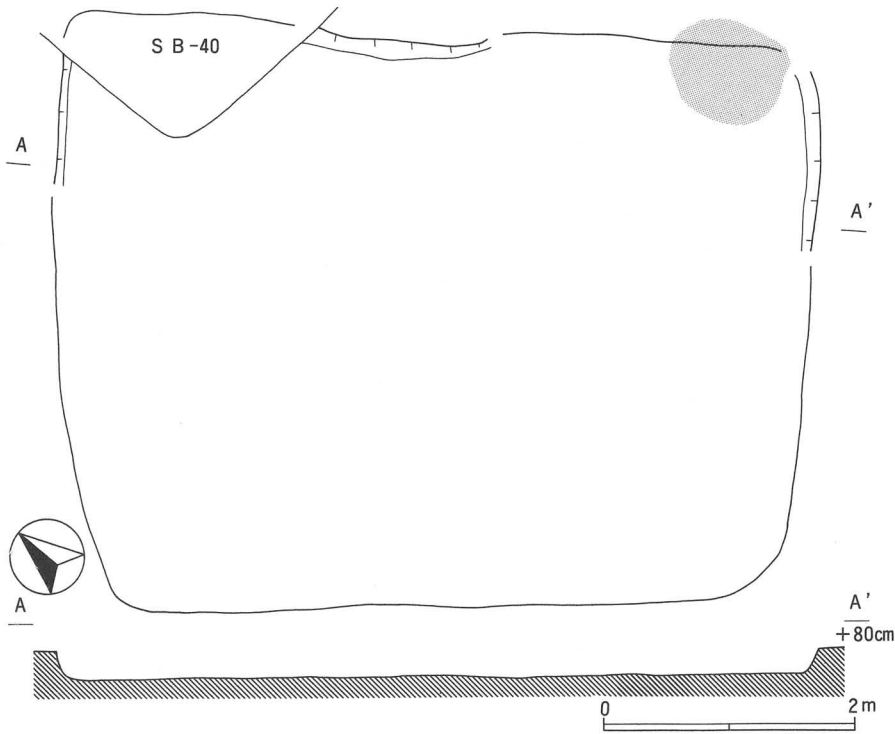
第50図 第38号住居址実測図

確であるが、隅丸（長）方形を呈すると推定される。調査された部分の南北長は 4.9mを測り、南北の主軸方向はN-64°-Eを示す。残存する壁高は23~25cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、径30~36cm、深さ10~21cmのピットが計4基検出された。覆土は小礫を多く含んだ暗茶褐色土の単一層である。

本址からは古墳時代前期に比定される土師器の細片が少量出土しており、該期の所産と推定される。

(18) 第39号住居址 (S B 39 第51図)

本住居址はC区中央部のグリッドF~H-6~8において第34・35・38・40・47号住居址等と重複して検出された。平面プランは隅丸長方形を呈すると推定され、規模は南北 6.0m、東西4.6 m (推定) を測り、主軸方向はN-39°-Wを示す。残存する壁高は19~23cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土である。



カマドは住居址南東隅部において若干の焼土が検出されたが、遺構の殆どは他遺構との重複によって破壊されており、規模等は明確にできなかった。

本址からは古墳時代後期に比定される土師器、須恵器等の小細片が少量出土しており、該期の所産と推定される。

第51図 第39号住居址実測図

(19) 第40号住居址 (S B 40)

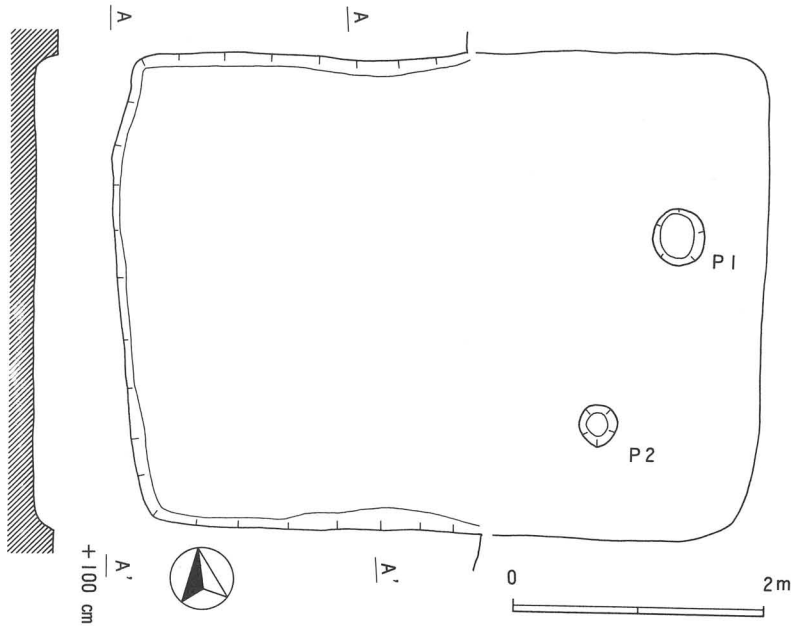
遺 構 (第52図)

本住居址はC区東側中央部のグリッドE~G-5~7において、第39・41・42号住居址等と重

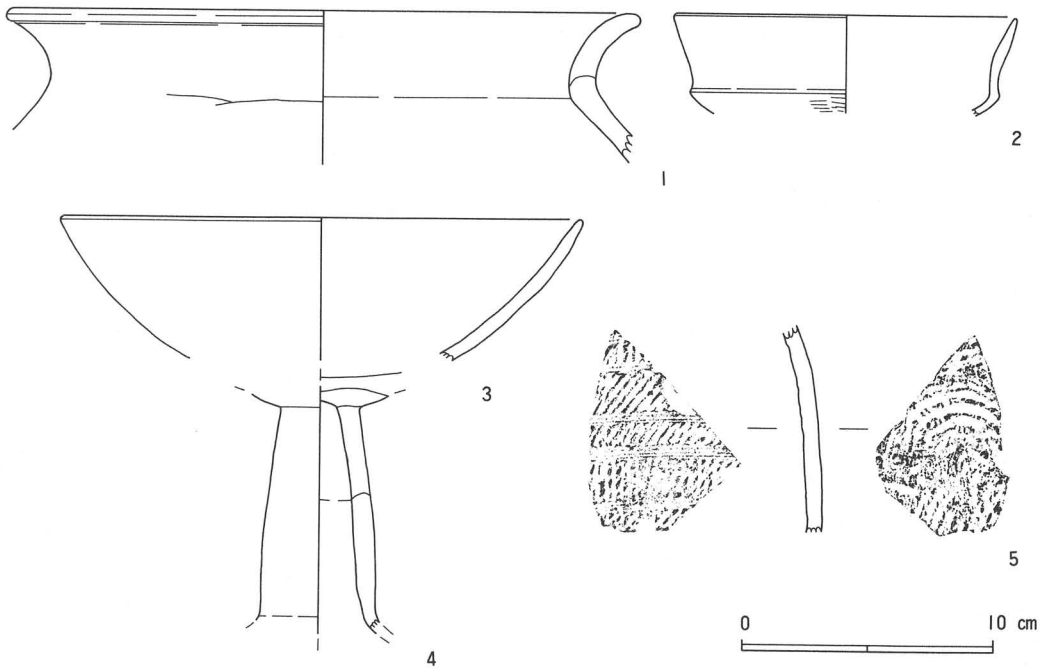
複して検出された。平面プランはN-82°-Wに主軸方向を持つ、隅丸長方形を呈し、規模は東西5.1m、南北3.7mを測る。残存する壁高は14~17cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的軟弱で、覆土は小礫を多量に含んだ黒褐色土の単一層である。

カマド等は検出されなかったが、ピットは2基検出され、P₁は径43cm、深さ35cm、P₂が径31cm、深さ22cmを測る。

本址は第39・41・42号住居址を切って構築されており、重複関係、出土遺物等から古墳時代後期の所産と推定される。



第52図 第40号住居址実測図



第53図 第40号住居址出土遺物実測図

遺物 (第53図)

本址からは土師器、須恵器片と混入遺物として石包丁等が出土している。土師器の器種には甕、坏、高坏があり、須恵器の器種には甕がある。それらのうち図示できたのは5点である。

1は甕で、球形の胴部に緩く外反する口縁部を持つ。2は所謂模倣坏で、浅い丸底を呈すると推定され、口辺部は稜を持って直立した後に直線的に外傾する器形を呈する。3・4は高坏で、3は大きく半球形に開く坏部で、4は柱状を呈する脚部である。5は須恵器の甕で、外面には横線文と平行タタキ目痕が施され、内面には同心円文が残る。

第12表 第40号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
53-1	土師・甕	口縁部1/3	口径(25.4)	口縁部緩く外反する。胴部大きく張る。	口縁部横ナデ。外内面横刷毛調整+ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
53-2	土師・坏	口縁部1/8	口径(13.8)	口縁部は体部外面に稜を持って直立した後に外傾する。	口縁部横ナデ。外面横刷毛調整。内面横へら磨き+ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
53-3	土師・高坏	坏部1/6	口径(21.0)	坏部僅かに内湾しながら大きく開く。	口縁部横ナデ。外内面縦へら磨き+ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内明橙褐色
53-4	土師・高坏	脚柱部2/3			外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
53-5	須恵・甕				外内面タタキ+ロクロによる横線。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰色、内青灰色 *外面に濃緑色の自然釉がかかる。

(20) 第41号住居址 (SB41)

遺構 (第54図)

本住居址はC区北東部のグリッドD～F-5～7において、第40～43号住居址等と重複して検出された。平面プランは一部不整な隅丸長方形を呈し、規模は南北6.0m、東西5.0mを測る。主軸方向はN-26°-Wを示す。本址は西壁を除く3方の壁際を40～65cm程の幅で残して2段に掘り込んで構築されている。当初、別遺構あるいは住居址拡張等の可能性を想定したのであるが、土層断面等の観察ではついに確認できなかった。残存する壁高は全体で26～30cmを測り、段差部分より床面までは14～16cmを測る。床面は一部で礫が露出し、やや軟弱であった。覆土は小礫を多量に含んだ暗褐色土層である。

炉址は東側中央部に地床炉が設置されており、90×70cmの範囲に炭混じりの焼土が堆積し、3cm程の浅い掘り込みを有する。ピットは計3基検出されたが、住居址北側に偏在している。P₁は略円形を呈し径30cm、深さ15cmを測る。P₂は楕円形を呈し32×25cm、深さ13cmを測る。P₃はやや不整な楕円形を呈し44×36cm、深さ16cmを測る。

遺物は住居址のほぼ全域から万遍なく出土し量も比較的多いが、殆どが覆土中から出土した小細片で接合可能な遺物は極めて少数であった。

本址は第40・43号住居址、第18号土壇によって切られており、重複関係、出土遺物より古墳時代前期の所産と推定される。

遺物

(第55～58図)

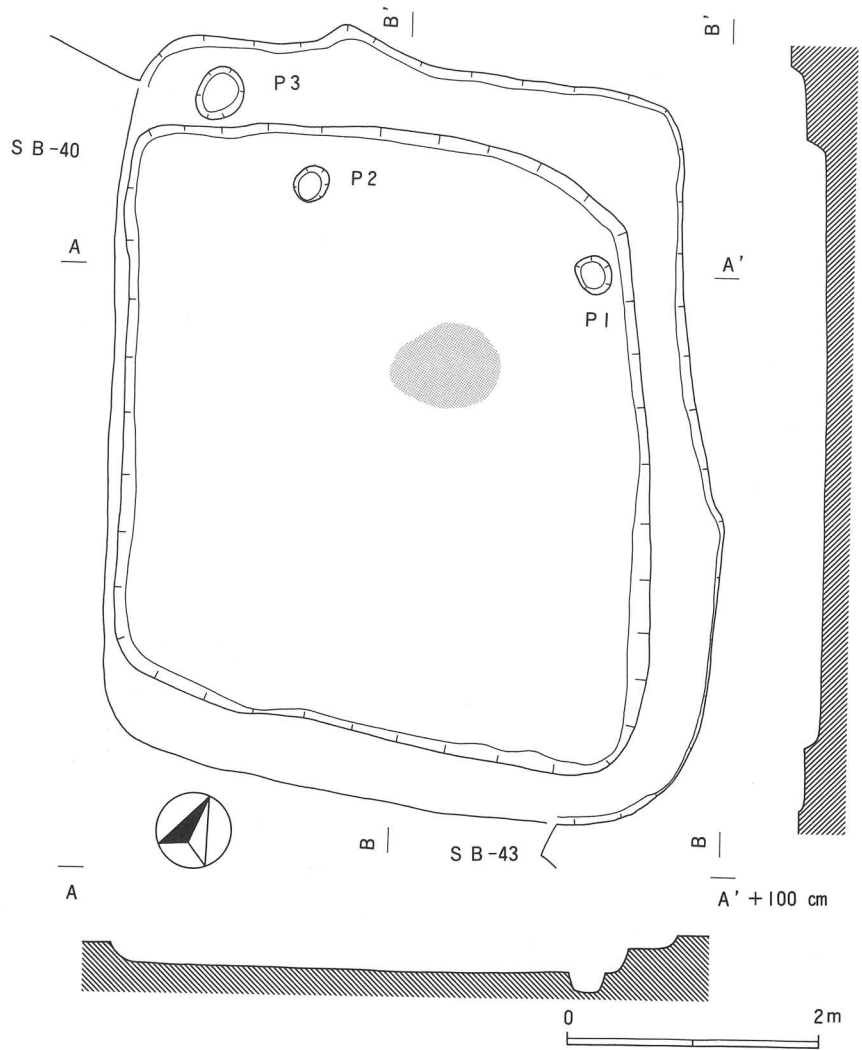
本住居址からは古墳時代前期に比定される土師器片、石製品と、若干の混入遺物が出土している。

土師器の器種には壺、甕、埴、甑、鉢、高杯、器台等があり、管玉1点を含めて58点が図示できたが、その大半は小片からの図上復元で図化したものである。

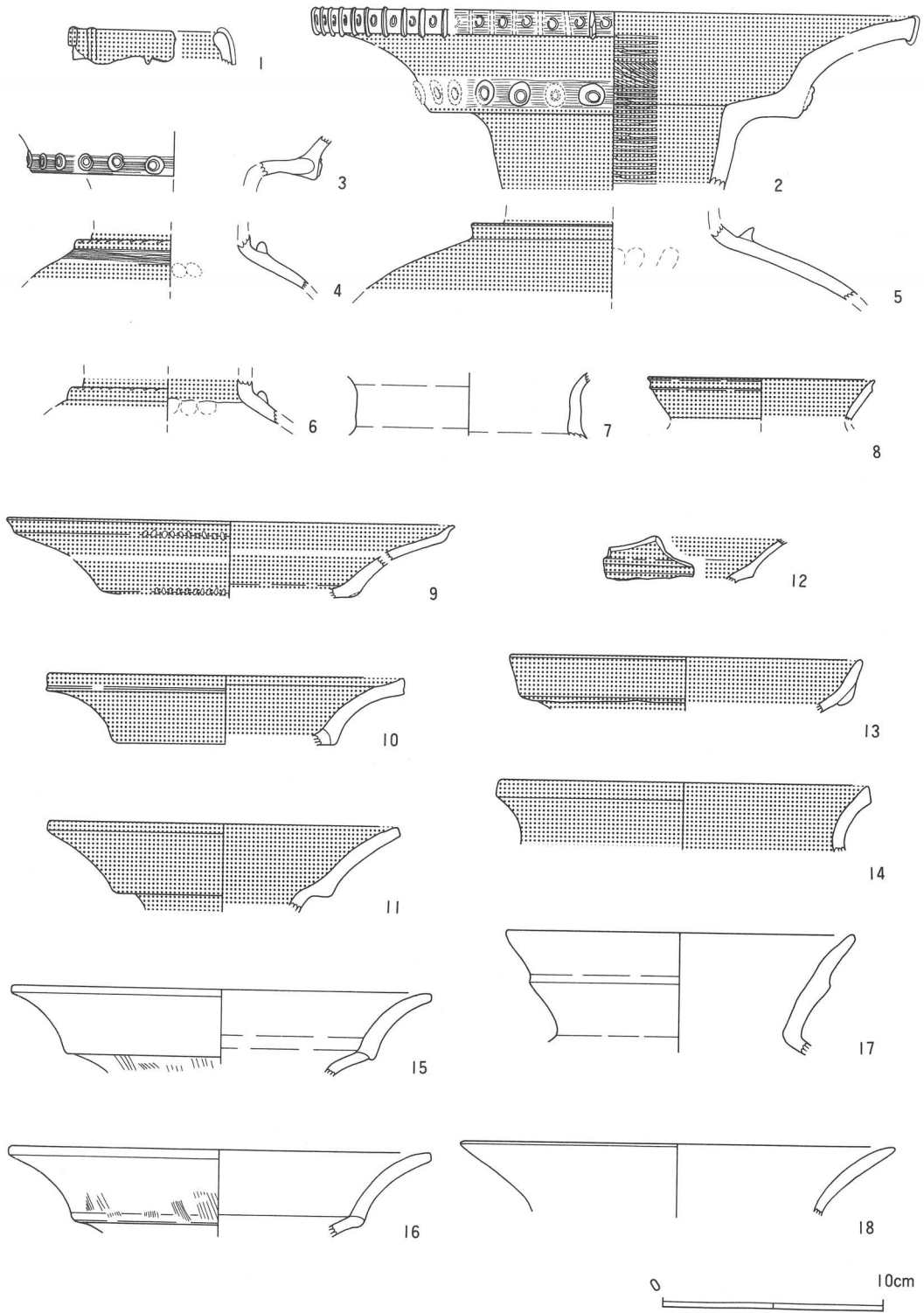
1～18は壺である。

1は複合口縁を呈す

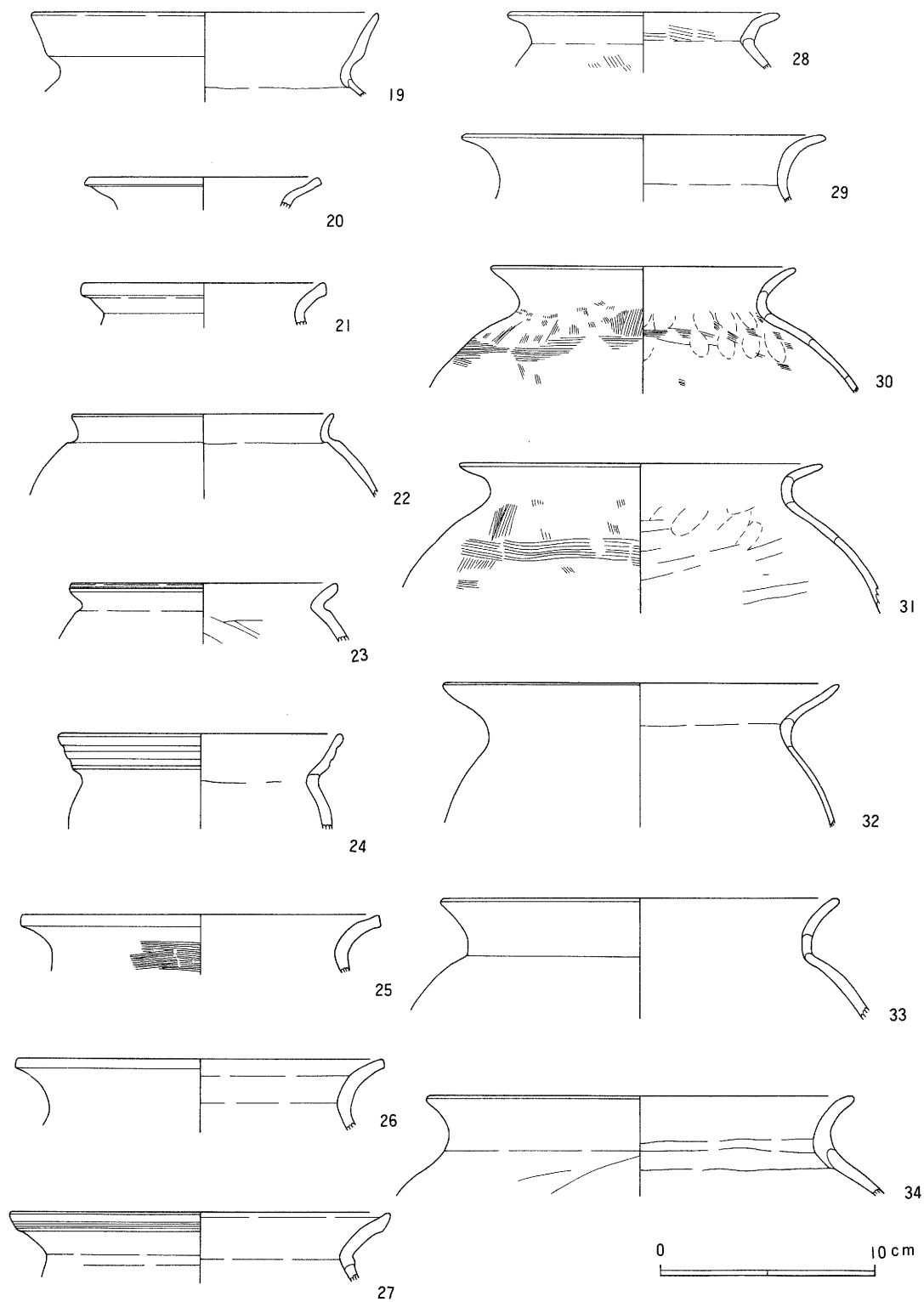
る壺の口縁部で、やや内湾する口縁部の外面に2本単位と推定される棒状浮文が付けられており、内外面赤彩が施されている。2～7・9～11は頸部で一旦直立し、そこから2段に外反する形態を呈する。2と3は2段目の外面に横線文を施文し、管状具で同心円状に刺突したボタン状貼付文を付している。2は更に口唇部を刷毛状工具で面取りし、推定70ヶ所前後に棒状浮文を付け、その間を管状具で刺突している。3は胎土が明白褐色を呈し、本址出土の他の土器とは著しく異なり他地域からの搬入品と推定される。4～6はいずれも赤彩され肩部で突帯を有し、4・6は斜めの刻みを持ち、4は突帯下部に横線文が施文されている。9は同一個体と推定される6片の細片から図化した。有段口縁が長く伸び、端部で更に短く屈曲外反する。口縁下部と有段部には刻みが施され、内外面赤彩されている。10・11は共に赤彩され、口唇部は面取りされる。10の口唇部は横ナデにより上方につまみ上げられ、1条の沈線が施文されている。12～14はそれぞれ



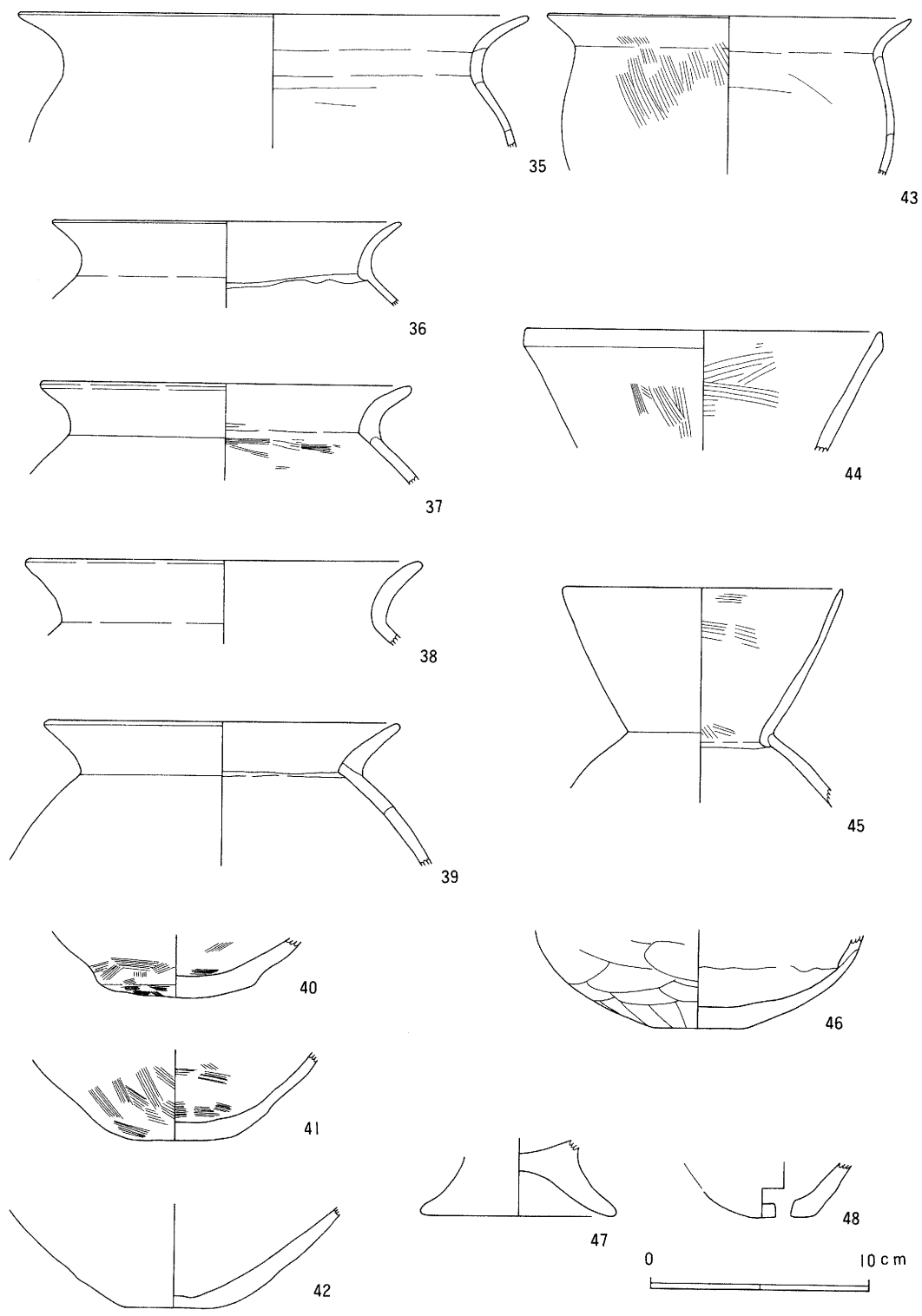
第54図 第41号住居址実測図



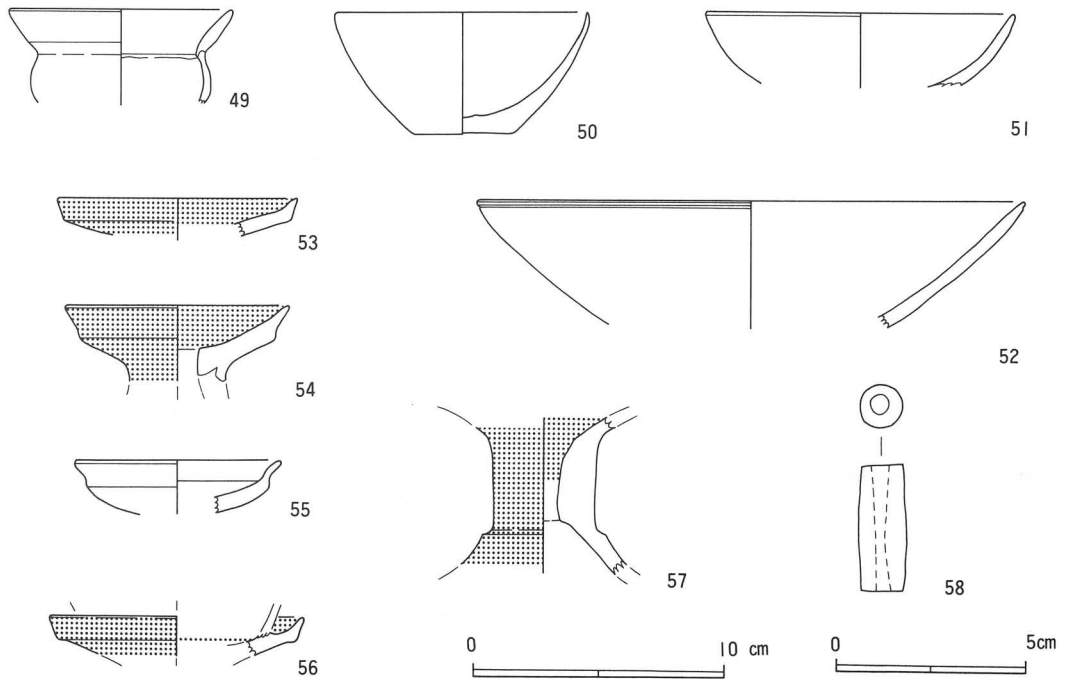
第55图 第41号住居址出土遺物実測图(1)



第56图 第41号住居址出土遺物実測図(2)



第57图 第41号住居址出土遗物实测图(3)



第58図 第41号住居址出土遺物実測図(4)

赤彩され、12・13は有段口縁を呈する。14は「く」の字状に外反した口縁端部が刷毛状工具によって面取りされている。15～17は「く」の字状に屈曲した口縁部が2段に外反し、15・16は外面に僅かに刷毛目が残る。16の口唇部は面取りされている。いずれも赤彩は施されていない。18は僅かに外反しながら長く伸びる口縁部である。19～43は甕である。19は口縁部が丸みを持って外反した後に、上方に屈曲して長く伸びる。20～23は口縁部が短く強く外反し、端部が面取りされている。22は短頸壺とも思われるが、肩部外面に段を有し、口縁部は短く強く外反する。23は肩部外面に段を有し、口唇部には1条の沈線が施文されている。24は口縁部が一旦外反した後に上方に長く伸び、外面に2条の凹線を巡らせている。口縁部のみ5片の小細片が検出された。25・26は口縁部が緩く外反し、端部が面取りされている。27は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は面取りされ横ナデにより上方に長くつまみ上げられており、外面に刷毛状工具による横線文が観られる。28・29は頸部で内面に稜を持って屈曲し、口縁部は端部が水平に近くなるまで外反する。共に頸部内面には刷毛目が残る。30・31は球形に大きく張った胴部に丸みを持って外反する口縁部を持ち、頸部内面には指頭による圧痕が明瞭に残る。共に外面の刷毛目は肩部に横線文を有し、器壁も非常に薄く作られているが、調整には若干の相違が観られる。30は横線文を施文した後に他の刷毛整形を行っているが、31は横線文を最後に施文している。また、内面調整も30が刷毛状工具による削りの後にナデ整形を行っているのに対し、31はへら削りを行っている。32は風化が著しいが、外面は刷毛整形、内面はへら削りされており、口縁部は丸みを持って外反し、僅かに内湾しながら長く伸びる。また、口唇部は不明瞭ながら内側に僅かに肥厚している。33～

36は大きく張った胴部が頸部で僅かに直立した後に外反し、口縁部外面は「コ」の字状に近い形態を呈する。37~39は頸部が「く」の字状に外反し、37と39の頸部内面には明瞭な稜を形成している。40~42は胴部の大きく張った甕の底部であるがいずれも内外面刷毛整形がされている。43はあまり張らない胴部に「く」の字状に短く外反する口縁部を持つ。外面は刷毛整形、内面はへら削りが行われている。44~46は埴で、44は口辺部が直線的に開き、端部は面取りされる。45・46は同一個体と推定され、やや下膨れの体部に、内湾して開く口辺部を持つ。47は台付甕の脚台部で、大きく「ハ」の字状に開く器形を呈し、ナデ整形が行われている。48は甗で丸底に近い底部に1孔を有し、孔径は7.5~8.0mmを測る。49は小形鉢で、口縁部は稜を持って外反し、僅かに複合口縁となる。50は内湾して立上がる鉢で、口縁端部はやや鋭く成形されている。51・52は高坏で、51は小形の小椀形を呈する坏部である。脚部は大きく開く器形を呈すると推定される。52は僅かに内湾しながら大きく開く坏部で、口縁端部外面に1条の沈線を有する。脚部は小さく「ハ」の字状に開くと推定される。53~55は大きく開く脚部を持つと推定される小形器台の器受部で、53は端部が直立気味に立上がり、内外面赤色塗彩が施される。54・55は端部が稜を持って外反し開き、54は内外面赤色塗彩が施され貫通孔を有する。56は器受部が2重になった所謂特殊器台で、鏝部は屈曲して僅かに外反する。内外面赤色塗彩が施されている。57は柱状の脚部を持ち、裾部は屈折して段を持って開く。外面と器受部内面は赤色塗彩が施され、貫通孔を有する。58は石灰岩製の管玉で、白みがあった緑色を呈し丁寧に研磨されている。全長3.4cm、径1.2cm、孔径3.3~4.2mm、重量2.60gを測る。

第13表 第41号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
55-1	土師・壺			口縁部内湾し、端部内側に肥厚する。	内外面横ナデ。棒状浮文を有する。	胎土：細砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗橙褐色 *外内赤彩。
55-2	土師・壺	口縁部 1/4 頸部 1/8	口径(27.6)	口縁部一旦直立した後に、2段に屈曲外反する。口唇部は面取りされる。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。竹管文、棒状浮文、ボタン状貼付文等による加飾を施す。	胎土：黒雲母・細砂粒を含む 焼成：良 色調：外赤色、内黒色 *外内赤彩。
55-3	土師・壺	口辺部 1/8		口縁部一旦直立した後に、2段に屈曲外反する。	内外面横ナデ。ボタン状貼付文を有する。	胎土：石英・細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明白褐色
55-4	土師・壺	肩部 1/3		頸部直立し、胴部は大きく張る。肩部に突帯を有する。	外面へら磨き。内面横刷毛調整。横線文と突帯に刻みを有する。	胎土：赤褐色他の小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色 内明灰褐色 *外赤彩。
55-5	土師・壺	肩部 1/3		頸部直立し、胴部は大きく張る。肩部に突帯を有する。	外面へら磨き。内面不明。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡赤褐色、内暗灰褐色 *外赤彩。
55-6	土師・壺	肩部 1/3		頸部直立し、胴部は大きく張る。肩部に突帯を有する。	内外面不明。突帯に刻みを有する。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
55-7	土師・壺	頸部 1/6		頸部一旦直立して外反する。	内外面横ナデ。	胎土：赤褐色他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明灰褐色 *外内赤彩。

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
55-8	土師・壺	口縁部 1/8	口径(10.4)	口縁部「く」の字状に外反し、端部外面に段を有する。	外内面横ナデ。	胎土：黒雲母他の微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙色 *外内赤彩。
55-9	土師・壺	口縁部 1/3	口径(20.6)	口縁部2段に外反して長く伸び、端部で更に短く外反する。	口唇部横ナデ。外面縦へラ磨き。内面横へラ磨き。外面稜の部分に刻みを有する。	胎土：長石・微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内淡橙色 *外内赤彩。
55-10	土師・壺	口縁部 1/8	口径(16.4)	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：石英他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明黄褐色 *外内赤彩。
55-11	土師・壺	口縁部 1/6	口径(16.2)	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：赤褐色他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外内赤彩。
55-12	土師・壺			口縁部外面に段を持って外反する。	口縁部外面に段を持って外反する。	胎土：細砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明橙色 *外内面に赤彩。
55-13	土師・壺	口縁部 1/5	口径(16.2)	口縁部外面に段を持って外傾する。	口縁部外面に段を持って外傾する。	胎土：石英他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 *外内面赤彩。
55-14	土師・壺	口縁部 1/5	口径(17.2)	口縁部緩く「く」の字状に外反する。口唇部面取りされる。	口縁部緩く「く」の字状に外反する。口唇部面取りされる。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内明灰褐色 *外内面赤彩。
55-15	土師・壺	口縁部 1/4	口径(19.3)	口縁部2段に外反する。	口縁部2段に外反する。	胎土：赤褐色他の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
55-16	土師・壺	口縁部 1/3	口径(19.4)	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部2段に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：赤褐色他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
55-17	土師・壺	口縁部 1/5	口径(16.1)	口縁部「く」の字状に外反した後、外面に段を持って長く伸びる。	口縁部「く」の字状に外反した後、外面に段を持って長く伸びる。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗茶褐色、内黒すんだ暗褐色
55-18	土師・壺	口縁部 1/8	口径(20.0)	口縁部「く」の字状に外反し、長く伸びる。	口縁部「く」の字状に外反し、長く伸びる。	胎土：長石他の微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
56-19	土師・甕	口縁部 1/6	口径(16.4)	口縁部丸く外反した後に、外面に稜を持って上方に伸びる。	口縁部丸く外反した後に、外面に稜を持って上方に伸びる。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明橙褐色～黒色
56-20	土師・甕	口縁部 1/6	口径(10.8)	口縁部短く「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部短く「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内明黒褐色
56-21	土師・甕	口縁部 1/8	口径(11.4)	口縁部短く「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部短く「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：黒雲母・小砂粒を含む 焼成：良 色調：外黒色、内暗赤褐色～黒色
56-22	土師・甕	口縁部～胴部上位 1/4	口径(12.4)	口縁部は短く外反し、肩部外面に段を有する。	口縁部は短く外反し、肩部外面に段を有する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
56-23	土師・甕	口縁部1/10	口径(12.6)	口縁部は短く「く」の字状に外反し、肩部外面に段を有する。	口縁部は短く「く」の字状に外反し、肩部外面に段を有する。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外赤褐色、内灰褐色
56-24	土師・甕	口縁部～胴部上位 1/3	口径(13.5)	口縁部丸く外反した後に、屈曲して上方に伸びる。	口縁部丸く外反した後に、屈曲して上方に伸びる。	胎土：白・褐色の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
56-25	土師・甕	口縁部1/10	口径(17.0)	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	胎土：黒雲母・細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内灰褐色
56-26	土師・甕	口縁部1/10	口径(17.4)	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色
56-27	土師・甕	口縁部 1/3	口径(18.0)	口縁部「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	口縁部「く」の字状に外反し、口唇部面取りされる。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗灰色～明橙褐色、内明灰褐色
56-28	土師・甕	口縁部 1/8	口径(12.8)	口縁部内面に稜を持って大きく外反する。	口縁部内面に稜を持って大きく外反する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内明灰褐色

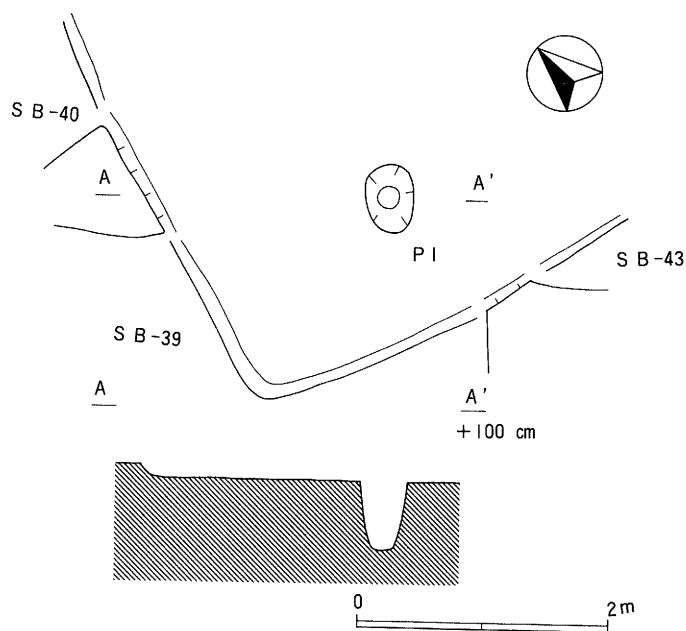
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
56-29	土師・甕	口縁部 1/4	口径(17.2)	口縁部内面に稜を持って大きく外反する。	口縁部内面に稜を持って大きく外反する。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色
56-30	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/2	口径(14.4)	口縁部丸く外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。外面横線文+縦刷毛調整。内面横刷毛調整+ナデ・指頭押圧。	胎土：赤褐色他の細砂粒少量含む 焼成：良 色調：外明灰褐色 内淡黄褐色
56-31	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/6	口径(17.2)	口縁部丸く外反し、胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。外面縦刷毛調整+横線文。内面へら削り+指頭押圧。	胎土：赤褐色他の細砂粒少量含む 焼成：良 色調：外明灰褐色 内淡橙褐色
56-32	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/3	口径(18.8)	口縁部丸く外反し、内湾しながら長く伸びる。口唇部微かに肥満圧。	口縁部横ナデ。外面刷毛調整+ナデ?。内面へら削り+ナデ。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
56-33	土師・甕	口縁部～肩部 1/4	口径(18.8)	口縁部「コ」の字状に近く外反する。	口縁部横ナデ。外内面刷毛調整+ナデ?。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
56-34	土師・甕	口縁部～肩部 2/3	口径(20.2)	口縁部「コ」の字状に近く外反する。	口縁部横ナデ。外面斜めへら削り。内面横へら削り・ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明白褐色
57-35	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/4	口径(23.6)	口縁部「コ」の字状に近く外反する。	外面刷毛調整?。内面横へら削り。	胎土：黒雲母・細砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明黄褐色
57-36	土師・甕	口縁部～肩部 1/4	口径(16.2)	頸部内面に稜を持ち、外面は「コ」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多く含む(金黒母を少量含む) 焼成：良 色調：外内淡乳褐色
57-37	土師・甕	口縁部～肩部 2/5	口径(17.2)	頸部内面に稜を持って外反する。	口縁部横ナデ。外面へら削り+ナデ。内面横刷毛調整・へらナデ。	胎土：微細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内明灰褐色
57-38	土師・甕	口縁部 1/3	口径(18.4)	口縁部緩く「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明灰褐色
57-39	土師・甕	口縁部～ 胴部上位 1/4	口径(16.4)	口縁部緩く「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。外面刷毛調整+ナデ?。	胎土：金雲母・赤褐色の微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
57-40	土師・甕	底部完存	底径 7.2		外内面刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良。 色調：外明赤褐色、内暗灰褐色
57-41	土師・甕	底部完存	底径 5.8		外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗黒褐色
57-42	土師・甕	底部～胴部下 位 1/2	底径 5.0		外内面刷毛調整。	胎土：赤褐色他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色、内淡黄褐色
57-43	土師・甕	口縁部～胴部 中位 1/2	口径(16.8)	口縁部緩く「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。外面斜め刷毛調整。内面横へら削り。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色、内暗灰褐色
57-44	土師・埴	口縁部 1/4	口径(16.6)	口縁部直線的に開き、端部は面取りされる。	口唇部横ナデ。外面縦刷毛調整。内面斜め刷毛調整。	胎土：赤褐色他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明黄褐色
57-45	土師・埴	口縁部 1/2 体部上位 1/6	口径(13.0)	口縁部僅かに内湾して開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横刷毛調整。体部内面ナデ。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内暗茶褐色 *46と同一個体か?。
57-46	土師・埴	底部～体部下 位 1/2	底径 4.2	体部やや下膨れの器形を呈する。	外内面へら削り。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明茶褐色 *45と同一個体か?。
57-47	土師・甕	脚台部ほぼ完 存	裾径 9.1	大きく「ハ」の字状に開く。	外内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
57-48	土師・甌	底部ほぼ完存		底部に1孔を有する。	外面へら削り。内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 *外面に黒斑あり。
58-49	土師・鉢	口縁部～体部 1/4	口径(9.0)	口縁部僅かに稜を持って外反し、外面に段を有する。	口縁部横ナデ。外面へら磨き?。内面ナデ。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙色
58-50	土師・鉢	口縁部～底部 3/5	口径(10.2) 器高 4.9 底径 4.1	体部内湾して立上がり、口唇部尖る。	口縁部横ナデ。外内面へら磨き?。	胎土：小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙色
58-51	土師・高坏	坏部 1/2	口径(12.4)	坏部緩く内湾する。	口縁部横ナデ。外内面へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙色
58-52	土師・高坏	坏部 1/4	口径(22.0)	坏部僅かに内湾しながら大きく開く。	外内面へら磨き。口唇部外面に凹線文を有する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外淡橙色 内暗灰色
58-53	土師・器台	器受部 1/3	口径(9.6)	器受部皿状を呈し、端部短く立上がる。	口縁部横ナデ。外内面へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗茶褐色 *外内赤彩。
58-54	土師・器台	器受部 4/5	口径(9.0)	端部外面に稜を持って外反する。貫通孔を有する。	口縁部横ナデ。外内面へら磨き。	焼成：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗茶褐色 *外内赤彩。
58-55	土師・器台	器受部 1/6 存	口径(8.3)	器受部皿状を呈し、端部屈曲外反する。	口縁部横ナデ。外内面へら磨き。	胎土：長石・細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙 *赤彩?。
58-56	土師・器台	器受部 1/8	口径(10.2)	屈曲して僅かに外反する銜部を有する。	銜部横ナデ。外面へら磨き。	胎土：白色・長石の微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗茶褐色 *外内赤彩。
58-57	土師・器台	接合部～脚柱部完存		脚部は柱状を呈し、裾部は段を持って外反する。	外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色 内暗茶褐色 *外・受部内赤彩。

(21) 第42号住居址 (SB42 第59図)

本住居址はC区東部のグリッドE・F-7・8において第39～43号住居址と重複して検出された。住居址西壁と南壁の一部が検出されたが、他住居址との重複が著しいため、全体のプラン、規模等は不明確である。西壁を基準とした南北の主軸方向はN-18°-Eを示す。残存する壁高は10～12cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は軟弱で、55×39cmの楕円形を呈し、深さ53cmを測るピットが1基検出された。覆土は小礫を多く含んだ暗茶褐色土の単一層である。

本址は第39～41・43号住居址によって切られており、出土遺物等より弥生時代後期の所産と推定される。



第59図 第42号住居址実測図

(22) 第43号住居址 (SB43)

遺構 (第60図)

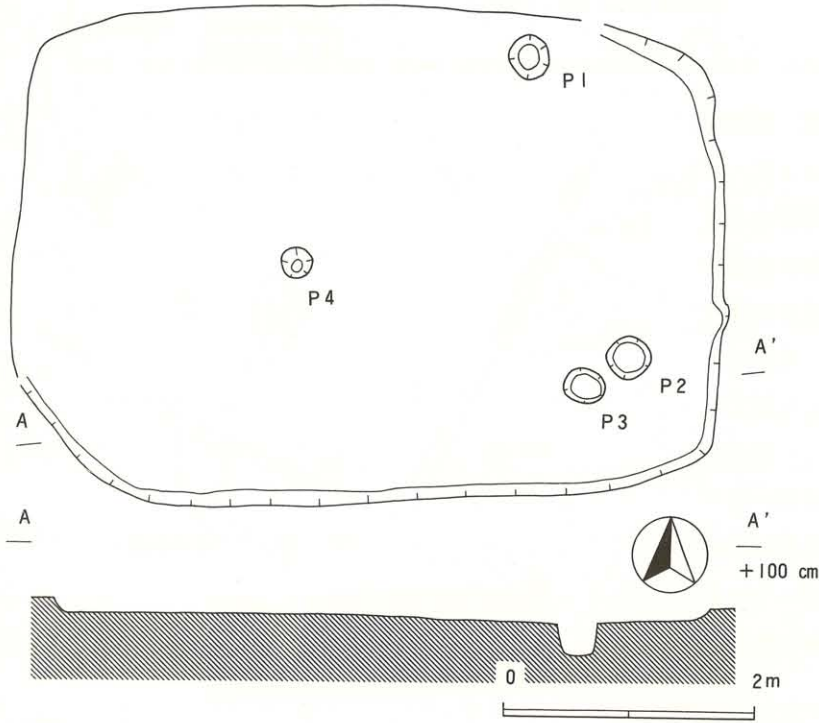
本址はC区東側中央部のグリッドD~F-7・8において第41・42号住居址等と重複して検出された。平面プランは主軸方向をN-88°-Eとほぼ東西に持つ不整隅丸長方形を呈し、規模は東西5.7m(推定)、南北4.0mを測る。残存する壁高は8~18cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層である。

ピットは計4基検出され、規模25~36cm、深さ9~26cmを測る。

本址は第41・42号住居址等を切って構築された後に、P-50によって切られている。本址の所産期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

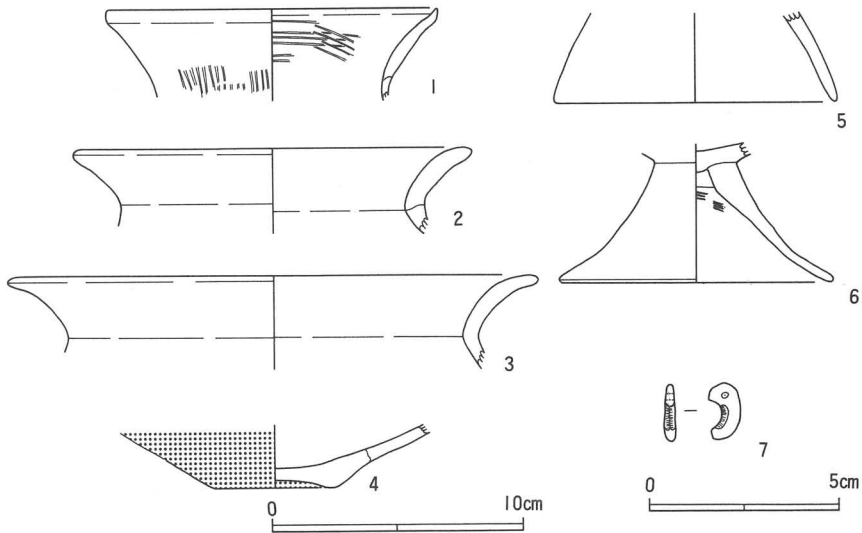
遺物 (第61図)

本址からは若干の土師器片と勾玉が出土している。土師器の器種には甕、壺、鉢、高坏等があり、そのうち図示できたのは勾玉も含めて7点である。



1~3は甕の口縁部で、1は内側面刷毛整形され、口縁端部も刷毛状工具によって面取りされている。2・3は「く」の字状に外反する口縁部である。4は球形かやや下膨れの胴部を持つ壺の底部で、外面と底部裏面には赤色塗彩が施されている。5・6は高坏の脚部で、内外面へ磨きされ、内面は刷毛とナデにより調整されている。7は蠟石製の勾玉で、やや角張った「C」字形を呈し、丁寧に研磨されている。色調は僅かに緑色を帯びた黒色を呈し、全長14.5mm、幅8.5mm、厚さ3.0mm、孔径1.6mm、重量0.47gを測る。

第60図 第43号住居址実測図



第61図 第43号住居址出土遺物実測図

第14表 第43号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
61-1	土師・甕	口縁部 1/4	口径(13.4)	口縁部緩く外反し、口唇部面取りされる。	口縁部横ナデ。外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内暗灰褐色
61-2	土師・甕	口縁部 1/6	口径(16.0)	口縁部「く」の字状に外反する。	外内面横ナデ。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
61-3	土師・甕	口縁部 1/10	口径(21.2)	口縁部「く」の字状に外反する。	外内面横ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内橙褐色、内暗灰色
61-4	土師・壺	底部ほぼ完存	底径 4.8	外裏面や上げ底となる。	外面へラ磨き。内面ナデ。	胎土：赤褐色小粒子を多く含む 焼成：良 色調：外明橙色、内明灰褐色。*外面、底裏部赤彩。
61-5	土師・高坏	脚部 1/4	器高(11.2)	脚部内湾する。	外面縦へラ磨き。内面横刷毛調整+ナデ。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗茶褐色
61-6	土師・高坏	接合部完存 裾部 1/6	器高(11.0)	脚部大きく開く。	外面縦へラ磨き。内面横刷毛調整+ナデ。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色

(23) 第45号住居址 (SB45)

遺構 (第62図)

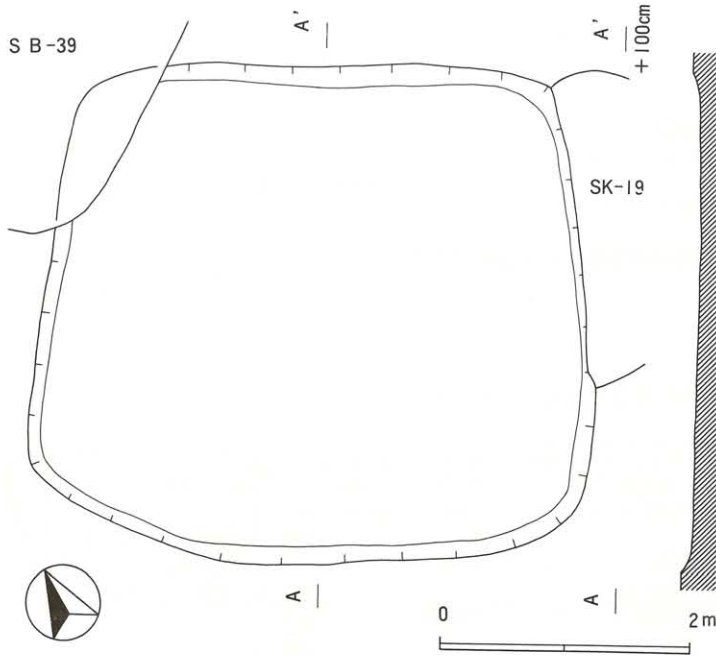
本住居址はC区南東部のグリッドE~G-8~10において第39・46・47号住居址等と重複して検出された。平面プランは南壁のやや長い隅丸方形を呈し、規模は東南 4.4m、南北 4.0mを測る。東西の主軸方向はN-60°-Wを示す。残存する壁高は15~22cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的軟弱で、覆土は多量の小礫と少量の炭化物を含んだ暗褐色土の単一層である。

本址は第46・47号住居址を切って構築された後に、第39号住居址、第19号土壇、P-51等によって切られており、重複関係、出土遺物等から古墳時代前期の所産と推定される。

遺物 (第63図)

本址からは古墳時代前期に比定される土師器片が少量出土した。器種には壺、甕、鉢、高坏、器台、ミニチュア土器等があり、図示できたのは8点である。

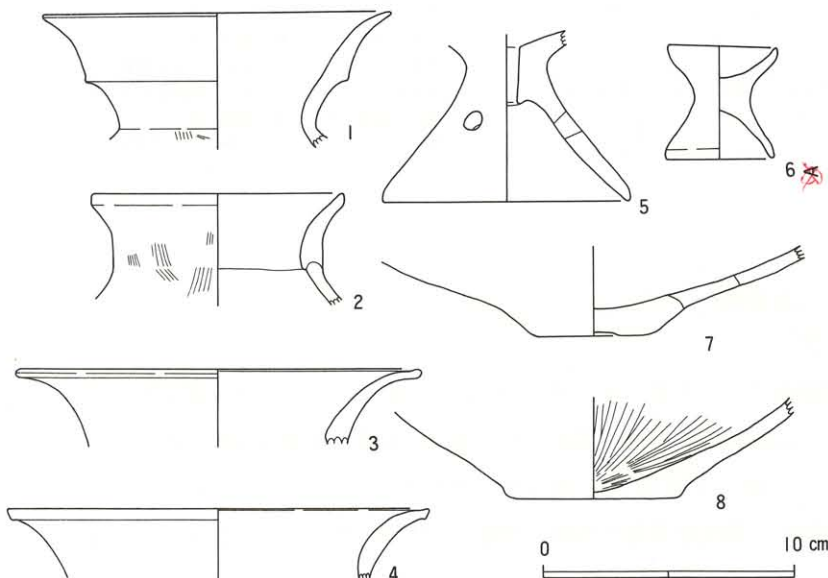
1は壺の口縁部で有段口縁を呈し、胴部は球形か、やや下膨れを呈すると推定される。2～4



第62図 第45号住居址実測図

は甕で、2は内外面刷毛整形され、口縁端部は僅かに面取りされる。3は「く」の字状に屈曲した頸部から長く伸びた口縁部で、端部は内面に僅かに肥厚している。4は内外面刷毛整形され、口縁端部は面取りされ、横ナデにより上下に肥厚している。5は器台の脚部で、直線的に「ハ」の字状に開く器形を呈し、裾端部は面取りされている。器受部と脚部の間には貫通孔を有し脚部には3ヶ所に円形の透かし孔を有する。6は高坏と

推定されるミニチュア土器で、坏部と脚部をそれぞれ大きく欠損しているが器高4.5cmを測る。坏部は椀状を呈し、裾端部には面取りが表現されている。7・8は球形胴を呈すると推定される壺の底部である。



第63図 第45号住居址出土遺物実測図

第15表 第45号住居址出土土器一覽表

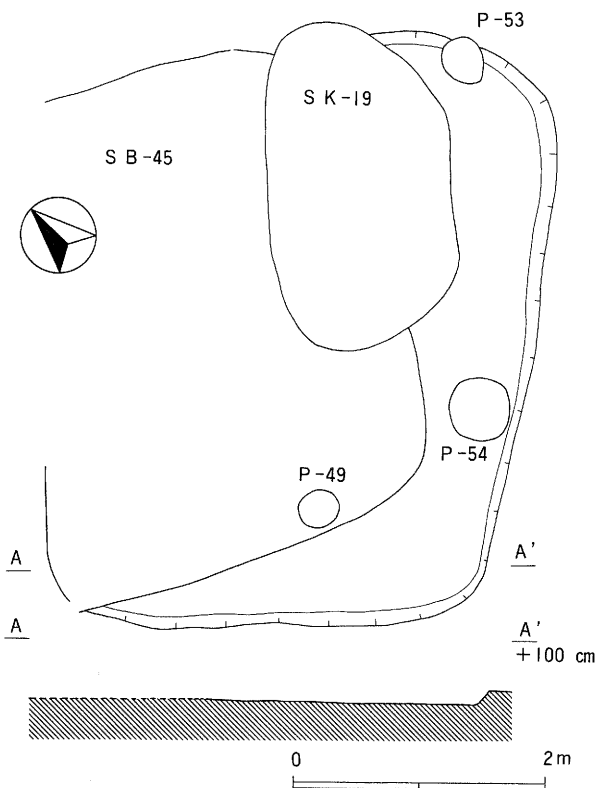
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
63-1	土師・壺	口縁部～頸部 1/6	口径(14.0)	口縁部2段に外反する。	口縁部横ナデ。頸部外面刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内黒色
63-2	土師・甕	口縁部～頸部 3/4	口径(10.2)	口縁部緩く「コ」の字状に外反する。口唇部は面取りされる。	口縁部横ナデ。外面縦刷毛調整。内面刷毛調整十ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗褐色、内明灰褐色
63-3	土師・甕	口縁部1/5	口径(16.4)	口縁部「く」の字状に外反し、長く伸びる。端部は僅かに肥厚する。	口縁部横ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗灰赤褐色
63-4	土師・甕	口縁部1/8	口径(17.0)	口縁部外反し、口唇部は面取りされる。	口縁部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
63-5	土師・器台	接合部～脚部 2/3	裾径 10.0	脚部は直線的に開き、貫通孔を有する。裾部面取りされる。	器受部内面へラ磨き。外面縦へラ磨き。脚部内面ナデ。裾部横ナデ。3ヶ所に透かし孔を有する。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰赤褐色 内暗灰褐色
63-6	土師・ミニチュア	坏部 1/3 脚部 1/6	口径 4.3 器高 4.5 底径 4.2	坏部・脚部とも内湾する。裾部は面取りされる。	外内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
63-7	土師・壺	底部 1/2	底径 5.0	脚部大きく張る。	外面縦へラ磨き。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内暗灰色
63-8	土師・壺	底部 1/2	底径 7.0	脚部大きく張る。	外内面縦刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗灰赤褐色

(24) 第46号住居址 (S B46)

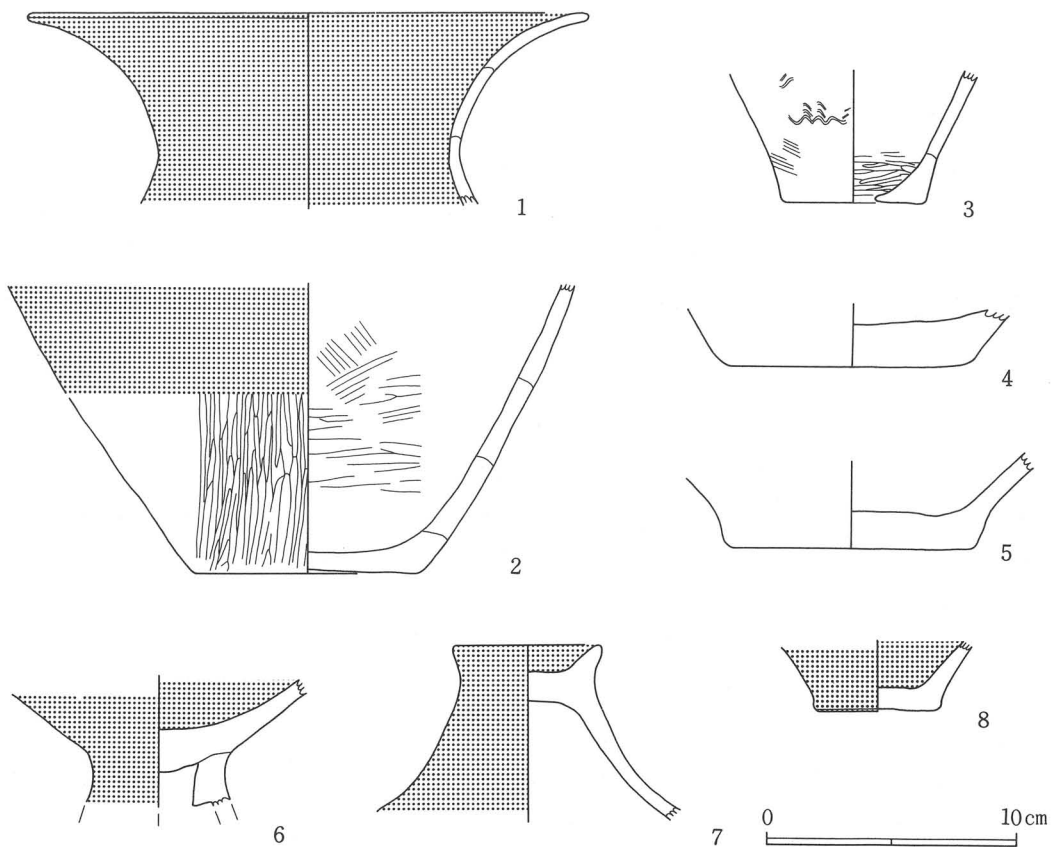
遺構 (第64図)

本住居址はC区南東部のグリッドE～G-9・10において第45・47号住居址等と重複して検出された。遺構は西側の大部分を第45号住居址、第19号土壌等によって破壊されており、全体のプラン、規模等は不明確であるが隅丸長方形を呈すると推定される。規模は南北4.7m、東西3.7m(推定)を測り、主軸方向はN-57°-Eを示す。残存する壁高は8～15cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層である。

本址は第45号住居址、第19号土壌、P-49・53・54によって切られており、重複関係、出土遺物等より弥生時代後期の所産と推定される。



第64図 第46号住居址実測図



第65図 第46号住居址出土遺物実測図

遺物（第65図）

本址からは弥生時代後期に比定される弥生土器片が若干出土した。弥生土器の器種は壺、甕、鉢、蓋、深鉢、高坏等があり、比較的種類に富むが、小細片が多く、図示できたのは8点のみである。

1・2は壺で、1は内外面ともへら磨きされた後に赤色塗彩が施された口辺部である。頸部に通常施文されるT字文は施文されず無文であるが、本遺跡では無文あるいは無塗彩の壺は比較的頻繁に看取される。2は僅かに内湾しながら立上がる壺の底部で、外面と内面底部付近はへら磨きが行われ、外面は底部付近を除いて赤色塗彩が施されている。胴部内面は刷毛調整されている。外面には僅かながら煤の付着が看取される。3～5は甕の底部で、3は小形の甕であるが底部が20×15mmの楕円形に穿孔されており、甑として転用されたものかと推定される。6は高坏の接合部で、外面と坏部内面はへら磨きされ、赤色塗彩が施されている。7は蓋で、内外面へら磨きされ、外面は赤色塗彩されている。8は鉢で、内外面へら磨きされ、赤色塗彩が施されている。また、図示できなかったが、甕は比較的整った波状文が施文されており、頸部に簾状文を持たないものが多く観察される。

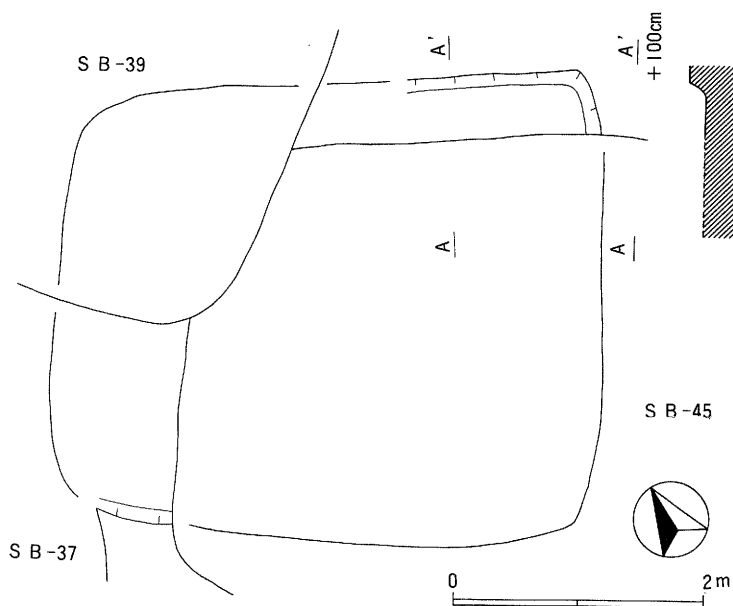
第16表 第46号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
65-1	弥生・壺	口縁部～頸部 1/3	口径(22.5)	口縁部長く弓状に外反する。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：金雲母・細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外内面赤彩。
65-2	弥生・壺	胴部下位～ 底部ほぼ完存	底径 9.5	僅かに内湾しながら立上がる。	外面縦へら磨き。内面斜め刷毛調整+横へら磨き。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *底部附近を除き赤彩。
65-3	弥生・甕	胴部下位～ 底部完存	底径 5.8	僅かに外反しながら立上がる。底部焼成後に穿孔される。	外面波状文・刷毛調整。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色 *甑として転用されたものか。
65-4	弥生・甕	底部 4/5	底径 9.8		外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内暗灰褐色
65-5	弥生・甕	底部完存	底径 10.0		外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内暗橙褐色
65-6	弥生・高坏	接合部完存			外面縦へら磨き。坏部内面横へら磨き。脚部内面ナデ。	胎土：白色細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内暗橙褐色 *脚部内面除き全面に赤彩。
65-7	弥生・蓋	摘み部完存			摘み外内面横へら磨き。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：白色細粒子を若干含む 焼成：良 色調：外暗褐色、内暗黒褐色 *外面赤彩。
65-8	弥生・鉢	底部完存	底径 5.0		外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外内赤彩。

(25) 第47号住居址 (S B47 第66図)

本住居址はC区南東部のグリッドE～G-8・9において、第38・39・45等と重複して検出された。遺構の大部分は他遺構との重複によって破壊されているため、規模。プラン等は不明確であるが、東西に僅かに長い隅丸方形を呈すると推定され、規模は東西 4.4m (推定)、南北 3.7mを測る。主軸方向はN-60°-Wを示す。残存する壁高は11～12cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的軟弱で、覆土は小礫を多量に含んだ暗褐色土の単一層である。

本址からは弥生時代後期に比定される弥生土器片が少量出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。



第66図 第47号住居址実測図

(26) 第48号住居址 (SB48)

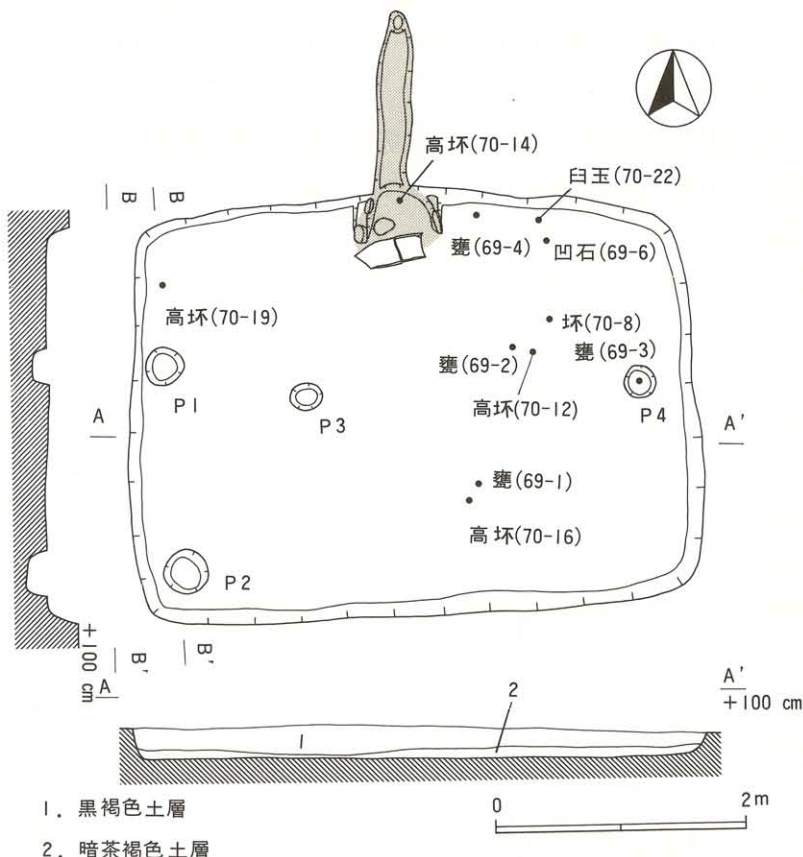
遺構 (第67・68図)

本住居址はC区南側のグリッドG~I-10~12において検出された。他遺構との重複関係はない。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は東西4.5m、南北3.4mを測る。カマドを中心として主軸方向はN-2°-Wを示す。残存する壁高は17~25cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は西側では比較的堅緻であったが、東側では礫が露出しやや軟弱な状態であった。覆土は2層に分けられ、上層は炭化物を少量含んだ黒褐色土、下層は小礫を含んだ暗褐色土であった。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置されており、砂岩、輝石安山岩等を芯にして暗黄褐色粘土で構築された石芯粘土カマドである。遺存状態は良好で、規模は全長185cm、両袖幅72cmを測る。袖は馬蹄形に構築され、右袖先端部には砂岩が、左袖先端部には輝石安山岩がそれぞれ補強のために配されている。なお、焚口部には天井石と推定される55×24×11cmを測る砂岩が検出された。燃烧部内の奥壁部分からは強く披熱した高坏脚部(第70図14)が出土したが、カマド内において支柱として使用されたものと推定される。また、燃烧部内第3層中からは披熱した獣骨片と推定される小骨片が少量出土している。

ピットは計4基検出され、いずれも略円形を呈し、径23~36cm、深さ7~15cmを測る。P₁・P₂は西壁に沿って位置し、P₄内には土師器甕(第69図3)が埋設されていた。遺物の出土状況は、住居址東側に集中する傾向が観られ、P₄の西側でいくつかの土器が床着の状態ではほぼ原位置を保って検出されている。また、カマド右側の北壁際において凹石と白玉が出土している。

本址の所産期は、住居址形態、出土遺物等から古墳時代後期と推定される。



第67図 第48号住居址実測図

遺物 (第69・70図)

本住居址からは土師器片、須恵器片、石器、石製品が出土している。土師器の器種には甕、高坏、坏、ミニチュア土器があり、須恵器の器種には甕がある。これらの遺物のうち図示できたのは22点である。

1～5は甕である。1は長胴甕の口縁部で比較的器肉が厚く、口縁部は緩く外反して内外面へラ削りされる。2は器高 8.6cmを測る小形甕で、丸底の底部に短く「く」の字状に外反する口縁部を持つ。3はP₄内に埋設されていた胴張甕で、やや肩の張った器形を呈すると推定され、内外面とも粗くへラ削りされている。4はカマド右側より出土した長胴甕の底部で、僅かな平底を持ち内外面へラ削りされる。5は胴張甕の底部で、底部裏面もへラ削りによって仕上げられる。

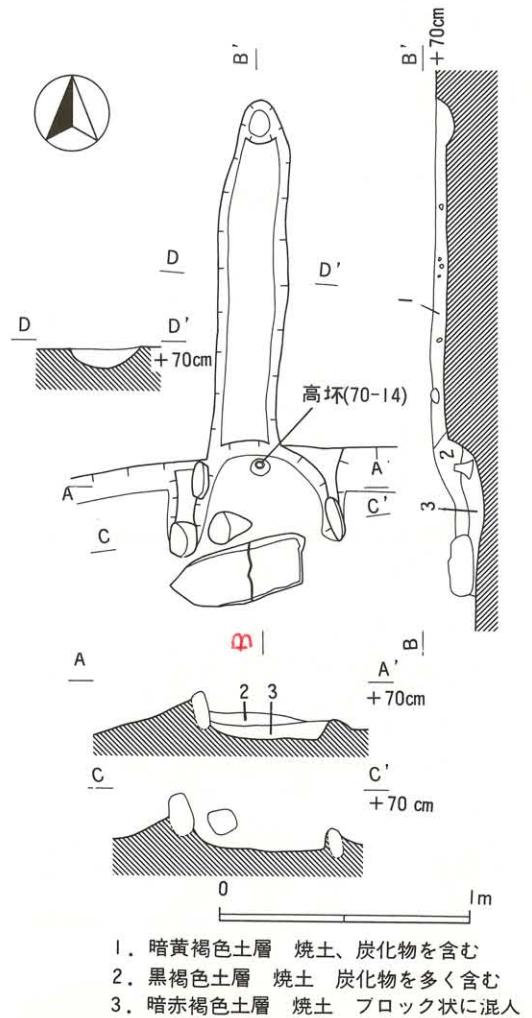
6は輝石安山岩の円礫を使用した凹石で、カマド右側の北壁際から伏せた状態で出土した。片面が著しく磨滅しており、反対側の面も中央部に僅かに使用痕が観察される。大きさは17.9×16.6×6.9cm、重量は2300gを測る。

7～10は坏で、8～10は内面が黒色研磨されている。7は所謂模倣坏で、浅い丸底の底部に僅かに外反する口辺部を持つ。8～10はいずれも内湾して開く器形を呈し、底部外面はへラ削りされている。9の口縁端部は外側に僅かに肥厚している。11～19は高坏である。11～16は坏部が稜を持って椀状を呈し、脚部は裾部で大きく開くスカート状を呈する。外面はへラ削りによって整形され、口縁と裾の末端部は横ナデされている。また、坏部内面は黒色研磨され、立上がり部分には段を有する。17～19は稜を持って大きく開く坏部と、柱状の脚部を持つと推定される。脚部の柱状の部分は螺旋状に成形されている。

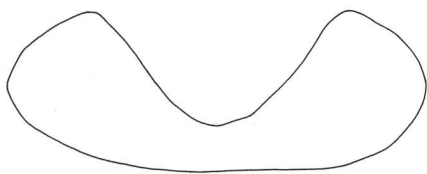
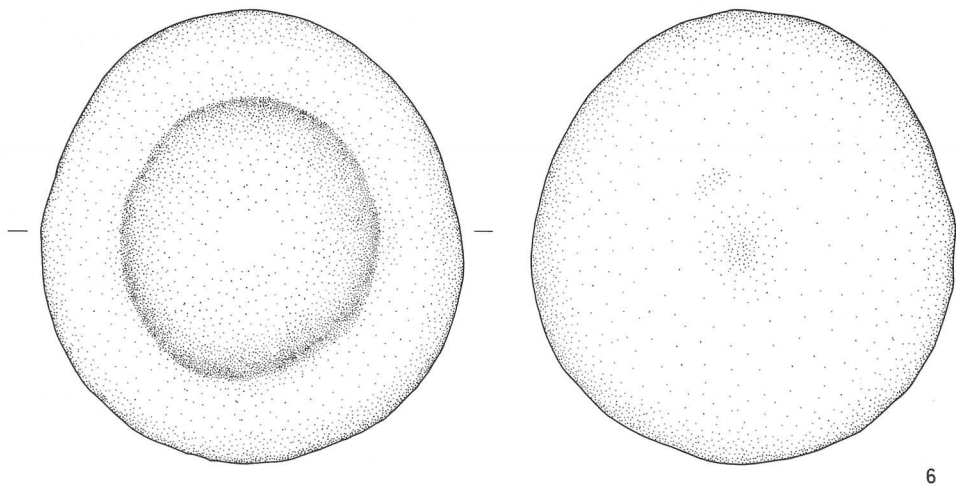
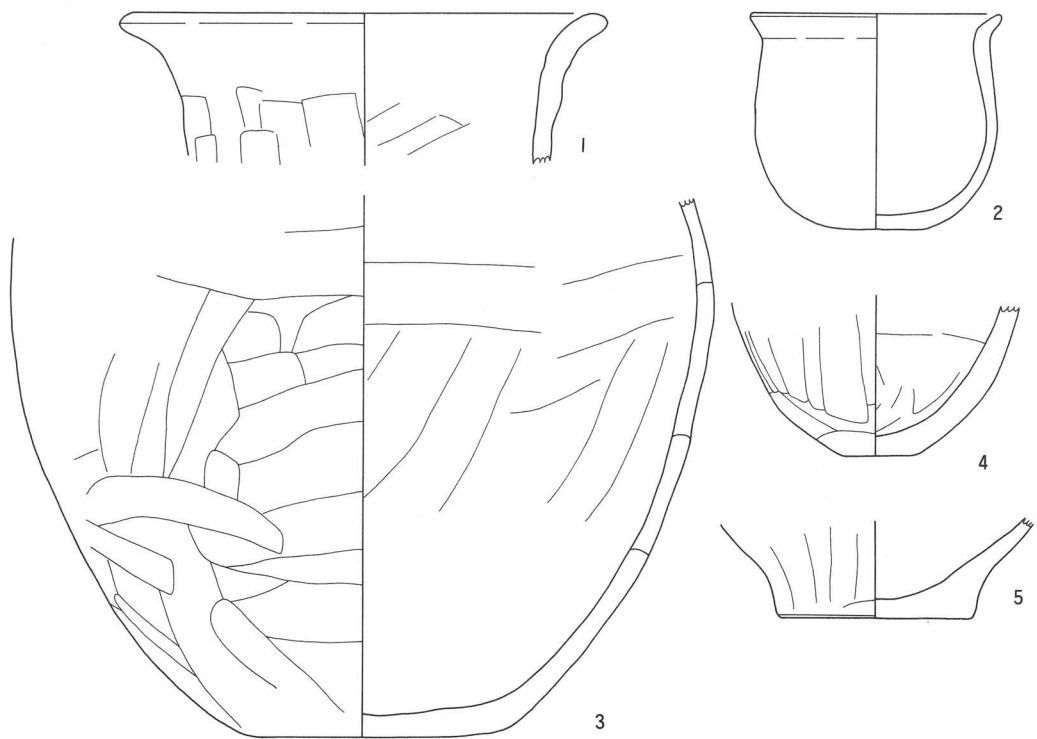
20は須恵器甕の口縁部で、端部は内湾して立上がり、外面に断面三角形の突帯が貼りつけられている。内面には淡黄色の自然釉がかかり、推定口径は19.8cmを測る。

21は高坏の脚部と推定されるミニチュア土器である。スカート状に開く器形を呈し、裾径は7.2cmを測る。

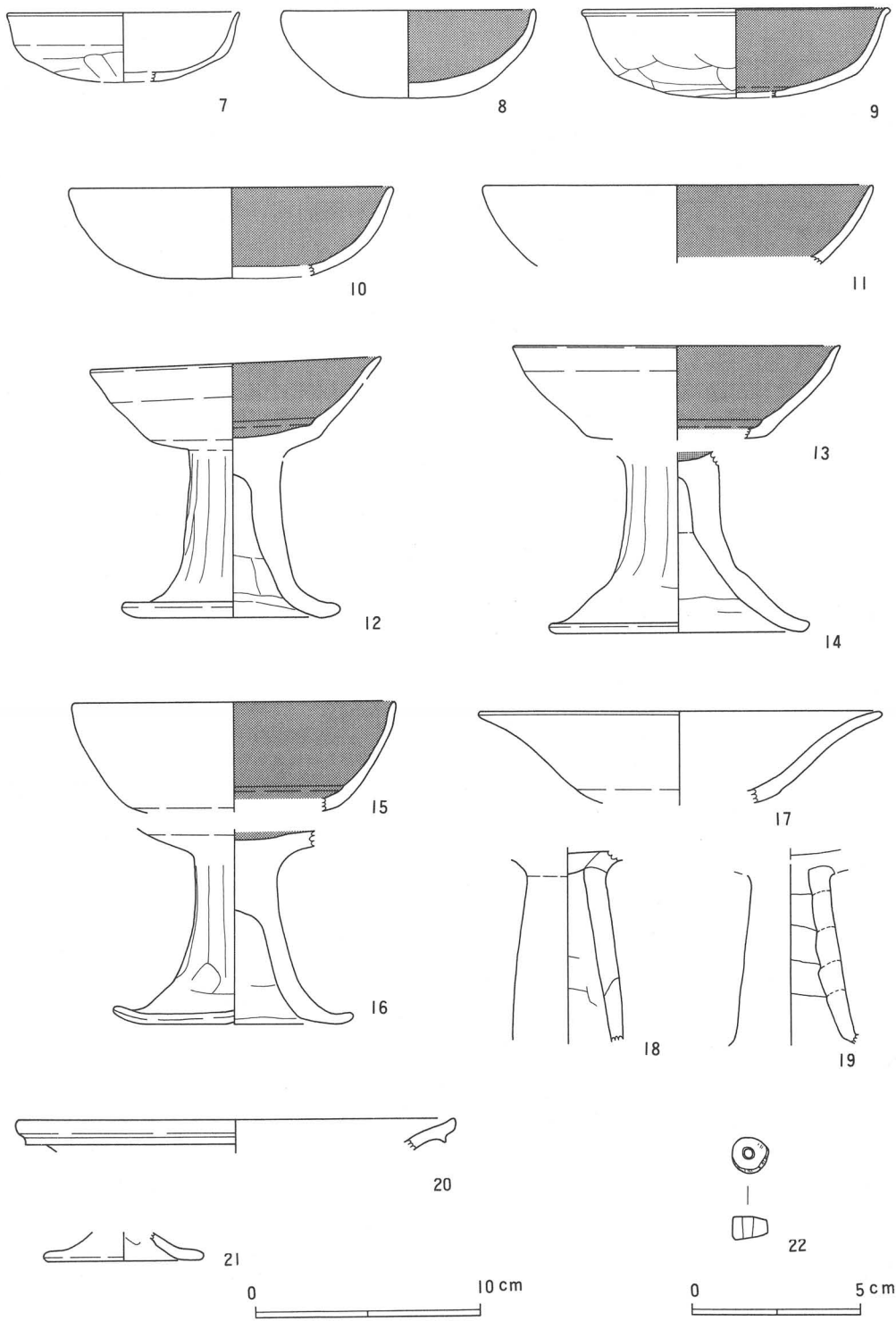
22はカマド右側の北壁際より出土した蠟石製の白玉で、乳黄色を呈し、径10.5mm、厚さ 5.2～7.1mm、孔径 3.5mm、重量1.23gを測る。研磨は比較的粗雑である。



第68図 第48号住居址カマ実測図



第69图 第48号住居址出土遺物実測図(1)



第70图 第48号住居址出土遺物実測図(2)

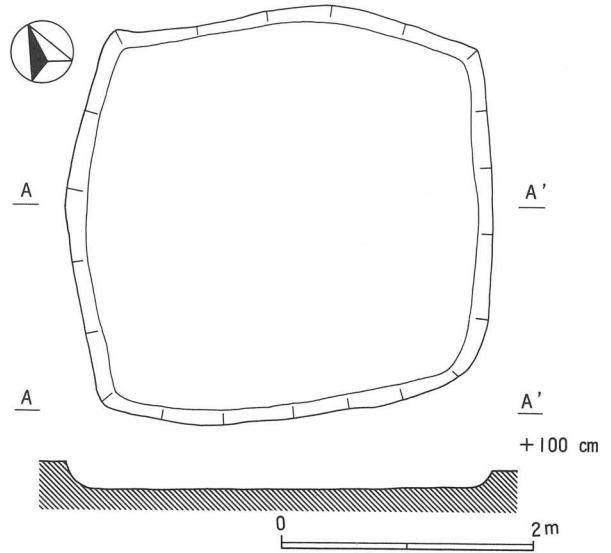
第17表 第48号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
69-1	土師・甕	口縁部完存	口径 19.5	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ、外面縦へら削り。内面斜めフナ削り。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
69-2	土師・甕	口縁部1/12 胴部上位1/2 底部完存	口径(11.0) 器高 8.6	口縁部短く「くの字」状に外反する。底部は丸底を呈する。	口縁部横ナデ、外面へら削り？。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色 内暗灰褐色
69-3	土師・甕	胴部上位～底部完存	底径 10.2	やや肩の張った器形を呈する。	外内面横・斜めへら削り。	胎土：細砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外面に黒斑あり。
69-4	土師・甕	底部完存	底径 2.7	僅かな平底を持つ。	外内面縦・横へら削り。	胎土：細砂粒多く含む。 焼成：良 色調：外内明赤褐色
69-5	土師・甕	底部1/2	底径(7.8)		外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外茶褐色、内黒褐色
70-7	土師・坏	口縁部～底部2/5	口径 10.6 器高 3.2	口縁部は外面に稜を持って僅かに外反する。底部は浅い丸底を呈する。	口縁部横ナデ。底部へら削り。内面へら磨き縦ナデ。	胎土：微砂粒を少量、金雲母片多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色 内淡茶褐色
70-8	土師・坏	ほぼ完存	口径 11.4 器高 4.0	内湾して立上がる。	口縁部横ナデ。外面へら削り。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内黒色
70-9	土師・坏	口縁部～底部1/3	口径 13.8 器高(4.0)	内湾して立上がり、口縁部で僅かに外反する。口唇部は外面に肥厚する。	口縁部横ナデ。外面へら削り。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内黒色
70-10	土師・坏	口縁部～底部1/5	口径(14.6)	内湾して立上がる。	口縁部横ナデ。外面へら削り。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明黄褐色、内黒色
70-11	土師・坏	口縁部1/8	口径(16.6)	坏部僅かに内湾し、大きく開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き？。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外淡茶褐色、内黒色
70-12	土師・高坏	ほぼ完存	口径 13.0 器高 11.5 裾径 9.8	坏部屈曲して内湾する。脚部は裾部で大きく開く。	口縁部・裾部横ナデ。坏部外内面横へら磨き。脚部外面縦へら削り。内面横へら削り・ナデ。	胎土：小砂粒若干含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色、坏内黒色
70-13	土師・高坏	坏部1/10	口径(14.6)	坏部屈曲内湾する。	口縁部横ナデ。外面へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明黄褐色 内黒色
70-14	土師・高坏	脚部完存	裾径 11.8	裾部で大きく開く。	坏部内面へら磨き。脚部外面縦へら削り。内面横へら削り・ナデ。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内淡茶褐色
70-15	土師・高坏	坏部1/5	口径(14.6)	坏部屈曲内湾する。	口縁部横ナデ。外面へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
70-16	土師・高坏	接合部～脚部完存	裾径 10.7	裾部で大きく開く。	坏部内面へら磨き。脚部外面縦へら削り。内面横へら削り・ナデ。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外内淡茶褐色 坏内黒色
70-17	土師・高坏	坏部1/5	底径(18.2)	坏部屈曲外反して大きく開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗茶褐色 色調：外内暗茶褐色
70-18	土師・高坏	脚柱部1/2			外面縦へら磨き。内面横へら削り+ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
70-19	土師・高坏	脚柱部完存		粘土紐を螺旋状に巻いて成形される。	外面縦へら磨き。内面未調整。裾部内面横ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
70-20	須恵・甕	口縁部1/12	口径(19.8)	口縁部大きく外反し、端部で僅かに内湾する。口縁下部に突帯が貼り付けられる。	外内面横ナデ。	胎土：小砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色 内明灰褐色 *内面に自然釉かかる。
70-21	土師・ミニチュア	裾部1/4	裾径(7.2)	裾部で大きく開く。	外内面横ナデ。	胎土：微砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外橙茶褐色、内暗灰褐色

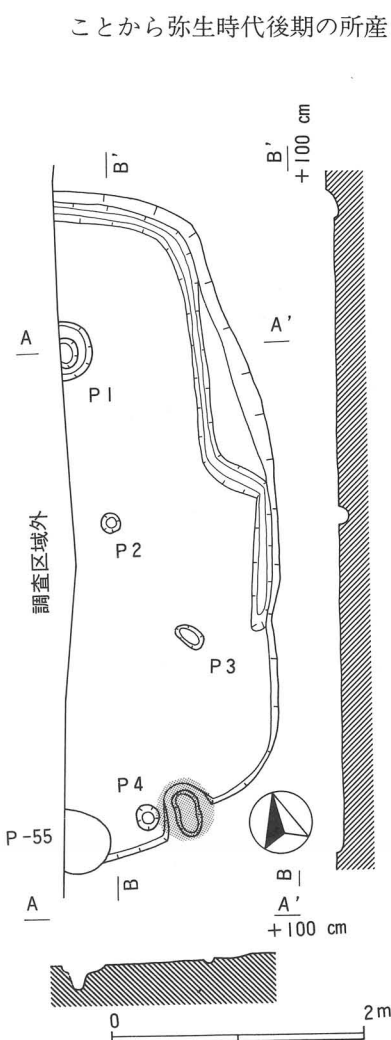
(27) 第49号住居址 (SB49 第71図)

本遺構はC区南東部のグリッドD・E-10・11より検出された。他遺構との重複関係はない。平面プランは東西の主軸方向をN-60°-Wに持つやや不整な隅丸方形を呈し、規模は東西3.4m、南北3.3mを測る。残存する壁高は13~21cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は凹凸が激しく軟弱で柱穴等は検出されなかった。覆土は暗褐色土の単一層である。

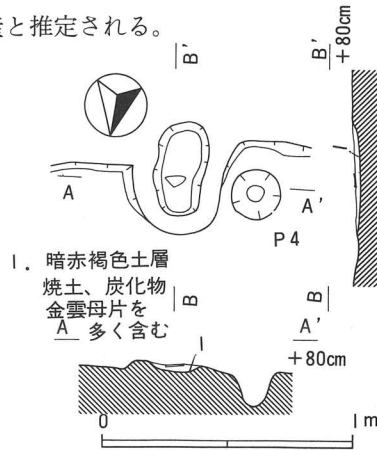
本址は規模、構造等より堅穴状遺構とも推定され、弥生土器の小片が若干出土していることから弥生時代後期の所産と推定される。



第71図 第49号住居址実測図



第72図 第50号住居址実測図



第73図 第50号住居址
カマド実測図

1. 暗赤褐色土層
焼土、炭化物
金雲母片を
A 多く含む

本住居址はC区南西部のグリッドN・O-9~11において、P-55に切られて検出された。住居址の西側は調査区域外にあり、全体の規模等は不明確であるが隅丸長方形を呈すると推定され、調査された範囲での南北長は5.4mを測り、南北の主軸方向はN-8°-Eを示す。残存する壁高は5~9cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は部分的に貼床の遺存が確認されたが全体に軟弱で、覆土は小礫を含んだ暗黒褐色土の単一層である。

カマドは住居址南東隅部にあたる南壁東寄りに設置されているが、遺存状況は悪く、長円形に掘り込まれた燃焼部と袖部の底部が検出されたのみである。残存する規模は全長90cm、全幅84cmを測る。

ピットは計4基検出された。P₁は支柱穴と推定され、径52cmの略円形を呈し、深さは19cmを測る。P₂・P₃は性格不明の小ピットで、P₂は略円形を呈し、径16cm、深さ7cmを測る。

(28) 第50号住居址

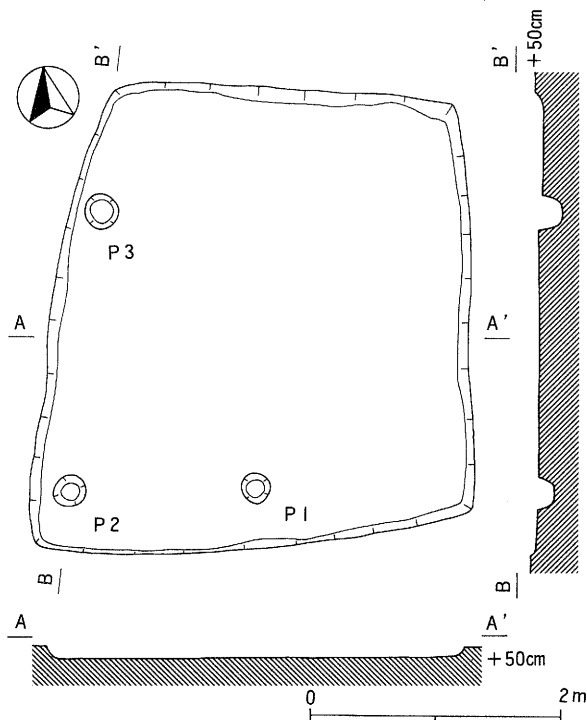
(SB50 第72・73図)

本住居址はC区南西部のグリッドN・O-9~11において、P-55に切られて検出された。住居址の西側は調査区域外にあり、全体の規模等は不明確であるが隅丸長方形を呈すると推定され、調査された範囲での南北長は5.4mを

P₃は楕円形を呈し、規模は27×16cm、深さ8cmを測る。P₄はカマド右側より検出され、カマドに付随する施設と推測される。平面形は略円形を呈し、規模は径21cm、深さ11cmを測る。周溝は住居址北壁と東壁の一部に沿って検出され、幅9～21cm、深さ3～5cmを測る。

本址からは極めて少量の土師器片が出土しているのみで所産期は明確にし難いが、カマド内より出土した土師器片より古墳時代後期の所産と推測される。

(29) 第51号住居址 (SB51 第74図)



第74図 第51号住居址実測図

本址は第17号土壇、第4号溝状遺構を切って構築された後に、第21・22・24号住居によって切られており、重複関係、出土遺物等より弥生時代後期の所産と推定される。

本住居址はC区北西部のグリッドJ・K-4・5に位置し、第21・22号住居址等の床面に検出された。平面プランは南壁が長く台形に近い隅丸方形を呈し、規模は南北長3.7m、南壁長3.6m、北壁長2.9mを測る。南北の主軸方向はN-6°-Eを示す。残存する壁高は6～10cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は西側に比較的堅緻であったが、東側は軟弱であった。覆土は若干の小礫を含んだ暗黒褐色土の単一層である。ピットは計3基検出された。いずれも略円形を呈し、径23～26cm、深さ6～18cmを測る。

本址からは弥生土器の小細片が若干出土しており、壺、甕、高坏、鉢、蓋等の器種がある。

(30) 第52号住居後 (SB52)

遺構 (第75図)

本住居後はC区中央部のグリッドH～J-7～9に位置し、第34～39・53・54号住居址等と重複して検出された。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は東西5.1m、南北4.2mを測る。主軸方向はN-39°-Wを示す。残存する壁高は13～21cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はほぼ平坦で、覆土は小礫を含んだ明茶褐色土の単一層である。

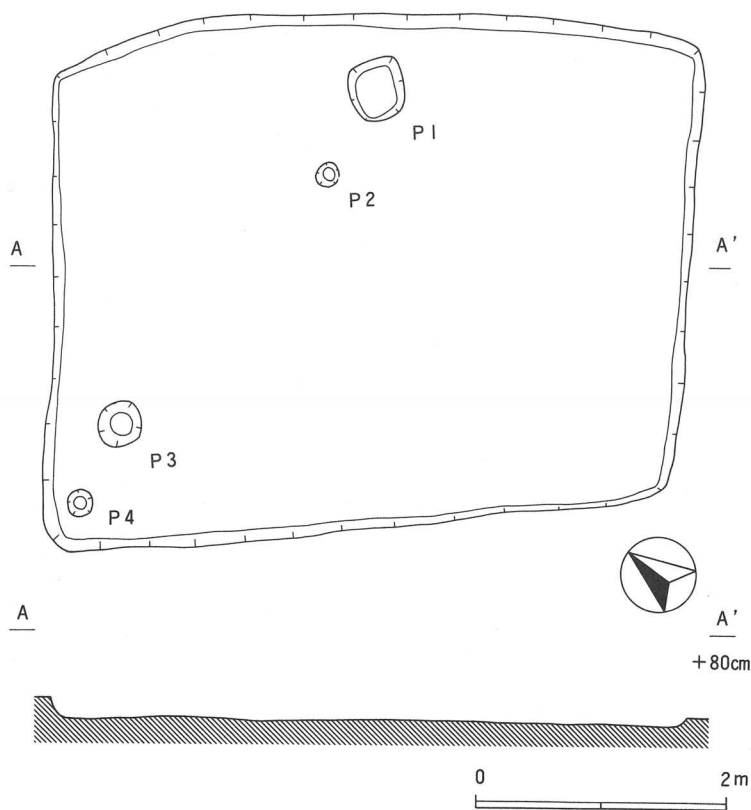
ピットは計4基検出された。P₁は48×46cmの略方形を呈し、深さは12cmを測る。P₂～P₄は略円形を呈し、径16～36cm、深さ10～16cmを測る。

本址は出土遺物から古墳時代中期の所産と推定される。

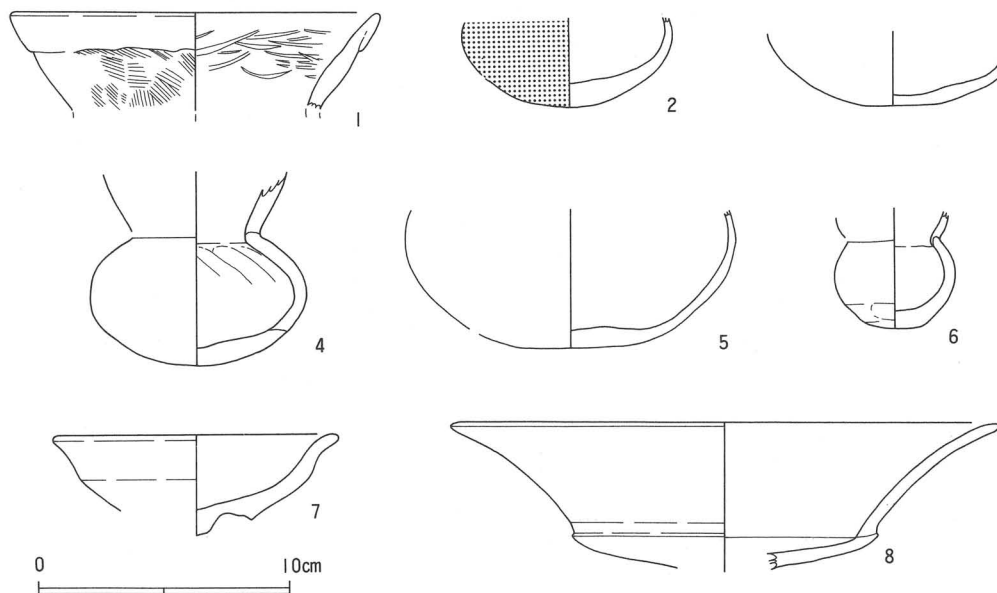
遺物 (第76図)

本址からは古墳時代中期に比定される土師器片が若干出土している。土師器の器種には壺、甕、埴、高坏、ミニチュア土器等があり、図示できたのは8点である。

1は折り返し口縁を持つ壺で、外面は刷毛形成され、内面はへラの先端による三日月状の削り痕が残る。2～5は埴で、いずれも扁球形の体部を持ち、4の口辺部は僅かに内湾する。2の外面は赤色塗彩されている。6は埴のミニチュア土器で、残存高4.7cmを測る。7・8は高坏で、7は坏部が椀状を呈し、外面に



第75図 第52号住居址実測図



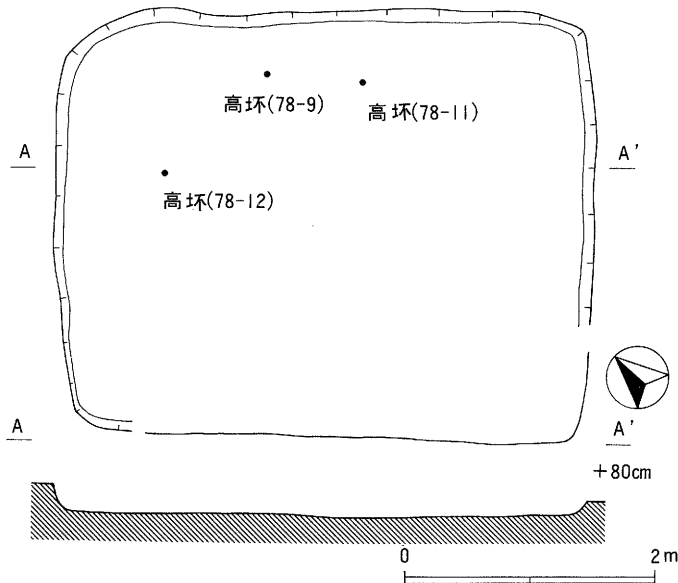
第76図 第52号住居址出土遺物実測図

稜を持って短く外反する。脚部は大きくスカート状に開くと推定される。8は水平に近く開き屈曲して長く伸びる坏部で、脚部は柱状を呈すると推定される。

第18表 第52号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
76-1	土師・壺	口縁部1/6	口径(14.8)	口縁部「く」の字状に外反し、端部外面に折り返される。	口縁部横ナデ。外面斜め刷毛調整。内面横へら削り+ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内暗灰褐色
76-2	土師・埴	底部完存		体部は偏平な球形を呈する。	外面横へら磨き。内面削り+ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙色 内明灰褐色 *外面赤彩。
76-3	土師・埴	底部2/3		体部は偏平な球形を呈する。	外面横へら磨き。内面へら磨き+ナデ。	胎土：黒雲母・赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明赤褐色 *体部外面に黒斑あり。
76-4	土師・埴	口縁部1/4 体部ほぼ完存		体部は偏平な球形を呈する。口縁部は僅かに内湾する。	口縁部縦へら磨き。体部外面横へら磨き。内面ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内暗灰色
76-5	土師・埴	底部完存 体部1/4		体部は偏平な球形を呈する。	外面横へら磨き。内面ナデ?。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内明橙色
76-6	土師・ミニチュア	体部~底部完存 口縁部1/3		体部はほぼ球形を呈し、口縁部は内湾する。	体部外面横へら磨き・へら削り。内面ナデ。	胎土：黒雲母・微砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
76-7	土師・高坏	坏部 1/2	口径 11.3	坏部外面に稜を持って屈曲外反する。	口唇部横ナデ。外内面へら磨き。	胎土：微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色、内明橙褐色
76-8	土師・高坏	坏部1/5	口径(22.0)	坏部稜を持って屈曲外反し、長く伸びる。	口唇部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙色

(31) 第53号住居址 (S B53)

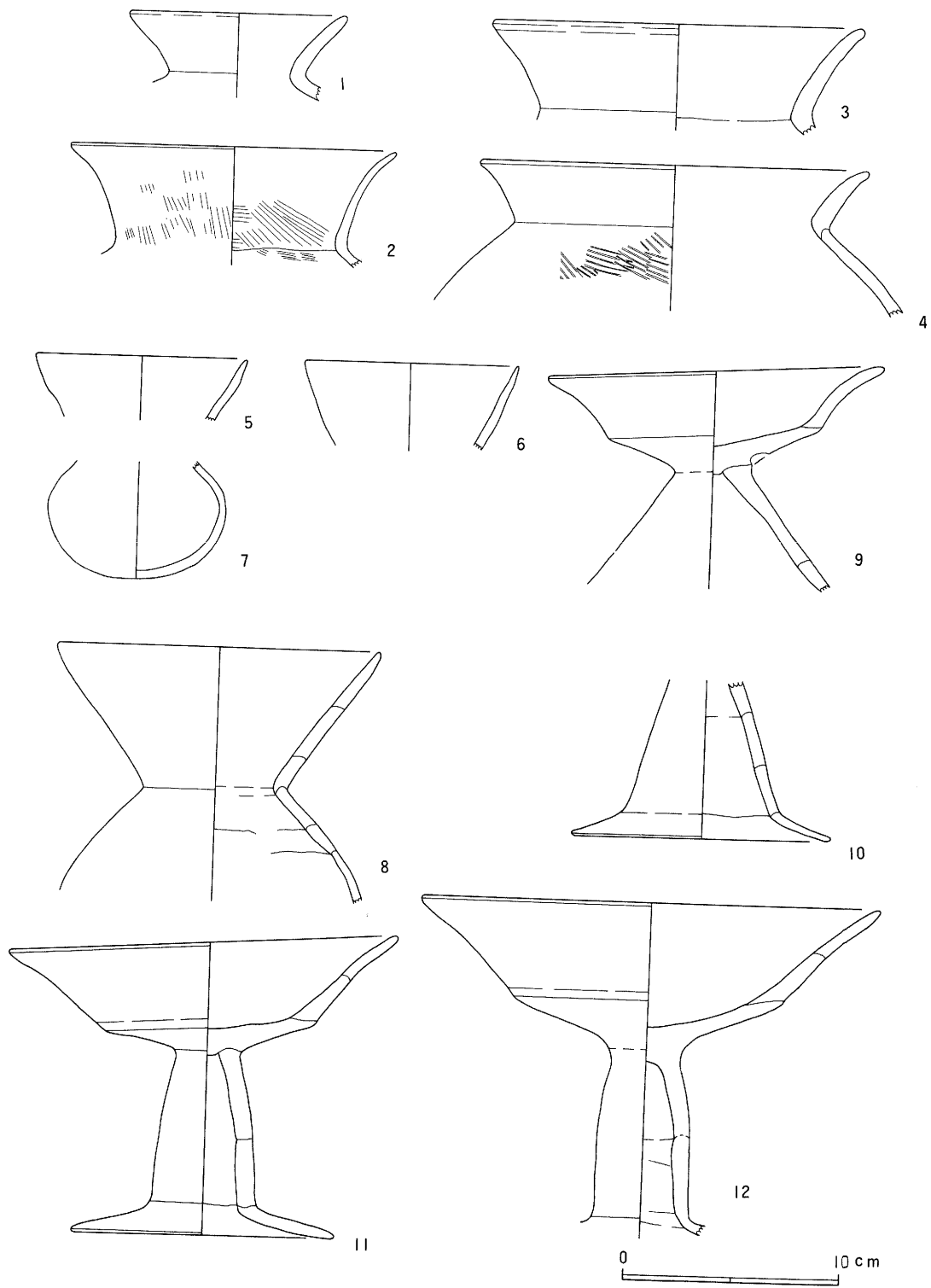


第77図 第53号住居址実測図

遺構 (第77図)

本住居址は、C区中央部のグリッドG~I-6~8において第34・35・39号住居址の掘り下げ中に検出された。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は東西4.3m、南北3.4mを測り、主軸方向はN-44°-Wを示す。残存する壁高は12~20cmを測り、壁はほぼ直に近く立上がる。床面はやや軟弱で礫の露出が多く、覆土は小礫を多量に含んだ暗茶褐色土の単一層であった。

本址は第34・52号住居址を切つて構築された後に、第35・39号住



第78图 第53号住居址出土遺物実測図

居址によって切られており、出土遺物から古墳時代中期の所産と推定される。

遺物(第78図)

本址からは土師器片が出土している。器種には壺、甕、埴、坏、高坏、甑等があるが図示できたのは12点である。

1・2は球形胴を持つと推定される壺で、1は頸部で「く」の字状に外反し、2は口縁部が長く伸び、内外面刷毛整形される。3・4は甕で、共に頸部で「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈すると推定される。4の外面には粗い刷毛整形がされている。5～8は埴で、5・6の口辺部は僅かに内湾し、7は比較的球形に近い体部である。8はやや下膨れの体部に直線的に開く口辺部を持つ。9～12は高坏で、9は裾端部を欠損しているが、脚部がスカート状に大きく開き、坏部は中位で稜を持って外反する。11・12は柱状の脚部を持ち、坏部、裾部とも稜を持って屈曲外反している。

第19表 第53号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
78-1	土師・壺	口縁部 1/2	口径 10.2	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。肩部内面に指頭圧痕。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
78-2	土師・壺	口縁部1/4	口径(15.2)	口縁部「く」の字状に外反し、長く伸びる。	口縁部横ナデ。外内面刷毛調整。	胎土：赤褐色小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙色
78-3	土師・壺	口縁部ほぼ完存	口径 17.4	口縁部「く」の字状にする。	口縁部横ナデ。胴部内面へラ削り。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
78-4	土師・壺	口縁部～肩部 2/5	口径(18.0)	口縁部「く」の字状に外反する。胴部球形に大きく張る。	口縁部横ナデ。胴部外面斜め刷毛調整。内面へラ削り+ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内暗褐色
78-5	土師・埴	口縁部1/4	口径(10.0)	口縁部内湾する。	不明。	胎土：微砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内淡褐色
78-6	土師・埴	口縁部1/2	口径(10.0)	口縁部内湾する。	不明。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙色
78-7	土師・埴	体部 1/2 底部完存		体部はやや扁平な球形を呈する。	外面へラ磨き？。内面ナデ。	胎土：金雲母・微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内暗褐色
78-8	土師・埴	口縁部完存 体部 1/5	口径 15.2	やや下膨れの体部に直線的に開き端部で僅かに内湾する口縁部を持つ。	口唇部横ナデ。外面縦へラ磨き。口縁内面縦へラ磨き。体部内面ナデ。	胎土：細砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内明橙色
78-9	土師・高坏	坏部3/4 脚部完存(裾部欠損)	口径 15.6	口縁部は屈曲外反し、脚部は大きく開く。	口縁部横ナデ。外面縦へラ磨き。坏部内面横へラ磨き。脚部内面横へラ削り+ナデ。	胎土：微砂粒多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色 内明黄褐色
78-10	土師・高坏	脚部ほぼ完存	裾径(12.2)	裾部で屈曲し大きく開く。	外面縦へラ磨き。内面へラ削り+ナデ。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内明橙色
78-11	土師・高坏	坏部ほぼ完存 脚柱部完存 裾部1/4	口径 18.2 器高 14.3 底径 12.2	坏部、裾部屈曲外反し、大きく開く。脚部は柱状に呈する。	口縁部・裾部横ナデ。外面縦へラ磨き。坏部内面へラ磨き？。脚部内面ナデ。	胎土：細砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内暗褐色
78-12	土師・高坏	坏部1/2 脚柱部完存 裾部欠損	口径(23.4)	坏部、裾部屈曲外反し、大きく開く。脚部は柱状を呈する。	口縁部横ナデ。外面縦へラ磨き。坏部内面へラ磨き？。脚部内面横へラ削り。	胎土：小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内明橙色

(32) 第54号住居址 (S B54 第79図)

本住居址はC区中央部のグリッドH~J-8・9において検出された、遺構北側の大部分を第35・52号住居址等によって破壊されているため、全体のプラン、規模等は不明確である。確

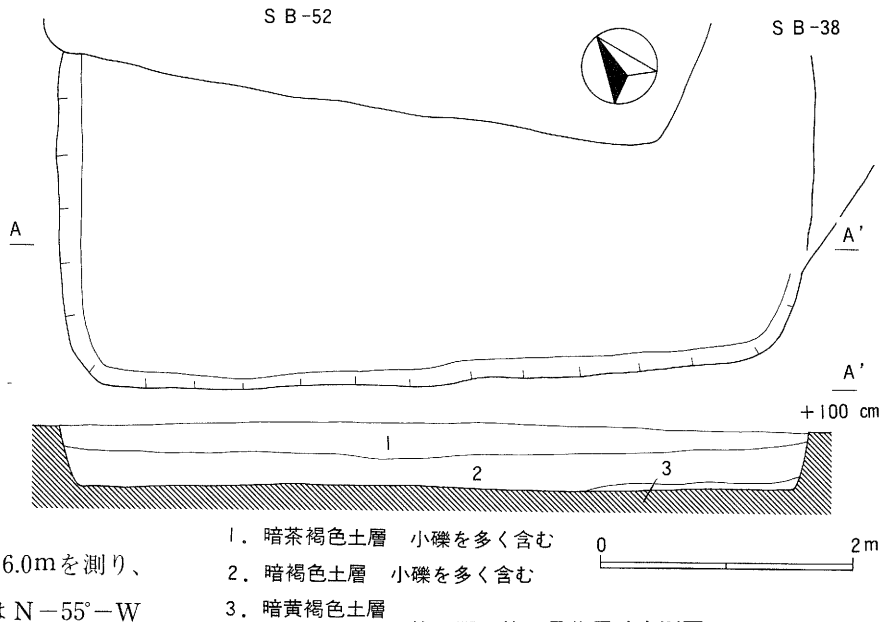
認された東西長は6.0mを測り、東西の主軸方向はN-55°-Wを示す。残存する壁高は35~46cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は軟弱で、覆土は3層に分けられ、第1層は小礫を多く含んだ暗茶褐色土、第2層は小礫を含んだ暗褐色土、第3層は黄色粒子を含んだ暗黄褐色土である。

本址からは古墳時代前期に比定される土師器片が少量出土しており、該期の所産と推定される。

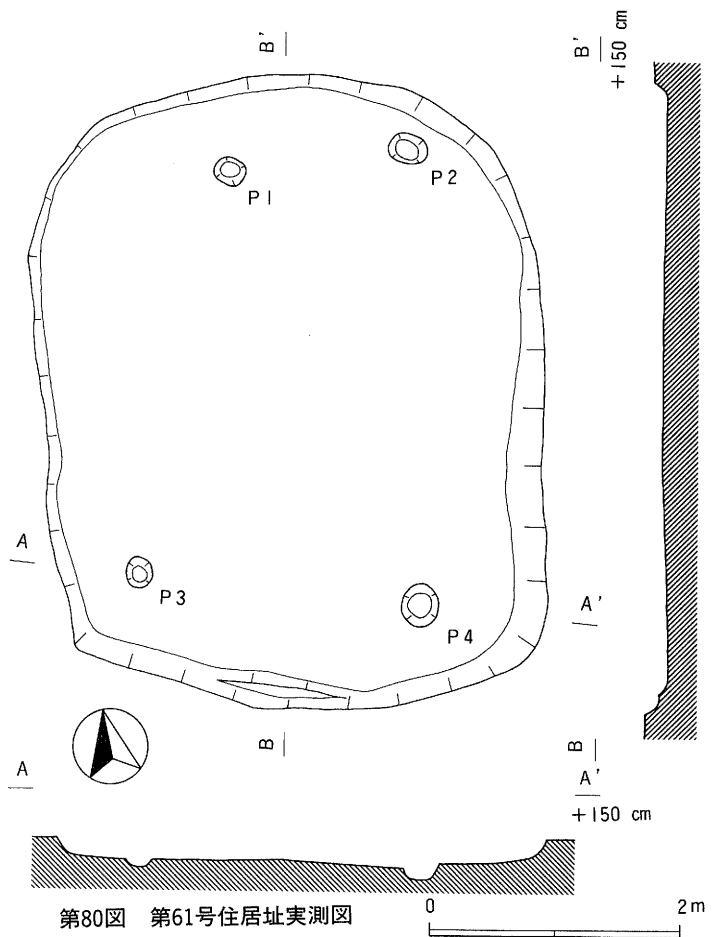
(33) 第61号住居址 (S B61)

遺構 (第80図)

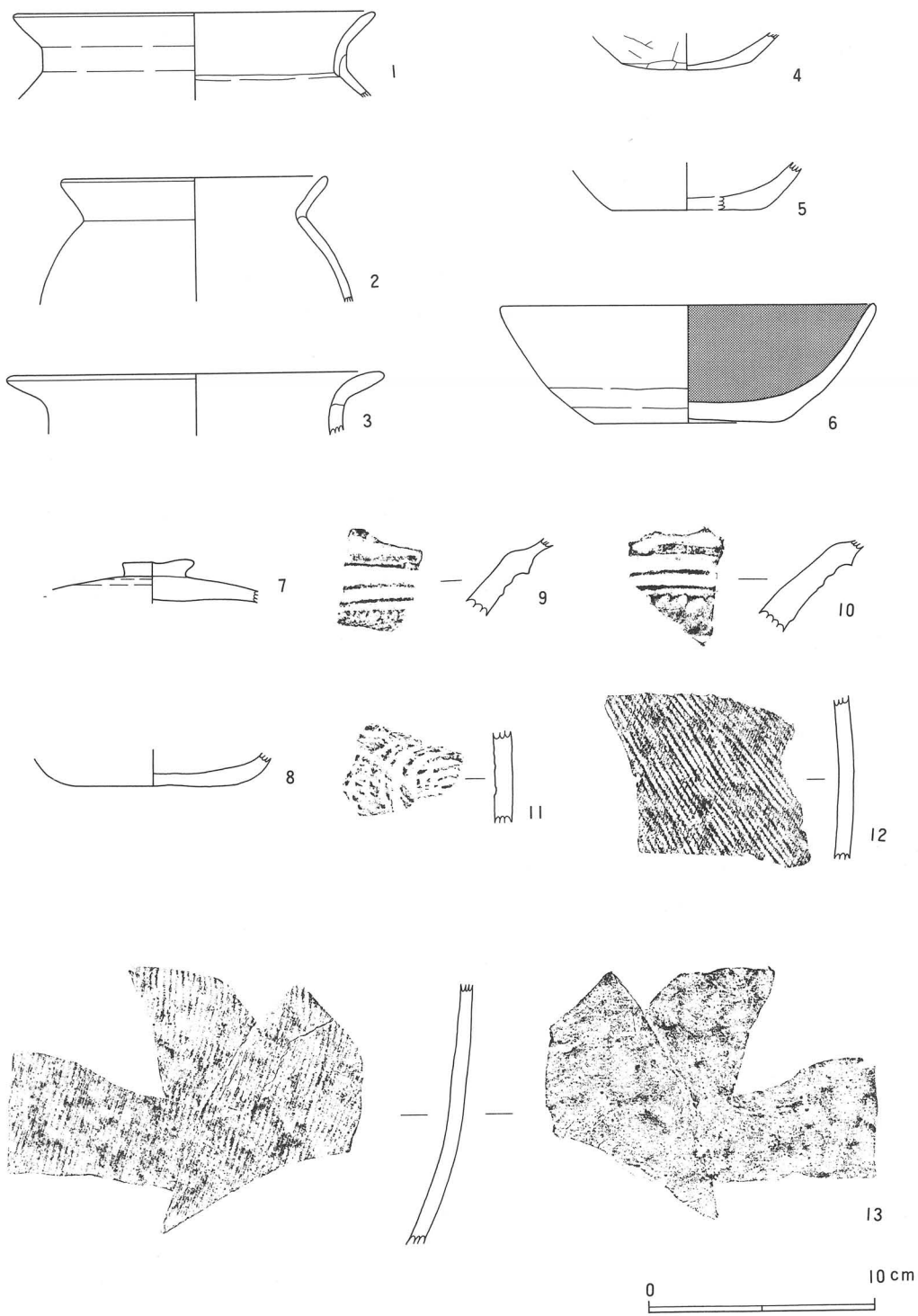
本住居址はD区東側中央部のグリッドQ・R-21~23において第62号住居址等と重複して検出された。規模は南北長5.1m、



第79図 第54号住居址実測図



第80図 第61号住居址実測図



第81图 第61号住居址出土遗物实测图

第20表 第61号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
81-1	土師・甕	口縁部～頸部 1/3	口径(16.2)	口縁部「コ」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴部外内面へラ削り。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明灰褐色
81-2	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/5	口径(11.8)	口縁部「く」の字状に外反する。胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴部外面へラナデ。内面ナデ。	胎土：微細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
81-3	土師・甕	口縁部1/6	口径(16.8)	口縁部「く」の字状に大きく外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗灰褐色
81-4	土師・坏	底部 1/2			外面へラ削り。内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
81-5	土師・坏	底部 1/2	底径 (6.8)		外面へラ削り。内面へラ磨きナナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
81-6	土師・坏	口縁部～体部 1/4 底部1/2	口径(16.8) 器高 5.3 底径 8.2	体部緩く内彎する。	口縁部横ナデ。外面底部横へラ削り。内面へラ磨き。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：やや不良 色調：外暗橙褐色、内黒色
81-7	須恵・蓋	摘み部～天井部 1/2	摘み径3.1	摘みは偏平な擬宝珠形を呈する。	外面回転へラ削りナナデ。内面ナデ。	胎土：黒色小砂粒を含む 焼成：やや不良 色調：外暗灰色、内明灰白色
81-8	須恵・坏	底部 1/5			外内面ロクロナデ。底裏部へラ削り。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗灰色、内暗青灰色
81-9	須恵・甕			口縁部外反し、外面に突帯を伏す。	外内面ロクロナデ。外面に突帯と凹線文を有する。	胎土：白色細砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外明灰白色、内濃緑色自然釉かかる。 *10・11と同一個体か
81-10	須恵・甕			口縁部外反し、外面に突帯を伏す。	外内面ロクロナデ。外面に突帯と凹線文、波状文を有する。	胎土：白色細砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外内濃緑色自然釉かかる。*9・11と同一個体か
81-11	須恵・甕				タタキ。	胎土：白色細砂粒を僅かに含む 焼成：良 色調：外濃緑色、内明灰白色 *外面自然釉かかる。 *9・10と同一個体か。
81-12	須恵・甕				外面タタキ。内面ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明青灰色、内暗灰褐色
81-13	須恵・甕				タタキ。	胎土：黒色小砂粒を含む 焼成：良 色調：外青灰色、内明灰色

東西長 4.0mを測り、平面プランは北壁がやや丸味を持った隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-10°-Eを示す。残存する壁高は8～18cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は軟弱で、覆土は小礫を多量に含んだ暗黒褐色土の単一層であった。ピットは計4基検出されたが、いずれも小規模で径20～35cm、深さ6～24cmを測る。炉址、カマド等は検出されなかった。

本址は第62号住居址、第5号溝状遺構を切って構築されており、出土遺物から奈良時代の所産と推定される。

遺物(第81図)

本址からは土師器片、須恵器片が出土しており、土師器の器種には甕、坏があり、須恵器の器種には甕、坏、蓋がある。出土量は僅かで小片が多く、図示できたのは13点である。

1～3は土師器の甕である。1は所謂武蔵型甕で、頸部は「コ」の字状を呈する。2は球形に近い胴部に「く」の字状に外反する口縁部を持つ。3はほとんど張らない胴部に大きく外反する

口縁部を持つ。4～6は土師器の坏で、底部はいずれも手持ちへら削り調整される。4は内湾する口縁部を持ち、内面は黒色研磨されている。7は須恵器の蓋で、天井部は回転へら削りされ、偏平な擬宝珠形の摘みを持つ。8は須恵器の坏で、底部はへら切り後、手持ちへら削り調整される。9～13は須恵器の甕である。9～11は同一個体片と推定され、濃緑色の自然釉が厚くかかる。口縁外面には断面三角形の突帯が貼りつけられ、横線文と波状文が施文されている。胴部外面には平行タタキ目痕が、内面には同心円文が施文されている。12は外面に平行タタキ面痕が綾杉状に施文され、内面はナデ整形されている。13は外面に平行タタキ目痕が、内面には同心円文が施文されているが、同心円文はほとんど消去されている。

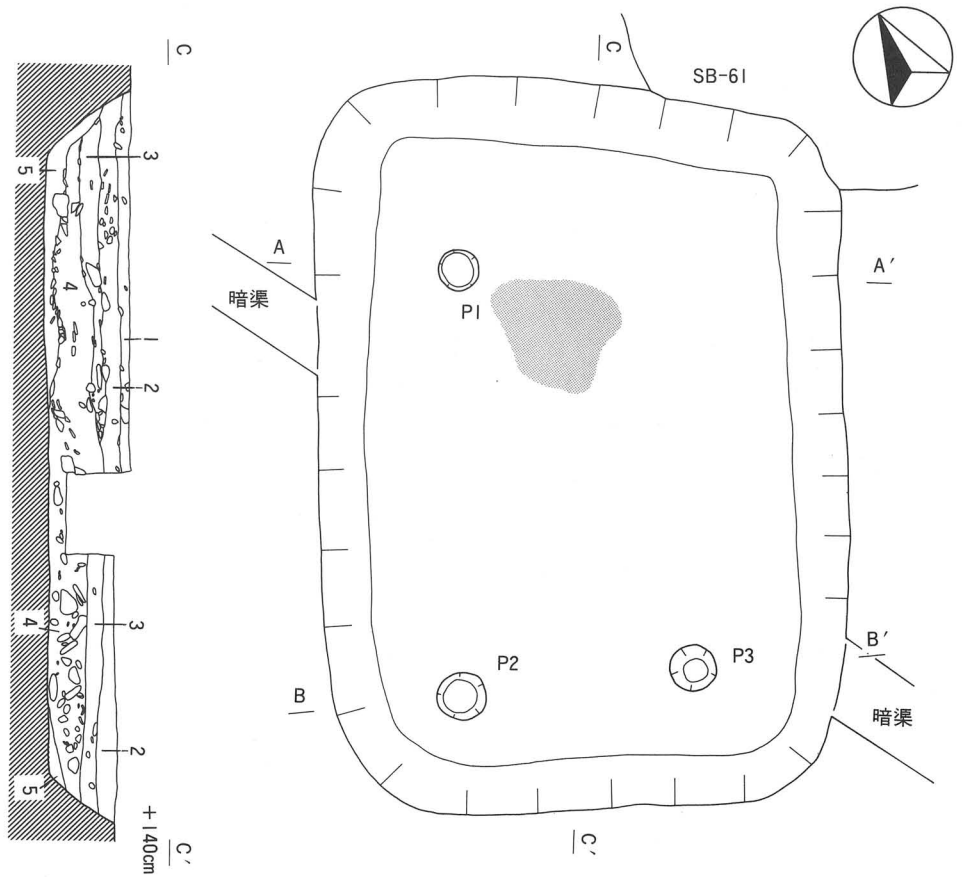
(34) 第62号住居址 (S B62)

遺構(第82図)

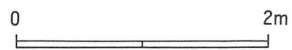
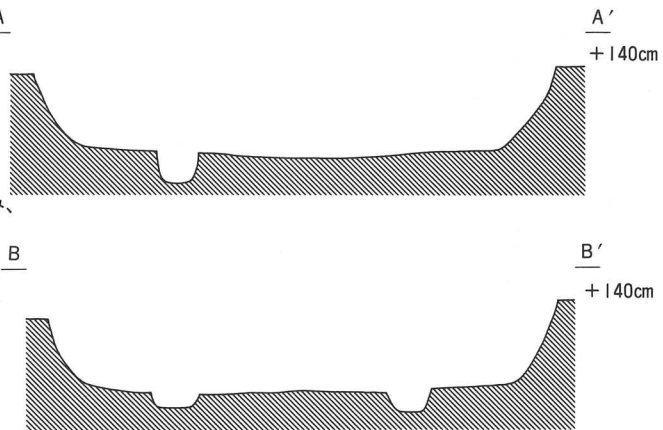
本址は、C区の南側に長く設定したD区の東寄りに検出された。主軸方位をN-27°-Eにもち、東北部コーナー付近を第61号住居址(S B61)に、南側壁を第67号住居址(S B67)に、南西部コーナー付近を第66号住居址(S B66)に切られており、さらに南側半分には南東から北西に2本の暗渠が走り、壁及び覆土層を破壊していた。このため、全体のプランは床面および壁の立ち上がりから把握せざるを得なかったが、幸い床面までの深さがあったため、推定ではあるもののほぼ全体を知ることができた。

主軸方位を北から27°東に振った隅丸長方形の平面プランを呈し、全て推定だが、南東辺長約5.5m、北西辺長約5.9m、南西辺長約4.2m、北東辺長約~~2.2~~^{4.0}mを、また深さは約54～74^{cm}mをはかる。床面は堅緻な貼床で、明確な炉址は検出できなかったものの、3ヶ所の焼土部分が検出されている。

後世の遺構による破壊が著しい住居址であり、遺物の出土もそれほど期待されなかったが、それに反して膨大な出土量があり、驚かされた。遺物はほとんどが弥生時代後期後半の箱清水式期に属するもので、その直後形式のものが僅かに混在していた。遺物としては、壺・甕・台付甕・深鉢・鉢・台付鉢・高坏・蓋・甑・手づくねのミニチュア土器と、石包丁・磨製石鏃・鉄石英製細形管玉の石製品、鉄斧・~~銅~~^銅釧の金属製品、ガラス小玉および骨粉があり、出土量の膨大さもさることながら、バラエティにも富んだものである。このように器種豊かな遺物であるが、その組成量は平均的でなく、赤色塗彩された鉢類の出土量の多さが目を引く。また、磨製石鏃・管玉・鉄斧・~~銅~~^銅釧・ガラス小玉・てづくねミニチュア土器・骨粉などの葬送に関わると思われる遺物は、床面よりやや上層の比較的狭い範囲にまとまって出土していることから、土層などの観察からは全く把握できなかったけれども、本址が住居としての機能を失い埋められた後にあるいは墓塚などが営まれた可能性が否定できないことを付け加えておくが、それとても箱清水式の範疇に入るもので、住居址とはさほどの時間差のないものであろう。



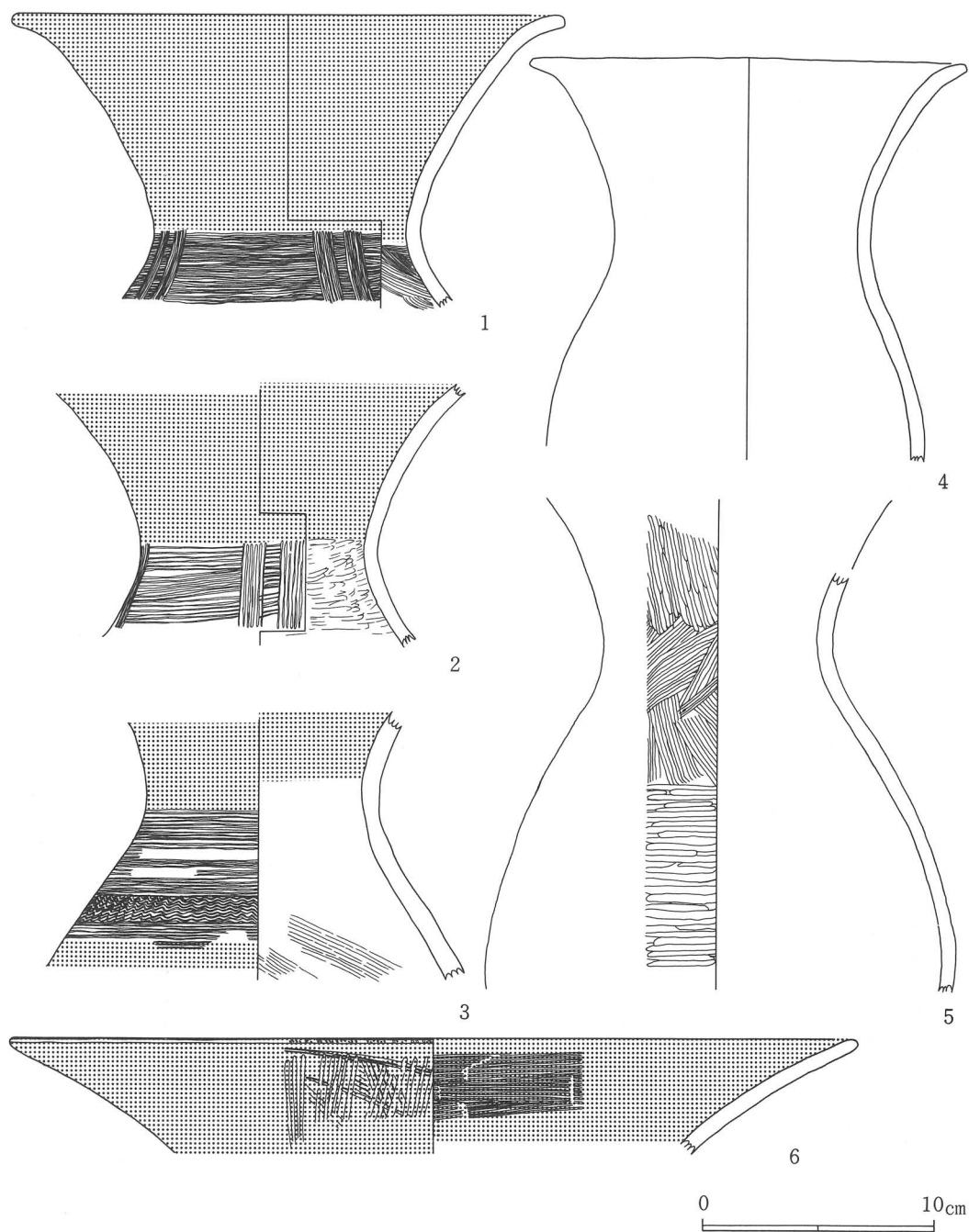
- 第1層 暗灰褐色土
小礫、黄色ブロックを多く含む
- 第2層 暗茶褐色土
比較的堅緻
- 第3層 黒褐色土
小礫、炭化物を多く含み、比較的堅緻
- 第4層 暗黒褐色土
礫、炭化物を多く含み、軟質で粘性強い
- 第5層 暗黄色土
やや粘性が強い



第82図 第62号住居址実測図

遺物 (第83図～第92図)

前述したとおり、本住居址からは膨大かつバラエティ豊かな遺物が出土した。土器のほとんど全ては弥生時代後期後半の箱清水式期に属する典型的なものであるが、観察の結果、該期でも後



第83図 第62号住居址出土遺物実測図(1)

出する特徴を備えていると言えるものである。

土 器

1. 壺 (第83図1～6)

おおまかに分けて、外面と内面頸部までを赤色塗彩し頸部から肩部にかけて文様帯をもつもの(1～3)、赤色塗彩されず文様帯もたないもの(4・5)、その他(6)とすることができる。

1・2は頸部から肩部にともに6本1単位・2条セットのT字文が4ヶ所に施されており、頸部から肩部にかけての内面は1はハケ、2はヘラで調整されている。1は肩部以下を、2は口縁部と肩部以下を欠失しているが、頸部から強く外反して口縁部に至り、その口縁部に最大径をもつと思われ、1は口縁部径24cmをはかる。3も1・2同様の器形を示すものだが肩部にT字文が施されず、9本1単位で5段施される櫛描直線文の上から4段目に同じ工具による櫛描波状文を施している。肩部以下の内面は斜めのハケ調整がわずかに認められるが、指頭によるていねいな調整が行われている。1～3とも明黄褐色を呈する。

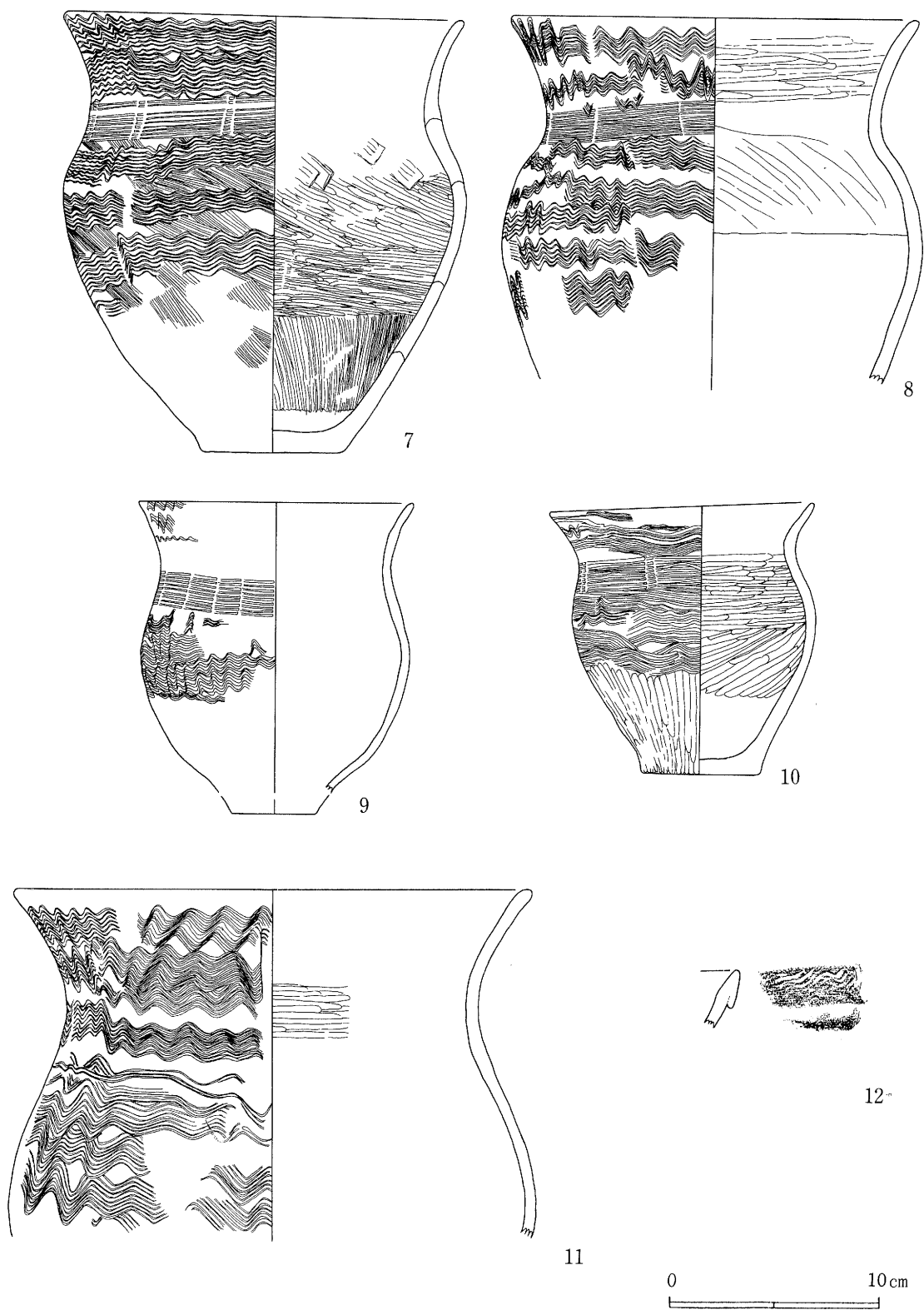
4は表面が荒れており観察が不可能だが、器形・胎土・色調ともに1～3に近く、むしろ1～3の部類とも思われるが、塗彩も文様も全て剥落するほどの荒れでもないのにそれらを認められないことからこちらに分類した。5は胎土精良であり焼成堅緻で内外面褐色を呈し、器形もやや細身を示すようである。文様は施されないが、頸部にあたかも文様帯のごとくに羽状のハケ目帯をめぐらし、その上部から口縁部に至るまでは縦位のヘラ磨きを、その下部の肩部から胴部にかけては横位のヘラ磨きを施している。

6は口縁部径37cmの大量量をはかる壺の口縁部で、頸部から強く外反し口縁部にいたる器形を示すものようであるが、残念ながら以下を欠き全体の形状は不明である。外面は斜位のヘラ磨きの上にさらに縦位のヘラ磨きを行っており、ヘラ磨きは全体に粗い。内面はていねいな横位のハケ調整が施されている。また、口唇部には細かい乱雑な刻み目を施す。胎土良好・焼成堅緻で、色調は内外面とも褐色を呈する。

1～4は千曲川水系弥生時代後期後半の箱清水式土器であり、壺形土器の典型と言えるが、5は器形的には1～4と同様に箱清水式土器あるいはその範疇にふくめられるものと思えるものの、胎土・色調および表面調整など異質な部分も多く、1～4に比べると後出するものと考えられよう。6も5と同様に1～4に比し後出するもので、箱清水式期に比定してよいか疑問点が存在する。むしろ、弥生時代最終末から古墳時代最初頭にかけての端境期に属する土器と考えた方が妥当と思われる。

2. 甕 (第84図7～13)

全て弥生時代後期後半の箱清水式期に属するものだが、法量・施文・口縁部形状(成形手法)などにバラエティがあり、(A)中型で頸部に櫛描簾状文を施し、頸部から口縁部と肩部から胴



第84图 第62号住居址出土遺物実測図(2)

部に櫛描波状文を施すもの(7・8)、(B)小型だが簾状文・波状文とも中型と同様のもの(9・10)、(C)大型で簾状文が施されず口縁部から胴部まで波状文のみで埋められているもの(11)、(D)折り返し口縁で、折り返された部分に波状文を施すもの(12)に区分することができよう。

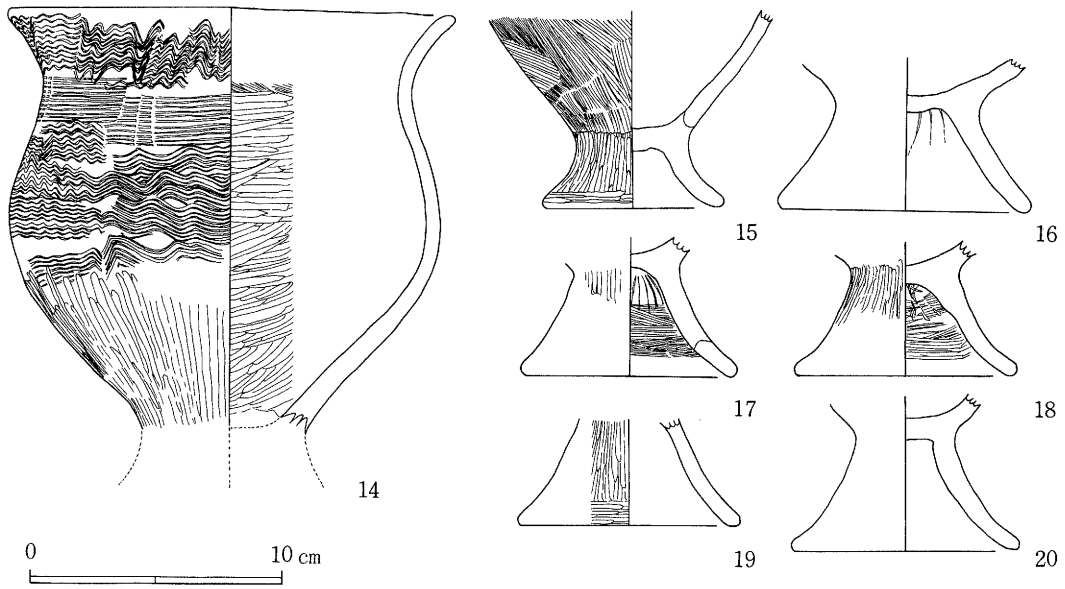
7は8とともにこの種の典型を示すもので、器高21cm、口縁部径19.3cm、最大径は胴部にあり19.5cmをはかる。外面は、7は簾状文が多段止めに、8は1段止めにされており、また、7は肩部から胴部にかけて斜位のハケ調整が行われ、その上に波状文が描かれている。内面は、7の胴部下半が縦位の、胴部中央が斜位のへら磨きが行われ、頸部にはハケ目も観察できる。8は口縁部が横位のへら磨き、肩部から胴部上半にかけて斜位のハケ調整が行われている。微砂粒を含む胎土良好で、焼成も良く、褐色ないし明褐色を呈する。

9・10は、7・8と同様の施文が行われているが、最大径を口縁部にもつ点で小型であるというだけでなくやや異なる所がある。9は口縁部径13.2cm、胴部径13cmを、10は最大器高13.2cm、口縁部径12.7cm、胴部径11.7をそれぞれはかる。施文は9がよりていねいで、9本1単位の工具による等間隔1段止めの簾状文と、7本1単位と思われる工具による波状文を描いている。しかし、表面の荒れが進み口縁部の波状文の多くは観察できない。10は2段止めの簾状文と乱雑な波状文を施し、胴部下半は縦位のへら磨きを行っている。内面は10のみ観察でき、胴部を斜位の、頸部から肩部にかけてを横位のへら磨きで調整している。胎土・焼成とも良好で褐色を呈する。

11は胴部下半および底部径25cm、胴部径25.4cmでこれが最大径となる。頸部に簾状文が施されず、全て9本1単位の工具による波状文で埋められている。ただし、同じ波状文でも頸部から口縁部にかけてと、肩部から胴部にかけての描き方には明瞭な違いがあり、2度に分けての施文が行われていることを示している。内部は頸部に横位のへら磨きが行われている。胎土に微砂粒・細砂粒を含み焼成良好で、色調は褐色ないし明褐色である。

12は口縁部破片で、折り返し口縁を呈する。折り返された部分には波状文が施され、その直下には施文を認められないが、おそらく波状文・簾状文が施されているものであろう。小破片なので全体形状は不明であるが、口縁部の形状を除くと7・8に近い器形および施文となるものと考えられる。

甕は全体に箱清水式土器に属するものである。¹²13は群馬県北西部を中心に広がりをもつ樽式土器が主に持つ特徴で千曲川流域にも多くの類例が認められるものである。



第85図 第62号住居址出土遺物実測図(3)

3. 台付甕 (第85図14~20)

出土量はあまり多くなく、全体の残るものはない。調整に若干の差異が存在するが、全体的には同一の類型に属するものである。

14は台部のみを欠失しており、甕部の遺存するものである。頸部には櫛描簾状文を、その上下に櫛描波状文を施しており、弥生時代後期後半の甕の施文の典型で、最大径は口縁部にあり17.9cmをはかり、胴部径は17.4cmを、台接合部までの高さ17.2cmをそれぞれはかる。施文と11本1単位と9本1単位の工具とが使用されているようだが、全体に乱雑で、とくに簾状文は器体を1周した時の元の位置とのずれが大きい。胴部下半は波状文施文の後に縦位のへら磨きを行っている。内面は胴部下半は斜位の上半は横位のへら磨きを行い、頸部にはへら磨き以前に行った斜位のハケ目が僅かに認められる。微砂粒を含む胎土は良好で、焼成も堅緻である。明褐色ないし灰褐色を呈する。

15は胴部上半以上を失っている。台部底径7.3cm、高さ内面で2.3cmの小型のものである。甕部の胴部外面はていねいな斜位のハケ調整が行われ、台部外面は縦位のへら磨きの後に縁の部分のみを横位のへら磨きで仕上げている。胎土良好・焼成堅緻で褐色の色調を示す。

16~20は台部のみが復元できたものだが、底径・高さともに差異があるものの成形・調整ともに別段異質なものはなく、外面は15と同様のへら磨き(17~19)、内面は横位のハケ調整(17・18)を行っている。

4. 高坏 (第86図21~30)

坏部内外面および脚部外面を赤色塗彩したもの(21~29)と、土師器高坏(30)とがある。

~~29)、土師器高坏(30)とがある。~~

21は口縁部径29.2cmをはかり、接合部から直線的に開き口縁部に至って平らに開く形状を示す通有のもので、脚部内面と接合部付近が縦位の、それ以下が横位のハケ調整をしている。22は内外面に赤色塗彩を施す点で21・22と同様であるが、坏部がやや内湾してふくらむ形状を呈する。外面に縦位の、内面に横位のハケ目がわずかに残されている。23で特記すべきことは、脚部が破損した後に接合直下を意図的に打ち欠き、打ち欠いた面を擦って平らにし他の器種に転用している点である。このことは27においても同様のことが行われている。24～26の脚部については外面赤色塗彩、内面斜位中心のハケ調整、スカート状の直線的形状というごく一般的なもので特筆することはない。底径はそれぞれ18.5cm、17.2cmをはかり、法量による分類はできる。

27は前述の通り23と同様に脚部欠損後、他の器種に転用されたものである。28・29も弥生時代後期後半の一般的な高坏の器形を示すものであろう。28は小型高坏で全体の形状が不明なので多く言えないが、21～27・29とは時期的に若干の差異があるものと思われる。

30は脚部に4孔を有する土師器高坏で、孔は4つとも等間隔に穿孔されている。全体の形状は不明であるが、脚端部は強く広がるものであろう。

高坏は土師高坏と時期的に差異があると考えられるものを各1点含むほかは、弥生時代後期後半の高坏としてごく一般的である。けれども、23・27にみられるような他の器種への転用というあまり類例のない事例が知られた。

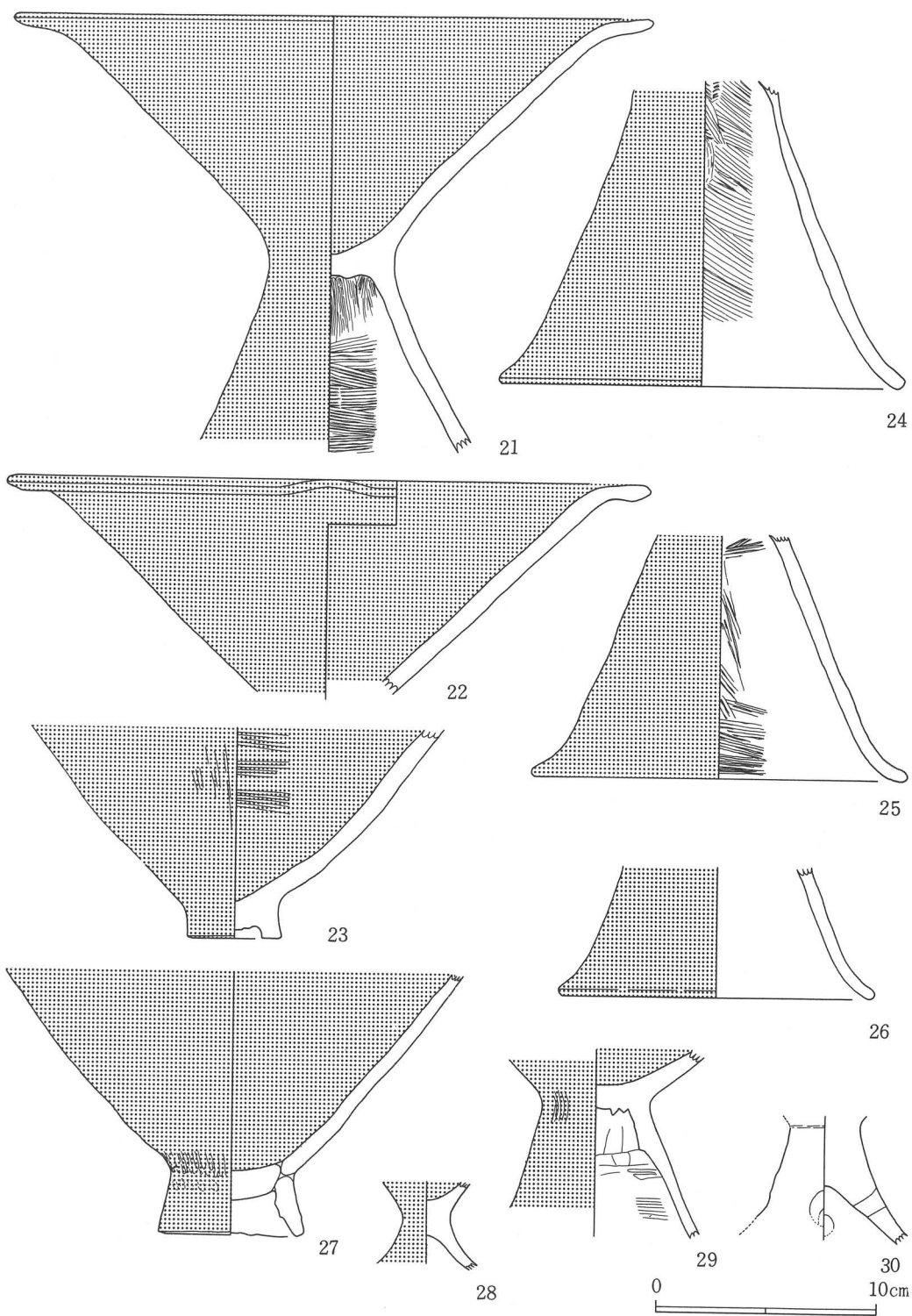
5. 深鉢 (第87図31～37)

いわゆる甕形の深鉢だが、頸部に2ヶ一對の小孔をもつもの(36・37)とまたないもの(31～35)に分類できる。また、外面は全面赤色塗彩されるが、内面の赤色塗彩が頸部あるいは胴部上半までの途中までのもの(31・32・34)と底部までの全面のもの(33・35～37)という分類もできる。どちらが機能により関わるということから、小孔の有無による分類をしておこう。

31～35は頸部に小孔をもたない。完形でないものの方が多いので、あるいは欠失している部分は小孔があった可能性は皆無ではない。しかし、小孔は2ヶ一對で2ヶ所にあるのが普通なので、そうすれば小孔はもともと穿たれなかったと言える。全て口縁部に最大径をもち、唯一全器形が知られる31によると、器高17.4cm、口縁部径17.4cm胴部径15.8cmをはかる。頸部のくびれの形状・全体の法量その他に若干の差異は存在するものの、およそ同様の形状を示すものと思われる。

36・37は頸部に2ヶ一對の小孔を2ヶ所に有する。内外面全面を赤色塗彩され、36は口縁部径16.3cm、胴部径14.8cmを、37は口縁部径16.6cm、胴部径14.6cmをそれぞれはかり、やはり口縁部に最大径をもつ。小孔が穿たれている頸部は、31～35が弱く「く」の字状であるのに比較してくびれが弱く、すんなりした「し」の字状を呈している。

深鉢は全て千曲川水系弥生時代後期後半の箱清水式土器の典型を示すものである。



第86图 第62号住居址出土遺物実測図(4)

6. 鉢 (第87図・第88図38~57)

内外面の全面にわたり赤色塗彩されるもの(38~53)、脚をもち脚内面を除き全面赤色塗彩されるもの(53~54)、全く塗彩されないもの(55~57)、の3分類ができ、法量の差や底部から口縁部に向かつての立ち上がり形状の差異などにより、さらに小分類もできる。

38~52は内外面全面に赤色塗彩されるが、38~43は小型、44~48・52は大型、49~51は中型とすることができよう。小型のものは器高6~7cmで、口縁部径11~14cmほどである。胴部立ち上がりが内湾するものと直線的なものがある。中型のものは全器形が分かるものがないが、口縁部径17~18cmのものがこれに含められる。大型は器高はまちまちだが口縁部契約20cmからそれ以上のもので、最大のもの口縁部径24.8cmをはかる。

脚をもつもの(53~54)は、脚内面を除き全面に赤色塗彩が施され、脚部の形状は台付甕の脚部に近似する。53の脚部内面は横位のへら磨き、54は横位・斜位めのハケ調整が行われている。

55~57の全く赤色塗彩されないものも大・中・小型に分けることができ、小型は口縁部径が11.5cm、中型は16.1cmをはかり、大型は29.2cmをはかる超大型である。56の外表面は粗いハケ目状の調整痕が残り、57は内外面ともへら磨きされている。

箱清水式土器における赤色塗彩される鉢が供献用であり、無彩のものが一般生活用什器(食器)だとすると、本住居出土の鉢は供献用のものが異常に多く、反対に一般生活用什器が異様に少ないと言える。それはともあれ、全て箱清水式土器に属することのできるものである。

7. 蓋 (第89図58~67)

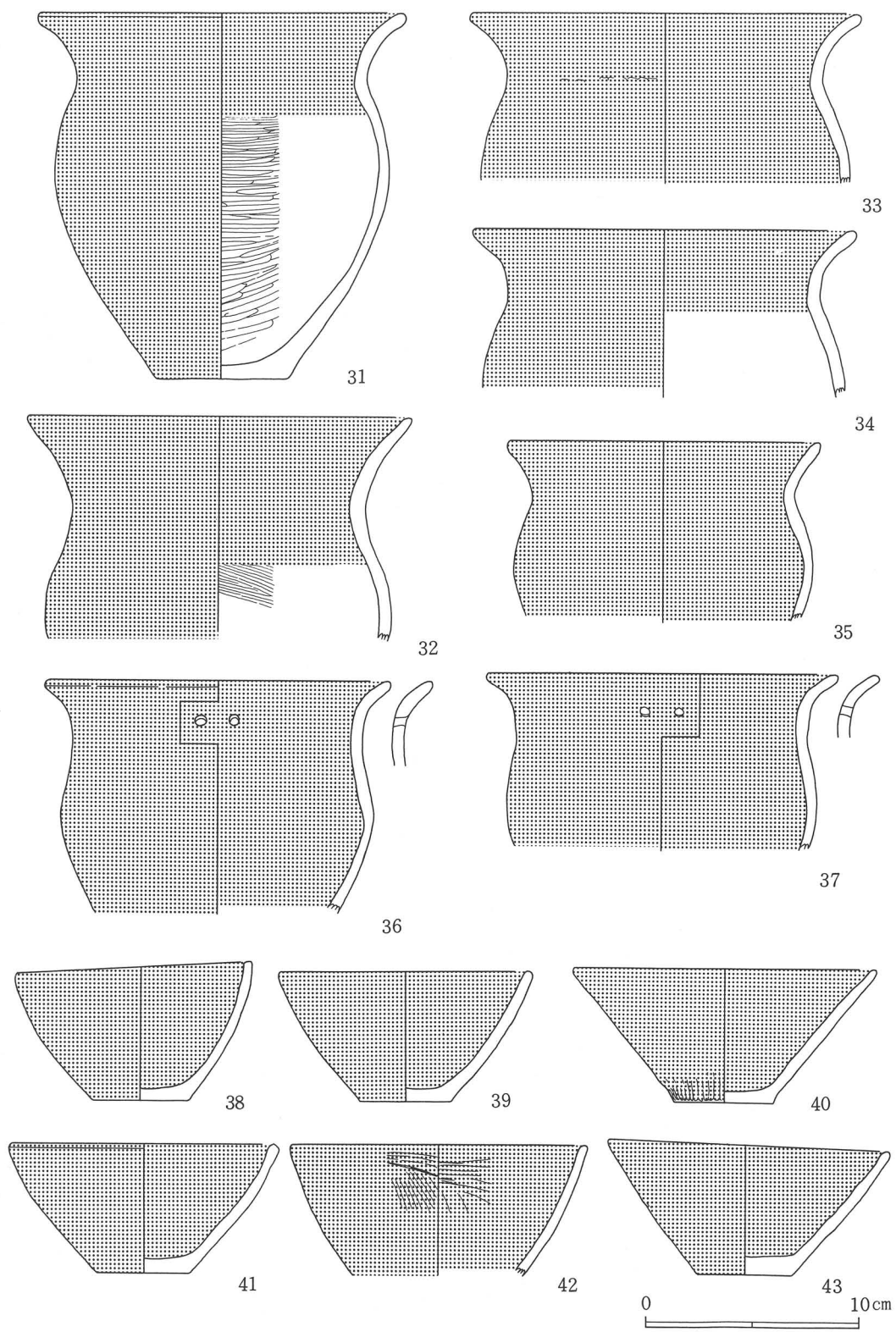
外面の全面を赤色塗彩するもの(58~62)としないもの(63~67)とに分けられる。天井部に小孔を有するもの(62)や、つまみをもたないもの(63)も存在する。

赤色塗彩されるものは全てつまみをもち、内面の調整はハケによるものとへら磨きによるものがある。62は天井部中央に2mmの1孔を有する。赤色塗彩されないものは内外面ともハケ調整されるものが多く、外面は縦位の、内面は斜位・横位の細かいハケ調整が行われている。つまみをもたない63は、逆転させると鉢状だが鉢とするには口縁部が外反しすぎるし、また、別の器種からの転用とも考えにくいので、やはり当初から蓋として製作されたものとすべきであろう。

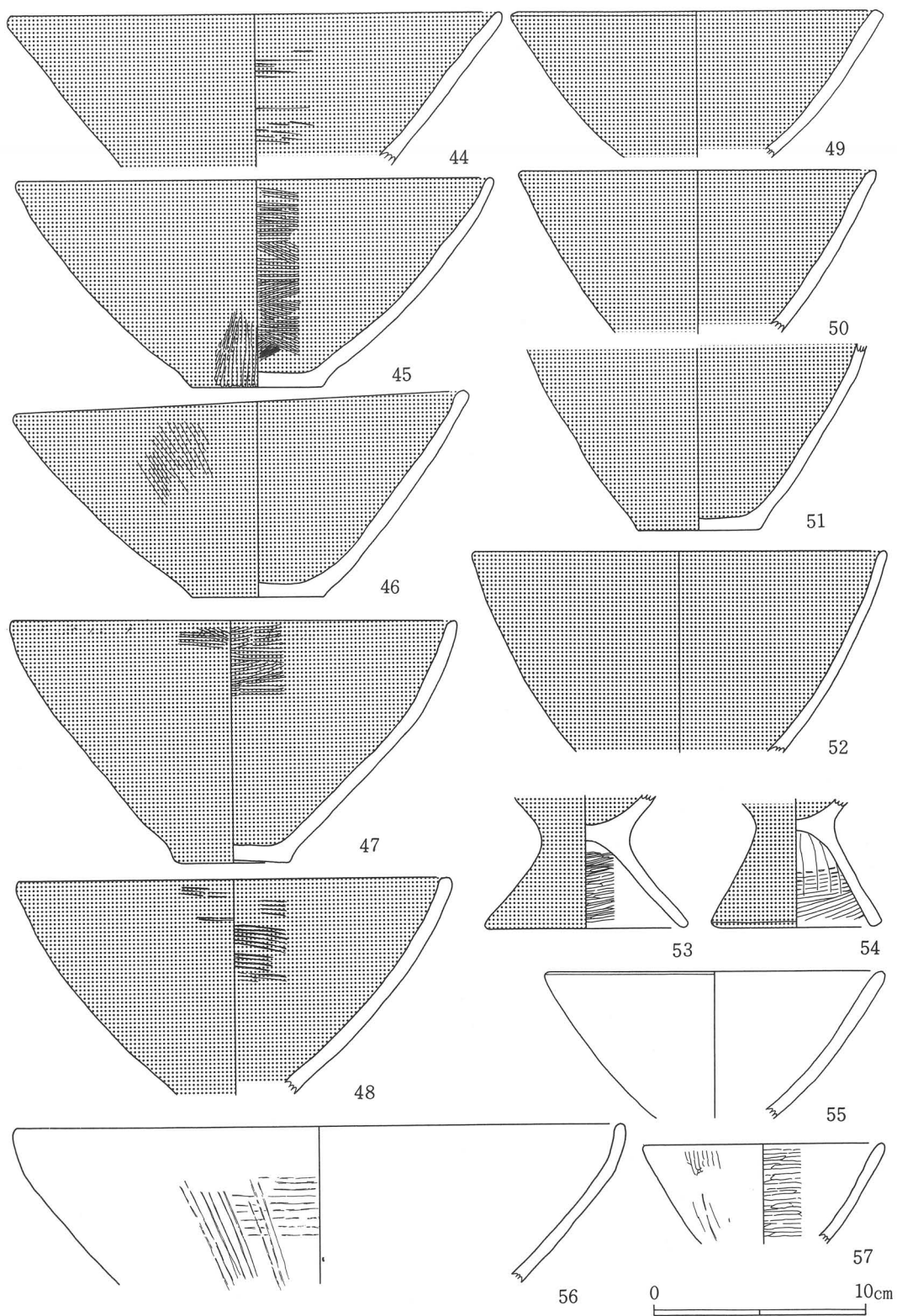
8. 甑 (第90図68・69)

ルート状で底部に1孔を穿たれた甑が2点出土した。68は全器形を推定できるものの成形が雑で、特に口縁部においては器高が9.5~11.7cmの差をはかるほど縁の凹凸がはげしい。口縁部径19.8cm、底部径5.0cm、孔径1.3cmをはかる。表面調整は外面は斜位の、内面は横位・斜位のハケ調整が行われている。69は成形・調整ともていねいだが、底部及び胴部下半のみが残存し、胴部上半と口縁部を欠いており全体は不明であるが、底部径5.4cm、孔径1.3cmはAに近似する値であるので、法量的にも似通ったものであろう。外面は底部近くは横位の細かいハケ目があり、それ以外は縦位・斜位のやや粗いハケ調整をし、その上に部分的な斜位のへら磨きが施されている。内面は細かい斜位のハケ調整が行われ、底部に指頭による押さえ痕が残されている。

68・69とも箱清水式期の甑として通有の形状のものである。



第87図 第62号住居址出土遺物実測図(5)



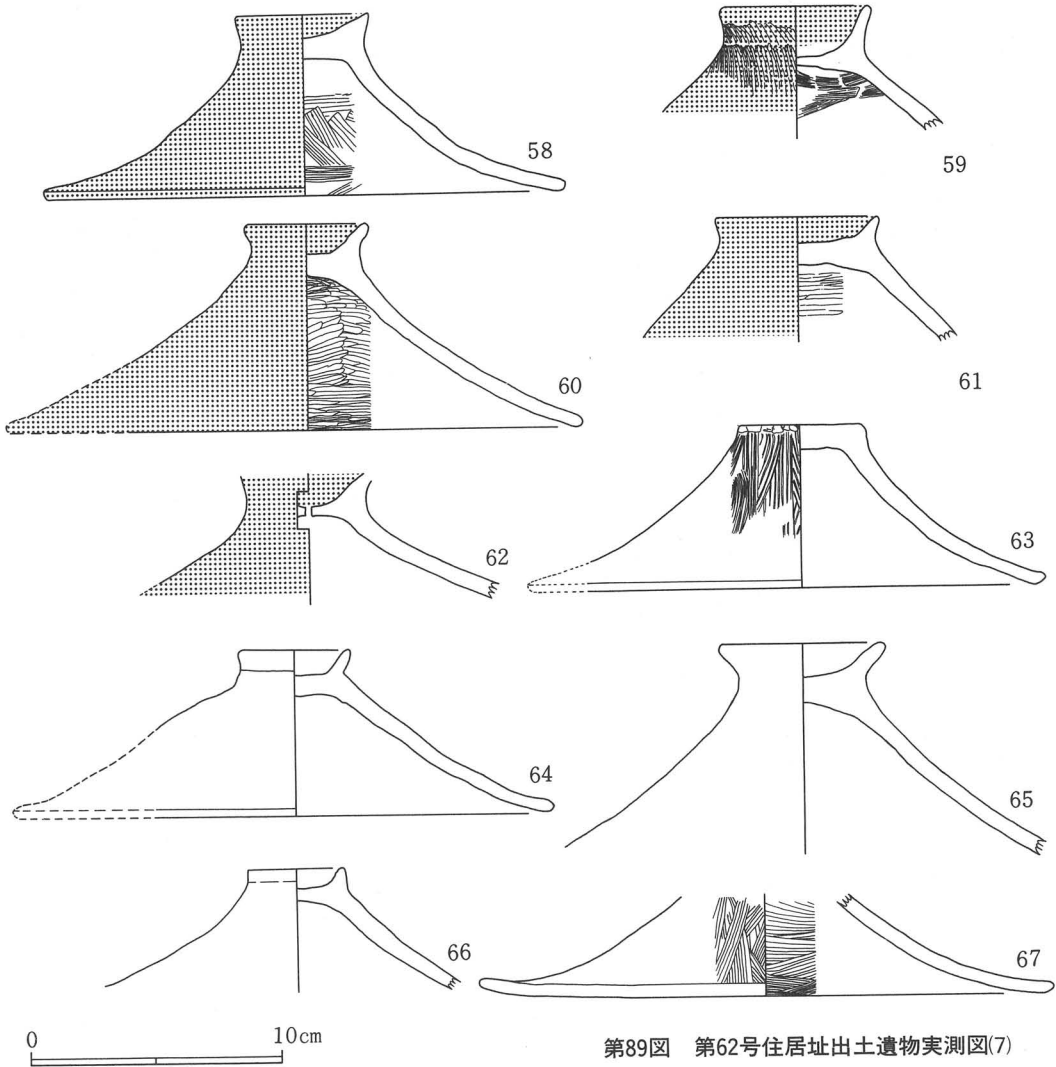
第88图 第62号住居址出土遺物実測図(6)

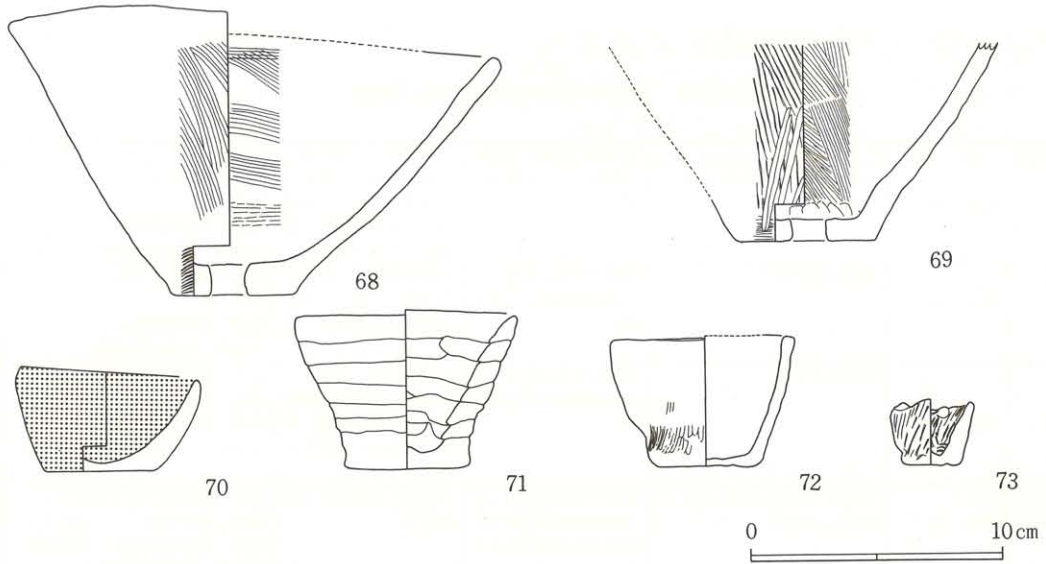
9. その他の土器 (第90図70~73)

ミニチュア土器・手づくね土器をここに分類した。

70~72は鉢状だが、一般的な鉢に分類しにくいものでこちらに含めたものである。70は内外面の全面は赤色塗彩が施された小型の鉢で、器高 3.6cm~ 4.2cm、口縁部径 7.2cmをはかる。これは、先に小型とした鉢のさらに1/2ほどの数値にしかない極小のものである。71も形態的には鉢形だが、成形後の調整を全く行わず底部の上に6段の輪積み痕をそのまま残したもので、これが何を意味するのかわかり不明である。器高 6.1cm~ 6.4cm、口縁部径 8.9cmをはかる小型鉢である。72も同様に鉢形で、器高 5.2cm、口縁部径 7.3cmをはかり、外面胴部下半に縦位のハケ磨きが行われている。

73は手づくね土器で、器高 2.2cm~ 2.6cm、口縁部径 3.0cmの極小型品である。口縁部凹凸がはげしく、内外面ともに粗いハケ目状の痕が見られる。





第90図 第62号住居址出土遺物実測図(8)

その他の遺物

1. 金属製品 (第91図74)

出土した金属製品としては、鉄斧(1)と、あまりに小破片ばかりで図示できなかったが銅釧とがある。
73

鉄斧は錆着が著しく細部については不明なてんが多いものの、長さ約12.0cm、幅 4.0cm～ 5.5cm、厚さ 1.0cm～ 2.0cm、重さ 242をはかり、平面形状は板状である。刃部形状は不明だが、断面から推定すると両刃を呈するものようで、小型品ながら縦斧の可能性が強いと言える。

銅釧は小破片の出土であまり量も多くなく、図示不可能であるが、弥生時代後期に属する銅釧は通有の形態と大きさを示すものと考えられる。

2. 石製品・ガラス製品 (第92図75～78)

石製品としては石包丁 (75)、磨製石鏃 (76)、細型管玉 (77) があり、他にガラス製品として小玉 (78) が各1点出土している。石包丁は頁岩製で淡緑色を呈し、長さ73mm、幅31mm、厚さ7mmを測り、半月形で1孔を有する。穿孔は両面より行われている。石鏃は粘板岩製で基部と刃部の一部を欠損しているが残存長37mm、幅20mm、厚さ 2.6mm測る。両面が丁寧に研磨されている。細型管玉は佐渡産の鉄石英製で深紅色を呈し、長さ14.7mm、径 2.5mmを測る。ガラス小玉は明黄色を呈し、径 4.6mm、厚さ 3.1mmを測る。
74

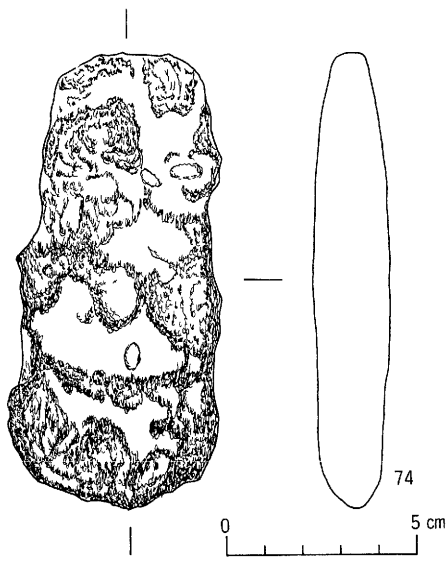
第21表 第62号住居址出土土器一覽表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
83-1	弥生・壺	口縁部～頸部 ほぼ完存	口径 24.2	口縁部大きく朝顔状に 開く。	口縁部外面へラ磨き。 内面横へラ磨き。胴部 内面斜め刷毛調整。頸 部にT字文を有する。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・口縁内面赤彩。
83-2	弥生・壺	頸部ほぼ完存		頸部で弓状に外反し、 口縁部朝顔状に大きく 開く。	口縁外面縦へラ磨き。 内面横へラ磨き。胴部 内面斜め刷毛調整。頸 部にT字文を有する。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・口縁内面赤彩。
83-3	弥生・壺	頸部ほぼ完存		頸部で弓状に外反し、 口縁部朝顔状に大きく 開く。	口縁外面縦へラ磨き。 内面横へラ磨き。胴部 内面斜め刷毛調整。頸 部に横線文・波状文を 有する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・口縁内面赤彩。
83-4	弥生・壺	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 19.0	頸部で弓状に外反し、 口縁部朝顔状に開く。 胴部は無花果形を呈す る。	外面縦へラ磨き？。内 面不明。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明赤褐色～黄茶褐色 *外面・口縁内面赤彩？。
83-5	弥生・壺	頸部～胴部 中位ほぼ完存		頸部で弓状に外反し、 胴部は無花果形を呈す る。	口縁外面縦へラ磨き。 胴外面横へラ磨き。内 面不明。頸部に羽状文 を有する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外茶褐色、内橙褐色
83-6	弥生・壺	口縁部 1/4	口径(37.0)	口縁部朝顔状に大きく 開く。	口縁部横ナデ。外面刷 毛調整+縦へラ磨き。 内面横刷毛調整。口唇 部に刻みを有する。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明褐色～明灰褐色 *外内面赤彩。
84-7	弥生・甕	ほぼ完存	口径 19.3 器高 21.0 底径 6.6	口縁部緩く外反し、胴 部は肩の張った器形を 呈する。	外面斜め刷毛調整+簾 状文+波状文。内面縦 ・横へラ磨き（一部刷 毛調整）。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色～黄灰褐色、内 くすんだ橙褐色
84-8	弥生・甕	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 19.6 、	口縁部緩く外反し、胴 部はやや球形に張る。	外面簾状文+波状文+ 縦へラ磨き。内面横へ ラ磨き・へラナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色～暗褐色、内明 茶褐色
84-9	弥生・甕	口縁部 1/2 胴部上位完存 胴部下位 1/2	口径 13.2	口縁部緩く外反し、胴 部はやや球形に張る。	外面簾状文+波状文+ 縦へラ磨き。内面横へ ラ磨き？。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内濃褐色
84-10	弥生・甕	口縁部 2/3 胴部上位～底 部完存	口径 12.7 器高 12.9 底径 5.7	口縁部僅かに「く」の 字状に外反し、胴部は 肩部でやや張る。	外面簾状文+波状文+ 縦へラ磨き。内面横・ 斜めへラ磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成： 良 色調：外褐色～暗褐色、内明 赤褐色
84-11	弥生・甕	口縁部～胴部 中位ほぼ完存	口径 25.0	口縁部緩く外反し、胴 部は球形に張る。	外面波状文。内面横へ ラ磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外茶褐色～暗褐色、内明茶 褐色
84-12	弥生・甕			口縁部外面に折り返さ れる。	口唇外面波状文。外内 面横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
85-13	弥生・甕	口縁部～胴部 下位完存	口径 18.0	口縁部やや強く外反 し、胴部は中位で張っ た後、脚台部へ急速に 収束する。	外面簾状文+波状文+ 縦へラ磨き。内面刷毛 調整+横・斜めへラ磨 き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明褐色～暗灰色、内明茶 褐色
85-15	弥生・甕	脚台部下位～脚 台部完存	裾径 7.4	脚台部大きく「ハ」の 字状に開く。	外面斜め刷毛調整・縦 へラ磨き。内面へラ磨 き。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含 焼成：良 色調：外暗灰色、内橙褐色～暗灰 色
85-16	弥生・甕	脚台部完存	裾径 10.1	脚台部大きく「ハ」の 字状に開く。	外面縦へラ磨き？。内 面ナデ。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内茶褐色
85-17	弥生・甕	脚台部完存	裾部 9.0	脚台部大きく「ハ」の 字状に開く。	外面縦へラ磨き。内面 横刷毛調整。裾部横ナ デ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色～黒灰色

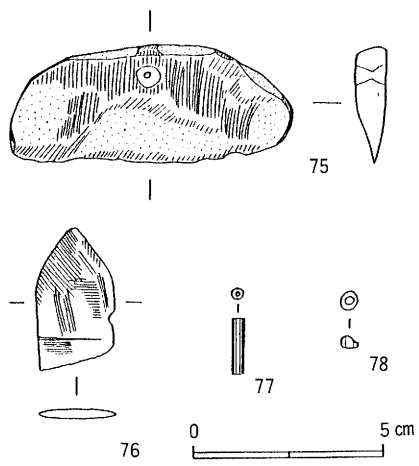
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
85-18	弥生・甕	脚台部完存	裾部 8.7	脚台部大きく「ハ」の字状に開く。	外面縦へら磨き。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色～灰色
85-19	弥生・甕	脚台部完存	裾径 9.0	脚台部大きく「ハ」の字状に開く。	外面縦へら磨き。裾外面横へら磨き。内面不明。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外灰色かかった橙褐色、内褐色
85-20	弥生・甕	脚台部完存	裾径 9.2	脚台部大きく外反して開く。	外内面ナデ？	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明茶褐色
86-21	弥生・高坏	坏部 1/3 接合部～脚部 中位ほぼ完存	口径 29.2	坏部僅かに外反しながら開き。端部で更に緩く外反する。口唇部に山形突起を有する。	口唇部横へら磨き。外面縦へら磨き。坏内面斜めへら磨き。脚内面縦・横刷毛調整。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色～灰色 *外面・坏内面赤彩。
86-22	弥生・高坏	坏部ほぼ完存	口径 28.7	坏部直線的に開き、端部で水平に外反する。口唇部に山形突起を有する（4ヶ所）	口唇部横へら磨き。外面縦へら磨き。坏内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
86-23	弥生・高坏	坏部中位～接合部ほぼ完存		坏部内湾して開く。	外面縦刷毛調整+縦へら磨き。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内橙褐色 *外内面赤彩。鉢として転用？。
86-24	弥生・高坏	脚部ほぼ完存	裾径 18.6	脚部ラップ状を呈し、裾部で大きく開く。	外面縦へら磨き。内面斜め刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面赤彩。
86-25	弥生・高坏	脚部完存	裾径 17.2	脚部ラップ状を呈し、裾部で大きく開く。	外面縦へら磨き。内面斜め刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内橙褐色 *外面赤彩。
86-26	弥生・高坏	脚部下位 1/2	裾径 13.4	脚部ラップ状を呈し、裾部で大きく開く。	外面縦へら磨き。内面へら磨き。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面赤彩。
86-27	弥生・高坏	坏部 2/3 接合部完存		坏部僅かに内湾して開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内黒灰色 *外内面赤彩。鉢として転用？。
86-28	弥生・高坏 ミニチュア	接合部完存		脚部外反して開く。	外面縦へら磨き。脚内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 *外面赤彩。
86-29	弥生・高坏	接合部～脚部 中位完存			外面縦へら磨き。坏内面へら磨き。脚内面刷毛調整+ナデ？	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内灰黒色 *外面・坏内面赤彩。
86-30	土師・高坏	接合部～脚部 中位ほぼ完存		裾部に向かって大きく開く。	外内面ナデ？	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
87-31	弥生・深鉢	口縁部 1/2 頸部～底部ほぼ完存	口径 17.5 器高 17.3 底径 6.2	口縁部やや強く外反し、胴部は肩部で緩く球形に張る。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外面・口縁内面赤彩。
87-32	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/2	口径 19.2	口縁部緩く外反し、胴部は肩部で弱く張る。	外内面横刷毛調整+横・斜めへら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色 *外面・口縁内面赤彩。
87-33	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/2	口径 18.5	口縁部やや強く外反し、胴部は肩部で弱く張る。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
87-34	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/3	口径 18.2	口縁部やや強く外反し、胴部は肩部で弱く張る。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外・口縁内面赤彩。
87-35	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/2	口径 14.8	口縁部外反し、胴部は肩部で弱く張る。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
87-36	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/2	口径 16.4	口縁部緩く外反し、胴部は肩部で弱く張る。頸部に一對の小孔を有する。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。37と同一個体か。

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
87-37	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/2	口径 16.6	口縁部緩く外反し、胴部は肩部で弱く張る。頸部に一對の小孔を有する。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。36と同一個体か。
87-38	弥生・鉢	口縁部 1/2 底部完存	口径 11.2 器高 6.3 底径 4.4	内湾して開き、口縁部でさらに内湾する。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良色調：外内暗茶褐色 *外内面赤彩。
87-39	弥生・鉢	口縁部～底部 1/2	口径 12.0 器高 6.2 底径 4.3	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。41と同一個体か。
87-40	弥生・鉢	口縁部 1/4 底部完存	口径 14.2 器高 6.4 底径 4.5	底部から口縁部にかけて直線的に開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
87-41	弥生・鉢	口縁部～底部 1/2	口径 12.6 器高 6.1 底径 4.3	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。39と同一個体か。
87-42	弥生・鉢	口縁部 2/3	口径 14.1	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外内面横・斜め刷毛調整へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
87-43	弥生・鉢	口縁部 3/4 底部完存	口径 12.0 器高 6.2 底径 4.3	底部から口縁部にかけて直線的に開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
88-44	弥生・鉢	口縁部～体部 中位	口径(23.5)	底部から口縁部にかけて直線的に開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面刷毛調整+横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
88-45	弥生・鉢	口縁部 1/4 底部完存	口径(22.8) 器高 9.9 底径 6.2	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-46	弥生・鉢	口縁部 1/2 底部完存	口径 21.8 器高 9.3 底径 6.2	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面斜め刷毛調整+縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
88-47	弥生・鉢	口縁部 1/2 底部完存	口径 21.3 器高 11.6 底径 5.4	底部から口縁部にかけて内湾しながら開く。	口縁部横刷毛調整。外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-48	弥生・鉢	口縁部～体部 下位～1/3	口径(20.7)	僅かに内湾しながら開く。	外面横刷毛調整+縦へら磨き。内面横刷毛調整+横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-49	弥生・鉢	口縁部～体部 下位～1/4	口径(16.1)	僅かに内湾しながら開く。口唇部面取りされる。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明茶褐色 *外内面赤彩。
88-50	弥生・鉢	口縁部～体部 下位～1/3	口径(17.0)	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-51	弥生・鉢	体部下位 1/4 底部完存	底径 5.7	僅かに内湾しながら開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-52	弥生・鉢	口縁部～体部 下位 1/3	口径 19.7	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
88-53	弥生・鉢	脚台部完存	裾径 9.7	脚台部「ハ」の字状に開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内褐色～暗褐色 *外面・坏部内面赤彩。
88-54	弥生・鉢	接合部完存 裾部 3/4	裾径 8.1	脚台部「ハ」の字状に開く。	外面縦へら磨き。内面斜め刷毛調整。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良色調：外内明茶褐色 *外面・坏部内面赤彩。高坏再生品。
88-55	弥生・鉢	口縁部～体部 下位 1/3	口径(15.9)	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良色調：外内明褐色

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
88-56	弥生・鉢	口縁部～体部 中位 1/5	口径(29.2)	僅かに内湾しながら開き、口縁部で更に内湾する。	口縁部横ナデ。外面横・斜め刷毛調整。内面横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内褐色～黒褐色
88-57	弥生・鉢	口縁部～体部 下位 1/4	口径(11.5)	僅かに内湾しながら開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
89-58	弥生・蓋	摘み部完存 裾部 1/6	摘み径5.3 器高 7.2 裾径(21.0)	天井部から裾部にかけて、大きく外反して開く。	外面縦へら磨き。内面斜め刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外面・摘み内面赤彩。
89-59	弥生・蓋	摘み部～天井部 完存	摘み径6.1	大きく外反して開く。	摘み内面横ナデ。外面縦へら磨き。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色 *外面・摘み内面赤彩。
89-60	弥生・蓋	摘み部完存 裾部 1/4	摘み径5.0 器高 8.2 裾径(23.2)	天井部から裾部にかけて、大きく外反して開く。	外面縦へら磨き。内面横・斜めへら磨き。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色 *外面・摘み内面赤彩。
89-61	弥生・蓋	摘み部～天井部 完存	摘み径6.5	大きく外反して開く。	摘み内面横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・摘み内面赤彩。
89-62	弥生・蓋	摘み部～天井部 ほぼ完存		大きく外反して開く。天井部に1孔を有する。	摘み内面横ナデ。外面横・縦へら磨き。内面へら磨き？。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗茶褐色 *外面・摘み内面赤彩。
89-63	弥生・蓋	摘み部完存 裾部 1/5	摘み径4.7 器高 6.6 裾径(20.8)	平坦な天井部から裾部にかけて大きく外反して開く。	外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
89-64	弥生・蓋	摘み部完存 裾部 1/3	摘み径4.4 器高 6.7 裾径(21.7)	天井部から裾部にかけて、大きく外反して開く。	外内面ナデ。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗黄褐色～黒灰色、内暗褐色
89-65	弥生・蓋	摘み部～天井部 ほぼ完存	摘み径6.6	大きく外反して開く。	摘み内面横ナデ。外内面へら磨き？。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色
89-66	弥生・蓋	摘み部ほぼ完存 天井部 1/2	摘み径4.0	大きく外反して開く。	摘み内面横ナデ。外内面へら磨き？。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色～暗灰色
89-67	弥生・蓋	裾部ほぼ完存	裾径 23.0	大きく外反して開き、裾部で僅かに反り返る。	外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外橙褐色～黒灰褐色、内黒褐色
89-68	弥生・甌	ほぼ完存	口径 19.8 器高 11.5 底径 4.9	僅かに内湾しながら開く。底部に1孔を有する。	口縁部横ナデ。外面斜め刷毛調整。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内黒灰色～橙褐色 *器形の歪みが著しい。
89-69	弥生・甌	体部 1/4 底部完存	底径 5.4	底部から口縁部にかけて直線的に開く。底部に1孔を有する。	外面縦刷毛調整+縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内黒灰色～暗灰色
89-70	弥生・ミニチュア	完存	口径 7.2 器高 4.0 底径 4.8	体部内湾する。	口縁部横ナデ。外内面横へら磨き+ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色 *外内面赤彩。
89-71	弥生・ミニチュア	口縁部 3/4 底部完存	口径 8.9 器高 6.4 底径 5.0	体部僅かに内湾する。6段の輪横み痕を明瞭に残す。	口縁部横ナデ。外内面押圧+ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外褐色、内明茶褐色
89-72	弥生・ミニチュア	口縁部 1/2 底部完存	口径 7.3 器高 5.2 底径 3.8	体部内湾する。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
89-73	弥生・手づくね	完存	口径 3.0 器高 2.6 底径 2.1		手づくね	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色



第91图 第62号住居址出土遺物実測図(9)



第92图 第62号住居址出土遺物実測図(10)

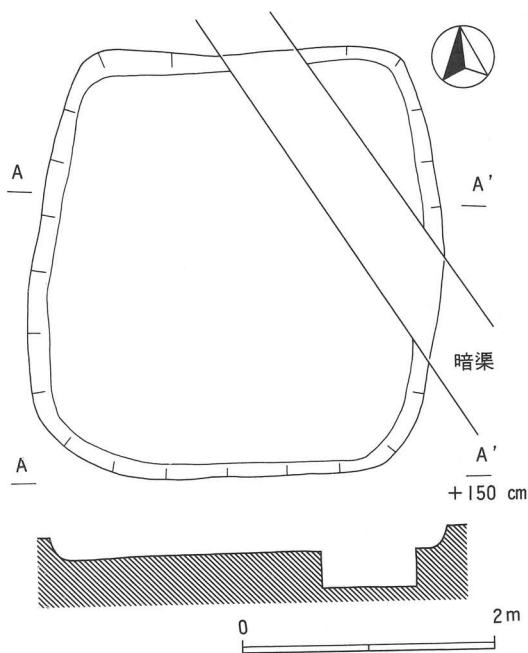
(35) 第63号住居址 (S B63)

遺構 (第93図)

本住居址はD区中央部東寄りのグリッドT・U-21・22において第64・65号住居址を切って検出された。規模は南北 3.4m、東西 3.3mを測り、平面プランは南北に僅かに長い隅丸方形を呈している。南北の主軸方向はN-7°-Eを示す。残存する壁高は12~23cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面は一部で礫が露出しやや凹凸があるもののほぼ平坦で、覆土は暗茶褐色土の単一層であった。

遺構掘り下げ中に西壁中央部において若干の焼土が検出されたが、カマド等の確認には至らなかった。柱穴は検出されなかった。

本址は第64・65号住居址を切って構築され、また、最近の暗渠によって切られており、出土遺物より古墳時代後期の所産と推定される。

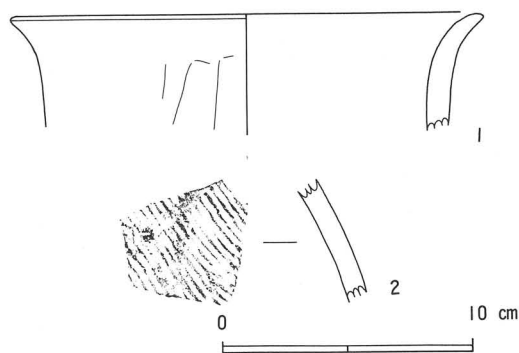


第93図 第63号住居址実測図

遺物 (第94図)

本址からは土師器と須恵器の小片が僅か出土した。土師器の器種には甕、内黒坏等があり、須恵器の器種には甕がある。これらの遺物のうち図示できたのは2点に過ぎない。

1は土師器の長胴甕で緩く僅かに外反する口縁部を持つ。2は須恵器の甕で外面は平行叩き目痕が残り、内面はナデ整形されている。



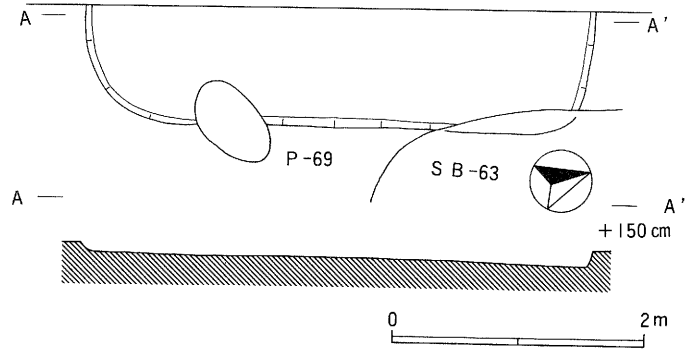
第94図 第63号住居址出土遺物実測図

第22表 第63号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
94-1	土師・甕	口縁部1/10	口径(19.0)	口縁部緩く僅かに外反する。	口縁部横ナデ。外面縦へら削り。内面横へら削り。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明灰褐色
94-2	須恵・甕				外面叩き。内面横削り+ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明灰色 *外面に濃緑色の自然釉かかる。

(36) 第64号住居址 (S B 64 第95図)

本住居址はD区中央部東寄りのグリッドU-21~23において第63・65号住居址、P-69と重複して検出された。遺構の西側は調査区域外にあり、全体の規模は不明であるが、平面プランはN-18°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形と推定され、南北長は4.1m、調査された部分の東西



第95図 第64号住居址実測図

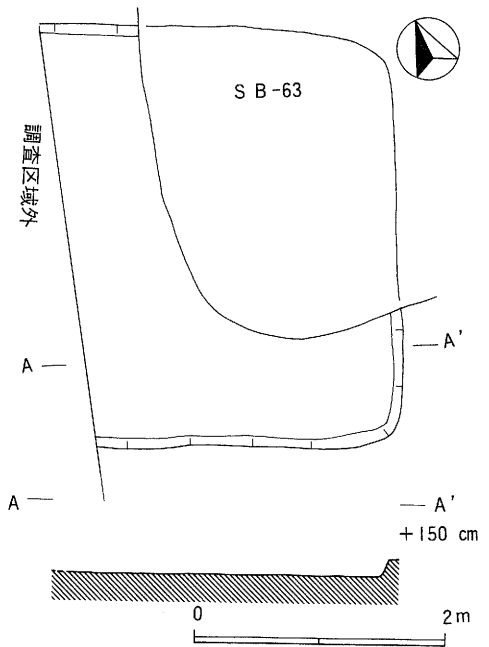
長は1.0mを測る。残存する壁高は6~13cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で柱穴等の施設は検出されなかった。覆土は小礫を含んだ暗茶褐色土の単一層である。

本址は第65号住居址を切って構築された後、第63号住居址、P-69によって切られている。遺物は弥生土器、土師器の細片が僅か出土しているが、確実に本址に伴うと推定されるものは無く所産期は不明である。

(37) 第65号住居址 (S B 65)

遺構 (第96図)

本住居址はD区中央部東寄りのグリッドT・U-21・22において第63・64号住居址と重複して検出された。遺構の西側は調査区域外にあり、東北部も第63号住居址によって破壊されているため、全体のプランはやや不明確であるが、隅丸(長)方形を呈すると推定され、南北長は3.4m、調査された部分の東西長は2.8mを測る。南北の主軸方向はN-24°-Eを示す。残存する壁高は14~20cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗黒褐色土の単一層である。炉址、柱穴等の施設は検出されなかった。



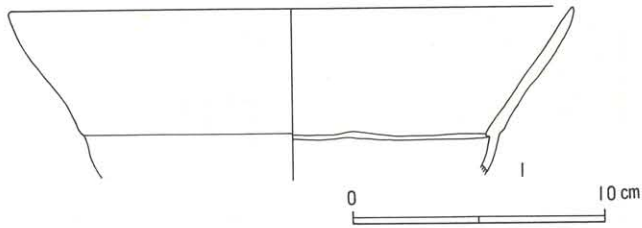
第96図 第65号住居址実測図

本址は第63・64号住居址によって切られており、出土遺物より古墳時代前期の所産と推定される。

遺物 (第97図)

本址からは土師器の小細片が少量出土した。器種には甕、高坏、鉢等があるが、図示できたのは1点のみである。

1は鉢で、長く僅かに内湾する口縁部と半球形の体



第97図 第65号住居址出土遺物実測図

部を持ち、所謂小型丸底土器と相似の器形を呈するが、口径22.6cmを測る大形品である。他に、細かい刷毛整形された球形胴を呈する甕の小片なども出土している。

第23表 第65号住居址出土土器一覧表

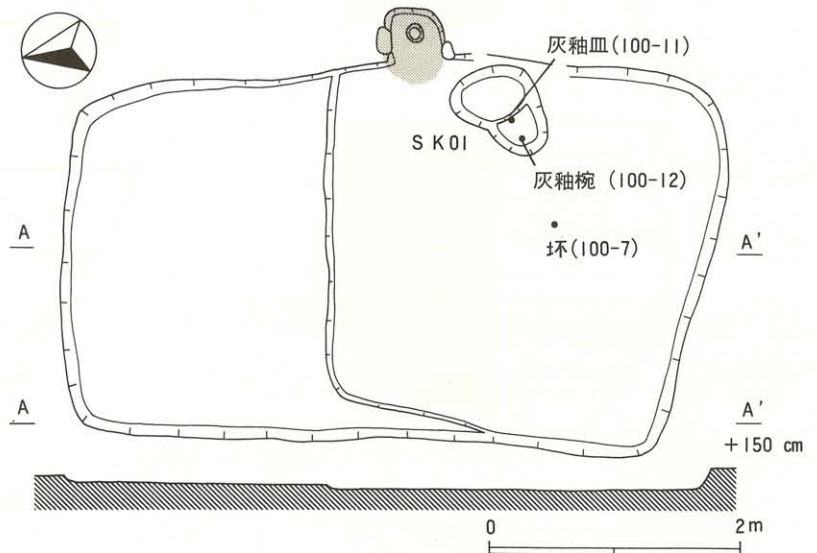
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
97-1	土師・鉢	口縁部～体部 上位2/3	口径 22.7	浅い半球形の体部と、長く僅かに内湾する口縁部を持つ。	口唇部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：石英・長石を多量に含む。 焼成：良 色調：外暗灰褐色 内暗赤褐色

(38) 第66号住居址 (S B66)

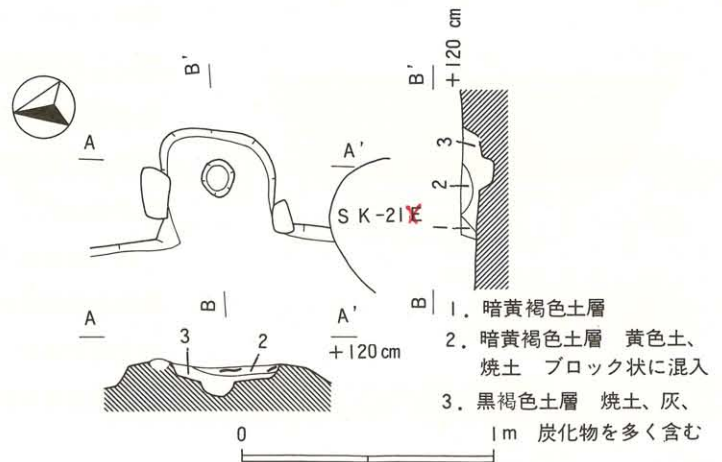
遺構 (第98・99図)

本住居址はD区中央部東寄りのグリッドT・U-22～24において第67号住居址等と重複して検出された。平面プランは東壁のやや長い隅丸長方形を呈し、規模は南北 5.2m、東西 3.1mを測る。主軸方向はN-20°-Eを示す。残存する壁高は9～16cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、住居址南側カマド周辺の約3/5ほどの範囲が4cmほど深く掘り込まれていた。覆土は小礫を多く含んだ暗茶褐色土の単一層である。

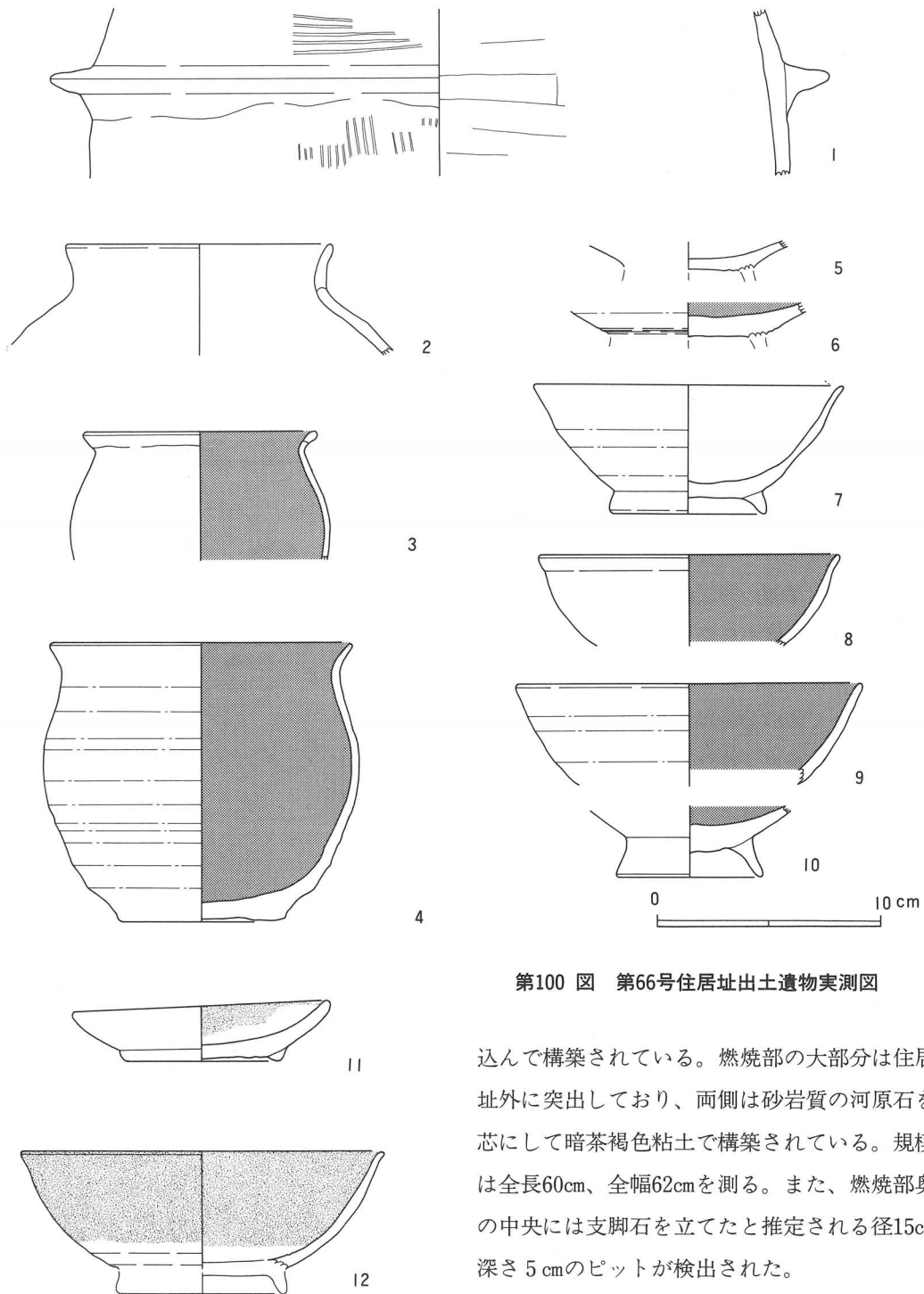
カマドは東壁中央部、やや南寄りに設置されており、壁面を「コ」の字形に掘り



第98図 第66号住居址実測図



第99図 第66号住居址カマド実測図



第100 図 第66号住居址出土遺物実測図

込んで構築されている。燃烧部の大部分は住居址外に突出しており、両側は砂岩質の河原石を芯にして暗茶褐色粘土で構築されている。規模は全長60cm、全幅62cmを測る。また、燃烧部奥の中央には支脚石を立てたと推定される径15cm、深さ5cmのピットが検出された。

柱穴は検出されなかったが、カマド右側に貯蔵穴と推定される土壌1基が検出された。2つの土壌が連結したような不整形を呈し、80×60cm、深さ6～14cmの規模を有する。

第24表 第66号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
100-1	土師・羽釜	鏝部 1/4		口縁部にもけて内湾する。鏝部はほぼ水平。	外面横・縦刷毛調整。横へラ削り+ナデ。	胎土：金雲母・石英・砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色 *外面煤付着。
100-2	土師・壺	口縁部～胴上位1/4	口径(12.0)	口縁部短く直立気味に外反。	口縁部横ナデ。胴部外面横刷毛調整?。内面横ナデ。	胎土：細砂粒多く含む 焼成：やや不良 色調：外内暗橙褐色
100-3	土師・甕	口縁部～胴部上位1/3	口径(10.6)	口縁部短く「く」の指状に外反し、端部僅かに肥厚する。	口縁部横ナデ。胴部外面クロコナデ。内面へラ磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内黒色
100-4	土師・甕	口縁部1/3 胴部上位1/6 胴部下位1/4	口径(13.6) 器高 12.6 底径 7.0	口縁部緩く「く」の字状に外反する。底部回転系切り。	口縁部横ナデ。胴部外面クロコナデ。内面へラ磨き?。	胎土：細砂粒多く含む 焼成：良 色調：外淡橙褐色、内暗灰褐色 *二次焼成を受ける。
100-5	土師・皿	底部完存		付け高台(欠損)。底部回転系切り。	外面クロコナデ。内面ナデ。	胎土：黒雲母・細砂粒片を少し含む 焼成：良 色調：外内明橙色
100-6	土師・皿	底部完存		付け高台(欠損)。底部回転系切り。	外面クロコナデ。内面へラ磨き。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内黒色
100-7	土師・坏	体部1/4 底部～高台部完存	口径(14.0) 器高 5.8 底径 7.0	付け高台。口縁部僅かに外反する。底部回転系切り。	外面クロコナデ。内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
100-8	土師・坏	口縁部～体部1/8	口径(13.6)	口縁部僅かに外反する。	口縁部横ナデ。外面クロコナデ。内面横へラ磨き。	胎土：小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
100-9	土師・坏	口縁部～体部1/8	口径(15.6)	口縁部僅かに外反する。	口縁部横ナデ。外面クロコナデ。内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内黒色
100-10	土師・坏	高台部完存	底径 6.6	付け高台。底部回転系切り。	外面クロコナデ。内面へラ磨き。	胎土：細砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外明灰褐色、内黒色
100-11	灰釉・皿	ほぼ完存	口径 11.6 器高 2.7 底径 6.9	付け高台。体部緩く内湾する。底部回転系切り。	口縁部横ナデ。外内面クロコナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内乳白色～明灰色 *口縁部内面のみ施釉、不発色。
100-12	灰釉・椀	口縁部～体部1/4	口径(16.4)	口縁部僅かに外反する。	外内面クロコナデ。外面底部回転へラ削り。	胎土：緻密で精良 焼成：良 色調：外内明白灰色 *内外面施釉、不発色。

本址は第67号住居址を切って構築され、第21号土壌によって切られており、所産期は重複関係、出土遺物等から平安時代後期と推定される。

遺物(第100図)

本址からは土師器片、灰釉陶器片、鉄製品と少量の混入遺物が出土している。土師器の器種には羽釜、壺、甕、皿、高台付坏等があり、灰釉陶器の器種には、皿と椀がある。鉄製品は薄板状の製品が出土しているが腐食が著しく図示できない。これらの遺物のうち図示できたのは12点である。

1は羽釜で、小砂粒、金雲母等を多量に含んだ砂質の脆い胎土で作られ、水平に伸びた肉厚の鏝部を持つ。外面は荒く刷毛整形され、鏝部より下部は全体に煤が付着している。2は壺で大きく張った球形胴に短く僅かに外反する口縁部を持つ。3・4は甕で共にクロコ成形され、内面は黒色処理されている。3は「く」の字状に短く、強く外反する口縁部を持ち、口縁端部はやや肥

厚している。4は緩く「く」の字状に外反する口縁部を持ち、底部には回転糸切り痕が残る。二次焼成を受けており、内面黒色処理は殆ど剥落している。5・6は皿で、共に高台部分は欠損している。6は内面が黒色処理されている。7～10は高台付坏で、7を除き内面は黒色処理されている。いずれも口縁部は僅かに外反し、7の高台断面は三日月状を呈する。また、10の高台は僅かに外反しながらも直線的に「ハ」の字状に開く、所謂足高高台である。5～10の皿、坏の底面にはやや不明瞭ながら、いずれも回転糸切り痕が残る。

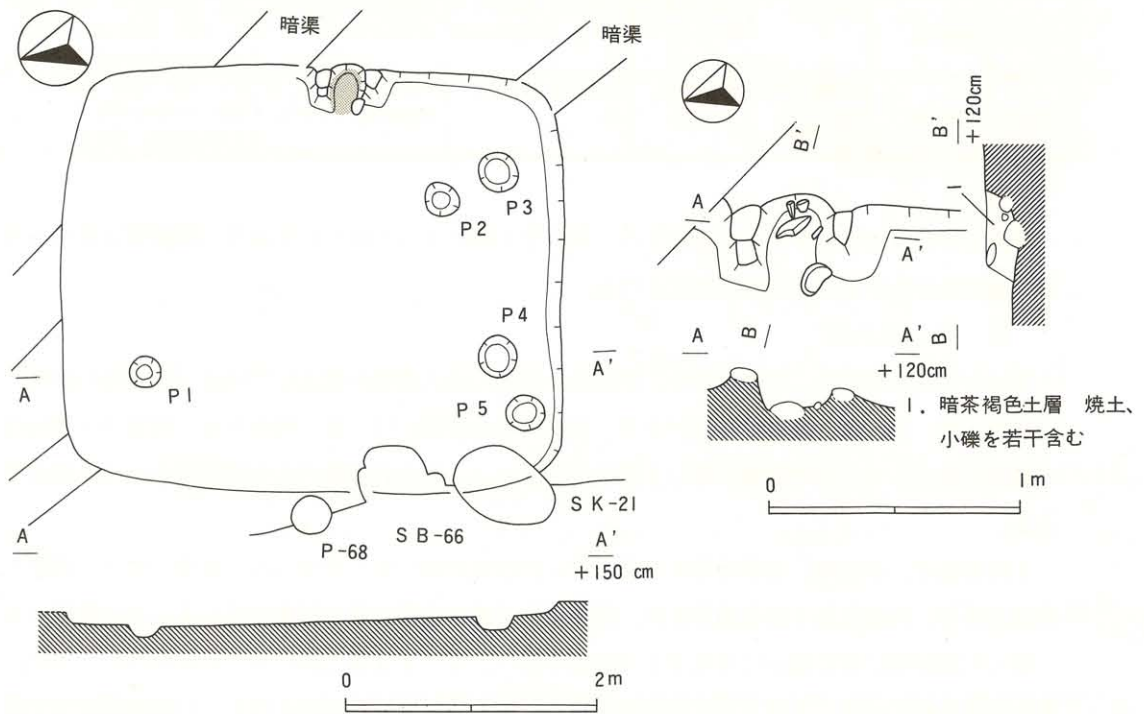
11・12は共にカマド脇のSK01内より出土している。11は完形で出土した皿で、肉厚の皿部に僅かに半円形の高台を貼付けている。施釉は口縁部内面のみに行われているが、ほとんど発色していない。12は椀で、明白灰色の精良な胎土で比較的丁寧に成形されている。底部を欠損しているが、内面底部には重ね焼きの高台痕が残る。施釉は漬け掛けにより内外面に行われているが、11と同じくほとんど発色しておらず、僅かに痕跡が観察されるのみである。

(39) 第67号住居址 (S B 67)

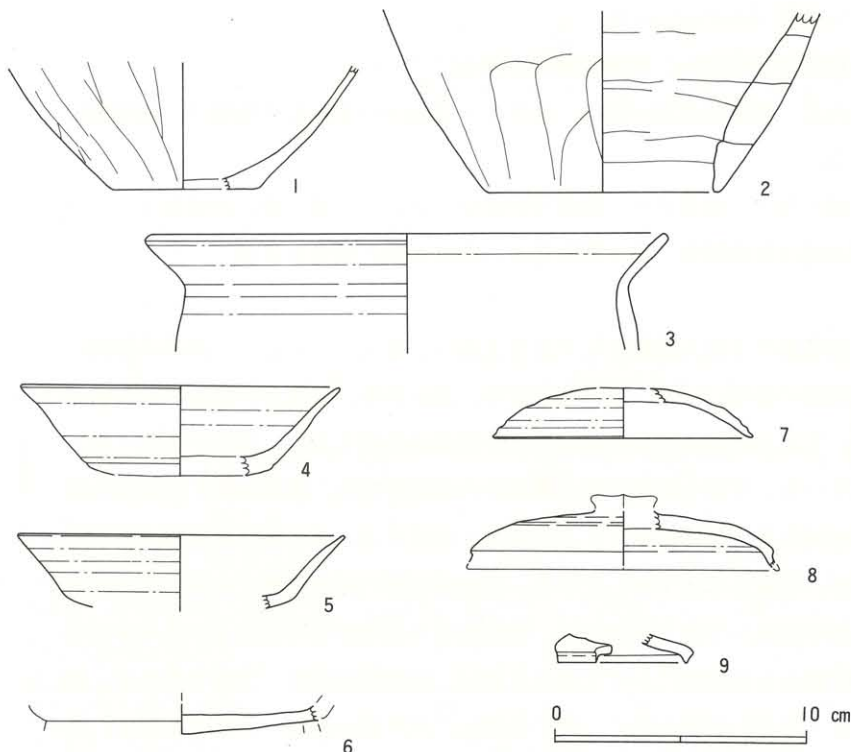
遺 構 (第101・102図)

本住居址はD区東側南西部のグリッドS・T-23・24において第62・66号住居址等と重複して検出された。西壁を第66号住居址、第21号土壌に破壊され、北部も第62号住居址と重複のため、全体のプランは不明確であるが、N-17-Eに主軸を持つ隅丸~~長~~方形と推定される。規模は南

東



第101 図 第67号住居址・同址カマド実測図



第102 図 第67号住居址出土遺物実測図

北 3.5mを測る。残存する壁高は9~13cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は南側では比較的堅緻であったが、北側は第62号住居址覆土の礫が露出し、かなり不整な状態であった。覆土は暗黒褐色の単一層である。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが遺存状況は悪く、数点の安山岩質河原石を芯に暗黄褐色粘土で構築され

第25表 第67号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
102-1	土師・甕	胴部下位~底部 1/2	底径(5.8)	内湾して立上がる。	外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：黒雲母・微砂粒を含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明灰褐色 *外面に煤付着。
102-2	土師・甕	胴部下位~底部 1/2	底径(9.4)	筒抜けの底部から大きく開いて立上がる。	外面縦へら削り。内面横へら削り・ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内明灰褐色 *外面に煤付着。
102-3	須恵・甕	口縁部~胴部 上位1/12	口径(21.0)	口縁部「く」の字状に外反する。口唇部面取りされる。	口縁部横ナデ。	胎土：黒色小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内明灰色
102-4	須恵・坏	口縁部~底部 1/4	口径(12.8) 器高(3.7) 底径(7.4)	口縁部僅かに外反する。	外内面ロクロ横ナデ。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗緑灰色、内暗青灰色 *内面自然釉かかる。
102-5	須恵・坏	口縁部~底部 1/8	口径(13.2)	口縁部僅かに外反する。	外内面ロクロ横ナデ。	胎土：微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内明青灰色
102-6	須恵・坏	底部1/6			内面ナデ。底裏部回転へら削り。	胎土：金雲母・小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗青灰色、底裏部自然釉かかる。
102-7	須恵・蓋	天井部~裾部 1/5	裾径(10.4)		外面回転へら削り・ロクロナデ。内面ナデ。	胎土：細砂粒を少量含む 焼成：不良 色調：外内明灰白色
102-8	須恵・蓋	天井部~裾部 1/5	裾径(12.6)	口辺部短く屈曲する。	口辺部横ナデ。外面回転へら削り。内面ロクロナデ。	胎土：精良 焼成：良 色調：暗青灰色、内青灰色
102-9	須恵・蓋	裾部の一部		口辺部短く屈曲する。	口辺部横ナデ。内面ロクロナデ。	胎土：精良 焼成：良 色調：外内青灰色

ている。規模は極めて小規模で全長40cm、両袖幅65cmを測る。

ピットは計5基検出された。規模は径26~31cm、深さ7~12cmといずれも小規模で、南壁側に集中する傾向が看取される。

本址は第62号住居址を浅く切って構築され、第66号住居址、第21号土壇と最近の暗渠によって切られている。本址の所産期は重複関係、出土遺物等から奈良時代と推定される。

遺物 (第103図)

本址からは土師器片、須恵器片と混入遺物として弥生土器片が出土している。土師器の器種には甕、甑、坏があり、須恵器の器種には甕、坏、高台付坏、蓋がある。これらの遺物のうち図示し得たのは9点であった。1は土師器長胴甕の底部で、所謂武蔵型甕である。器肉が極めて薄く、外面は全体に煤が付着している。2は土師器の甑で筒抜けの底部を持ち、器肉が厚く比較的大形品と推定される。3は須恵器の甕で口縁部が「く」の字状に外反する。4・5は須恵器の坏で外反しながら開く器形を持ち、分量もほぼ一致している。6は須恵器の高台付坏である。高台が欠損しているが、底部は全面が回転へら削り調整され、濃緑色の自然釉が看取される。7~9は須恵器の蓋である。7は天井部から口辺部にかけて丸みを帯び、天井部は回転へら削りされる。摘みの有無は不明である。8・9は口辺部が鋭く、短く屈曲し、天井部は回転へら削りされる。共に扁平な摘み部を持つと推定される。

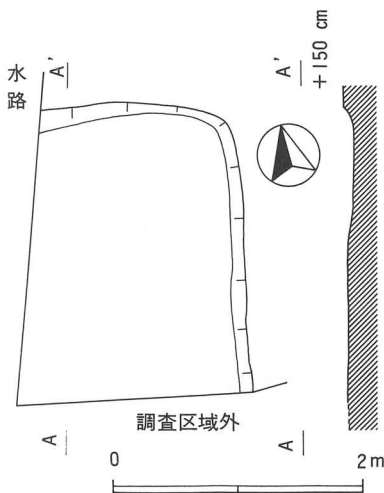
(40) 第68号住居址 (S B68)

遺構 (第103図)

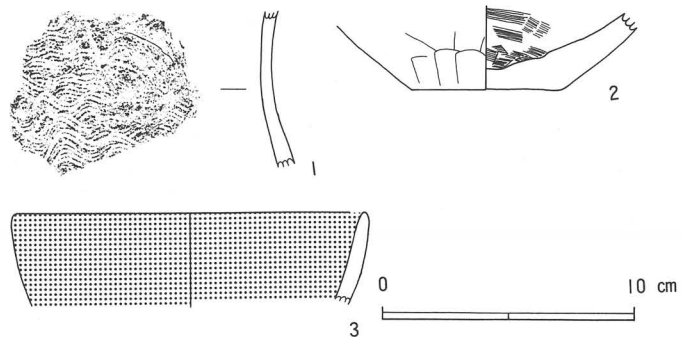
本住居址はD区中央部東寄りのグリッドU・V-24において北東部の一部が検出された。西側は用水路によって破壊され、南側は調査区域外のため規模は不明であるが、南北2.5m、東西1.5mの範囲が調査された。平面プランは隅丸長方形を呈すると推定され、南北の主軸方向はN-12°-Eを示す。残存する壁高は7~8cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、

覆土は暗黒褐色土の単一層であった。炉址、ピット等は検出されなかった。

本址の所産期は出土遺物から弥生時代後期と推定される。



第103 図 第68号住居址実測図



第104 図 第68号住居址出土遺物実測図

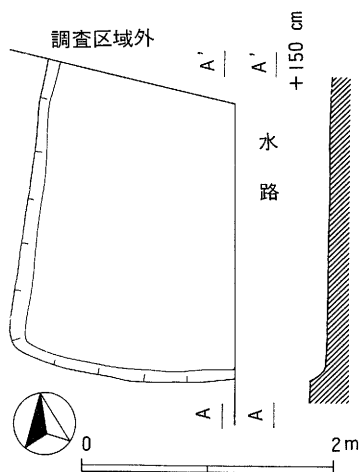
遺物（第104図）

本址からは弥生土器片が出土している。出土量は僅かで小片が多く、図示し得たのは3点のみである。1は甕の頸部片で、簾状文は施文されず口辺部から体部上半にかけて7本単位の波状文で充填されている。2は壺の底部で外面はへら削りされ、内面は刷毛整形されている。3は鉢で内外面共へら磨きされた後、赤色塗彩が施されている。他に壺や高杯の破片も出土しているが細片で図示できない。

第26表 第68号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
104-1	弥生・甕				外面波状文。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色他の少砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗茶褐色、内明白褐色
104-2	弥生・壺	底部1/2	底径 6.0		外面縦へら削り。内面刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内黒色
104-3	弥生・鉢	口縁部1/12	口径(14.0)	僅かに内湾する。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色 *外内赤彩。

(41) 第69号住居址 (S B69 第105図)



第105図 第69号住居址実測図

本住居址はD区中央部西寄りのグリッドW-22・23において南西部の一部が検出された。東側は用水路によって破壊され、北側は調査区域外のため全体の規模は不明確であるが、南北2.4m、東西1.9mの範囲が調査された。平面プランは隅丸長方形を呈すると推定され、南北の主軸方向はN-15°-Eを示す。残存する壁高は11~17cmを測り、壁は比較的直に近く立上がる。床面はやや堅緻で、覆土は暗黒褐色土の単一層であった。炉址、ピット等は検出されなかった。

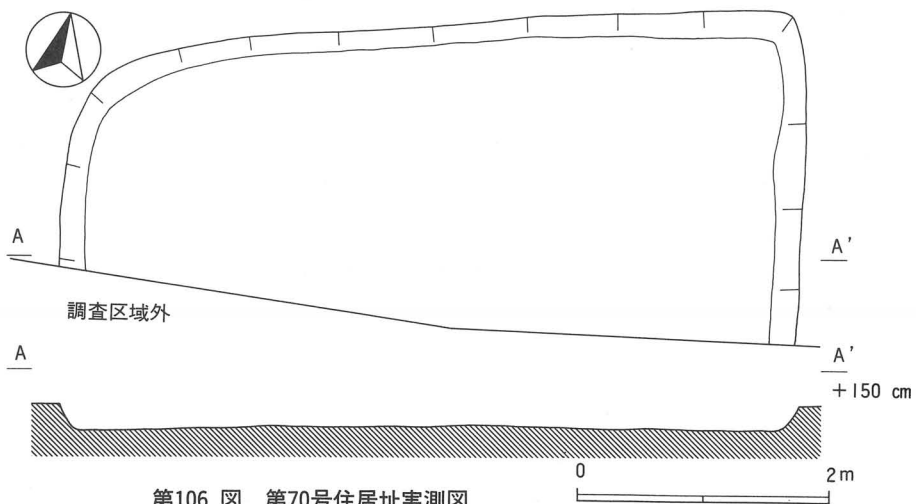
本址からは弥生土器片が僅か出土しており、弥生時代後期の所産と推定されるが、小細片がほとんどで図示できない。

(42) 第70号住居址 (S B70 第106図)

本住居址はD区西側南東部において第71・72号住居址と重複して検出された。南側が調査区域外のため、全体の規模は把握できないが平面プランはN-77°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形を呈すると推定され、東西長は5.9mを測る。残存する壁高は19~21cmを測り、壁は比較的直に

近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は暗茶褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

本址は第71・72号住居址を切って構築されているが、出土遺物は乏しく、所産期は不明である。

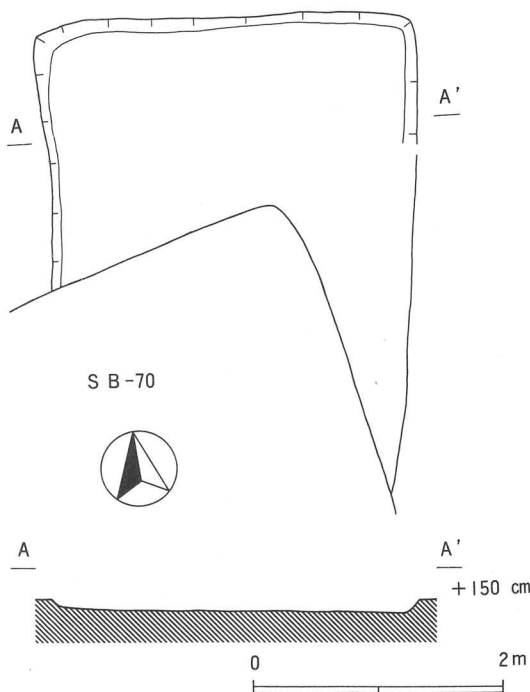


第106 図 第70号住居址実測図

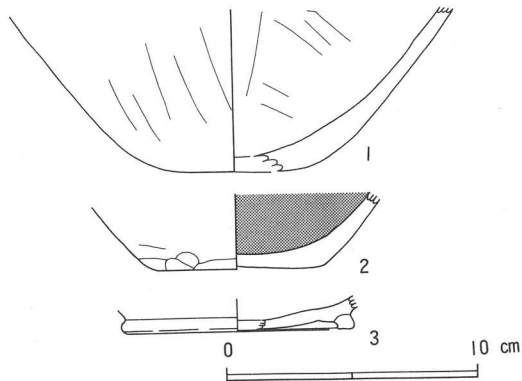
(43) 第71号住居址 (S B71)

遺構 (第107図)

本住居址はD区西側南東部のグリッドW・X-23・24において第70・72号住居址と重複して検出された。南西部を第70号住居址に切られており、全体のプランは把握できないがやや歪んだ隅丸長方形を呈すると推定され、北壁長は3.1mを測る。主軸方向はN-8°-Eを示す。残存す



第107 図 第71号住居址実測図



第108 図 第71号住居址出土遺物実測図

る壁高は6~12cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗茶褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等の施設は検出されなかった。

本址は第72号住居址を切って構築され、第70号住居址によって切られている。本址の所産期は出土遺物等から奈良時代と推定される。

第27表 第71号住居址出土土器一覧表

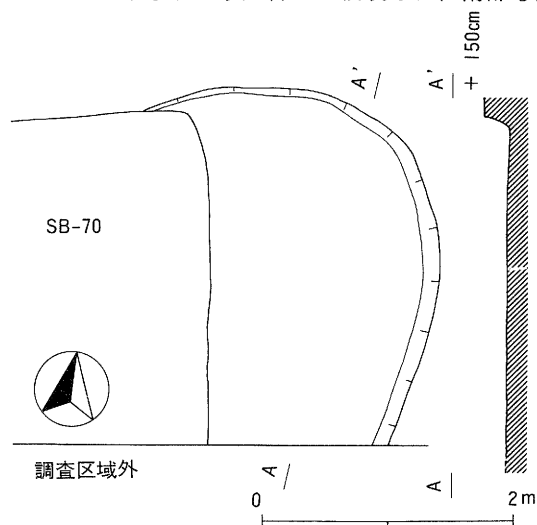
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
108-1	土師・甕	底部 1/3			外面縦へら削り。内面縦・横へら削り。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
108-2	土師・坏	底部1/3	底径(6.9)		外面口縁部横ナデ。外面底部横へら削り。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内黒色
108-3	須恵・坏	高台部1/6	底径(9.4)	高台が貼り付けられる。	高台部横ナデ。内面口クロナデ。底裏部回転へら削り?。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗灰色、内暗灰褐色

遺物 (第108図)

本址からは土師器片、須恵器片が出土している。出土量は僅かで小片が多く、図示できたのは3点であった。1は土師器甕の底部で丸底に近い器形を持ち、内外面へら削りされている。2は土師器の坏で内湾しながら立上がり、底部及び底部周縁はへら削りされ、内面は黒色処理されている。3は須恵器の高台付坏で断面台形の高台を貼り付け、底部は回転へら削りされている。以上の他に、所謂武蔵型甕の胴部片や、須恵器の蓋、坏、甕の破片なども出土している。

(44) 第72号住居址 (S B72 第109図)

本遺構はD区南東部のグリッドW・X-23・24において第70・71号住居址と重複して検出された。西部を第70号住居址に破壊され、南部も調査区域外のため、全体のプランは把握できないが、



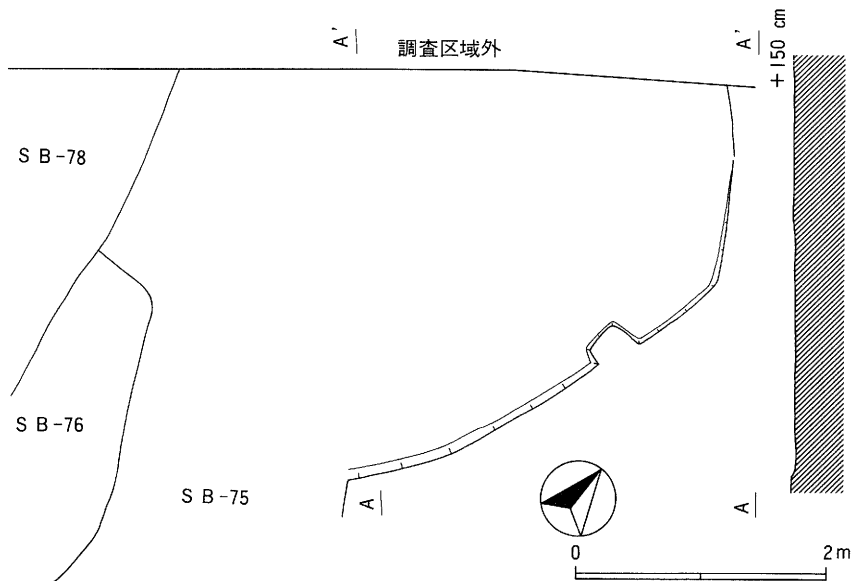
第109図 第72号住居址実測

やや不整な楕円形を呈すると推定される。調査された南北長は、2.9mを測る。主軸方向はN-10°-Eを示す。残存する壁高は14~18cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は軟弱で、覆土は小礫を含んだ暗茶褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。本址は第70・71号住居址に切られており、遺物は土師器の長胴甕、内黒坏等の小片が僅か出土しており、所産期は重複関係、出土遺物等から古墳時代後期と推定されるが、形態的に住居址とするにはやや疑問が残る。

(45) 第74号住居址 (S B74 第110図)

本住居址はD区西側中央部のグリッドZ・2A-21~23において第75・78号住居址等と重複して検出された。全体に削平がかなり進んでおり、南壁と東壁の一部が検出されたのみである。従って平面プラン、規模等は不明確であるが、隅丸長方形を呈すると推定され、南壁を基準とした

主軸方向はN-25°-Eを示す。残存する壁高は0~6cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は軟弱で、覆土は暗茶褐色土の単一層である。炉址、ピット等は検出されなかった。



第110 図 第74号住居址実測図

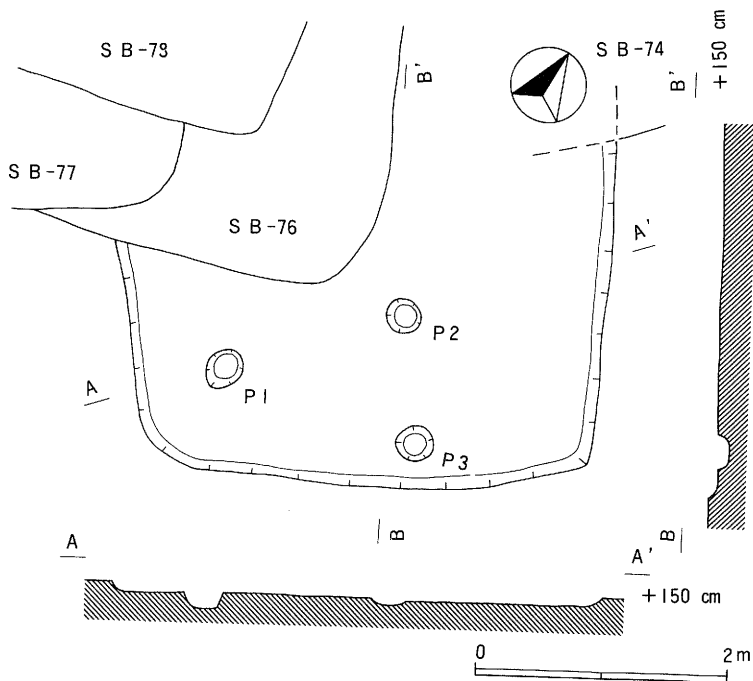
本址からは弥生土器片、平安時代後期に比定される土師器片等が出土しているが、小片で量も少なく、所産期は不明である。

(46) 第75号住居址 (SB75)

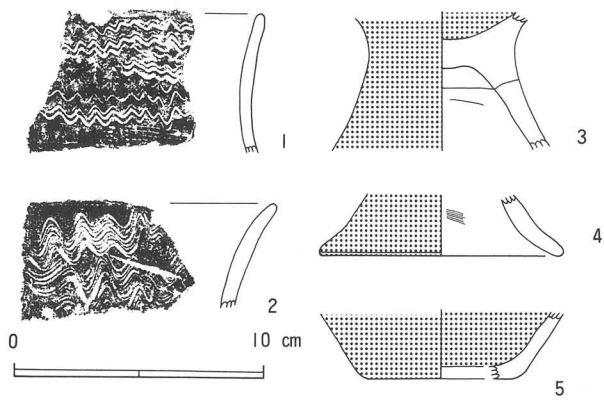
遺構 (第111図)

本住居址はD区西側中央部のグリッドZ・2A-23・24において第74・76~78号住居址等と重複して検出された。北側のプランが他遺構との重複により不明確だが、N-32°-Wに主軸を持つ隅丸長方形を呈すると推定され、東西長は3.9mを測る。残存する壁高は7~10cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は暗褐色土の単一層であった。

ピットは計3基検出さ



第111 図 第75号住居址実測図



第112図 第75号住居址出土遺物実測図

れ、径27~35cm、深さ5~12cmを測る。
 本址は第76~77号住居址に切られており、出土遺物から弥生時代後期の所産と推定される。

遺物(第112図)
 本址からは弥生土器の小片が僅か出土している。器種には甕(1・2)、高坏(3・4)、鉢(5)があり、いずれも当地域における弥生時代後期の一般的な遺物である。

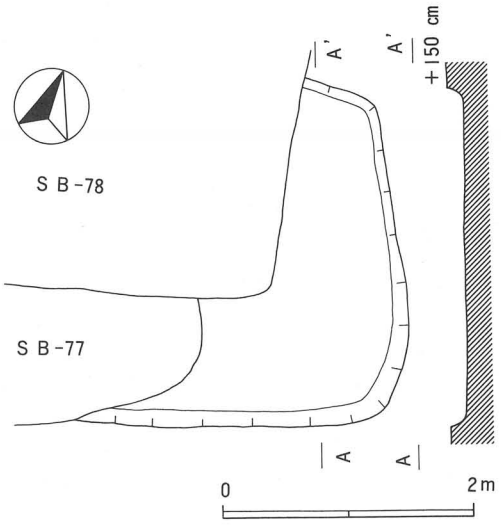
第28表 第75号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
112-1	弥生・甕		口径(23.5)	口縁部僅かに外反する。	口縁部横ナデ。外面簾状文+波状文。内面横へら磨き。	胎土：黒雲母・微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗灰褐色
112-2	弥生・甕		口径(20.3)	口縁部僅かに外反する。	口縁部横ナデ。外面波状文。内面横へら磨き。	胎土：石英他の細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗灰褐色
112-3	弥生・高坏	接合部完全			外面縦へら磨き。坏部内面へら磨き。脚部内面ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色 *脚外・坏内赤彩。
112-4	弥生・高坏	裾部 1/4	裾径(9.8)	裾部外反する。	外面縦へら磨き。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：長石・石英他の細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗橙褐色 *脚外赤彩。
112-5	弥生・鉢	底部 1/3	底径(5.8)		外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内赤彩。

(47) 第76号住居址 (S B 76 第113図)

本住居址はD区西側中央部、グリッド2A・2B-23・24において第75・77・78号住居址等と重複して検出された。西側を第77・78号住居址によって破壊されており、全体のプランは把握できないが南北長は2.8mを測り、N-73°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。残存する壁高は11~24cmを測り、壁は垂直に近く立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

本址からは弥生土器片が出土しており、器種に



第113図 第76号住居址実測図

は壺、甕、高坏、鉢等があるがいずれも小片で図示できない。

本址は第75号住居址を切って構築された後、第77・78号住居址、第24号土壙によって切られている。本址は所産期は重複関係、出土遺物等から弥生時代後期と推定される。

(48) 第77号住居址 (S B 77)

遺構 (第114図)

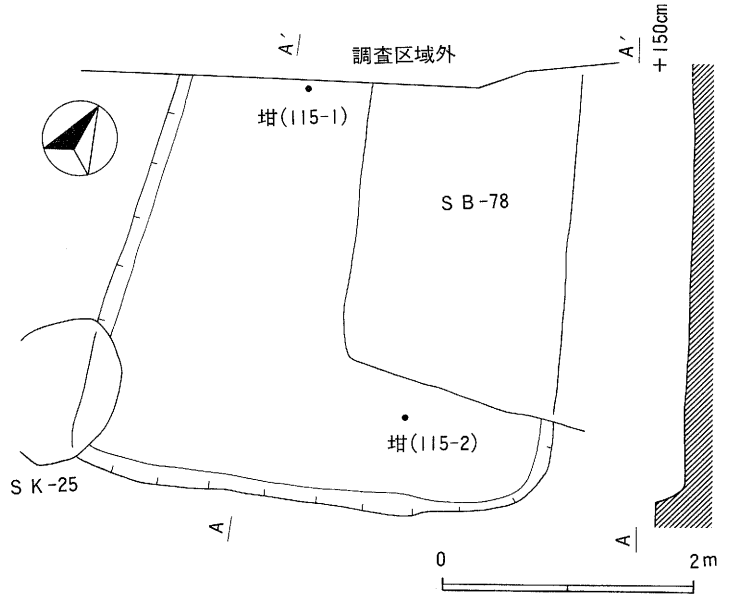
本住居址はD区西側中央部のグリッド2 A・2 B-22~24において第76・78号住居址等を重複して検出された。北東部を第78号住居址に破壊され、北西部も調査区域外のため、全体のプランは把握できないが、やや歪んだ隅丸(長)方形を呈すると推定され、南壁長は3.8mを測る。東西の主軸方向はN-64°-Eを示す。残存する壁高は20~26cmを測り、壁は垂直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は暗茶褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

本址は第76号住居址を切って構築された後、第78号住居址、第24・25号土壙によって切られており、所産期は重複関係、出土遺物等から古墳時代中期と推定される。

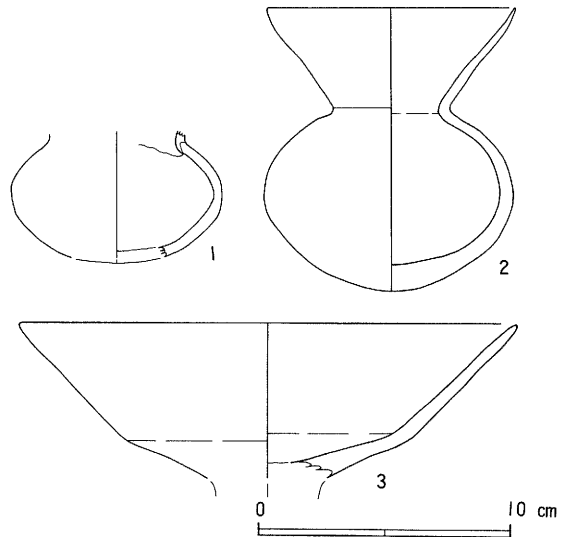
遺物 (第115図)

本址からは若干の土師器片が出土している。また、南壁沿いの中央部床面において少量の骨粉が検出されたが、本址との関係、性格等は不明確である。土師器の器種には甕、埴、高坏等があり、図示できたのは3点である。

1・2は埴で、共に扁平な球形の体部を持ち、1は端部で僅かに内湾する口縁部を持つ。外面と口縁部内面は縦方向のヘラ磨きが行われ体部



第114図 第77号住居址実測図



第115図 第77号住居址出土遺物実測図

第29表 第77号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
115-1	土師・埴	体部 4/5		体部は扁平な球形を呈する。	外面へラ磨き。内面ナデ。	胎土：黒雲母・赤褐色小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
115-2	土師・埴	口縁部1/5 体部完存	口径(10.0)	口縁部僅かに内湾し、口唇部尖る。体部は扁平な球形を呈する。	外面縦へラ磨き。体部内面ナデ。	胎土：微砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内黒褐色
115-3	土師・高坏	坏部1/3	口径(20.0)	坏部屈曲外反する。	内外面縦へラ磨き。	胎土：黒雲母・細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色

内面はナデ整形が行われている。3は高坏坏部であるが、比較的深めの坏部で接合部からやや反り返るように開き、屈曲して直線的に伸びている。脚部は柱状を呈すると推定される。

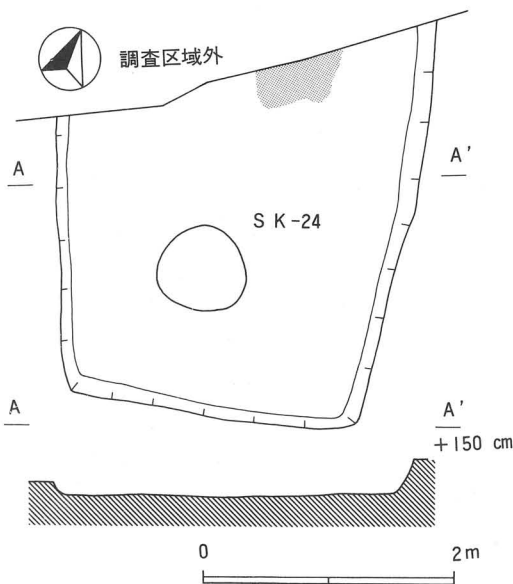
(49) 第78号住居址 (S B78 第116図)

本住居址はD区西側中央部のグリッド2A・2B-22・23に位置し、第74～77号住居址等と重複して検出された。北側が調査区域外のため全体のプランは把握できないが、北側でカマドの痕跡と推定される多量の焼土が検出されており、調査範囲よりさほど離れない位置に北壁が存在していた可能性がある。平面プランはやや南壁の短い台形に近い隅丸長方形を呈し、東西長は最大で3.0mを測る。南北の主軸方向はN-17-Wを示す。残存する壁高は9～29cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は暗黒褐色土の単一層である。

カマドは前述したように調査範囲北側において若干量の焼土が検出され、カマドの痕跡と推測されたが、構造、規模等は不明である。柱穴は検出されなかった。

本址からは古墳時代後期に比定される土師器片と、混入遺物として少量の弥生土器片が出土しており、土師器の器種には長胴甕、小形甕、内黒坏等があるがいずれも小片で図示できない。

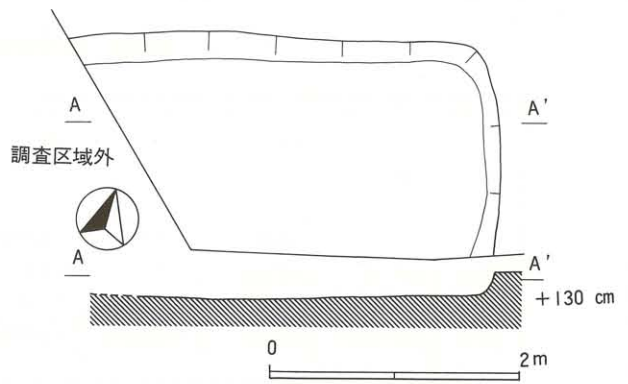
本址は第74～77号住居址を切って構築され、第24号土壌に切られており、所産期は重複関係、出土遺物等から古墳時代後期と推定される。



第116 図 第78号住居址実測図

(50) 第79号住居址 (SB79 第117図)

本住居址はD区最南部のグリッド2D・2E-25・26において検出された。西側と南側が調査区域外となり、北壁 3.4m、東壁 1.7mの範囲が調査された。全体の規模は不明であるが平面プランは隅丸長方形を呈すると推定され、東西の主軸方向はN-75°-Eを示す。残存する壁方は18~20cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は暗茶褐色土の単一層である。炉址、ピット等は検出されなかった。



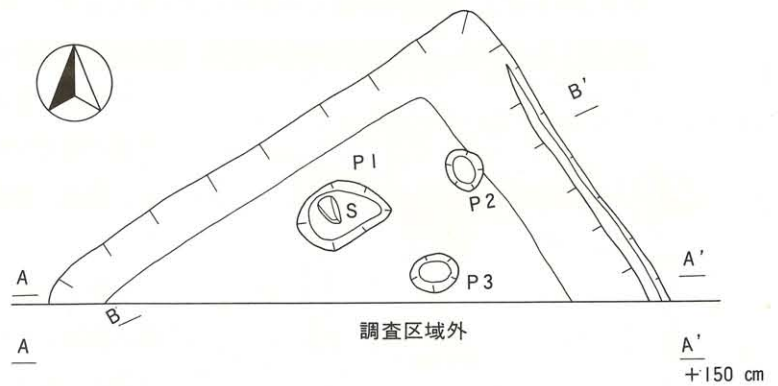
第117図 第79号住居址実測図

本址からは弥生土器片、石包丁片が少量出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

(50) 第80号住居址 (SB80)

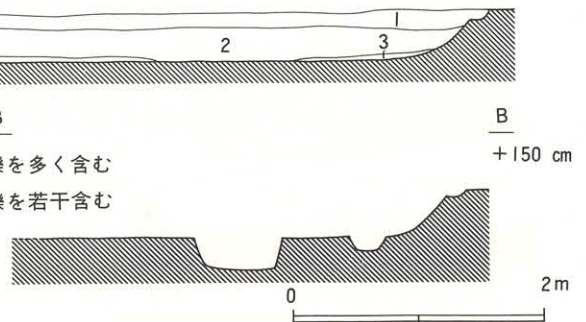
遺構 (第118図)

本住居址はD区東南部のグリッドO~Q-24・25において検出された。南側が調査区域外となり、全体のプラン、規模は把握できないが、後述する主軸方向、出土遺物等の特徴から第83・104号住居址等と共伴し、同様の形態を持つ可能性がある。平面プランは隅丸方形を呈すると推定され、東西の主軸方向はN-56°-Eを示す。残存する壁高は26~35cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は3層に分けられ、第1層は小礫を多く含んだ明茶褐色土、第2層は暗黒褐色土、第3層は暗茶褐色土であった。

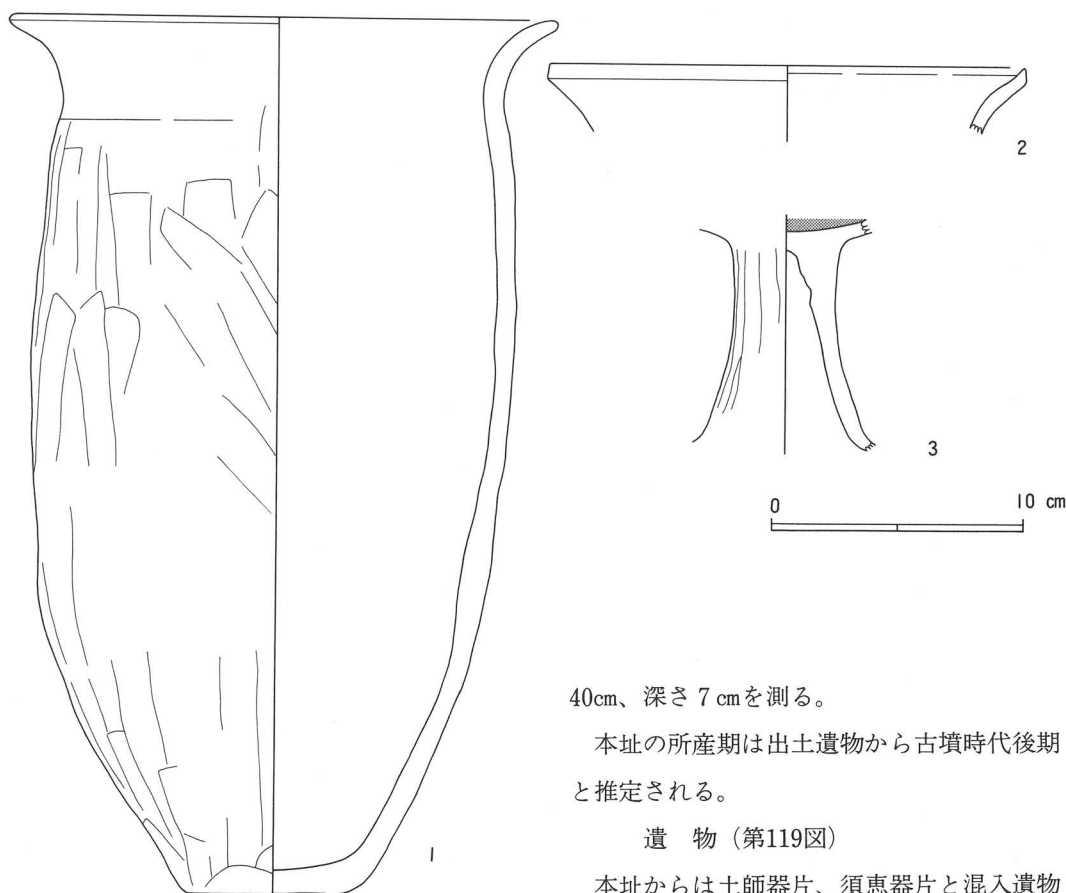


カマドは確認されなかったが、東壁中央部に設置されていたと推定される。土壌・ピットは計3基検出され、SK01は支柱穴もしくは貯蔵穴と推定される。規模はSK01が75×55cm、深さ25cm、P₁が径35cm、深さ11cm、P₂が径

1. 明茶褐色土層 小礫を多く含む
2. 暗黒褐色土層 小礫を若干含む
3. 暗茶褐色土層



第118図 第80号住居址実測図



第119 図 第80号住居址出土遺物実測図

図示できたのは3点であった。1は長胴甕で器高は35.2cmを測る。砲弾形の胴部と、緩く外反する口縁部を持ち、底部は平底である。胴部外面の全面には薄く煤が付着している。2は胴張甕の口縁部で口縁端部は面取りされ、横ナデにより比較的鋭く仕上げられている。3は高坏脚部で裾部で大きく開き、坏部内面は黒色研磨処理される。

40cm、深さ7cmを測る。

本址の所産期は出土遺物から古墳時代後期と推定される。

遺物(第119図)

本址からは土師器片、須恵器片と混入遺物として弥生土器片が出土している。土師器の器種には甕、坏、高坏があり、須恵器は蓋坏の坏身が出土している。これらの遺物のうち

第30表 第80号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
119-1	土師・甕	口縁部 2/3 他はほぼ完存	口径 21.5 器高 35.2 底径 6.8	口縁部緩く外反する。 胴部は放談形を呈し、 底部平底。	口縁部横ナデ。胴部外面縦・斜めへら削り。 内面横へら削り+ナデ。底裏部へら削り。	胎土：赤褐色小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色 *外面に黒斑あり。
119-2	土師・甕	口縁部1/4	口径(19.0)	口縁部外反し、口唇部に面取りされる。	外内面横ナデ。	焼成：小砂粒を少し含む 焼成：良 色調：外内淡橙褐色
119-3	土師・高坏	接合部完存 脚部1/2		裾部で大きく開く。	坏部内面へら磨き。脚部外面縦へら削り。内面へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外内淡黄褐色

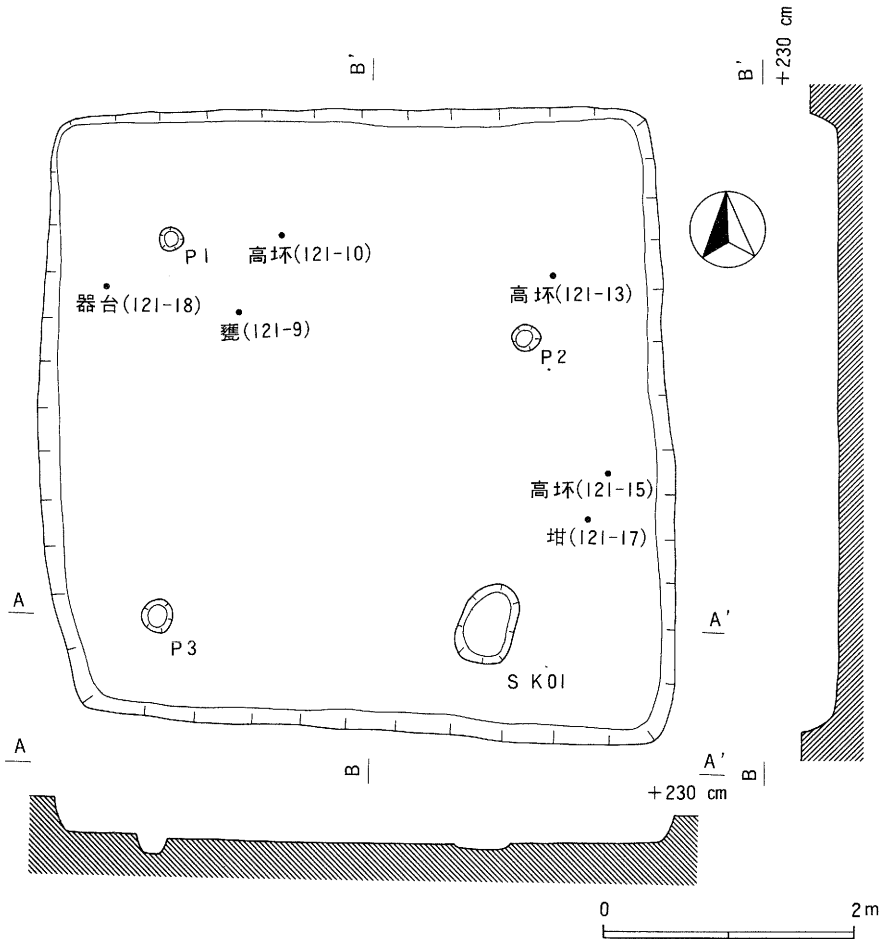
(52) 第82号住居址 (S B82)

遺構 (第120図)

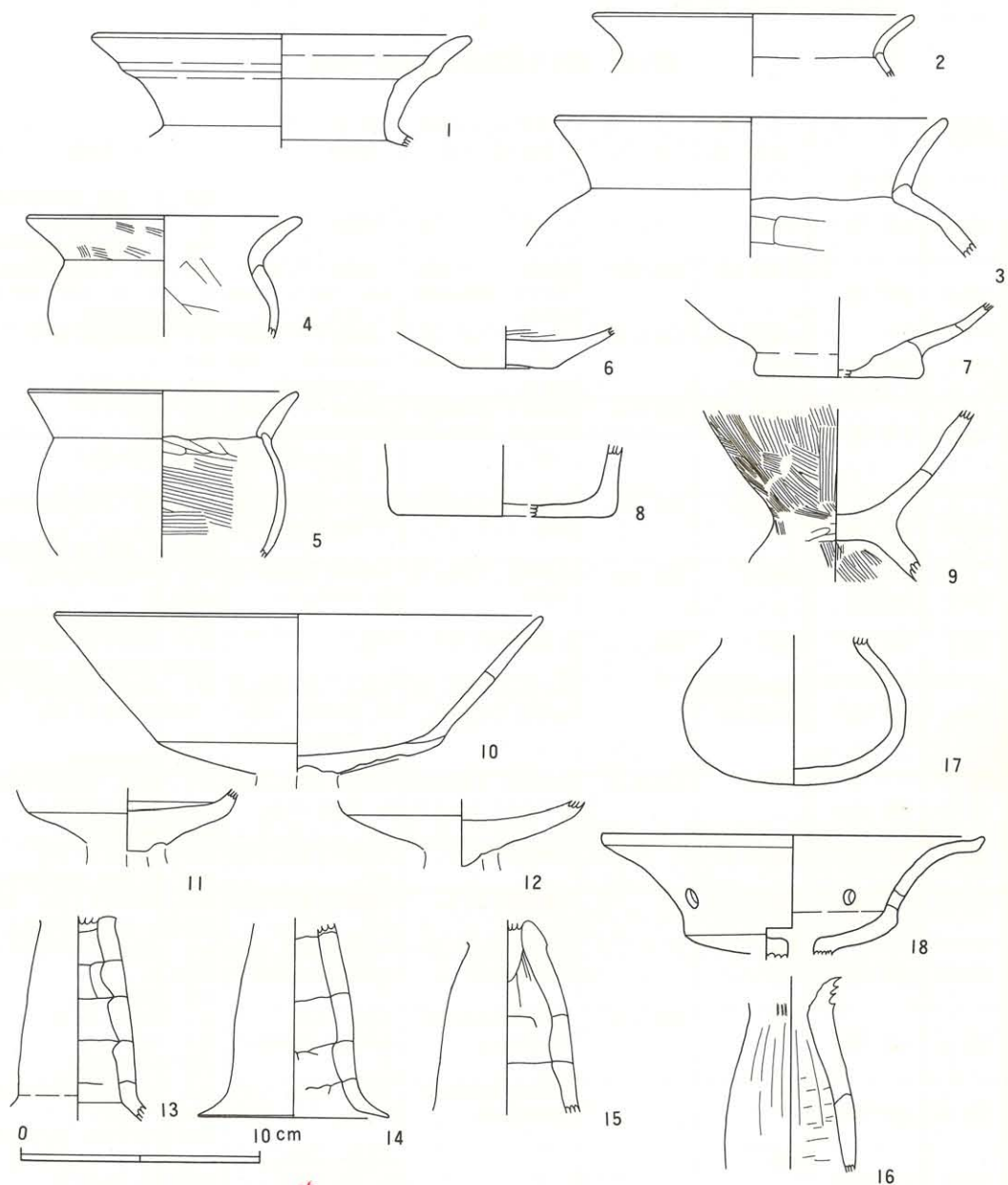
本住居址はE区北側中央部、グリッド2H・2I-31・32において第26号土塋と重複して検出された。規模は南北5.1m、東西5.0mを測り、平面プランは東壁の僅かに長い隅丸方形を呈する。主軸方向はN-3°-Eを示す。残存する壁高は16~27cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は小礫を多く含んだ暗茶褐色土の単一層であった。また、住居址北西部に2×1.2mの範囲で10cm内外の礫が床面より11~15cm浮いた状態で検出されたが、性格は不明である。

土塋・ピットは計4基検出されたがいずれも小規模である。SK01は55×45cm、深さ6cm、P₁は径18cm、深さ12cm、P₂は径24cm、深さ18cm、P₃は径26cm、深さ15cmを測る。炉址等は検出されなかった。

本址は第26号土塋を切って構築されており、重複関係、出土遺物等から古墳時代中期の所産と推定される。



第120 図 第82号住居址実測図



第82号住居址出土遺物実測図

遺物 (第121図)

本址からは土師器片が出土している。出土量はあまり多くなく、土師器の器種には壺、甕、高坏、埴、器台があり、図示できたのは18点である。

1は有段口縁を呈する壺の口縁部で、大きく張った胴部から屈曲して立上がり、2段に外反する。有段部外面には僅かに刷毛目を残し、内面には指頭の手ナデにより凹面を形成している。2～9は甕で大きく張った球型胴から「く」の字状に屈曲外反する口縁部を持つ。8は風化が著しい

第31表 第82号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
121-1	土師・壺	口縁部～頸部 1/5	口径(16.0)	口縁部2段に屈曲して外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：石英・長石他の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明赤褐色
121-2	土師・甕	口縁部 1/5	口径(13.4)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色
121-3	土師・甕	口縁部 1/3	口径(16.2)	口縁部「く」の字状に外反する。胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴部外面縦へら削り。内面横へら削り。	胎土：長石・石英他的小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明灰茶褐色
121-4	土師・甕	口縁部～胴部 中位 1/4	口径(11.6)	口縁部「く」の字状に外反する。胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴部外面縦刷毛調整。内面横・斜め刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
121-5	土師・甕	口縁部～胴部 中位4/5	口径 11.4	口縁部「く」の字状に外反する。胴部は球形に張る。	口縁部横ナデ。胴部外面斜め刷毛調整+ナデ。内面斜め刷毛調整・へらナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明黒褐色
121-6	土師・甕	底部完存	底径 3.8	底部は僅かに上げ底となる。	外面へら磨き?。内面へら削り+ナデ。	胎土：長石・石英の微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
121-7	土師・甕	底部1/2	底径 6.8	底部突出して外面に段を持つ。	外面不明。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内明灰褐色
121-8	土師・甕	底部1/4	底径(9.1)	底部直に近く立上がる。	不明。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明茶褐色、内暗灰褐色
121-9	土師・甕	胴部下位～脚部 台部上位		脚台部大きく開き、胴部内湾して立上がる。	外面縦・斜め刷毛調整。胴部内面へら削り?。脚台部内面斜め刷毛調整。	胎土：赤褐色・白色小粒子・長石・雲母微粒子等多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
121-10	土師・高坏	坏部1/2	口径(20.6)	坏部屈曲して僅かに外反しながら大きく開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き+ナデ。	胎土：金雲母・赤色微粒子等を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内淡橙褐色
121-11	土師・高坏	接合部1/4		坏部屈曲外反する。	外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
121-12	土師・高坏	接合部ほぼ完存		坏部屈曲外反する。	外面縦へら磨き。内面ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外明橙褐色
121-13	土師・高坏	脚部		粘土紐を螺旋状に巻いて成形される。	外面縦へら磨き。内面未調整。内面裾部ナデ。	胎土：金雲母・赤色砂粒等を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
121-14	土師・高坏	脚部	裾径(7.9)	粘土紐を螺旋状に巻いて成形される。	外面縦へら磨き?。内面未調整。内面裾部ナデ。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：不良 色調：外内明橙褐色
121-15	土師・高坏	脚部		粘土紐を螺旋状に巻いて成形される。	外面縦へら削り?。内面ナデ。	胎土：金雲母他微砂粒を含む 焼成：やや不良 色調：外明橙褐色、内淡橙褐色
121-16	土師・高坏	脚部			外面縦へら磨き。内面縦・横へら削り。	胎土：金雲母・石英・長石等の微粒子を含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内淡橙褐色
121-17	土師・埴	体部 1/2		偏平でやや下膨れの球形の体部を呈する。	外面横へら磨き。内面ナデ。	胎土：長石・石英細粒子を多く含む 焼成：良 色調：外内明乳褐色 *外面に黒斑あり
121-18	土師・器台	器受部～底部 ほぼ完存	口径 16.1	器受部屈曲外反し、端部は面取りされ、つまみ上げを有する。貫通孔を有する。	口縁部横ナデ。外内面ナデ。坏部5ヶ所に透かし孔を有する。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明乳黄褐色

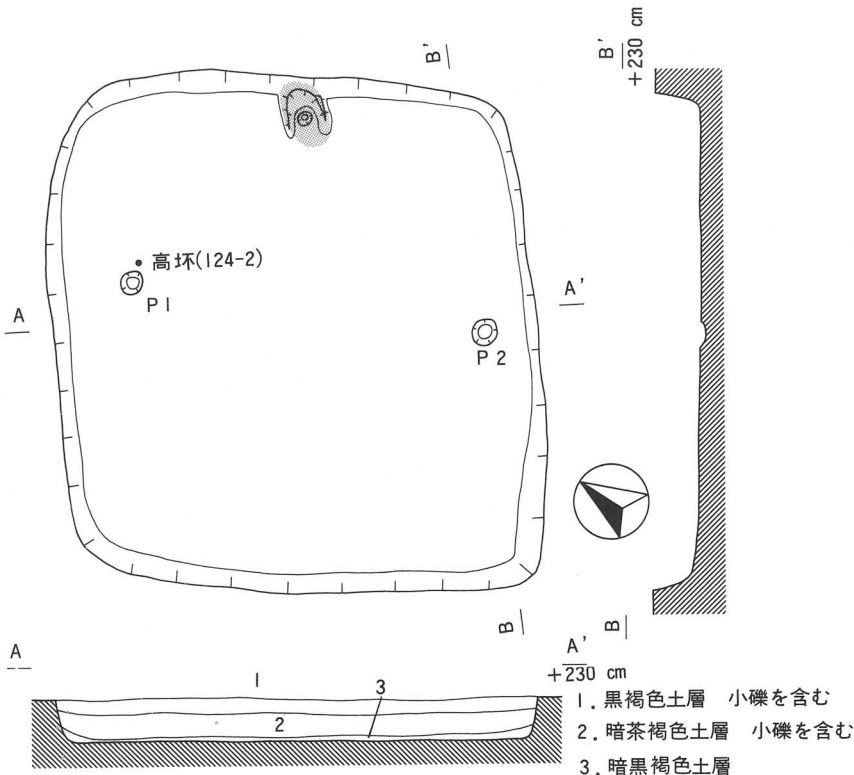
が直に近く立上がる甕の底部である。9は刷毛整形された台付甕である。10～16はほぼ同一形態の高坏で柱状の脚部と大きく広がる坏部と裾部を持つ。脚部は粘土紐を螺旋状に巻いて成形されており、坏部との接合はほぼによってなされる。17は埴の体部でやや下膨れの器形を呈する。18

は器台で、坏部に5ヶ所の円形透かし孔を持ち、大きく広がった口縁端部は面取りされ、横ナデにより上方につまみ上げられている。脚部との接合部には貫通孔を有し、脚部は大きく広がるスカート状を呈するものと推定される。

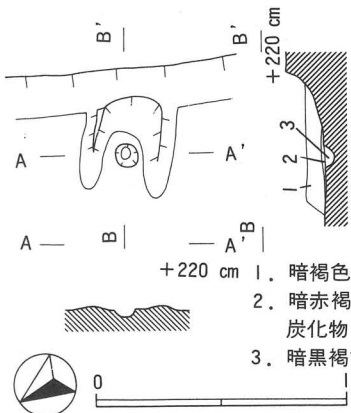
(53) 第83号住居址 (S B83)

遺構 (第122・123図)

本住居址はE区中央東寄りのグリッド2 F~2 H-34・35において検出された。他遺構との重複関係はない。規模は東西



第122 図 第83号住居址実測図



第123 図 第83号住居址カマド実測図

規模は東西 4.1m、南北 3.9mを測り、平面プランはやや不整な隅丸方形を呈する。カマドを中心とした主軸方向はN-57°-Eを示す。残存する壁高は24~36cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は3層に分けられ、第1層は小礫を含んで締まった黒褐色土、第2層は小礫を含んだ暗茶褐色土、第3層は締まり、粘性に乏しい暗黒褐色土であった。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが、遺存状況は悪く暗褐色粘土で構築された袖部が僅かに残るのみで

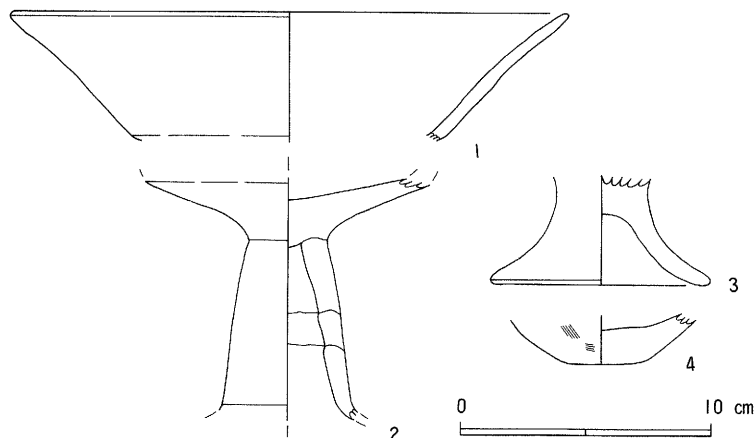
ある。残存する規模は袖長42cm、両袖幅38cmを測る。燃焼部中央には支柱を立てたと推定される径9cm、深さ4cmの小ピットが検出された。煙道は壁高が比較的あったにもかかわらず検出されなかった。

ピットは2基検出され、P₁は径20cm、深さ4cm、P₂は径21cm、深さ7cmを測る。いずれも柱穴とするには小規模である。

本址の所産期は住居址形態、出土遺物等から古墳時代後期と

遺物 (第124図)

本址からは土師器片と混入遺物として弥生土器片、石包丁片が出土しているが、出土量は僅かである。土師器の器種には甕、柑、坏、高坏があり、図示できたのは4点である。



第124図 第83号住居址出土遺物実測図

1・2は高坏で1は坏部で外反しながら大きく広がる器形を持つ。2は同一個体の可能性のある脚部で柱状を呈する。3は風化が著しいが台付甕の脚台部と推定される。4は外面刷毛成形された甕の底部である。以上のほかに口縁端部を面取りされた甕や内面黒色研磨された坏片等も出土している。

第32表 第83号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
124-1	土師・高坏	坏部 1/5	口径(22.4)	稜を持って外反し、長く伸びる。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：長石・赤褐色・微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明黄褐色
124-2	土師・高坏	接合部～脚柱完存		脚部螺旋状に成形。	坏部内面へら磨き。外面縦へら磨き+ナデ? 脚内面ナデ。	胎土：小砂粒多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明橙褐色
124-3	土師・甕	脚台部2/3	脚径(8.8)	脚台部外反する。	外面ナデ。内面横へら磨き+ナデ。	胎土：赤褐色砂粒他の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内明黄褐色
124-4	土師・甕	底部ほぼ完存	底径(3.2)		外面刷毛調整。内面横へら削り+ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色 内暗灰褐色

(54) 第84号住居址 (S B84)

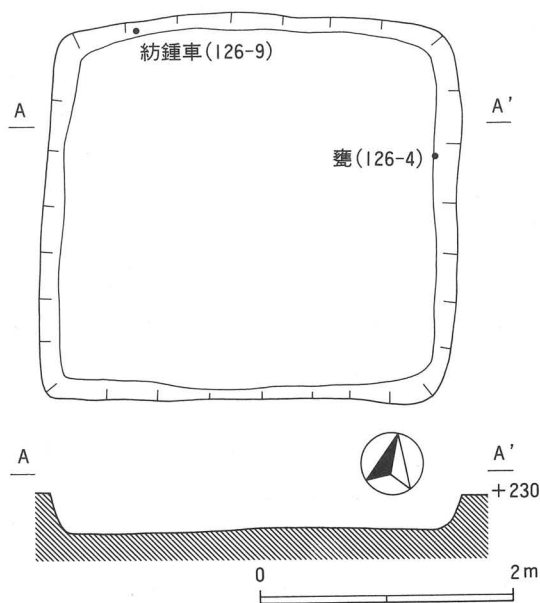
遺構 (第125図)

本住居址はE区中央東寄りのグリッド2 G・2 H-36・37に位置し、第85号住居址と重複して検出された。規模は東西 3.3m、南北 3.1mを測り、平面プランは僅かに東西に長い隅丸方形を呈する。主軸方向はN-79°-Eを示す。残存する壁高は27~33cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は暗黒褐色土の単一層である。炉址、柱穴等は検出されなかった。

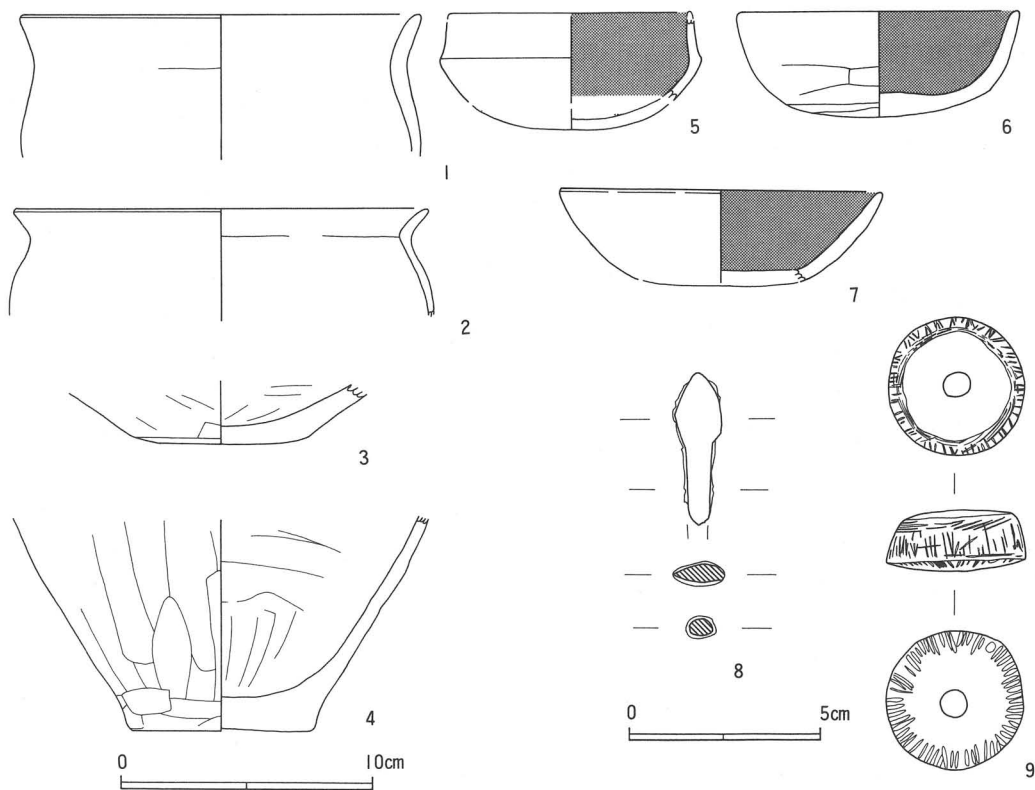
本址は第85号住居址を切って構築されており、所産期は重複関係、出土遺物等から古墳時代後期と推定される。

遺物 (第126図)

本址からは、土師器片、鉄製品、石製品のほかに黒曜石片が出土している。出土量は僅かで、土師器の器種には甕、坏がある。1～4は甕で、1はあまり張らない胴部に緩く外反する口縁部を持ち、2は短く強く外反する口縁部を持つ。3・4は底部で4の底部裏面には木葉痕が残る。5～7は坏で、いずれも内面は黒色研磨されている。5は所謂模倣坏で口縁部は内傾しながら直に立上がる。6・7は内湾しながら立上がり、底部はへら削りされている。8は鉄鏃で平根式の有茎鏃である。茎部を欠損しているが、残存長は42mm、最大幅は13mm、厚さは7.0mm、重量は3.62gを測る。9は北西部の壁面沿いより出土した蠟石製の紡鍾車で、緑色がかかった褐



第125図 第84号住居址実測図



第126図 第84号住居址出土遺物実測図

色を呈し丁寧に研磨されている。最大径は37.2mm、孔径は 6.2mm、重量は 34.57 g を測る。

第33表 第84号住居址出土土器一覧表

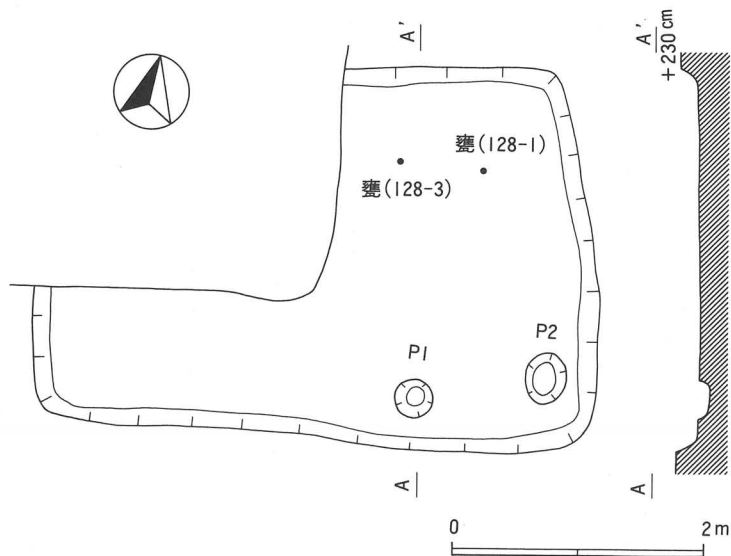
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
126-1	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/6	口径(16.1)	口縁部緩く外反する。	口縁部横ナデ。胴部外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：石英・長石・赤褐色小砂粒等を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
126-2	土師・甕	口縁部～胴部 上位 1/5	口径(16.6)	口縁部「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ。胴部外面縦へら削り。内面横刷毛調整+ナデ。	胎土：赤褐色他の小粒子多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
126-3	土師・甕	底部 1/3	底径(7.0)	底部やや丸底気味。	外面縦へら削り。内面横へら削り+ナデ。	胎土：長石他の微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
126-4	土師・甕	底部完存 胴部下位 1/4	底径 7.2	平底。直線的に立上がる。	外面縦・横へら削り。内面縦・横へら削り+ナデ。	胎土：石英・長石の小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内明灰褐色 *底部裏面に木葉痕。 *外面煤付着。
126-5	土師・坏	口縁部下位～ 体部上位 1/5	口径(9.6)	外面に稜を持って口縁部内傾する。	口縁部横ナデ。外面ナデ。内面へら磨き。	胎土：長石の微砂粒を少量含む 焼成：やや不良 色調：外明橙色、内黒色
126-6	土師・坏	全体の2/3	口径(11.2) 器高(4.2)	内湾して立上がる。	外面口縁部横ナデ。底部へら削り。内面横へら磨き。	胎土：長石微砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外内黒色(外面一部明黄褐色)
126-7	土師・坏	口縁部～体部 1/4	口径(13.0) 器高(4.8) 底径(7.0)	内湾して立上がる。	外面口縁部横ナデ。底部へら削り。内面横へら磨き。	胎土：赤褐色小砂粒を少量含む 焼成：良 色調：外明黄褐色 内黒色

(55) 第85号住居址 (S B85)

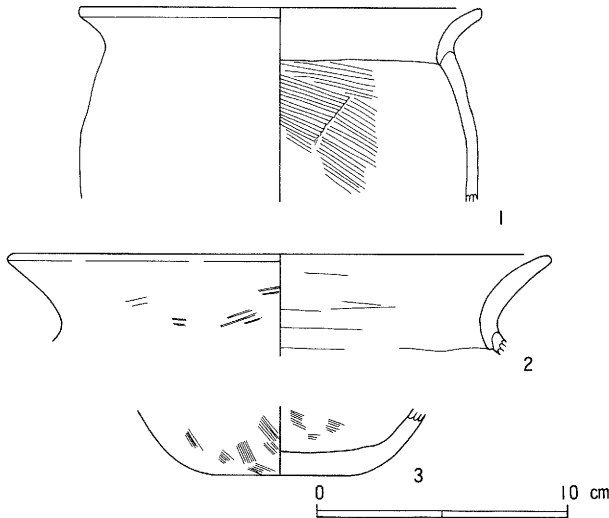
遺構 (第127図)

本住居址はE区中央東寄りのグリッド2F・2G-37・38に位置し、第84号住居址と重複して検出された。規模は東西4.5m、南北3.1mを測り、平面プランはN-85°-Eに主軸を持つ隅丸長方形を呈する。残存する壁高は14~18cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は暗茶褐色土の単一層である。ピットは2基検出され、P₁は径30cm、深さ7cmの略円形を呈し、P₂は44×32cmの楕円形を呈し、深さは13cmを測る。炉址等は検出されなかった。

本址は第84号住居址に切られており、所産期は重複関係、出土遺物等から古墳時代中期と推定される。



第127 図 第85号住居址実測図



第128 図 第85号住居址出土遺物実測図

遺物(第128図)

本址からは土師器片が出土している。出土量は僅かで器種には甕、坏があり、図示できたのは甕3点のみである。

1はあまり張らない球形胴に短く丸く外反する口縁部を持ち、口縁端部は面取りされている。胴部内面は幅の広い刷毛状工具によって整形されている。2は丸く外反する口縁部の端部を横ナデにより面取り状に仕上げている。3は丸底に近い甕の底部で、1とほぼ同一の胎土で成形され、内外面刷毛整形される。

第34表 第85号住居址出土土器一覧表

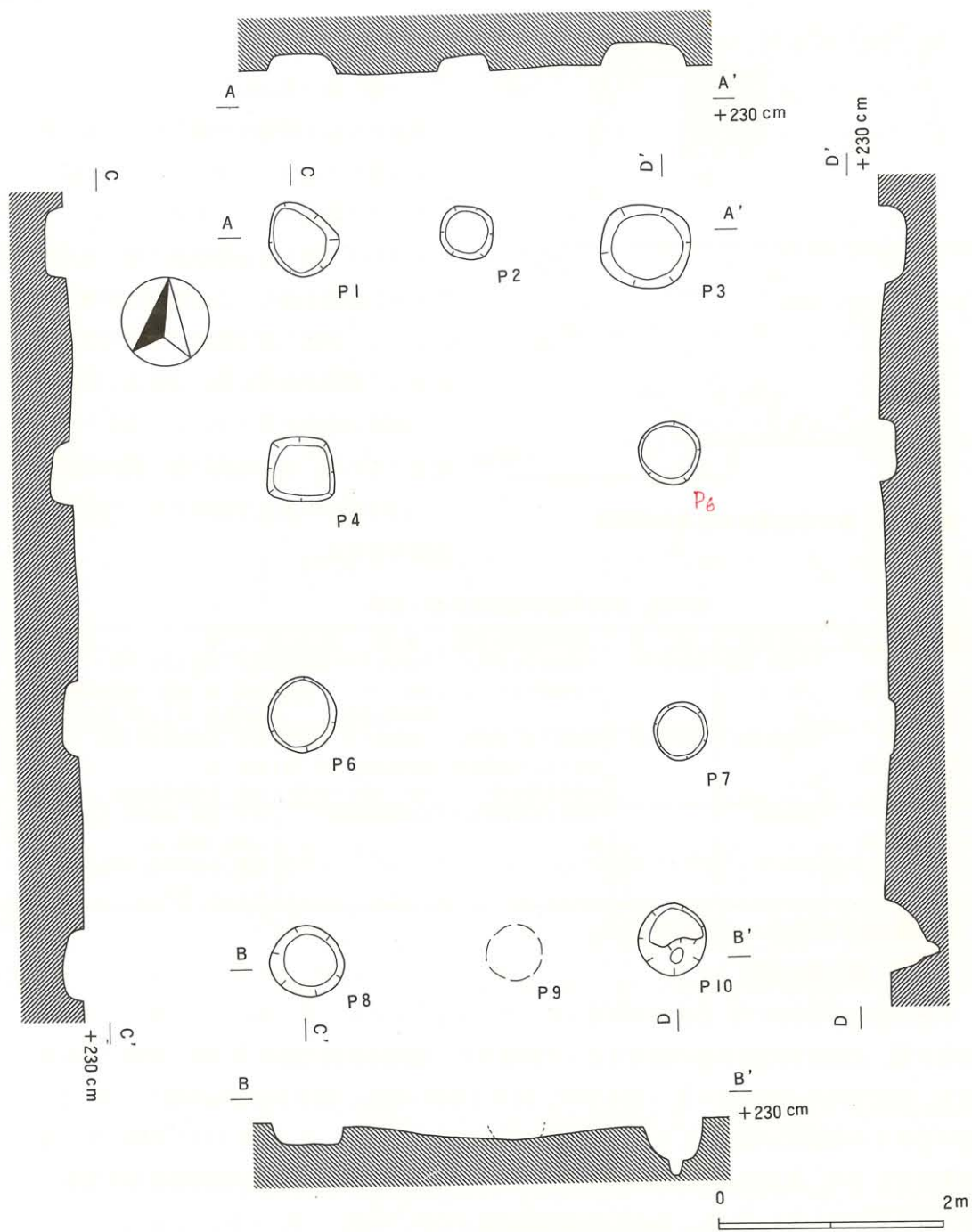
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
128-1	土師・甕	口縁部～胴部 上位1/3	口径(16.0)	口縁部短く外反する。 口唇部面取りされる。	口縁部横ナデ。胴部外面縦へら削り?。内面斜め刷毛調整。	胎土：白色小砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗赤褐色、内暗灰褐色 * 3と同一個体か。
128-2	土師・甕	口縁部 1/8	口径(21.8)	口縁部「く」の字状に外反する。口唇部外面に僅かな稜を有する。	口縁部横ナデ。頸部外面刷毛調整+ナデ。内面横へら削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明灰茶褐色
128-3	土師・甕	底部完存		丸底に近い底部を有する。	外内面刷毛調整。	胎土：石英・長石他の小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗灰褐色、内暗赤褐色 * 1と同一個体か。

(56) 第101号住居址 (S B101)

遺構(第129図)

本址は掘立柱建物址で、E区中央西寄りのグリッド2 J・2 K-33~36にかけて検出された。南北3間、東西2間の計10基の柱穴によって構成され、規模は柱間で南北6.5m、東西3.3mを測る。南北方向の主軸はN-6°-Wを示す。柱穴は径48~80cm、深さ4~49cmを測り、やや不揃いであるが各隅柱は比較的しっかりした掘り込みを有していた。P₉は表土剥ぎの際に深く削平されてしまい、確認作業中に消失してしまった。各柱穴の平面形は殆どが略円形を呈するが、P₄は隅丸方形を呈している。各柱穴の柱間隔は芯々でP₁-P₂、P₉-P₁₀が約1.5m、P₂-P₃、P₈-P₉が約1.7m、西側はP₁-P₄が約2.1mとやや短いながら、P₄-P₈-P₈は約2.2mとほぼ平均している。それに対して東側はP₃-P₅、P₇-P₁₀が約1.9mと短く、中央部のP₅-P₇は約2.5mと広く配列されており、本建物址が東側を正面として構築されたことが窺える。

遺物は各柱穴より弥生土器片と古墳時代前期の土師器片が出土しており、確実に本建物址に伴うものとは不明確であるが、古墳時代前期の所産である可能性が考慮される。



第129 图 第101 号住居址出土实测图



第130 图 第101 号住居址出土遺物实测图

遺物 (第130図)

本址の各柱穴からは前述したように弥生土器片と土師器片が出土しているが、細片が殆どで量も僅かであった。それらのうち図示できた遺物は、P₆より出土したS字口縁台付甕1点のみで、口縁端部は丸く仕上げられ、水平に近く外反している。頸部の内外面には横方向の刷毛目が僅かに残る。

第35表 第101号住居址出土土器一覧表

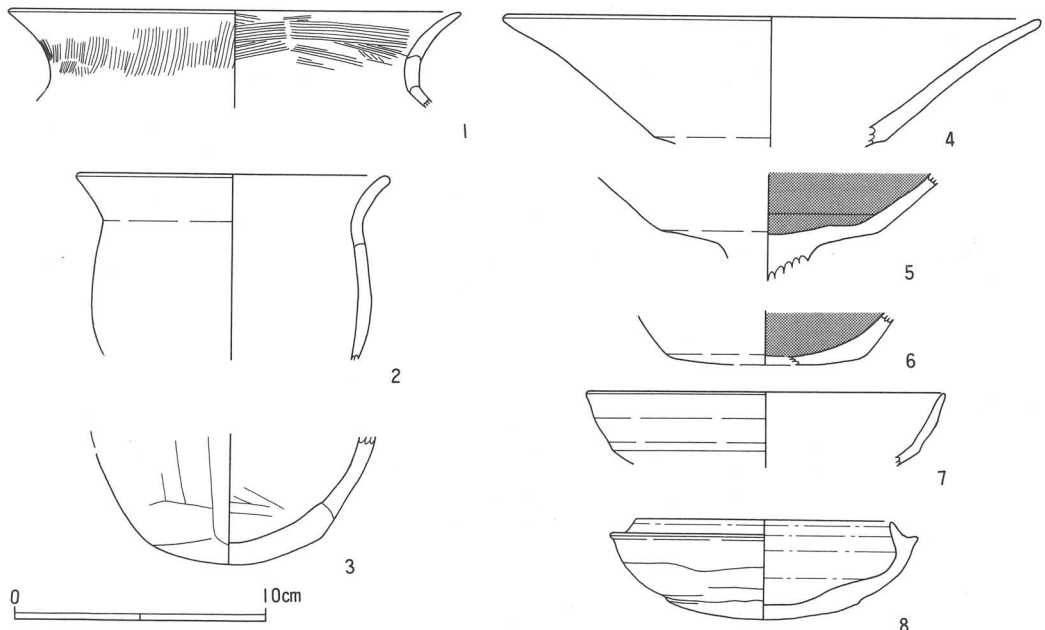
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
130-1	土師・甕	口縁部1/10	口径(16.6)	口縁部S字状に屈曲外反する。	口縁部横ナデ。頸部外内面横刷毛調整。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色

(57) 第104号住居址 (S B104)

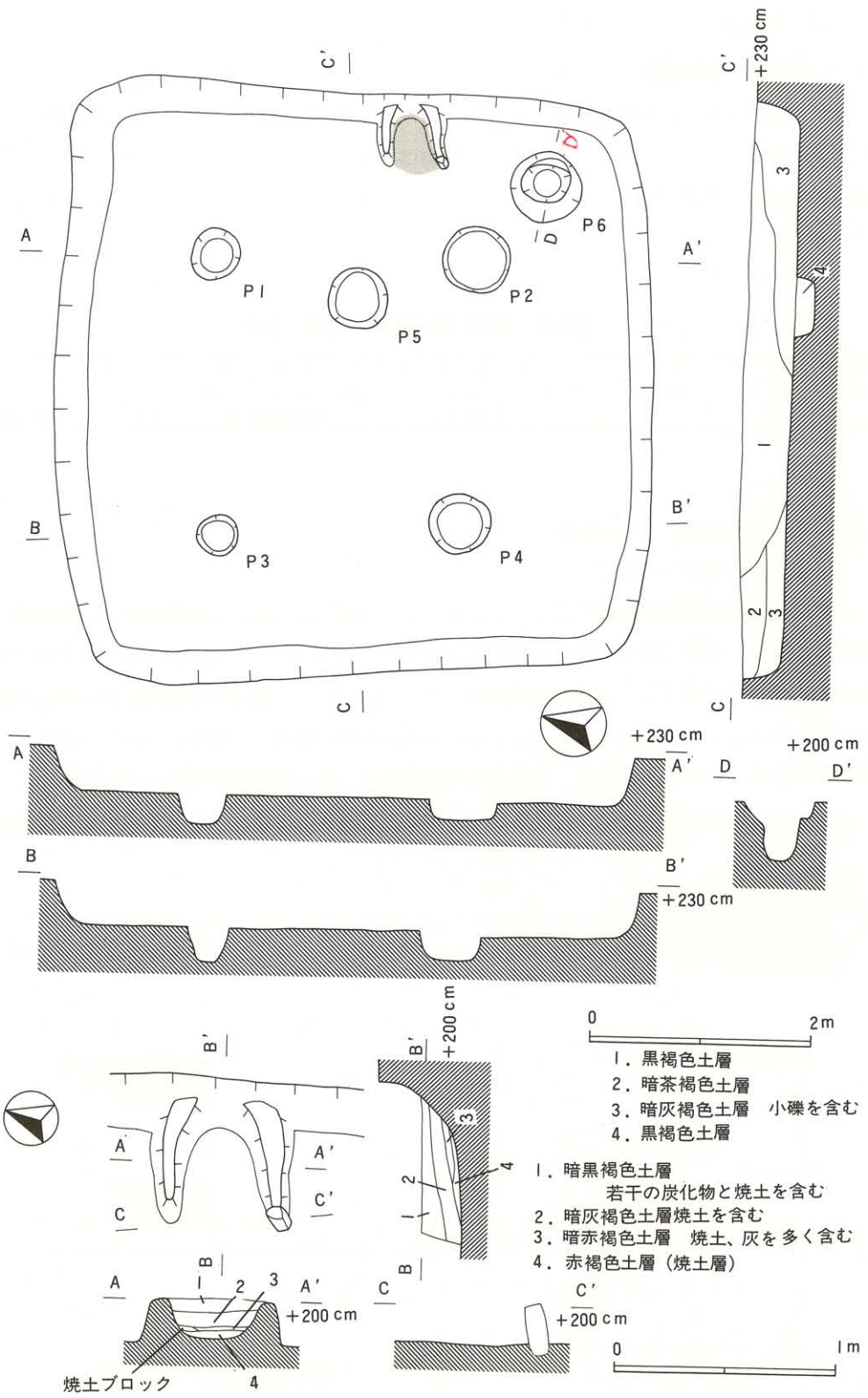
遺構 (第131・132図)

本住居址はE区南側中央部のグリッド2H～2J-39～41において検出された。他遺構との重複関係はない。規模は東西5.3m、南北5.1mを測り、平面プランは南壁のやや短い隅丸方形を呈する。カマドを中心とした主軸方向はN-77°-Eを示す。残存する壁高は29～44cmを測り、壁は緩やかに立上がり上方で直に近くなる。床面は比較的堅緻で、覆土は3層に分けられ、第1層は小礫を多く含んだ黒褐色土、第2層は暗茶褐色土、第3層は暗灰褐色土である。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが、遺存状況は悪く「U」字状の暗茶褐色粘土で



第131 図 第104 号住居址出土遺物実測図



第132図 第104号住居址・同址カマド実測図

構築された袖部と右袖先端の河原石が遺存していたのみである。残存する規模は袖長60cm、両袖幅60cmを測る。また、第83号住居址と同じく床面レベルが低かった割には煙道部は確認できず、C区で検出された住居址群とはカマドの構造に若干の差がある可能性が想起される。

ピットは計6基検出された。規模は37~75cm、深さ15~54cmを測る。

本址の所産期は住居址状態、出土遺物等から古墳時代後期と推定される。

遺物 (第131図)

本址からの出土遺物には土師器片、須恵器片と混入遺物として弥生土器片、黒曜石片がある。出土量は僅かで小片が殆どである。土師器の器種には甕、坏、高坏があり、須恵器は蓋坏の坏身が出土している。これらの遺物のうち図示できたものは8点であった。

1は土師器甕で薄く長く外反する口縁部で、内外面とも刷毛整形されている。2は小形甕であり張らない胴部に丸く外反する口縁部を持つ。3は長胴甕の底部で、内外面へラ削りされる。4・5は高坏で、4は大きく長く外反する坏部で柱状の脚部をもつと推定される。5は坏部内面が黒色研磨されており、裾広がりの脚部を持つと推定される。6・7は坏で、6は内面が黒色研磨され、外面はへラ削りによって調整されている。7は所謂模倣坏で外面に稜を持って直線的に外傾している。8は須恵器蓋坏の坏身で、口縁の立上がりはかなり高い位置にあり、口縁部は僅かに外反しながら内傾している。端部は丸く仕上げられている。受部は鈍く上方に延びる。底部は回転へラ削りとナデ整形により丸く仕上げられている。

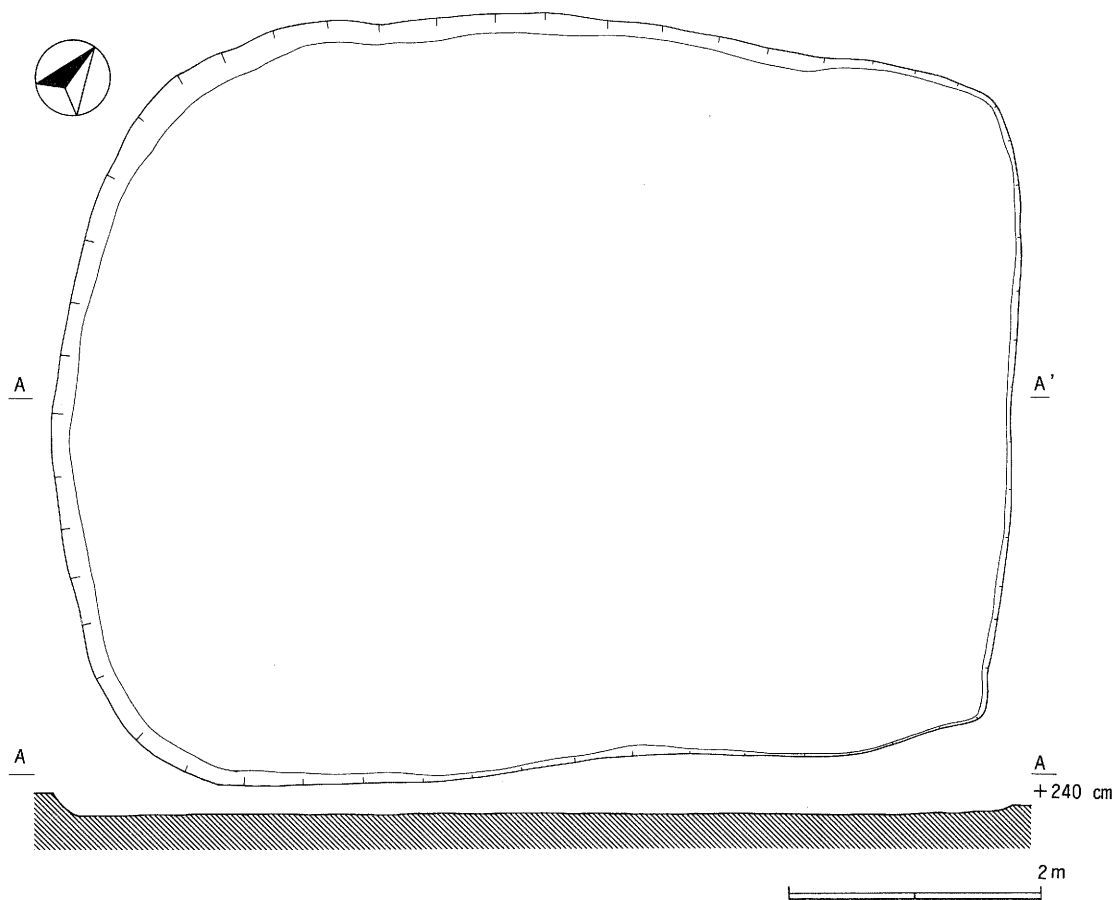
第36表 第104号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
131-1	土師・甕	口縁部 1/3	口径(18.2)	口縁部外反する。	口縁部横ナデ。外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。	胎土：小砂粒・金雲母片を多く含む 焼成：良 色調：外暗褐色 内明白褐色
131-2	土師・甕	口縁部～胴部 1/4	口径(12.6)	口縁部外反する。	口縁部横ナデ。胴内面へラ削り。	胎土：小砂粒を多量に含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
131-3	土師・甕	底部 2/3		丸底を呈する。	外面縦へラ削り。内面横へラ削り。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗橙褐色、内暗灰色
131-4	土師・高坏	坏部 1/2	口径(19.6)	坏部稜を持って外反し、長く伸びる。	外内面縦へラ磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明橙色
131-5	土師・高坏	坏部 1/2		坏部稜を持って外反する。	外面縦へラ磨き+ナデ？ 内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外明橙褐色、内黒色
131-6	土師・坏	底部 1/4		底部は丸底に近い。	外面横ナデ。内面横へラ磨き。底裏面へラ削り。	胎土：赤褐色細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明黄灰褐色、内黒色
131-7	土師・坏	口縁部1/8	口径(14.4)	外面に稜を有し、僅かに内湾しながら外傾する。	外面横ナデ。内面横へラ磨き+ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗灰褐色
131-8	須恵・坏	口縁部～底部 1/2	口径 10.3 器高 4.0	丸底を呈し、受部は鈍く上方に延びる。口縁部内傾する。	口縁部横ナデ。外面回転へラ削り。内面口横ナデ。	胎土：精良 焼成：良(堅緻) 色調：外青灰色 内明青灰色

(58) 第106号住居址 (S B106 第133図)

本住居址はF区北東部のグリッド2 I～2 L-46～49において、第107号住居址と重複して検出された。遺構東側でやや深く削平を受けており、平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は東西7.7m、南北5.9mを測り、主軸方向はN-50°-Eを示す。残存する壁高は3～22cmを測り、壁は比較的直に近く立上がる。床面は軟弱で、覆土は暗黒褐色土の単一層である。柱穴、炉址等は検出されなかった。

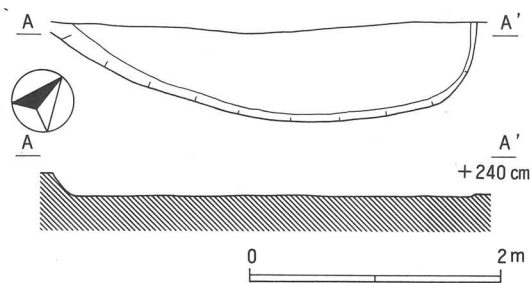
本址は第107号住居址を切って構築され、古墳時代前期に比定される土師器の小片が僅少出土しているところから該期の所産と推定される。



第133 図 第106 号住居址実測図

(59) 第107号住居址 (S B107 第134図)

本址はF区北東部のグリッド2 J-48・49において、第106号住居址と重複して南東部の一部が検出された。遺構の大部分を第106号住居址によって破壊されていたため、規模、平面プラン

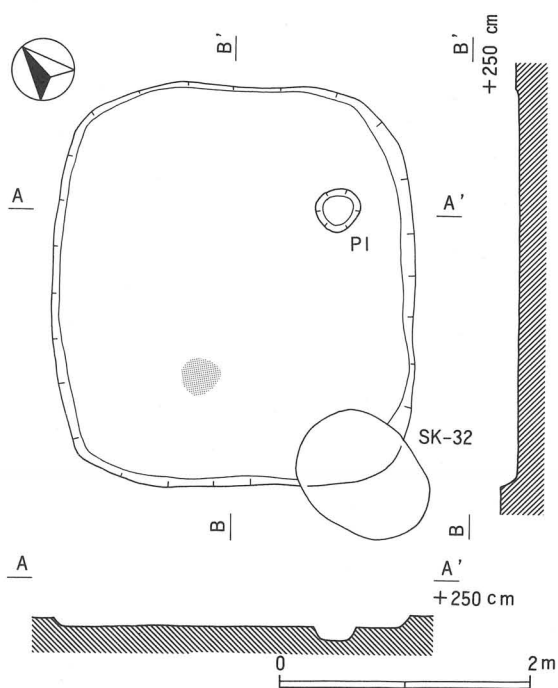


第134 図 第107 号住居址実測図

等は不明である。残存する壁高は7~11cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は黄色粒子を多く含んだ暗茶褐色土の単一層であった。柱穴、炉址等は検出されなかった。

本址からは箱清水式期に比定される弥生土器片が僅か出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

(60) 第108号住居址 (S B 108 第135図)



第135 図 第108 号住居址実測図

本住居址はF区南東部のグリッド2 J・2 K-53・54において第32号土壇と重複して検出された。遺構は北側でやや深く削平されており、南隅部を第32号土壇によって切られている。規模は長軸3.2m、短軸2.9mと極めて小規模で、平面プランは整った隅丸方形を呈する。主軸方向はN-42°-Eを示す。残存する壁高は4~14cmをはかり、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は黄色粒子を多く含んだ暗茶褐色土の単一層であった。

炉址は南側中央部に設けられ、約30cmの範囲に3cmの厚さで焼土が堆積していた。ピットは東隅部に1基検出され、径35cm、深さ10cmの略円形を呈する。本址からは弥生土器の小片が極く僅かながら出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

(61) 第110号住居址 (S B 110)

遺 構 (第136図)

本住居址はF区南部中央部のグリッド2 P・2 Q-55・56において検出された。他遺構との重複関係はない。平面プランは東西のやや長い隅丸方形を呈し、規模は東西3.0m、南北2.7mを測る。主軸方向をN-82°-Wを示す。残存する壁高は13~21cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面は比較的堅緻で、覆土は2層に分けられ、上層は若干の小礫を含んだ暗茶褐色土で、下層は

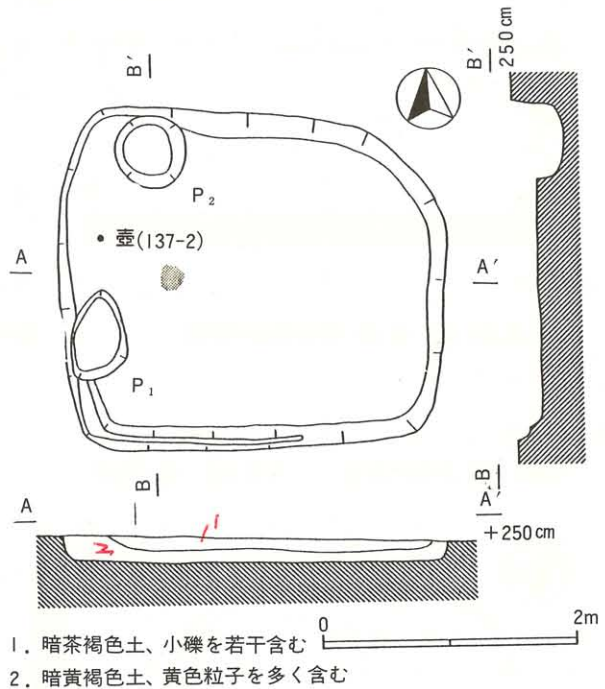
黄色粒子を多く含んだ暗黄褐色土である。

炉址は西側中央部に設置されていたと推定され、約20cmの範囲にわたって僅かに焼土が検出された。ピットは計2基検出された。P₁は西壁沿いに位置し、70×36cm、深さ22cmの不整楕円形を呈する。P₂は径58cm、深さ22cmの略円形を呈する。断面形は共にやや袋状を呈する。

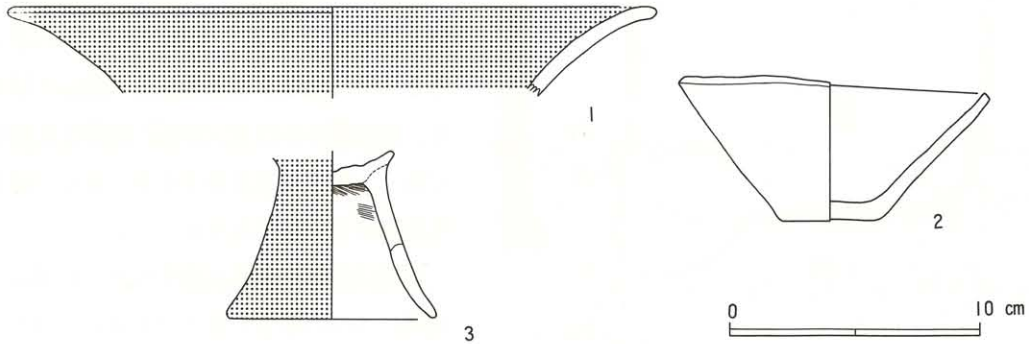
本址の所産期は、出土遺物より弥生時代後期と推定される。

遺物 (第137図)

本住居址からは少量の弥生土器片が出土している。器種には壺、甕、高坏、鉢があるが、小細片がほとんどで図示できたのは3点である。1は壺の口縁部で内外面と口



第136図 第110号住居址実測図



第137図 第110号住居址出土遺物実測図

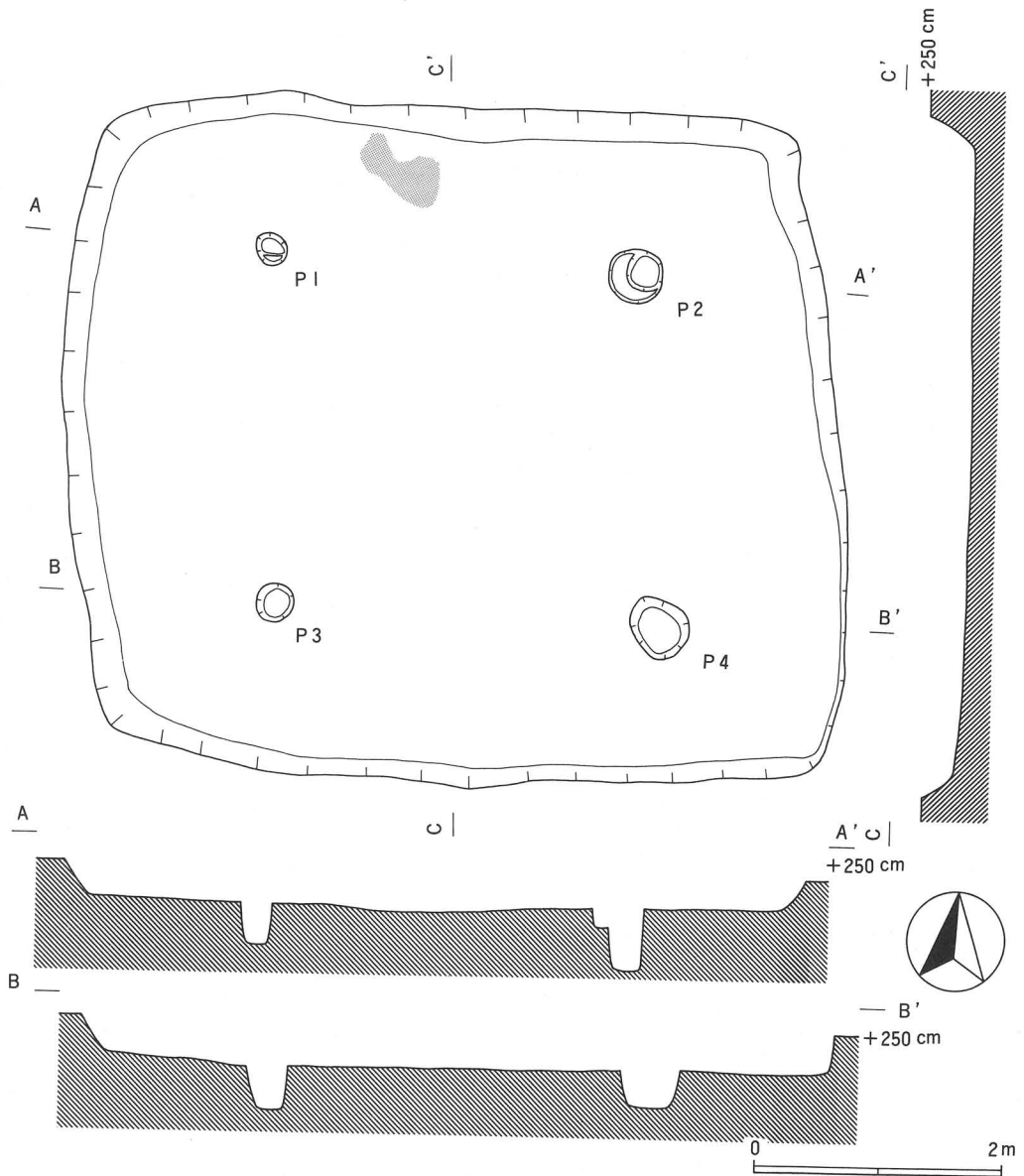
第37表 第110号住居址出土土器一覽表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
137-1	弥生・壺	口縁部 1/8	口径(26.0)	口縁部外反する。	口唇部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色 *外内赤彩(僅かに残る)。
137-2	弥生・壺	胴部下位3/4 底部完存	底径 3.8	平底の底部から胴部に僅かに外反して開く。	外面横刷毛調整+縦へら磨き。内面横刷毛調整+横へら磨き。底裏面へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内淡橙色 *壺の底部を鉢として転用したもののか。
137-3	弥生・高坏	脚部1/4	底径(8.4)	裾部僅かに外反する。	外面縦へら磨き。内面横刷毛調整+横ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外赤彩。

縁部で内外面ともへら磨きの後、赤色塗彩される。2は壺の底部であるが、破断面が丁寧に摺り潰されており、鉢として転用されたものと推定される。3は小形の高坏の脚部で外面は赤色塗彩され、内面は刷毛整形される。

(62) 第111号住居址 (S B111 第138図)

本住居址はF区北部中央のグリッド2 N～2 P-47～49において第112・113号住居址と重複して検出された。平面プランは東西方向に僅かに長く、南東側にやや歪んだ隅丸方形を呈し、規模は東西6.2m、南北5.7mを測る。東西方向の主軸はN-5°-Eを示す。残存する壁高は25



第138 図 第111 号住居址実測図

～36cmを測り、壁は全体として緩やかに立上がる。床面はほぼ平坦で比較的堅緻であった。覆土は小礫、炭化物を多く含んだ暗黒褐色土の単一層であった。

炉址は北壁沿いの中央部において若干の焼土が検出されたが、堀り込み等は確認できず、位置的にも地床炉と即断はしかねる。ピットは計4基検出され、規模は径25～48cm、深さ29～49cmを測る。柱間隔は東西 3.1m、南北 2.9mを測り、支柱穴と推定される。

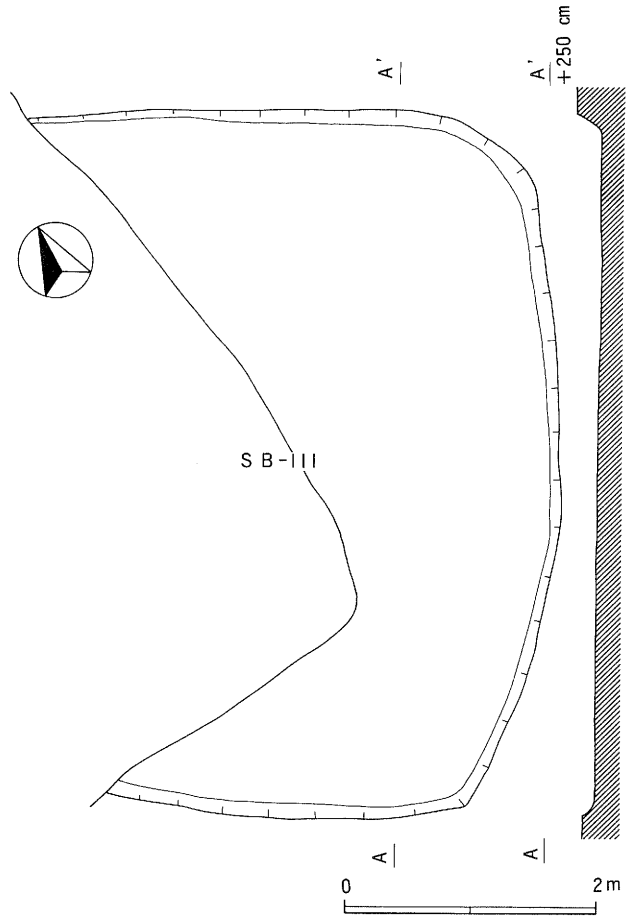
本址からは古墳時代前期に比定される土師器片と黒曜石片、白玉、ガラス小玉等が出土しており、該期の所産と推定される。

(63) 第112号住居址

(S B112 第139図)

本住居址はF区北側中央部のグリッド2M・2O-47～49において第111・113号住居址と重複して検出された。北西部の大部分を第111号住居址によって破壊されているため、全体のプランは不明確であるが、N-32°-Eに主軸方向を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。南北長は5.7mを測り、東西長は4.8mと推定される。残存する壁高は19～21cmを測り、壁は比較的直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、覆土は小礫を多く含んだ暗黒褐色土の単一層であった。炉址、柱穴等は検出されなかった。

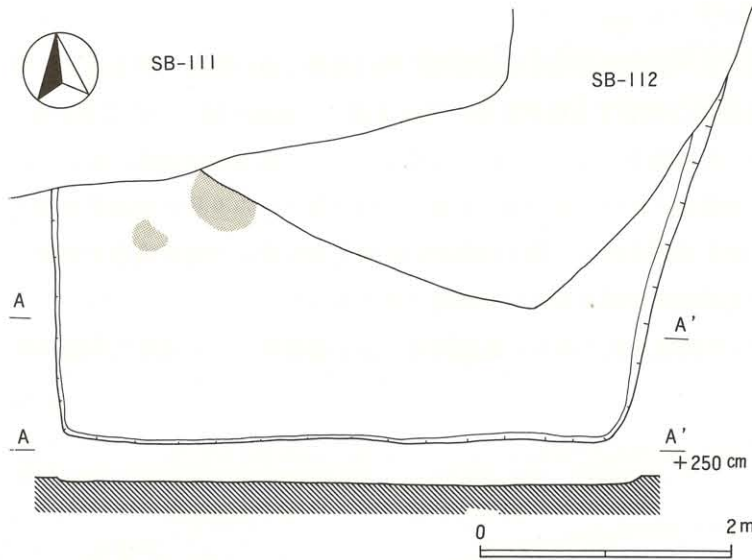
本址からは弥生土器の小片が若干出土しており、重複関係、出土遺物等から弥生時代後期の所産と推定される。



第139 図 第112 号住居址実測図

(64) 第113号住居址 (S B113 第140図)

本住居址はF区北側中央部のグリッド2N・2O-48・49において第111・112号住居址と重複して検出された。遺構北側の大部分を両住居址によって破壊されており、全体のプランは不明確であるが隅丸(長)方形を呈すると推定される。南壁を基準として主軸方向はN-84°-Wを示し、南壁長は4.4mを測る。残存する壁高は4～8cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面はやや凹凸があるものの比較的堅緻で、覆土は小礫を含んだ暗褐色土の単一層である。



第 140 図 第 113号住居址実測図

炉址は住居址西側に設置されていたと推定され、2ヶ所で若干の焼土が検出された。東側の焼土は一部第112号住居址に切られているものの約55cmの範囲に堆積しており、地床炉と推定される。西側の焼土については最も少量で東側の炉に伴なう焼土の可能性も考慮される。

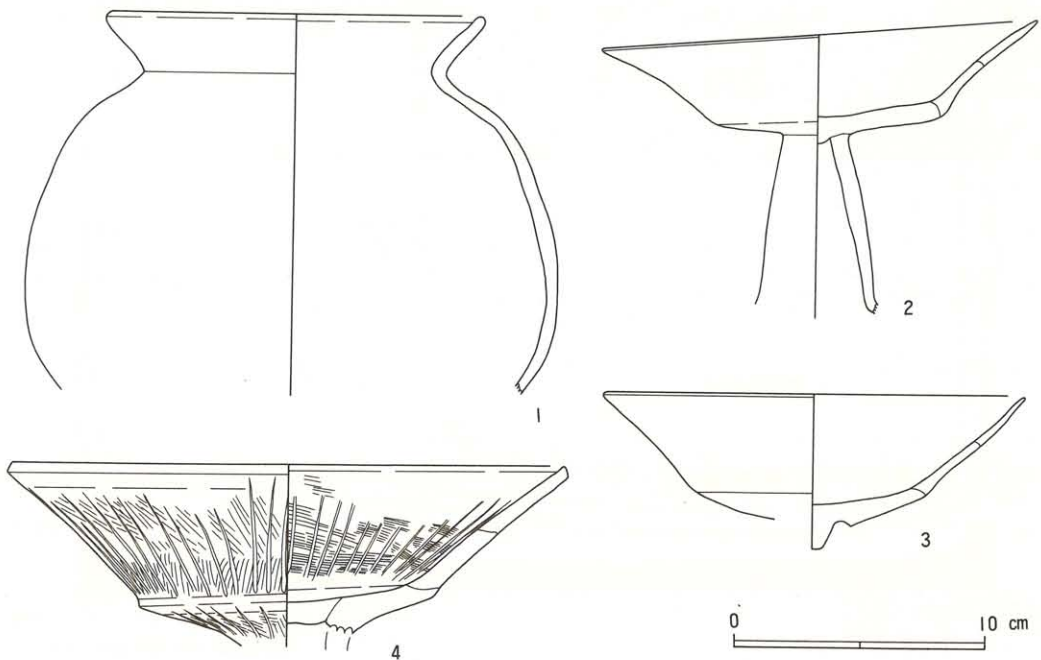
本址からは弥生土器の小片が僅か出土しており、重

複関係、出土遺物等より、弥生時代後期の所産と推定される。

(65) 第114号住居址 (SB114)

遺構 (第142図)

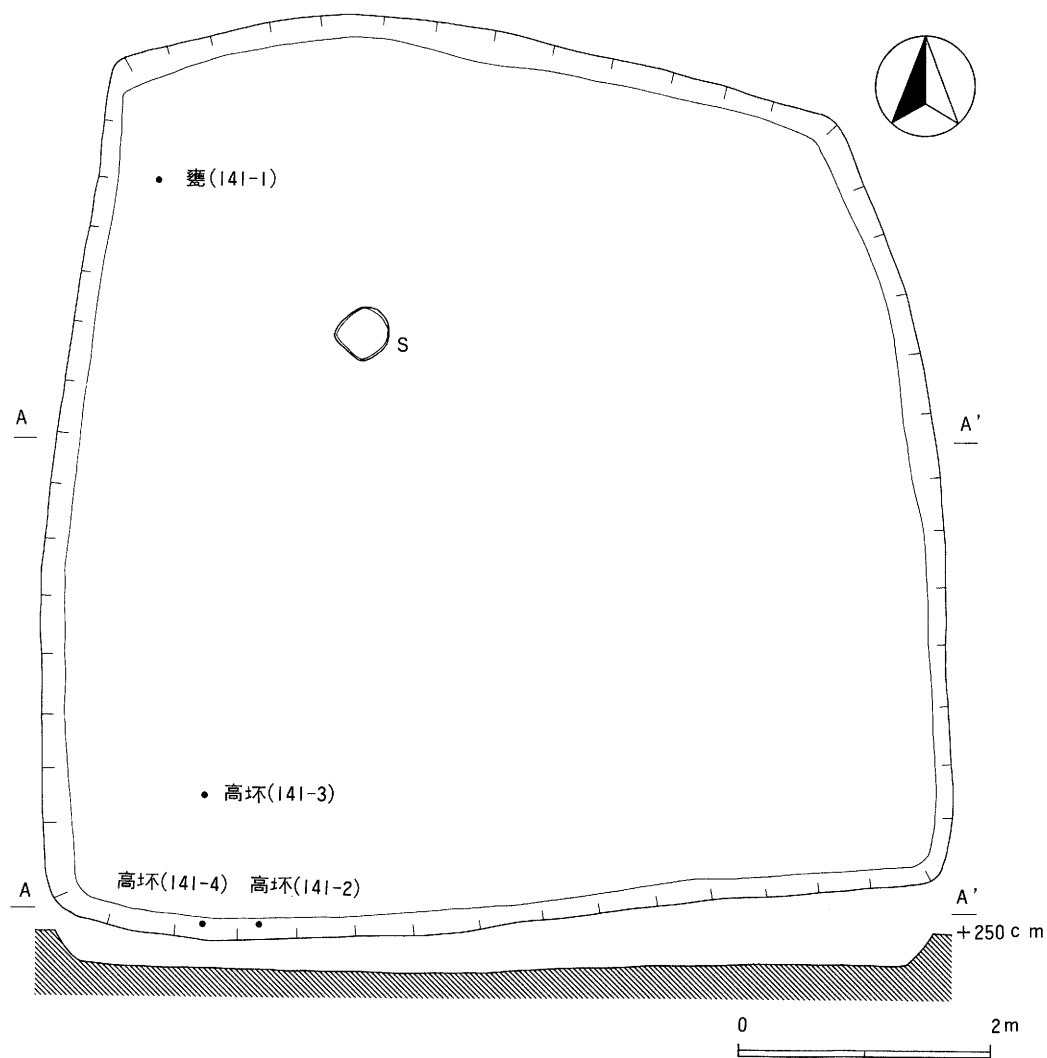
本住居址はF区中央部やや北西寄りのグリッド2Q~2S-49~52において、第115号住居址



第141 図 第114号住居址出土遺物実測図

と重複して検出された。平面プランは主軸方向をほぼ南北に持つ台形に近い隅丸方形を呈し、規模は南北 7.4m、東西 7.1mを測る。残存する壁高は19~29cmを測り、比較的緩やかに立上がる。床面は全体に堅緻であったが、床面精査ではついに柱穴は検出できず、住居址北西部において43×40cm、厚さ12cmの平石が1点検出されたことから、本址の主柱は掘り込みを持たず礎石を用いて立てられていたのではないかと推定される。覆土は部分的に炭化物を含んだ暗黒褐色土の単一層である。炉址は部分的に焼土の堆積が認められたが確認できなかった。

本址は第 115号住居址を切って構築されており、重複関係、出土遺物等より古墳時代中期の所産と推定される。

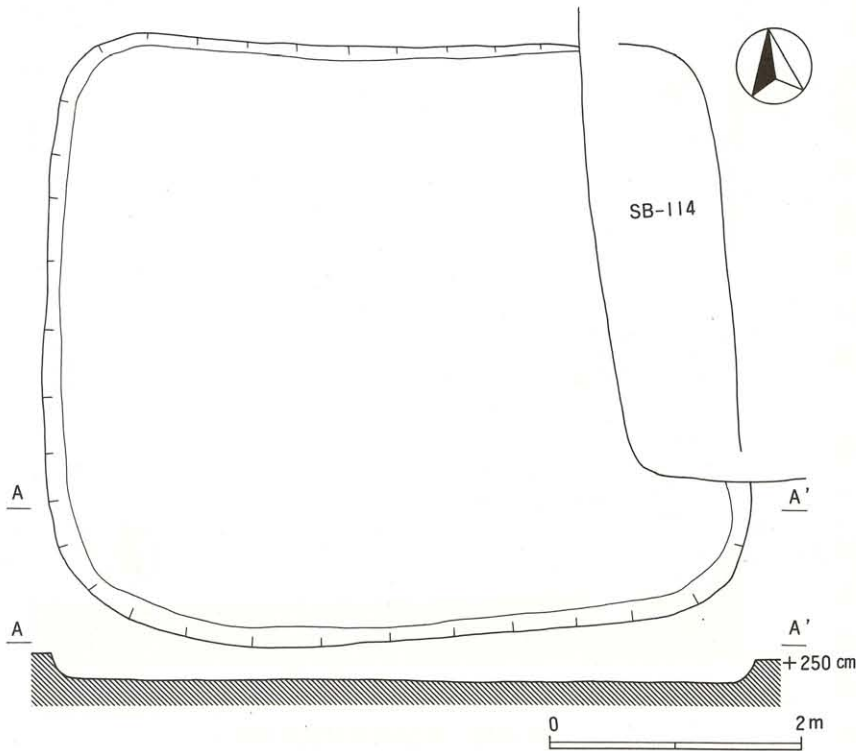


第142 図 第114号住居址実測図

遺物 (第141図)

本址からは若干の土師器片が出土している。器種には甕、高坏、坏等があるが、図示できたのは4点である。1は甕で、やや下膨れの球形胴に「く」の字状に強く外反する口縁部を持つ。2～4は高坏で、いずれも坏部は屈曲して大きく外反して開き、柱状の脚部裾部も大きく開く器形を持つ。坏部と脚部の接合はほぞによって成される。3の口縁部は面取りされ、坏部内外面には放射状の暗文が特に顕著である。 第38表 第114号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
141-1	土師・甕	口縁部～胴部下位1/2	口径(15.2)	口縁部「く」の字状に外反し、口唇部僅かに内湾し、内側に肥厚。胴部下半に最大径。	口縁部横ナデ。胴外面ナデ。胴内面へラ削り+ナデ。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色 *胴部外面煤ける。
141-2	土師・高坏	坏部 1/2 脚部完存	口径(17.4)	坏部稜を持って屈曲外反し、長く伸びる。脚部は柱状を呈する。	外面縦へラ磨き。坏内面へラ磨き+ナデ?。脚内面へラ削り。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：やや不良 色調：外内明褐色
141-3	土師・高坏	坏部ほぼ完存	口径 16.9	坏部稜を持って屈曲外反し、口縁端部で僅かに外反する。	口唇部横ナデ。外面縦へラ磨き。内面斜めへラ磨き+ナデ。	胎土：微砂粒多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色
141-4	土師・高坏	坏部完存	口径 22.4	坏部外面に段を持って屈曲外反。口縁端部は面取りされ内側に僅かに肥厚する。	口唇部横ナデ。外面斜め刷毛調整+縦へラ磨き。内面横刷毛調整+縦へラ磨き。	胎土：微砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明橙褐色



第143図 第115号住居址実測図

(66) 第 115号住居址

(SB115 第143図)

本住居址はF区西側中央部のグリッド2S・2T-50~52において第114・116号住居址と重複して検出された。平面プランは東西方向に僅かに長い隅丸長方形を呈しており、規模は東西長5.5m、南北長4.8mを測る。主軸方向はN-85°-Wを示す。残存する壁高は8~19cmを測り、壁は比較的直に近く立上がる。床

面は一部で貼床の遺存が確認されたものの、全体に軟弱で柱穴等は検出されなかった。覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層である。遺物は古墳時代前期に比定される土師器の小片が少量出土しており、甕、S字口縁台甕、高坏、器台等の器種が観られる。

本址は第116号住居址を切って構築された後に第114号住居址によって切られており、重複関係、出土遺物より古墳時代前期の所産と推定される。

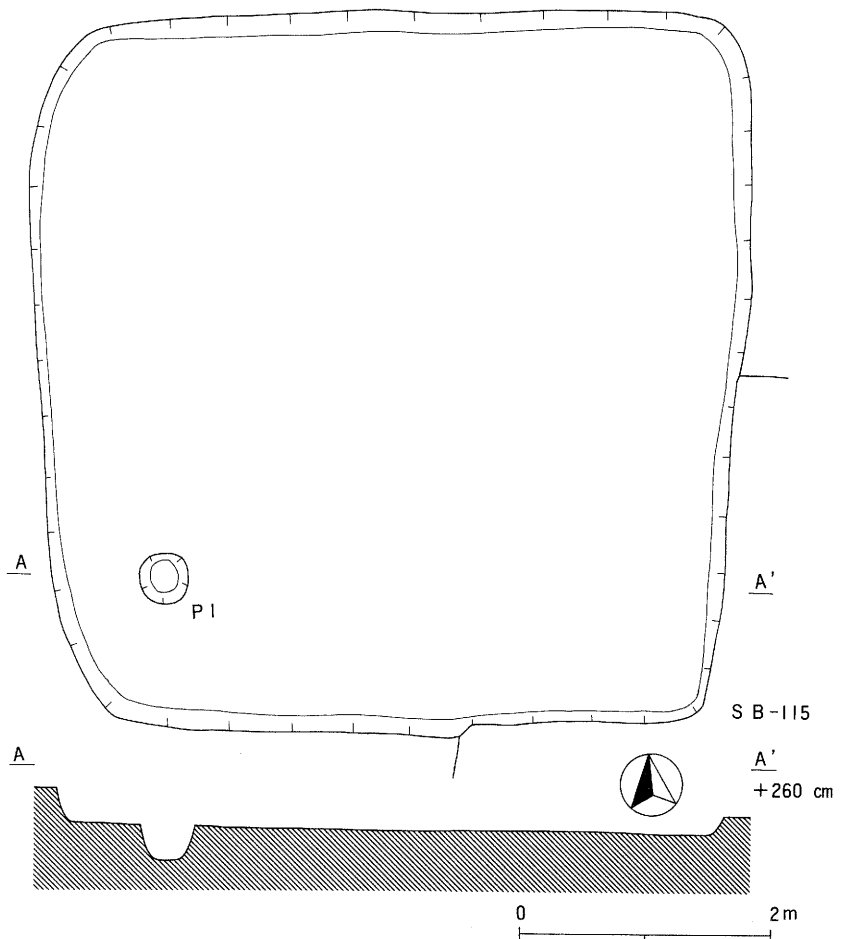
(67) 第116号住居址 (S B116 第144図)

本住居址はF区西側中央部のグリッド2 T・2 U-49~51において第115・117号住居址と重複して検出された。平面プランは南北の主軸方向をN-5°-Eに持つ隅丸方形を呈し、規模は南北5.9m、東西5.6mを測る。残存する壁高は30~34cmを測り、壁は比較的直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、住居址南西部に径40cm、深さ28cmのピットが1基検出された。覆土は小礫を多量に含んだ暗褐色土の単一層である。

本址からは弥生土器の小片が若干出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。

(68) 第117号住居址
(S B117 第145図)

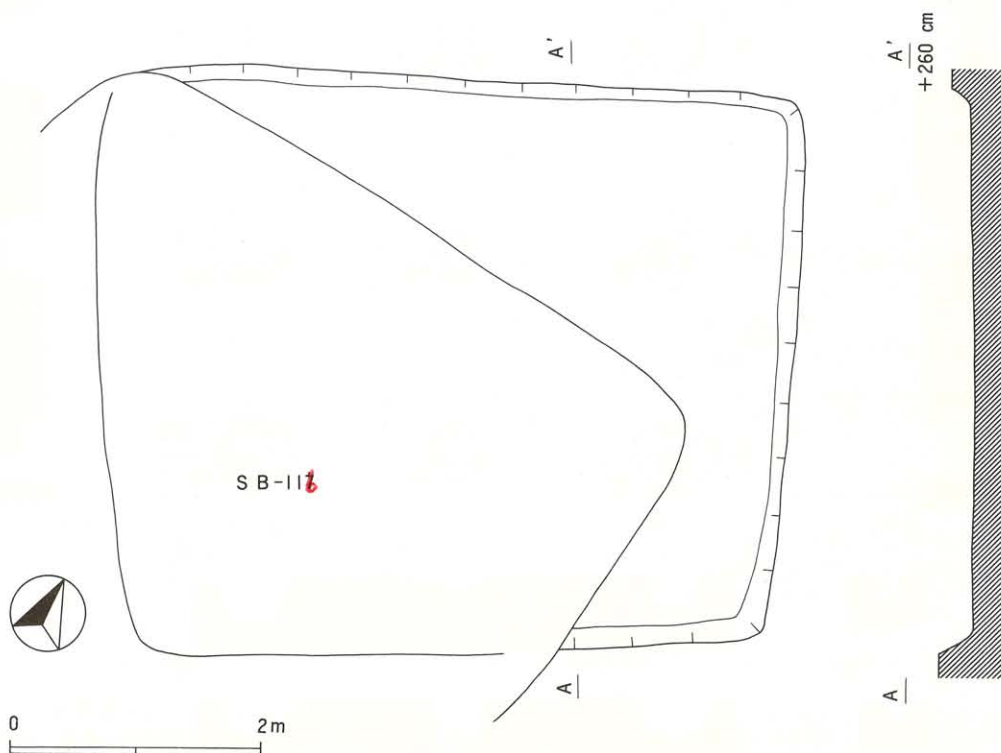
本住居址はF区北西部のグリッド2 S~2 U-49・50において第116号住居址と重複して検出された。遺構は南西部の大部分を第116号住居址によって破壊されているため全体のプランは不明確であるが、平面プランは東西に僅かに長い隅丸長方形を呈すると推定される。規模は東西長5.6m、南北長5.0mを測り、主軸方向はN



第144図 第116号住居址実測図

-65°-Eを示す。残存する壁高は15~23cmを測り、壁は直に近く立上がる。床面はやや軟弱で、柱穴等は検出されなかった。覆土は小礫を多く含んだ暗褐色土の単一層である。

本址からは弥生土器の小細片が少量出土しており、弥生時代後期の所産と推定される。



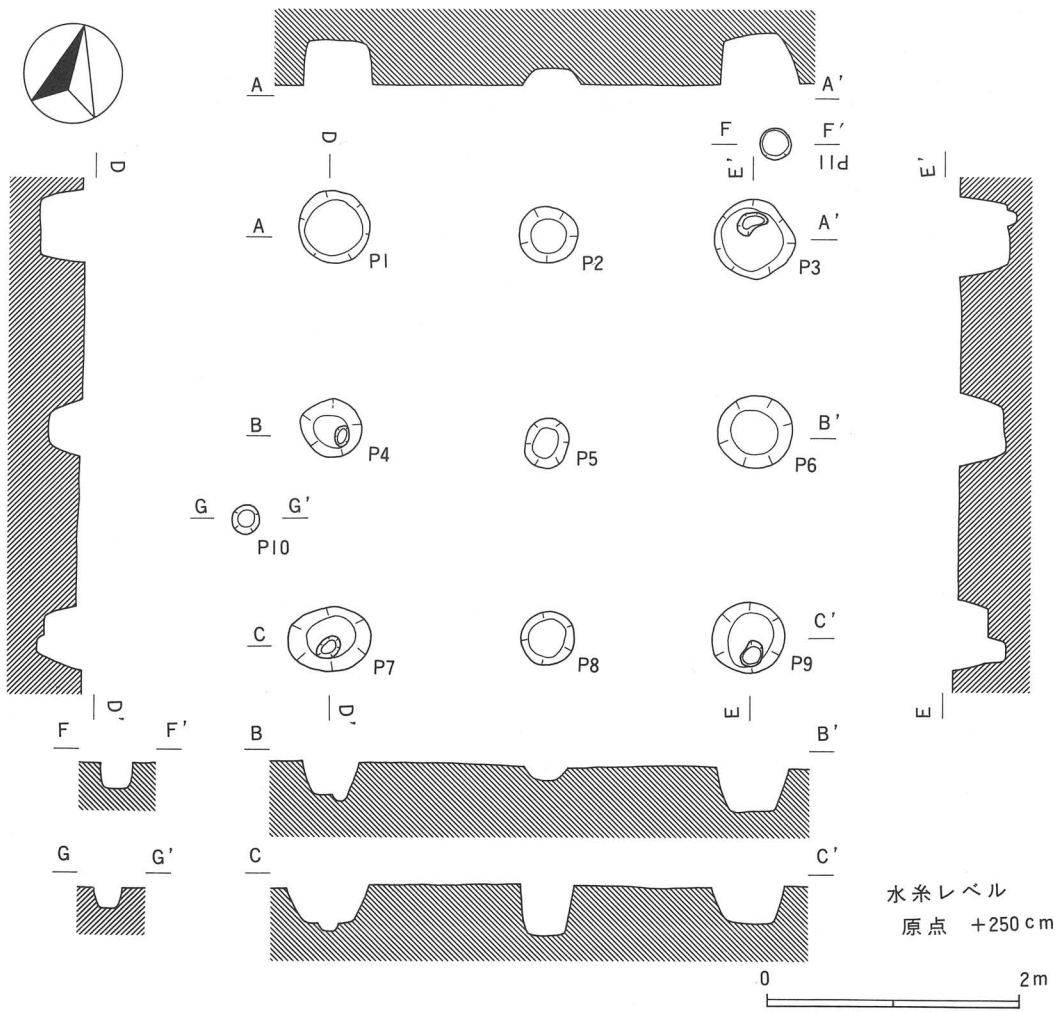
第145 図 第117号住居址実測図

(69) 第118号住居址 (SB118)

遺構 (第146図)

本址は掘立柱建物址で、F区南西部のグリッド2S・2T-54~56において第119号住居址を切って検出された。南北2間、東西2間の9基の主柱穴と2基の小柱穴の計11基の柱穴によって構成されている。建物址の規模は主柱の柱間で東西3.4m、南北3.2mを測り、東西の軸方向はN-75°-Eを示す。各柱穴の規模は、P₁・P₃・P₇・P₉の各隅柱がやや大きく、径55~61cmの略円形あるいは楕円形を呈し、深さは28~46cmを測る。各隅柱の中間に位置するP₂・P₄~P₆・P₈は径33~58cmの略円形を呈し、深さも12~43cmと比較的小規模である。なお、P₁₀はP₄とP₇の中間に位置し建物入口に伴う梯子穴と推定され、径21cmの略円形を呈し、深さは16cmを測る。P₁₁はP₃の北側に位置し、径25cmの略円形を呈し、深さは23cmを測る。P₃・P₄・P₇・P₉の4基はテラスを有しているが、いずれも柱痕は小規模で位置的關係からも主柱に添えられた補助柱の痕跡と推定される。

遺物はP₁・P₃・P₄・P₆・P₇・P₉の各柱穴より弥生土器片と古墳時代前期に比定される土師器片、黒曜石フレイク等が出土しており、古墳時代前期の所産である可能性が考慮され



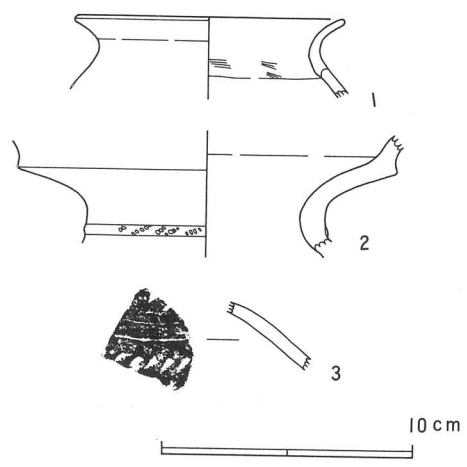
第146図 第118号住居址実測図

るが、掘立柱建物址の性格上明確にし難い。

遺物 (第147図)

本址の各柱穴からは前述したように弥生土器片、土師器片、黒曜石フレイク等が出土しているが、細片が殆どで、量も極めて少量であった。弥生土器の器種には壺、甕、高坏、鉢があり、土師器の器種には壺、甕がある。これらの遺物のうち図示できたのは土師器3点である。

1はP₃より出土した甕で、口縁部が短く弧を描いて外反する。2はP₄より出土した壺で、頸部は弧を描いて外反し、口縁部は屈曲して立上がり有段口縁を呈する。頸部外面には僅かな厚みを持った突帯が貼りつけられ、



第147図 第118号住居址出土遺物実測図

櫛歯状工具による刺突文が施文されている。3は壺の肩部片と推定され、P₉より出土した。数条の細い凹線文が施文され、その下部に楔形に刺突文が施文されている。

第39表 第118号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
147-1	土師・甕	口縁部1/4		口縁部短く弧を描いて外反する。	外面横ナデ。 内面刷毛調整+ナデ	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色
147-2	土師・壺	口縁部～頸部1/5		口縁部有段口縁。頸部は弧を描いて外反し、突帯こ有す。	外内面横ナデ。頸部突帯に櫛歯状工具による刺突文。	胎土：赤 白色小粒子を若干含む 焼成：良 色調：外内明黄褐色
147-3	土師・壺				数条の細い凹線文と楔形の刺突文を有する。	胎土：微砂粒を若干含む 焼成：良 色調：外明橙色、内暗灰色

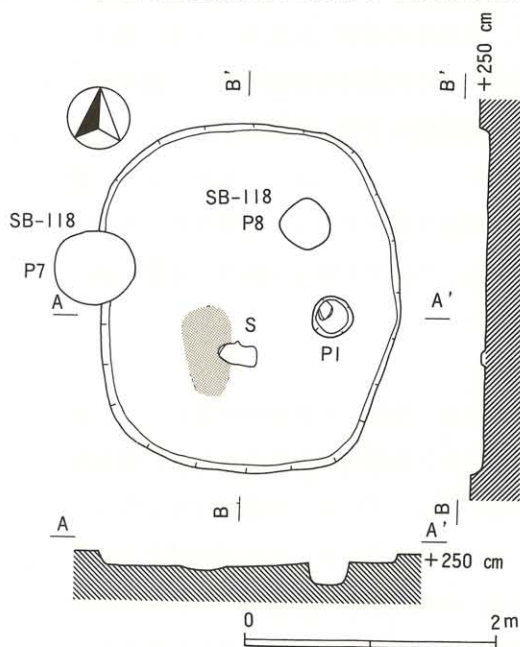
(70) 第119号住居址 (S B119)

遺物 (第148図)

本住居址はF区南西部のグリッド2 S・2 T-55・56において、第118号住居址に切られて検出された。平面プランは主軸方向をほぼ南北に持つ楕円形を呈し、規模は南北2.8m、東西2.4mを測る。残存する壁高は6～10cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は礫が露出しやや凹凸があり、覆土は暗黄褐色土の単一層である。

炉址は中央部南側に地床炉が設けられており、35×14×6cmの平石が据えられていた。また、中央部東側に径36cm、深さ10cmのピットが1基検出された。

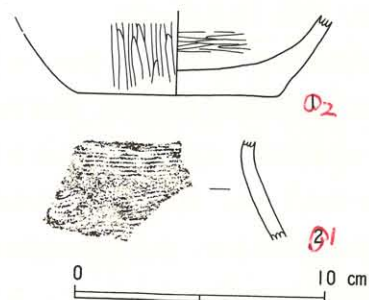
本址の所産期は出土遺物より弥生時代後期と推定される。



第148図 第119号住居址実測図

遺物 (第149図)

本址からは弥生土器の小細片が僅か出土した。器種には壺、甕があるが、図示できたのは拓影も含めて2点に過ぎない。1は甕の頸部片で、簾状文と波状文が施文されている。2は甕の底部で、内外面ともへら磨きが施され、底部裏面も一定方向にへら磨きが行われている。



第149図 第119号住居址出土遺物実測図

第40表 第119号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
149-1	弥生・甕				外面籬状文+波状文。 内面へラ磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外暗茶褐色、内明茶褐色
149-2	弥生・甕	底部完存	底径 8.1		外面縦へラ磨き。内面 横へラ磨き。底裏面へ ラ磨き。	胎土：小砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗赤褐色

2. 土 壌

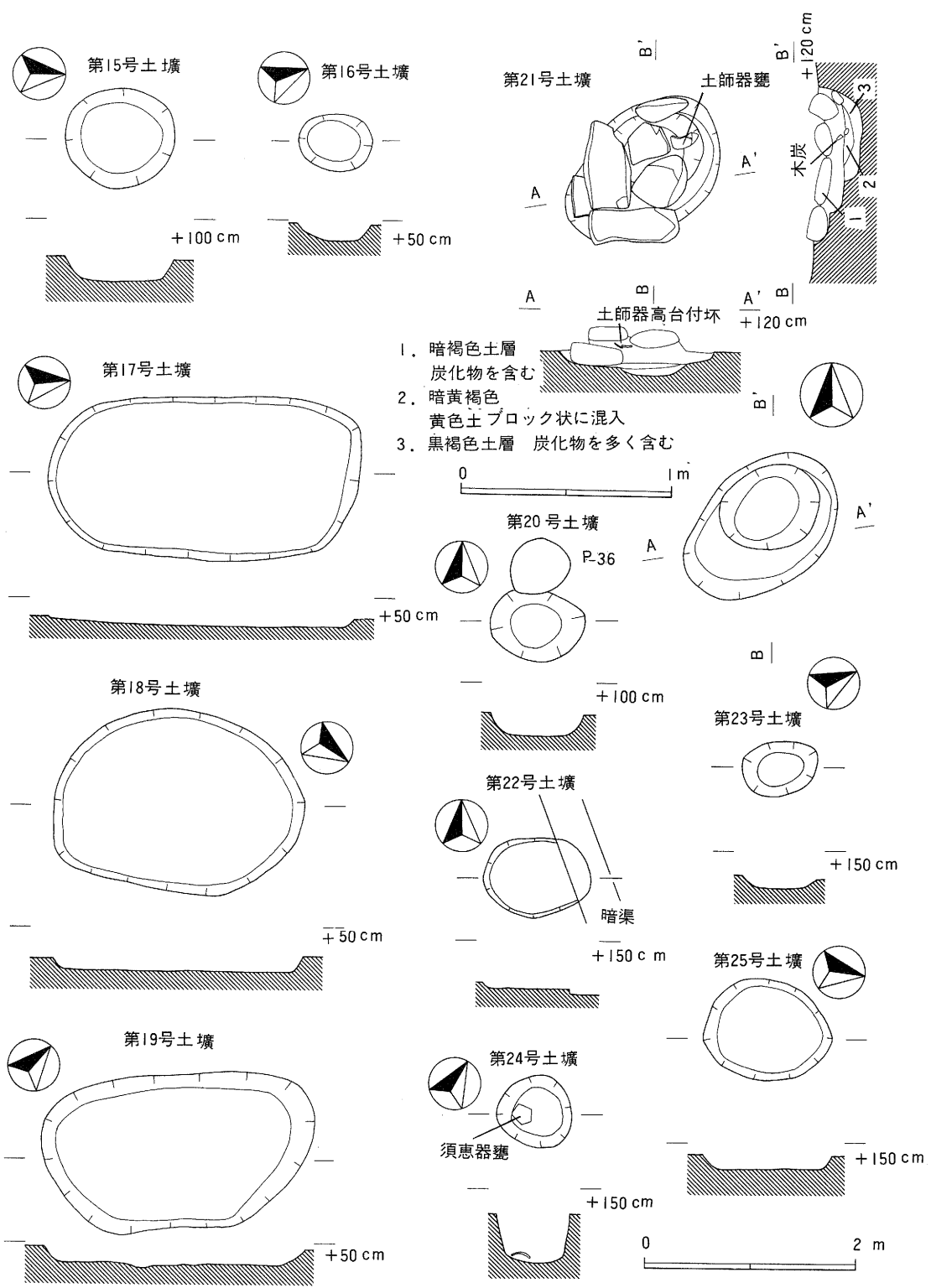
琵琶塚遺跡の2次調査において検出された土壌は、C区6基、D区5基、E区4基、F区4基の総計19基である。平面プラン、規模等は多様で、位置的にも偏在性は認められない。所産期は出土遺物、重複関係等より大部分の土壌が、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代後期の3時期に構築されたものと推定される。土壌の性格は不明確なものが多いが、第21・25・33号土壌は土壌墓の可能性が想定される。各土壌の計測値は一覧表にまとめた。以下、出土遺物、重複関係を中心に概述していきたい。

(1) C区 (SK15~20)

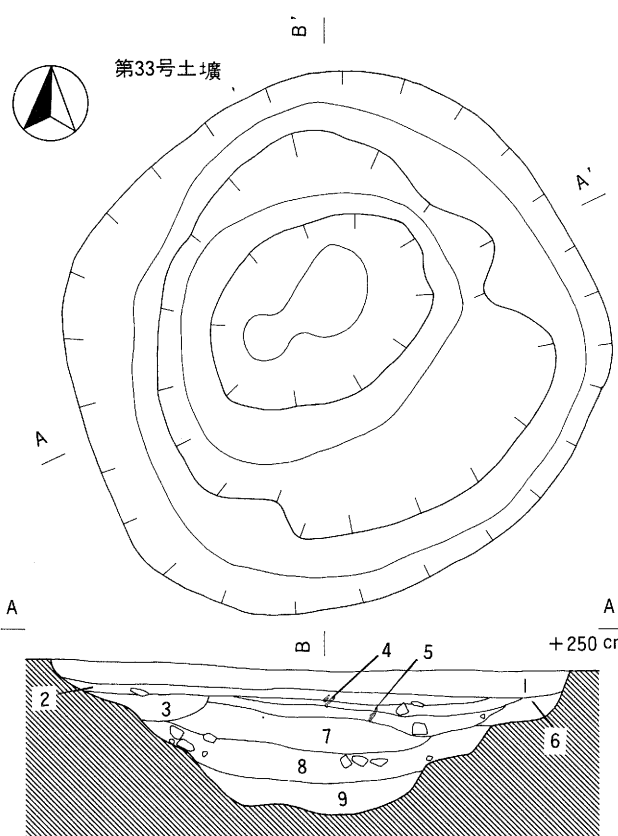
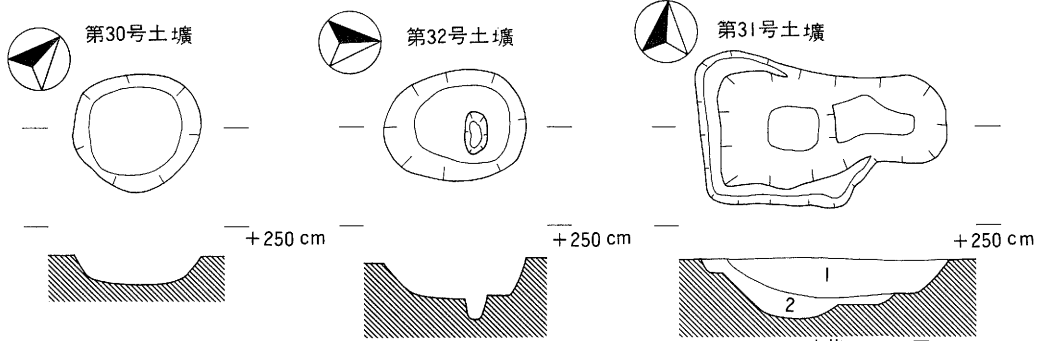
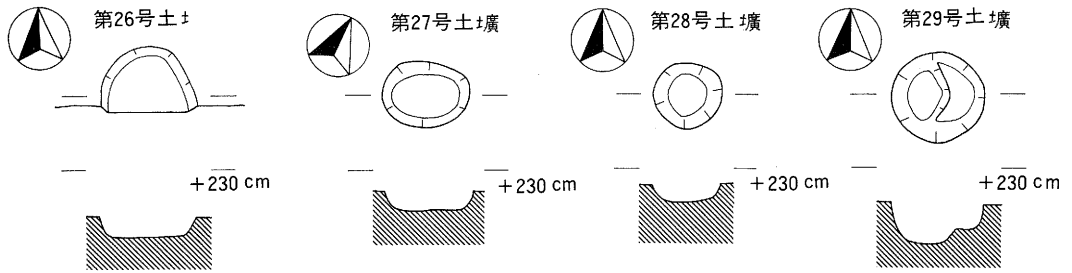
第15号土壌 (SK15) は比較的整った略円形を呈し、断面形は緩い鍋底状を呈する。遺物は弥生時代後期に比定される甕、高坏等が僅か出土している。第16号土壌 (SK16) は弥生時代の第30号住居址を切って構築されているが、出土遺物は皆無で所産期は不明である。第17号土壌 (SK17) は第22・24・51号住居址等によって切られており、弥生時代後期に比定される甕、高坏、鉢等が少量出土している。甕には二次焼成を受けたものや、やや前出的な要素を持った施文がなされているものが観られる。第18号土壌 (SK18) は第41号住居址を切って構築されており、古墳時代前期に比定される土師器片若干と、石包丁1点が出土している。土師器の器種には壺、甕、高坏、鉢、器台等がある。第19号土壌 (SK19) は第45・46号住居址を切って構築され、古墳時代前期に比定される壺、甕等の土師器片が少量出土している。第20号土壌 (SK20) はP-36に切られて検出されたが、出土遺物は皆無で所産期は不明である。

(2) D区 (SK21~25)

第21号土壌 (SK21) は第66・67号住居址を切って構築され、披熱した砂岩や河原石による極めて人為的な配石を伴う。配石下には比較的浅い楕円形プランを持つ掘り込みがあり、覆土内からは炭化物、木炭と共に、ほぼ完形の土師器高台付坏等が出土している。所産期は平安時代後期と推定される。第22号土壌 (SK22) と第23号土壌 (SK23) は共に整った楕円形プランを持つ小土壌であるが、出土遺物は皆無で所産期は不明である。第24号土壌 (SK24) は第76~78号住居址を切って深く構築されているが、出土遺物は外面に荒い平行タタキ目痕を有した燃成不良の須恵器甕片1点のみで所産期は不明確である。第25号土壌 (SK25) は第77号住居址を切って



第150図 土壌実測図(1)



1. 暗茶褐色土層 固くしまる
2. 暗黄褐色土層 黄色粒子を多く含む
1. 暗茶褐色土層 小礫を含む
2. 暗黄褐色土層 小礫、黄色粒子を多く含む
3. 暗茶褐色土層
4. 暗灰褐色土層 灰、礫を含む
5. 明灰色土層 灰を多量に含む、礫を含む
6. 暗黄灰褐色土層 黄色粒子と灰を若干含む
7. 暗黄褐色土層 黄色粒子を多く含む
8. 暗茶褐色土層 礫を多く含む
9. 暗褐色土層 小礫を多く含む
- 0 2m

第151図 土壌実測図(2)

構築され、土壌底部と壁面の全面が披熟して^焼土化していた。出土遺物は平安時代後期に比定される土師の羽釜、高台付坏、坏等が若干出土している。

(3) E区 (SK26)

第26号土壌 (SK26) は南側を第82号住居址によって切られており、古墳時代前期に比定される土師器甕2点が出土している。第27号土壌 (SK27)、第28号土壌 (SK28) は共に略円形を呈する小土壌であるが、出土遺物は第28号土壌より土師器の小片1点が出土したのみで、所産期は不明である。第29号土壌 (SK29) からは弥生時代後期に比定される壺、鉢が出土している。壺は胴下半部のみが遺存していたが最大径43cmを測る大形品である。

(4) F区 (SK30~33)

第30号土壌 (SK30) は整った略円形を呈し、古墳時代前期に比定される甕、高坏等の小片が少量出土している。第31号土壌 (SK31) は一部の突出した不整形を呈するが、出土遺物は皆無で、所産期は不明である。第32号土壌 (SK32) は弥生時代の第108号住居址を切って構築されており、小ピット1基を伴うが、出土遺物は無く所産期は不明確である。

第41表 土壌一覧表

番号	グリッド	平面形	規模 (cm)			長軸方向	所産期	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ				
15	J・K-6・7	略円形	100	93	19	N-1°-E	弥生時代後期	弥生土器片	
16	J・K-2・3	楕円形	70	54	17	N-25°-E	弥生時代以降	無	
17	J・K-4・5	不整長円形	300	153	7	N-7°-E	弥生時代後期	弥生土器片	
18	D・E-6	不整楕円形	238	175	17	N-32°-W	古墳時代前期	土師器片・石包丁	
19	E・F-9	〃	260	145	24	N-40°-E	古墳時代前期	土師器片	
20	K-9	楕円形	92	72	21	N-90°-EW	不明	無	
21	T-24	〃	165	116	25	N-50°-E	平安時代後期	土師器片	
22	T-22	〃	102	74	6	N-88°-E	不明	無	
23	X・Y-23	〃	74	54	14	N-6°-E	不明	無	
24	2A・2B-23	略円形	70	65	49	N-71°-W	平安時代?	須恵器片	
25	2B-24	不整円形	122	96	13	N-0°-EW	平安時代後期	土師器片	焼土を伴う
26	2H・2I-30・31	略円形?	79	-	15	-	古墳時代前期	土師器片	
27	2J-36・37	略円形	70	54	8	N-62°-E	不明	無	
28	2J-38	〃	55	52	16	N-75°-E	不明	土師器片	
29	2J-32	〃	74	72	34	N-85°-E	弥生時代後期	弥生土器片	
30	2L・2M-47	不整円形	102	94	25	N-40°-E	古墳時代前期	土師器片	
31	2I・2J-56	不整形	198	122	48	N-84°-E	不明	無	
32	2K-54	楕円形	115	90	30	N-6°-W	弥生時代以降	無	
33	2L・2M-53・54	不整円形	443	440	139	N-52°-E	弥生時代後期	弥生土器片	

(5) 第33号土壙 (S K33)

遺 構 (第151図)

本址はF区の南東部隅に近く検出された遺構で、4.4m×4.4mの略円形平面プランを、深さは約1.4mをはかる傾斜のゆるいロート状断面形を呈する。土層は9層に分かれるが、第1層はこぶし大から幼児の頭大ほどの礫と遺物を多く含み、特に南東部に集中する傾向がみられた。第5層の厚さ約15cmの灰層は中央部がくぼんでおり、灰が形成された後に沈下する堆積状態を示している。第6層から底部までさらに何層もの土層が認められ、何れの層からも遺物の出土がみられるが、出土量は多くない。

遺物は全て土器で、特に第1層から集中して出土し、量・種類とも多く、その全てが千曲川水系弥生時代後期後半の箱清水式期に所属させられるものである。

遺 物 (第152～154図)

1. 壺 (第152図1～7)

内外面赤色塗彩されたもの(1～4・6)と外面のみ赤色塗彩されたもの(5)および無彩のもの(7)とがある。1～4は大小の差があるものの通有の器形を示し、1は口縁部径35.9cmをはかる。4の頸部から肩部にかけて施されたT字文は11本1単位の工具により施文されており、いねいである。5は外面のみ赤色塗彩されているものだが、内外面とも目の粗いハケ調整が行われている。6・7は頸部から口縁部にいたる外反が強くなく、通常の壺の器形を示すが疑問点もあるが、一応壺に分類したものである。

2. 甕 (第152図8・9)

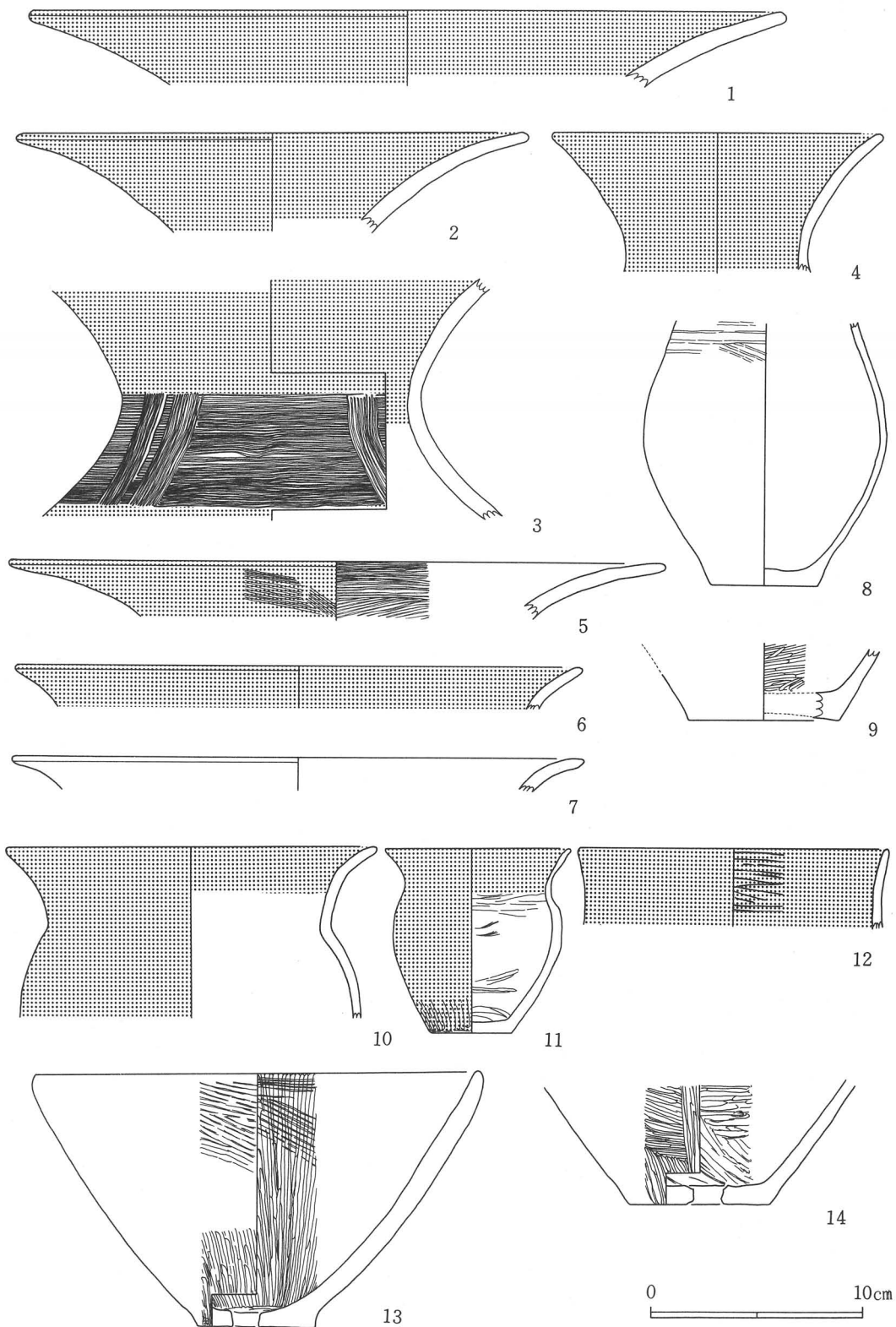
2点図示できた。8は細身の甕で、表面が荒れていて頸部に僅かに目の特に粗いハケ状の調整痕が認められるすぎない。9は底部破片だが、内面にいねいな横位・斜め位のへう磨きが行われている。

3. 深鉢 (第152図10～12)

10・11は大きさに差があるが(口縁部径17.6cm、8.8cm)通常の器形を示し、最大径が口縁部にある点も通有である。外面全面と内面の頸部までを赤色塗彩されている。11の器高は8.8cmをはかる。12はいわゆる深鉢とは形状を異にしている。直立する口縁部・頸部から殆どふくらまない胴部に続くようである。口縁部径14.7cmをはかり、内外面とも赤色塗彩されている。深鉢に分類することについては疑義もあるが、他に分類も出来ず深鉢とした。

4. 鉢 (第153図15～28)

大小合わせて14個体が復元できた。全体の出土量に占める割合が最も高い器種である。口縁部径20cm内外の大型のもの(15・17)、同14～17cmの中型のもの(16・18～24)、同10cm未満の小型のもの(25)という法量の差による分類と、胴部から口縁部にかけて直線的な立ち上がりを示すもの(15・17～19・23～25)と内湾して立ち上がるもの(16・20～22)という形状による分類、および内面の赤色塗彩の有無による分類も可能である。全体を知ることができる15は、器高10.4

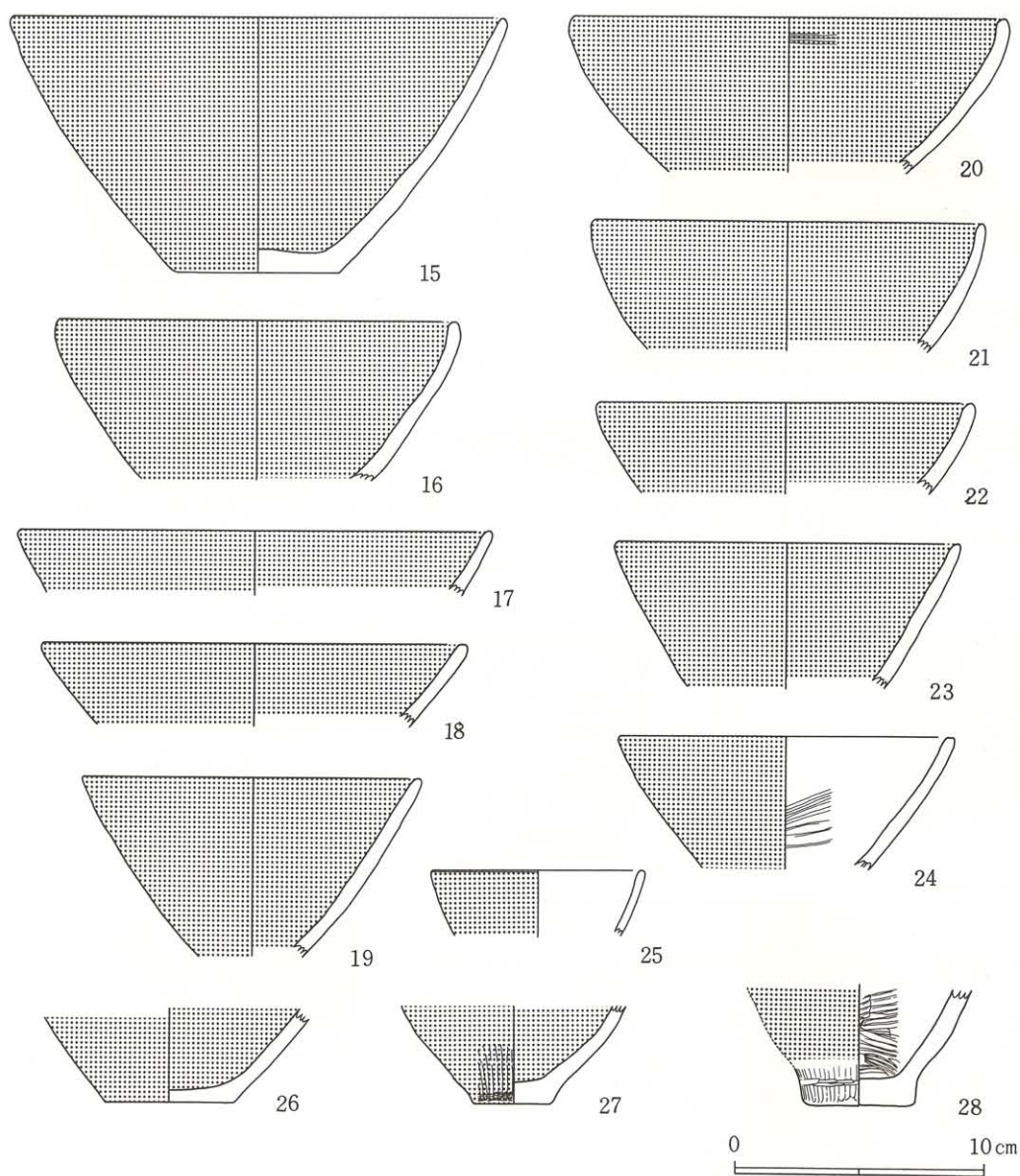


第152图 第33号土壤出土遺物実測図(1)

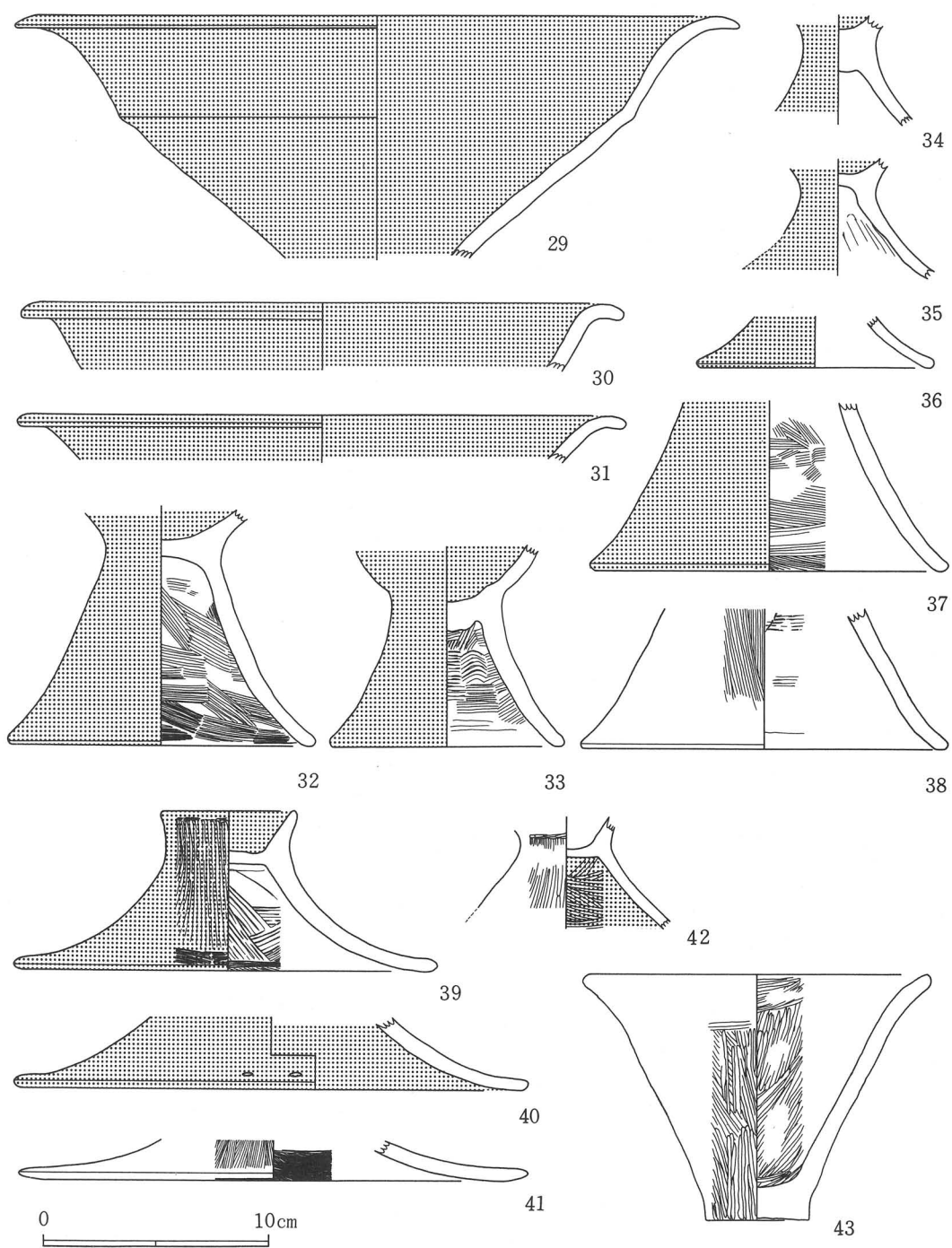
cm、口縁部径20cm、底部 6.7cmをはかる。

5. 高坏 (第154図29~38)

脚部内面を除き赤色塗彩されるもの (29~~~36~~³⁷) とされないもの (~~37~~・38) に分類でき、また、法量による分類もできる。29は坏部中段に稜をもち口縁部で大きく外反する形状を示すもので、口縁部径32.4cmをはかる。30・31も同様であると思われ、32・33はそれらに付く脚部と考えられる。~~37~~・38は赤色塗彩されないが、スカート状に開く通常の脚の形態を呈する。



第153図 第33号土壙出土遺物実測図(2)



第154图 第33号土坑出土遗物实测图(3)

6. 蓋 (第154図39~42)

赤色塗彩のされかたによる分類と、2ヶ対の小孔の有無による分類ができる。39は器高 7.1 cm、口縁部径18.9cm、つまみ部径 6.1cmを、小孔を有する40は口縁部径23cmをはかる。

7. 甌 (第152図13・14)

ロート状で底部に1孔をもつ甌が2点出土した。13は器高12cm、口縁部径21.2cm、底部径 5.6 cm、孔径 1.2cmをはかり、内外面とも粗いハケ調整の後縦位のへら磨きを行っている。

第42表 第33号土壌出土土器一覧表

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
152-1	弥生・壺	口縁部 1/3	口径(35.9)	口縁部大きく朝顔状に開く。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
152-2	弥生・壺	口縁部 1/4	口径(24.3)	口縁部大きく朝顔状に開く。	口縁部横へら磨き。外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
152-3	弥生・壺	頸部ほぼ完存		頸部でやや強く弓状に外反する。口縁部は朝顔状に大きく開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。胴部内面剥落。頸部にT字文を有する。	胎土：細砂粒を多く含む。 焼成：良 色調：外内明褐色 *外面・口縁内面赤彩。
152-4	弥生・壺	口縁部～頸部 1/2	口径 15.7	頸部で弓状に外反し、口縁部朝顔状に開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
152-5	弥生・壺	口縁部 1/6	口径(31.2)	口縁部大きく朝顔状に開く。	口縁部横ナデ。外面横斜め刷毛調整。内面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内黒灰色～茶褐色 *外面赤彩。
152-6	弥生・壺	口縁部 1/5	口径(27.0)	口縁部大きく朝顔状に開く。	外内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
152-7	弥生・壺	口縁部 1/6	口径(27.2)	口縁部大きく朝顔状に開く。	外内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色
152-8	弥生・甕	頸部～胴部下位 1/2 底部完存	底径 4.9	胴部中位で弱く張る。	外面斜め刷毛調整+簾状文?。内面不明。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外黒灰色、内明灰褐色 *器面著しく荒れる。
152-9	弥生・甕	底部 1/2	底径 7.1	直線的に立上がる。	外面縦へら磨き。内面横・斜めへら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内濃褐色
152-10	弥生・深鉢	口縁部～胴部 中位 1/3	口径(17.6)	口縁部緩く外反し、胴部は肩部で丸く張る。	口縁部横ナデ。外面縦へら磨き。内面不明。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内橙褐色 *外面・口縁内面赤彩。
152-11	弥生・深鉢	口縁部～胴部 下位 2/3 底部完存	口径 8.8 器高 8.8 底径 3.9	口縁部緩く「く」の字状に外反し、胴部は肩部で弱く張る。	口縁部横へら磨き。胴外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内橙褐色 *外面・口縁内面赤彩。

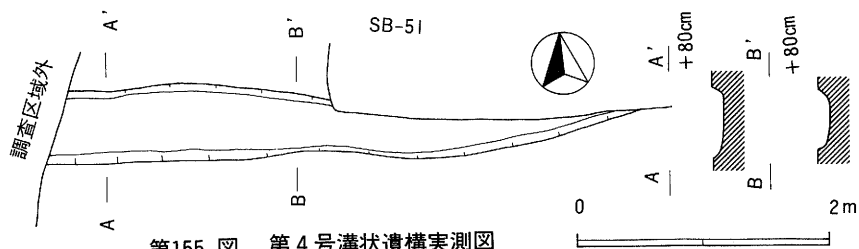
挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
152-12	弥生・深鉢	口縁部 1/8	口径(14.7)	口縁部ほぼ直立する。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
152-13	弥生・甌	口縁部 2/3 底部完存	口径 21.2 器高 12.0 底径 5.66	底部から口縁部にかけて内湾しながら開く。底部に1孔を有する。	外内面横・斜め刷毛調整+縦へら磨き。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外明黄褐色～黒灰色、内明赤褐色
152-14	弥生・甌	体部中位～底部ほぼ完存	底径 6.6	底部からほぼ直線的に立上がる。底部に1孔を有する。	外面縦・横へら磨き。内面横・斜めへら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内橙褐色
153-15	弥生・鉢	口縁部～胴部 中位 1/3 底部完存	口径(20.0) 器高 10.4 底径 7.0	底部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら開く。	外上半部・内面横へら磨き。外下半部縦へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明灰褐色 *外内面赤彩。
153-16	弥生・鉢	体部 1/5	口径(16.4)	内湾して開き、口縁部でさらに内湾する。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-17	弥生・鉢	口縁部 1/12	口径(19.3)	口縁部がすかに内湾する。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-18	弥生・鉢	口縁部 1/10	口径(17.3)	口縁部僅かに内湾する 口唇部面取りされる。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-19	弥生・鉢	体部 1/3	口径(13.8)	底部から口縁部にかけて直線的に開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-20	弥生・鉢	体部 1/4	口径(17.8)	内湾して開き、口縁部でさらに内湾する。	外内面横へら磨き？	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-21	弥生・鉢	体部 1/5	口径(16.0)	内湾して開き、口縁部でさらに内湾する。	外内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-22	弥生・鉢	口縁部 1/6	口径(15.4)	底部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら開く。	外内面へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
153-23	弥生・鉢	口縁部 1/3	口径(14.1)	底部から口縁部にかけて直線的に開く。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
153-24	弥生・鉢	口縁部 1/6	口径(13.6)	僅かに内湾しながら開く。口唇部面取りされる。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外暗褐色、内黒色 *外面赤彩。
153-25	弥生・鉢	口縁部 1/8	口径(8.6)	僅かに内湾しながら開く。	外内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色*外面赤彩。
153-26	弥生・鉢	底部ほぼ完存	底径 5.2	僅かに内湾して立上がる。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
153-27	弥生・鉢	底部ほぼ完存	底径 3.0	内湾して立上がる。	外面縦へら磨き。内面横へら磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
153-28	弥生・鉢	底部ほぼ完存	底径 4.2	内湾して立上がる。	外面縦・横へら磨き。 南面横刷毛調整。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色*外面赤彩。

挿図番号	器種	遺存度	法量	成形及び器形の特徴	調整・施文	備考
154-29	弥生・高坏	坏部 1/2	口径(32.4)	僅かに外反して開き、口縁部は内外に稜を持って大きく外反する。	口縁部横へラ磨き。外面縦へラ磨き。内面へラ磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色 *外内面赤彩。
154-30	土師・高坏	口縁部 1/10	口径(26.9)	内湾して開き、口縁部で強く屈曲外反する。	外内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
154-31	弥生・高坏	口縁部 1/10	口径(27.3)	内湾して開き、口縁部で緩く外反する。	外内面横へラ磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明褐色*外内面赤彩。
154-32	弥生・高坏	接合部～裾部 ほぼ完存	裾径 13.9	脚部長く緩やかに外反する。	坏内面へラ磨き。脚外面縦へラ磨き。内面斜め刷毛調整。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内黄灰褐色 *外面・坏内面赤彩。
154-33	弥生・高坏	接合部～裾部 ほぼ完存	裾径 10.5	脚部短く外反する。	坏内面へラ磨き。脚外面縦へラ磨き。内面刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を多く含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・坏内面赤彩。
154-34	弥生・高坏	接合部～裾部 ほぼ完存		脚部外反する。	坏内面へラ磨き。脚外面縦へラ磨き。内面ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面・坏内面赤彩。
154-35	弥生・高坏	接合部～裾部 ほぼ完存		脚部外反する。	坏内面へラ磨き。脚外面縦へラ磨き。内面へラナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内灰黄褐色 *外面・坏内面赤彩。
154-36	弥生・高坏	裾部 1/3	裾径(10.6)	裾部大きく外反する。	外面縦へラ磨き。内面横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内明茶褐色 *外面赤彩。
154-37	弥生・高坏	裾部 1/3	裾径(16.0)	脚部緩やかに外反する。	外面縦へラ磨き。内面横・斜め刷毛調整。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色*外面赤彩。
154-38	弥生・高坏	裾部 1/4	裾径(16.4)	脚部緩やかに外反する。	外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内橙褐色
154-39	弥生・蓋	摘み部完存 裾部 1/6	摘み径6.1 器高 7.1 裾径(18.9)	摘み部から裾部にかけて、外反して大きく開く。	外面縦へラ磨き。内面横・斜め刷毛調整。裾部横刷毛調整。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外面・摘み内面赤彩。
154-40	弥生・蓋	裾部 1/3	裾径(23.0)	摘み部から裾部にかけて、外反して大きく開く。裾部に1対の小孔を有する。	外面縦へラ磨き。内面横へラ磨き。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内暗褐色 *外内面赤彩。
154-41	弥生・蓋	裾部 1/6	裾径(22.8)	摘み部から裾部にかけて、外反して大きく開く。	外面縦刷毛調整。内面横刷毛調整。裾部横ナデ。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外明赤褐色、内明茶褐色
154-42	弥生・蓋	摘み部ほぼ完存		摘み部から裾部にかけて外反して開く。	外面縦へラ磨き。内面横・斜めへラ磨き。	胎土：細砂粒を含む 焼成：良 色調：外内茶褐色*外内面赤彩。
154-43	弥生・蓋?	摘み部完存 裾径 1/2	摘み径4.6 器高 11.0 裾径(15.6)	平坦な摘み部から外反して、裾部で大きく開く。	外面刷毛調整+縦へラ磨き。内面横・斜めへラ磨き。裾部横ナデ。	胎土：微砂粒を含む 焼成：良 色調：外内橙褐色 *実測は逆位で行なっている。

3. 溝状遺構

(1) 第4号溝状遺構 (SD04 第152図)

本遺構は、C区北西部の第21号住居址床面上において検出された。グリッドJ-5・6において第51号住居址と重複し



第155図 第4号溝状遺構実測図

て始まり、N-80°-Wの方向に直進して調査区域外へと続いている。調査区域内にあって調査された部分は約4.8mの範囲である。

溝幅は41~61cmを測り、西側で僅かに広がっている。確認面からの深さは3~9cmを測り、断面形は鍋底状を呈する。覆土は暗茶褐色土の単一層で、水の流れた痕跡は認められなかった。

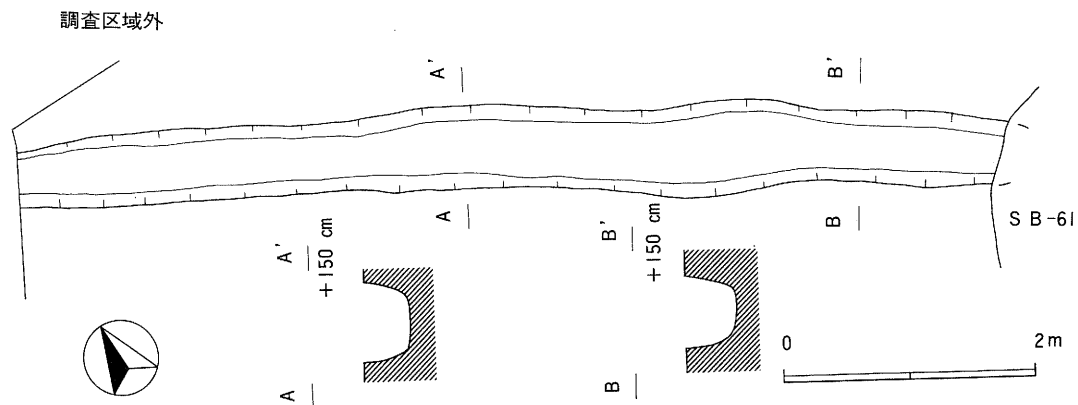
本遺構からの出土遺物は皆無であるが、重複関係より弥生時代後期以前の所産と推定される。

(2) 第5号溝状遺構 (SD05 第153図)

本遺構はD区東側北西部のグリッドR-21、S-20・21、T-20において第61号住居址に切られて検出された。R-21において第61号住居址と重複して始まり、N-58°-Wの方向にほぼ直進して調査区域外へと続いている。調査区域内にあって調査された範囲は約7.8mを測る。

溝幅は50~75cmで、確認面からの深さは21~32cmを測る。断面形は上方の僅かに開いた「U」字形を呈し、覆土は3~10cmの礫を多量に含んだ明茶褐色土の単一層であった。水の流れた痕跡は認められず、覆土の状況から一度に埋め戻されたかと推定される。

本遺構からは弥生時代後期に比定される弥生土器の小片が僅か出土しており、該期の所産と推定される。



第156図 第5号溝状遺構実測図